

横壁中村遺跡(10)

—古代・中世・近世編1—

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第33集

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

横壁中村遺跡(10)

- 古代・中世・近世編 1 -

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第33集

2010

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



20区屋敷跡 全景



横壁中村遺跡出土主要中世陶磁器



20区 90号住居 全景



90号住居 鉄製鋤先 No.35



90号住居 鉄製紡錘車 No.36

序

ハツ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

ハツ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年度で16年目を迎えます。横壁中村遺跡は平成8年度から発掘調査が開始され、平成22年度以降も調査の継続が予定されており、長期にわたる大規模な調査となりました。調査された遺構や遺物は本遺跡が縄文時代を中心とする、非常に大規模な、また長く続いた集落であったことを示しています。これら膨大な資料を整理し報告する作業は平成15年度から開始され、今回は平成16年度までに調査された古代の住居跡10軒と中世屋敷跡、掘立柱建物跡や墓坑等に関して報告を纏めることができました。本書は、ハツ場地域における古代、中世、近世の様相を知る上でも、また長野県、新潟県地域との広域な交流を考える上でも重要な資料になるものと考えています。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また本書が吾妻郡内、ひいては群馬県の歴史を解明する上で末永く活用されることを願います。

平成22年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、ハツ場ダム建設事に伴う事前調査として、平成8年度から実施されている「横壁中村遺跡」の発掘調査報告書である。横壁中村遺跡の発掘調査報告書は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集「久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」を第1冊目として既に9冊が刊行されている。本書は、平成16年度までに検出された横壁中村遺跡の古代住居10軒、石垣4箇所に囲まれた掘立柱建物9棟、堅穴遺構4基、石組遺構4基、焼土遺構8箇所、墓坑他7基、溝1条を含む屋敷跡1箇所、掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、堅穴遺構1基、鍛冶跡1箇所、石垣17箇所、石列3箇所、石組遺構11基、石囲い遺構3基、墓坑他37基、溝3条、ヤックラ4箇所、天明三年泥流下畑1箇所と出土遺物を掲載しており、横壁中村遺跡の発掘調査報告書の第10冊目である。
- 2 横壁中村遺跡は群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂530他に所在し、長野原町教育委員会と協議の結果、本遺跡名が決定された。
- 3 本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局（平成13年1月までは建設省）の委託を受けて実施した。平成14年度からは、ハツ場ダム地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ハツ場ダム調査事務所が担当している。
- 4 発掘調査は平成8年4月1日から平成18年12月31日まで実施し、平成22年度以降も調査は継続する予定である。今回報告する遺構の調査年度は、平成8年度から平成16年度に調査されたものである。詳細は、第3章の中で遺構ごとに記している。
- 5 発掘調査組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 小寺弘之（平成8・9年度）、菅野 清（平成10年度）、小野宇三郎（平成11～17年7月まで）、高橋俊夫（平成17年7月～平成21年度7月）、須田栄一（平成21年度8月～）

常務理事 菅野 清（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～12年度）、吉田 豊（13・14年度）、住谷永市（平成15・16年度）、木村裕紀（平成17～21年度）、津金澤吉茂（平成20年度）

事務局長 原田恒弘（平成8・9年度）、赤山容造（平成10～13年度）

事業局長 神保衛史（平成14～16年度）、津金澤吉茂（平成17～19年度、20年度兼務）、相京建史（平成21年度）

管理部長 蜂巣 実（平成8年度）、渡辺 健（平成9・10年度）、住谷 進（平成11～13年度）、萩原利通（平成14・15年度）、矢崎俊夫（平成16年度）

総務部長 矢崎俊夫（17年度）、萩原 勉（平成18・19年度）、木村裕紀（平成20年度兼務）、笠原秀樹（平成21年度）

調査研究部長 赤山容造（平成8～10年度）、神保衛史（平成11年度）、能登 健（平成12・13年度）、市 隆之（平成14年度）、石島和夫（平成15・16年度）、西田健彦（平成17～19年度）、飯島義雄（平成20・21年度）

調査研究課長 岸田治男（平成8年度）、能登 健（平成9～11年度）、飯島義雄（平成12年度）、下城 正（平成13年度）

ハツ場ダム調査事務所長 水田 稔（平成14・15年度）、市 隆之（平成16～19年度）、中東耕志（平成20年度）、相京建史（平成21年度兼務）

同調査研究部長 津金澤吉茂（平成14・15年度）、佐藤明人（平成16～18年度）、中東耕志（平成19年度）、中沢 悟（平成20・21年度）

同調査研究課長 下城 正（平成14年度）、齋藤和之（平成15・16年度）、中沢 悟（平成17年度）、

佐藤明人（平成18年度兼務）

事務担当 井上 剛、大島信夫、岡島伸昌、小淵 淳、笠原秀樹、片岡徳雄、国定 均、
小山建夫、坂本敏夫、鈴木理佐、須田朋子、野口富太郎、町田文雄、宮崎忠司、
富沢よねこ、森下弘美、矢崎知恵子、柳岡良宏、吉田有光、若林正人

調査担当 阿久津聡、飯田陽一、飯森康広、池田政志、石坂 聡、石田 真、今井和久、
岡部 豊、小野和之、金井 武、唐沢友之、久保 学、児島良昌、小林大悟、
斎藤幸男、篠原正洋、関 俊明、田村公夫、田村邦宏、友廣哲也、原 雅信、
柿沢健二、廣津英一、藤巻幸男、松原孝志、森田真一、諸田康成、山川剛史、
渡辺弘幸、綿貫邦男

6 整理期間は平成21年4月1日から平成22年3月31日である。

7 整理組織は下記の通りである。

管理・指導 理事長 高橋勇夫（～7月14日）、須田栄一（7月15日～）

常務理事 木村裕紀

ハツ場ダム調査事務所長 相京建史、同事務所調査研究部長 中沢 悟、
同調査GL 飯田陽一、整理GL 藤巻幸男

事務担当 ハツ場ダム調査事務所庶務GL 吉田有光

整理担当 黒澤照弘

8 本報告書作成の担当

編集 黒澤照弘

本文執筆 橋崎修一郎（第4章「横壁中村遺跡（10）出土中近世人骨」「横壁中村遺跡（10）出土中近
世骨骨」）、

中沢 悟（古代土器観察表の器種及び年代、古代住居年代）、

黒澤照弘（前記以外）

獣骨鑑定 橋崎修一郎

石材鑑定 渡辺弘幸

掘立柱建物指導助言 飯森康広

遺構写真撮影 各調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

デジタル写真図版作成 牧野裕美、市田武子、安藤美奈子、酒井史恵、廣津真希子、荒木絵美、
高梨由美子、矢端真観、横塚由香、下川陽子

機械実測 田所順子、岸 弘子、木原幸子、福島瑞希

委託関係 遺構測量および空中写真 株式会社測研

遺構図デジタル編集 株式会社測研

整理補助 吉田豊子、安カ川京美、唐澤美恵子、山口郁恵

9 出土遺物及び記録図・写真などの記録類は、すべて群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10 発掘調査及び本書の作成にあたっては、次の機関、諸氏から貴重なご指示やご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称省略、五十音順）

国土交通省関東地方整備局ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、
大竹幸恵、大橋康二、小野正敏、金子直行、小池岳史、佐藤雅一、白石光男、寺内隆夫、寺内敏郎、
富田孝彦、能登 健、藤澤良祐、萩原昭朗、平林 彰、福島 永、古郡正志、松島榮治、綿田弘実、
渡辺清志

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正以前の日本測地系を用いている。
- 2 調査範囲全域には4m×4mのグリッド網を設定し、各グリッドの呼称は南東隅の交点を当てている。
- 3 遺構図の縮尺は、住居 1/60、竈 1/30、掘立柱建物・礎石建物 1/80、竪穴遺構 1/50、石組遺構 1/50、石囲い遺構 1/50、墓坑 1/30、溝 1/80、焼土遺構 1/40 を基本としている。全体図は 1/800 または 1/600、1/500 (付図ほか) 等を使用している。これ以外の縮尺を用いる場合は、各図下部にスケールを示すか、各個別図に縮尺を記している。
- 4 遺構図面中における遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。また、●は土器・陶磁器、▲は石器・石製品、▼は金属器・鉄滓、■は骨、×は炭化物を表し、図示した遺物でこの表示のない遺物は出土位置を記録しなかったものである。
- 5 遺物図の縮尺は土器、陶磁器実測図が 1/3 または 1/4、砥石 1/3、茶臼・石臼・石鉢は 1/4、金属製品 1/2、銭貨 1/1、鉄滓 1/3 を原則としたが、これ以外の縮尺を用いている場合も多い。各図下部にスケールを示すか、各遺物実測図に縮尺を記している。また、遺物位置図に示した実測図については、1/6 または 1/8 を基本としている。
- 6 石製品実測図では、自然面は点描、磨り面と欠損面は白抜きとしている。
- 7 写真図版中の遺物の縮尺は、概ね遺物実測図と同縮尺としている。
- 8 今回の報告は、平成 16 年度までに調査された古代から近世までの遺構を対象としている。遺構番号は、一部を除き調査時の番号を用いている。既に報告されている遺構もあるため、遺構番号は連続していない。
- 9 遺構一覧表の記載では、完掘できなかった遺構の形状及び規模について () を付けている。
- 10 掘立柱建物の柱穴間平均値は、辺の長さを柱間の数で割った数値である。
- 11 遺物観察表の記載方法は下記の通りである。
 - (1) 遺物観察表は、「土器、陶磁器」、「石器、石製品」、「金属器」、「銭貨」に分けて記載している。
 - (2) 土器、陶磁器、石器、石製品、金属製品、鉄滓の計測値の単位はcmである。
 - (3) 銭貨の計測値の単位はmmである。
 - (4) 石器、石製品、銭貨、鉄滓の重量は全て残存値であり、単位はgである。
 - (5) 銭貨の直径及び内輪径は、縦の直径を①内輪径を③、横の直径を②内輪径を④としている。
 - (6) 銭貨の厚さは、文字部分で計測した最大値と最小値を記している。
 - (7) 陶磁器の色調は、胎土の色調を記している。
 - (8) 金属製品のうち、銅製品は合金による金属製品を含んでいる。
 - (9) 色調については、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に基づいている。

目次

序

例言

凡例

目次

図版目次

写真目次

表目次

第1章 調査の方法と経過

| | | |
|-----|---------|---|
| 第1節 | 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 | 調査の経過 | 1 |
| 第3節 | 調査の方法 | 4 |

第2章 遺跡の環境

| | | |
|-----|-------|---|
| 第1節 | 地理的環境 | 5 |
| 第2節 | 歴史的環境 | 6 |

第3章 発見された遺構と遺物

| | | |
|-----|-----------------------------------|-----|
| 第1節 | 遺跡の概要 | 12 |
| 第2節 | 基本土層 | 15 |
| 第3節 | 古代の竪穴住居 | 16 |
| 第4節 | 中世・近世の遺構 | 57 |
| | 1 屋敷跡 2 掘立柱建物 3 礎石建物 4 竪穴遺構 5 鍛冶跡 | |
| | 6 石垣 7 石列 8 石組遺構 9 石囲い遺構 10 墓坑他 | |
| | 11 溝 12 ヤックラ 13 天明泥流下畑 | |
| 第5節 | 遺構外出土遺物 | 204 |

第4章 調査の成果とまとめ

| | |
|-------|-----|
| 遺構一覧表 | 215 |
| 遺物観察表 | 235 |

抄録

写真図版

目 次

| | | | |
|--------|----------------------------|---------|-----------------------------|
| 第 1 图 | 年度別調査区全体図 | 第 60 图 | 20 区 4 号石組遺構 (1) |
| 第 2 图 | 遺跡位置及周辺道路図 | 第 61 图 | 20 区 4 号石組遺構 (2) |
| 第 3 图 | 横壁中村遺跡全体図 | 第 62 图 | 20 区 4 号石組遺構出土遺物 |
| 第 4 图 | 横壁中村遺跡基本土層 | 第 63 图 | 20 区 5 号石組遺構 |
| 第 5 图 | 古代住居全体図 | 第 64 图 | 20 区 6 号石組遺構 |
| 第 6 图 | 18 区 7 号住居 | 第 65 图 | 20 区 6 号石組遺構出土遺物 |
| 第 7 图 | 19 区 31 号住居 (1) | 第 66 图 | 20 区 1 ~ 6 号焼土遺構 |
| 第 8 图 | 19 区 31 号住居 (2) | 第 67 图 | 20 区 7・8 号焼土遺構 |
| 第 9 图 | 19 区 31 号住居出土遺物 | 第 68 图 | 20 区 5 号墓坑、5 号墓坑出土遺物 |
| 第 10 图 | 19 区 37 号住居 (1) | 第 69 图 | 20 区 34・46 号土坑 |
| 第 11 图 | 19 区 37 号住居 (2) | 第 70 图 | 20 区 2・3 号墓坑 |
| 第 12 图 | 19 区 37 号住居出土遺物 | 第 71 图 | 20 区 6 号墓坑、6 号墓坑出土遺物、13 号土坑 |
| 第 13 图 | 19 区 44 号住居 (1) | 第 72 图 | 20 区 3・28・32・33 号土坑 |
| 第 14 图 | 19 区 44 号住居 (2) | 第 73 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (1) |
| 第 15 图 | 19 区 44 号住居出土遺物 | 第 74 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (2) |
| 第 16 图 | 19 区 45 号住居 (1) | 第 75 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (3) |
| 第 17 图 | 19 区 45 号住居 (2) | 第 76 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (4) |
| 第 18 图 | 19 区 45 号住居 (3) | 第 77 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (5) |
| 第 19 图 | 19 区 45 号住居 (4) | 第 78 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (6) |
| 第 20 图 | 19 区 45 号住居出土遺物 (1) | 第 79 图 | 20 区屋敷跡出土遺物 (7) |
| 第 21 图 | 19 区 45 号住居出土遺物 (2) | 第 80 图 | 19 区 2・3 号竪立柱建物 |
| 第 22 图 | 19 区 48 号住居 | 第 81 图 | 19 区 4 号・20 区 11 号竪立柱建物跡 |
| 第 23 图 | 19 区 49 号住居 (1) | 第 82 图 | 30 区 1 号礎石建物 |
| 第 24 图 | 19 区 49 号住居 (2)、49 号住居出土遺物 | 第 83 图 | 30 区 1 号礎石建物出土遺物 |
| 第 25 图 | 20 区 83 号住居 (1) | 第 84 图 | 20 区 1 号竪穴遺構 |
| 第 26 图 | 20 区 83 号住居 (2) | 第 85 图 | 20 区 1 号竪穴遺構出土遺物 (1) |
| 第 27 图 | 20 区 83 号住居出土遺物 | 第 86 图 | 20 区 1 号竪穴遺構出土遺物 (2) |
| 第 28 图 | 20 区 90 号住居 (1) | 第 87 图 | 20 区 1 号鍛冶跡 |
| 第 29 图 | 20 区 90 号住居 (2) | 第 88 图 | 20 区 1 号鍛冶跡出土遺物 |
| 第 30 图 | 20 区 90 号住居 (3) | 第 89 图 | 18 区 1 ~ 4 号石垣 |
| 第 31 图 | 20 区 90 号住居 (4) | 第 90 图 | 18 区 1 号石垣 (1) |
| 第 32 图 | 20 区 90 号住居 (5) | 第 91 图 | 18 区 1 (2)・2 ~ 4 号石垣 |
| 第 33 图 | 20 区 90 号住居出土遺物 (1) | 第 92 图 | 18 区 1・3 号石垣出土遺物 |
| 第 34 图 | 20 区 90 号住居出土遺物 (2) | 第 93 图 | 20 区 1 ~ 6・8 ~ 16 号石垣 |
| 第 35 图 | 20 区 90 号住居出土遺物 (3) | 第 94 图 | 20 区 5 号石垣 |
| 第 36 图 | 20 区 90 号住居出土遺物 (4) | 第 95 图 | 20 区 5 号石垣出土遺物 |
| 第 37 图 | 20 区 91 号住居 (1) | 第 96 图 | 20 区 6 号石垣 (1) |
| 第 38 图 | 20 区 91 号住居 (2) | 第 97 图 | 20 区 6 号石垣 (2) |
| 第 39 图 | 20 区 91 号住居 (3) | 第 98 图 | 20 区 6 号石垣出土遺物 (1) |
| 第 40 图 | 20 区 91 号住居 (4) | 第 99 图 | 20 区 6 号石垣出土遺物 (2) |
| 第 41 图 | 20 区 91 号住居 (5) | 第 100 图 | 20 区 8 号石垣 (1) |
| 第 42 图 | 20 区 91 号住居出土遺物 (1) | 第 101 图 | 20 区 8 号石垣 (2) |
| 第 43 图 | 20 区 91 号住居出土遺物 (2) | 第 102 图 | 20 区 8 号石垣出土遺物 |
| 第 44 图 | 20 区屋敷跡全体図 | 第 103 图 | 20 区 9 号石垣 |
| 第 45 图 | 20 区屋敷跡 1 号竪立柱建物 (1) | 第 104 图 | 20 区 10 号石垣 |
| 第 46 图 | 20 区屋敷跡 1 号竪立柱建物 (2) | 第 105 图 | 20 区 11 ~ 15 号石垣 (1) |
| 第 47 图 | 20 区屋敷跡 1 号竪立柱建物出土遺物 | 第 106 图 | 20 区 11 ~ 15 号石垣 (2) |
| 第 48 图 | 20 区屋敷跡 2 号竪立柱建物 | 第 107 图 | 20 区 12 号石垣出土遺物 (1) |
| 第 49 图 | 20 区屋敷跡 3 号竪立柱建物 | 第 108 图 | 20 区 12 号石垣出土遺物 (2) |
| 第 50 图 | 20 区屋敷跡 4 号竪立柱建物 | 第 109 图 | 20 区 13 号石垣出土遺物 |
| 第 51 图 | 20 区屋敷跡 5・6 号竪立柱建物 | 第 110 图 | 20 区 15 号石垣・石垣出土遺物 |
| 第 52 图 | 20 区屋敷跡 6 号竪立柱建物出土遺物 | 第 111 图 | 20 区 16 号石垣、2 号ヤックラ |
| 第 53 图 | 20 区屋敷跡 7 号竪立柱建物 | 第 112 图 | 19 区 1 号列石、28 区 13 号列石 |
| 第 54 图 | 20 区屋敷跡 8・9 号竪立柱建物 | 第 113 图 | 20 区 2 号石列、2 号石列出土遺物 |
| 第 55 图 | 20 区 1・2 号石垣、1 号溝 | 第 114 图 | 20 区 3 号石列 |
| 第 56 图 | 20 区 3・4 (1) 号石垣 | 第 115 图 | 30 区 1 号石列 |
| 第 57 图 | 20 区 4 号石垣 (2) | 第 116 图 | 18 区 41 号配石 |
| 第 58 图 | 20 区 3 号石組遺構 | 第 117 图 | 20 区 1 号石組遺構 (1) |
| 第 59 图 | 20 区 3 号石組遺構出土遺物 | 第 118 图 | 20 区 1 号石組遺構 (2) |

| | | | |
|-------|----------------------|-------|-------------------------------|
| 第119回 | 20区1号石組遺構出土遺物(1) | 第152回 | 30区2号墓坑、2号墓坑出土遺物 |
| 第120回 | 20区1号石組遺構出土遺物(2) | 第153回 | 30区3号墓坑 |
| 第121回 | 20区2号石組遺構(1) | 第154回 | 30区14号配石、14号配石出土遺物 |
| 第122回 | 20区2号石組遺構(2) | 第155回 | 30区19号配石、19号配石出土遺物 |
| 第123回 | 20区2号石組遺構出土遺物 | 第156回 | 18区1号・20区10・12号墓坑、18区1号墓坑出土遺物 |
| 第124回 | 20区7号石組遺構、7号石組遺構出土遺物 | 第157回 | 20区230号土坑 |
| 第125回 | 20区27～31号配石 | 第158回 | 30区18号配石、18号配石出土遺物(1) |
| 第126回 | 20区32・33号配石 | 第159回 | 30区18号配石出土遺物(2) |
| 第127回 | 20区1・2号石囲い遺構 | 第160回 | 19区1号墓坑 |
| 第128回 | 20区1・2号石囲い遺構出土遺物 | 第161回 | 19区1号溝 |
| 第129回 | 20区3号石囲い遺構 | 第162回 | 19区2・3号溝 |
| 第130回 | 20区3号石囲い遺構出土遺物 | 第163回 | 20区1～3号ヤックラ、6号列石 |
| 第131回 | 人骨、獣骨、銭貨出土遺構分布図 | 第164回 | 20区1・2(1)号ヤックラ出土遺物 |
| 第132回 | 18区125・129号土坑 | 第165回 | 20区2号ヤックラ出土遺物(2) |
| 第133回 | 19区75・293号土坑 | 第166回 | 20区3号ヤックラ・ヤックラ(1)出土遺物 |
| 第134回 | 20区1号墓坑、1号墓坑出土遺物 | 第167回 | 20区ヤックラ出土遺物(2) |
| 第135回 | 20区4号墓坑、4号墓坑出土遺物 | 第168回 | 29区Y1号畑出土遺物 |
| 第136回 | 20区8号墓坑、8号墓坑出土遺物 | 第169回 | 18区遺構外出土遺物(1) |
| 第137回 | 20区9号墓坑 | 第170回 | 18区遺構外(2)・19区遺構外(1)出土遺物 |
| 第138回 | 20区11号墓坑、11号墓坑出土遺物 | 第171回 | 19区遺構外(2)・20区遺構外(1)出土遺物 |
| 第139回 | 20区13号墓坑 | 第172回 | 20区遺構外出土遺物(2) |
| 第140回 | 20区14号墓坑 | 第173回 | 20区遺構外出土遺物(3) |
| 第141回 | 20区15・16号墓坑 | 第174回 | 20区遺構外出土遺物(4) |
| 第142回 | 20区18号墓坑、18号墓坑出土遺物 | 第175回 | 20区遺構外出土遺物(5) |
| 第143回 | 20区19号墓坑、19号墓坑出土遺物 | 第176回 | 20区遺構外出土遺物(6) |
| 第144回 | 20区20号墓坑、20号墓坑出土遺物 | 第177回 | 28区遺構外・29区遺構外(1)出土遺物 |
| 第145回 | 20区21号墓坑、21号墓坑出土遺物 | 第178回 | 29区遺構外(2)・30区遺構外・遺構外出土遺物 |
| 第146回 | 20区22号墓坑、22号墓坑出土遺物 | 第179回 | 20区屋敷跡変遷案 |
| 第147回 | 20区34・46・308・309号土坑 | 第180回 | 中世陶磁器出土数量(1) |
| 第148回 | 20区320・322・423号土坑 | 第181回 | 中世陶磁器出土数量(2) |
| 第149回 | 29区1号墓坑、1号墓坑出土遺物 | 第182回 | 横壁中村遺跡出土内耳土器 |
| 第150回 | 29区17号配石、17号配石出土遺物 | | |
| 第151回 | 30区1号墓坑、1号墓坑出土遺物 | | |

写真目次

| | | | | | |
|-----|---|---------------------------|------|--------------------|------------------------------|
| PL1 | 1 | 遺跡の位置と周辺の地形 | 8 | 19区45号住居 竪全景(南西から) | |
| | 2 | 調査区と周辺の景観(北から)上方の丸い岩は「丸岩」 | PL6 | 1 | 19区45号住居 全景(南西から) |
| PL2 | 1 | 18区7号住居 竪出土状況(東から) | | 2 | 19区45号住居 貯蔵穴出土状況(南西から) |
| | 2 | 18区7号住居 竪全景(西から) | | 3 | 19区45号住居 掘り方全景(南西から) |
| | 3 | 18区7号住居 全景(西から) | | 4 | 19区48号住居 全景(東から) |
| | 4 | 18区7号住居 掘り方全景(西から) | | 5 | 19区48号住居 掘り方全景(東から) |
| | 5 | 19区31号住居 出土状況(南東から) | PL7 | 1 | 19区49号住居 全景(東から) |
| | 6 | 19区31号住居 セクション(南から) | | 2 | 20区83号住居 浅間B軽石?出土状況(北東から) |
| | 7 | 19区31号住居 掘出土状況(西から) | | 3 | 20区83号住居 浅間B軽石?下遺物出土状況(北東から) |
| | 8 | 19区31号住居 竪遺物出土状況(南西から) | | 4 | 20区83号住居 遺物出土状況(北西から) |
| PL3 | 1 | 19区31号住居 全景(南西から) | | 5 | 20区83号住居 竪出土状況(北西から) |
| | 2 | 19区37号住居 全景(西から) | PL8 | 1 | 20区83号住居 全景(北西から) |
| PL4 | 1 | 19区37号住居 竪1全景(北東から) | | 2 | 20区90号住居 遺物出土状況(北東から) |
| | 2 | 19区37号住居 竪2全景(南西から) | PL9 | 1 | 20区90号住居 竪先出土状況(北西から) |
| | 3 | 19区37号住居 掘り方全景(北東から) | | 2 | 20区90号住居 鉢輪車出土状況(北東から) |
| | 4 | 19区44号住居 遺物出土状況(西から) | | 3 | 20区90号住居 竪出土状況(北東から) |
| | 5 | 19区44号住居 全景(西から) | | 4 | 20区90号住居 竪全景(南西から) |
| PL5 | 1 | 19区44号住居 竪全景(西から) | | 5 | 20区90号住居 全景(南西から) |
| | 2 | 19区44号住居 貯蔵穴全景(北から) | PL10 | 1 | 20区90号住居 竪石組み出土状況(北西から) |
| | 3 | 19区44号住居 掘り方全景(西から) | | 2 | 20区90号住居 竪掘り方全景(南西から) |
| | 4 | 19区45号住居 セクション(南西から) | | 3 | 20区90号住居 掘り方全景(南西から) |
| | 5 | 19区45号住居 遺物出土状況(南西から) | | 4 | 20区91号住居 セクション(南西から) |
| | 6 | 19区45号住居 竪遺物出土状況(南西から) | | 5 | 20区91号住居 竪出土状況(南西から) |
| | 7 | 19区45号住居 竪軸石出土状況(南西から) | | | |

| | | |
|-------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|
| P.L 11 | 20区91号住居 竪全景 (南西から) | 8 20区2号墓坑 全景 (南から) |
| | 2 20区91号住居 竪軸出土状況 (南西から) | P.L 20 1 20区3号墓坑 確認状況 (南西から) |
| | 2 20区91号住居 全景 (南西から) | 2 20区3号墓坑 ウマ頸付近接 (南東から) |
| | 4 20区91号住居 竪掘り方全景 (南西から) | 3 20区3号墓坑と屋敷跡1号掘立柱建物柱穴 (南から) |
| | 5 20区91号住居 掘り方全景 (南西から) | 4 20区6号墓坑 全景 (南西から) |
| P.L 12 | 20区屋敷跡 全景 | 5 20区6号墓坑 馬函、緑釉小皿出土状況 (南西から) |
| | 20区屋敷跡 掘立柱建物と石垣全景 (東から) | 6 20区6号墓坑と3号掘立柱建物柱穴 (南西から) |
| P.L 13 | 20区屋敷跡 1・2号掘立柱建物と石垣 (北東から) | 7 20区28号土坑と3号石垣 (南西から) |
| | 2 20区屋敷跡 1・2号掘立柱建物と1号石垣 (北東から) | 8 20区32号土坑と屋敷跡5〜7号掘立柱建物柱穴 (南から) |
| | 3 20区屋敷跡 1・2号掘立柱建物と1号石垣 (南東から) | P.L 21 1 19区2・3号掘立柱建物 全景 (北東から) |
| | 4 20区屋敷跡 5〜7号掘立柱建物 (南西から) | 2 19区2号掘立柱建物 全景 (南から) |
| | 5 20区屋敷跡 5〜7号掘立柱建物と4号石垣 (北東から) | 3 19区2号掘立柱建物 全景 (東から) |
| P.L 14 | 20区1号石垣 (南西から) | 4 20区9号焼土 全景 (北から) |
| | 2 20区1号石垣 近接 (南から) | 5 20区10号焼土 全景 (北から) |
| | 3 20区1号石垣 近接 (北東から) | P.L 22 1 30区1号礎石建物 全景 (南から) |
| | 4 20区1号石垣 近接 (北東から) | 2 30区1号礎石建物 礎石セクション (南から) |
| | 5 20区1号溝 全景 (東から) | 3 30区1号礎石建物 礎石セクション (南から) |
| | 6 20区1号石垣と1号溝 近接 (東から) | 4 30区1号礎石建物 礎石近接 (南から) |
| | 7 20区3・4号石垣 (東から) | 5 30区1号礎石建物 礎石下階梁石 (南から) |
| P.L 15 | 20区3・4号石垣 全景 (南西から) | P.L 23 1 20区1号竪穴遺構 セクション (南東から) |
| | 2 20区3・4号石垣 近接 (北東から) | 2 20区1号竪穴遺構 遺物出土状況 (北東から) |
| | 3 20区4号石垣 近接 (南東から) | 3 20区1号竪穴遺構 鉄洋出土状況 (北東から) |
| | 4 20区4号石垣 近接 (東から) | 4 20区1号竪穴遺構 中央焼土セクション (南東から) |
| | 5 20区4号石垣下 土坑状の掘り込み (北東から) | 5 20区1号竪穴遺構 焼土全景 (北東から) |
| P.L 16 | 20区3号石組遺構 出土状況 (北西から) | P.L 24 1 20区1号竪穴遺構 全景 (北東から) |
| | 2 20区3号石組遺構 茶臼出土状況 (南東から) | 2 20区1号竪穴遺構 掘り方全景 (北東から) |
| | 3 20区3号石組遺構 全景 (南西から) | 3 20区1号鍛冶跡 全景 (南東から) |
| | 4 20区3・4号石組遺構 全景 (南西から) | 4 20区1号鍛冶跡 炉全景 (東から) |
| | 5 20区4号石組遺構 全景 (南西から) | 5 20区1号鍛冶跡 炉焼土近接 (東から) |
| | 6 20区4号石組遺構 掘り方全景 (南から) | P.L 25 1 20区1号鍛冶跡 炉セクション (東から) |
| | 7 20区5号石組遺構周辺 炭化物出土状況 (北西から) | 2 20区1号鍛冶跡 炉焼土セクション (東から) |
| P.L 17 | 8 20区5号石組遺構 全景 (北西から) | 3 20区1号鍛冶跡 鍛造剥片、粒状洋出土状況 (東から) |
| | 20区6号石組遺構 出土状況 (北東から) | 4 20区1号鍛冶跡 掘り方全景 (東から) |
| | 2 20区6号石組遺構 全景 (北東から) | 5 18区1号石垣 全景 (北から) |
| | 3 20区6号石組遺構 掘り方全景 (東から) | P.L 26 1 18区1・2号石垣 全景 (北西から) |
| | 4 20区1号焼土と屋敷跡1号掘立柱建物柱穴 (南東から) | 2 18区1号石垣 (北東から) |
| | 5 20区1号焼土 セクション (西から) | 3 18区1号石垣 (北から) |
| | 6 20区2号焼土と屋敷跡1号掘立柱建物柱穴 (南東から) | 4 18区1号石垣 (北西から) |
| P.L 18 | 7 20区2号焼土 セクション (北から) | 5 18区1号石垣 (南西から) |
| | 8 20区3号焼土 出土状況 (西から) | 6 18区1号石垣 近接 (北西から) |
| | 20区3号焼土 セクション (西から) | 7 18区1号石垣 O〜O'セクション (南から) |
| | 2 20区4号焼土 全景 (北から) | 8 18区1・2号石垣 A〜A'セクション (西から) |
| | 3 20区5号焼土 全景 (北から) | P.L 27 1 18区1号石垣 B〜B'セクション (北西から) |
| | 4 20区5号焼土 セクション (南から) | 3 18区1号石垣内側 石組み近接 (北西から) |
| | 5 20区6号焼土 全景 (南西から) | 4 18区1号石垣内側 石組み (北から) |
| | 6 20区6号焼土 セクション (南から) | 5 18区1号石垣内側 石組み (北西から) |
| P.L 19 | 7 20区7号焼土 全景 (南から) | 6 18区3号石垣 全景 (北西から) |
| | 8 20区7号焼土 セクション (西から) | 7 18区3号石垣 C〜C'セクション (南西から) |
| | 20区8号焼土 全景 (東から) | P.L 28 1 18区4号石垣 全景 (東から) |
| | 2 20区8号焼土 セクション (西から) | 2 20区5号石垣 全景 (北東から) |
| | 3 20区5号墓坑 確認状況 (北から) | 3 20区5号石垣 (北から) |
| | 4 20区5号墓坑 セクション (北から) | 4 20区5号石垣 セクション (南西から) |
| | 5 20区5号墓坑 全景 (北西から) | 5 20区6号石垣 全景 (西から) |
| | 6 20区2号墓坑 腰付出土状況 (北から) | P.L 29 1 20区6号石垣 全景 (北から) |
| 7 20区2号墓坑 ウマ頸付近接 (南東から) | 2 20区6号石垣 全景 (西から) | |
| | | 3 20区6号石垣 近接 (北から) |
| | | 4 20区6号石垣 裏込め (北から) |

| | | | | | | | |
|--------|---|--------------------|----------------|--------|---|------------|-------------------|
| | 5 | 20区6号石垣 | 茶臼出土状況 (北から) | P.L.38 | 1 | 20区3号石囲い遺構 | 確認状況 (北から) |
| | 6 | 20区6号石垣 | 志野皿出土状況 (西から) | | 2 | 20区3号石囲い遺構 | 焼土出土状況 (北から) |
| | 7 | 20区6号石垣 | 銭貨出土状況 (東から) | | 3 | 20区3号石囲い遺構 | 全景 (北西から) |
| | 8 | 20区6号石垣 A~A'セクション | (西から) | | 4 | 19区293号土坑 | 人骨出土状況 (南東から) |
| P.L.30 | 1 | 20区6号石垣 | 裏込めセクション (北から) | | 5 | 19区293号土坑 | 全景 (南東から) |
| | 2 | 20区6号石垣 | 掘り方全景 (西から) | | 6 | 20区1号墓坑 | 銭貨出土状況 (南西から) |
| | 3 | 20区8号石垣 | (西から) | | 7 | 20区1号墓坑 | 人骨出土状況 (南西から) |
| | 4 | 20区8号石垣 | 撤出出土状況 (北から) | | 8 | 20区1号墓坑 | 全景 (南西から) |
| | 5 | 20区8号石垣 | (北から) | P.L.39 | 1 | 20区4号墓坑 | 全景 (南から) |
| | 6 | 20区8号石垣 | (西から) | | 2 | 20区8号墓坑 | 出土状況 (北から) |
| | 7 | 20区9号石垣 | 全景 (西から) | | 3 | 20区8号墓坑 | 人骨、銭貨出土状況 (北から) |
| | 8 | 20区9号石垣 | 掘り方全景 (北から) | | 4 | 20区8号墓坑 | 全景 (南から) |
| P.L.31 | 1 | 20区10~15号石垣 | 全景 (北東から) | | 5 | 20区9号墓坑 | 出土状況 (北から) |
| | 2 | 20区10号石垣 | 全景 (東から) | | 6 | 20区9号墓坑 | 全景 (北から) |
| | 3 | 20区10号石垣 | セクション (北から) | | 7 | 20区9号墓坑 | 人骨出土状況 (南から) |
| | 4 | 20区11号石垣 | 全景 (北東から) | | 8 | 20区11号墓坑 | 確認状況 (北東から) |
| | 5 | 20区11号石垣 | 近接 (東から) | P.L.40 | 1 | 20区11号墓坑 | 全景 (東から) |
| P.L.32 | 1 | 20区11号石垣 A~A'セクション | (北西から) | | 2 | 20区11号墓坑 | 人骨出土状況 (東から) |
| | 2 | 20区12号石垣 | 全景 (東から) | | 3 | 20区13号墓坑 | 確認状況 (北から) |
| | 3 | 20区12号石垣 | 石塔出土状況 (南から) | | 4 | 20区13号墓坑 | 人骨出土状況 (北から) |
| | 4 | 20区12号石垣 A~A'セクション | (北から) | | 5 | 20区13号墓坑 | 全景 (北から) |
| | 5 | 20区13号石垣 | 全景 (東から) | | 6 | 20区14号墓坑 | 確認状況 (西から) |
| | 6 | 20区13号石垣 A~A'セクション | (北から) | | 7 | 20区14号墓坑 | 人骨出土状況 (南から) |
| | 7 | 20区14号石垣 | 全景 (北から) | | 8 | 20区15号墓坑 | 全景 (北から) |
| | 8 | 20区14号石垣 A~A'セクション | (南から) | P.L.41 | 1 | 20区16号墓坑 | 全景 (東から) |
| P.L.33 | 1 | 20区15号石垣 | 全景 (東から) | | 2 | 20区18号墓坑 | 銭貨出土状況 (北東から) |
| | 2 | 20区15号石垣 | 近接 (東から) | | 3 | 20区18号墓坑 | 全景 (北東から) |
| | 3 | 20区15号石垣 A~A'セクション | (南から) | | 4 | 20区19号墓坑 | 確認状況 (南東から) |
| | 4 | 20区16号石垣 | 全景 (南から) | | 5 | 20区19号墓坑 | 人骨出土状況 (東から) |
| | 5 | 20区16号石垣 | 近接 (東から) | | 6 | 20区19号墓坑 | 全景 (南東から) |
| | 6 | 20区16号石垣 | (北東から) | | 7 | 20区20号墓坑 | 出土状況 (北西から) |
| | 7 | 20区16号石垣 | (南東から) | | 8 | 20区20号墓坑 | 人骨出土状況 (南東から) |
| | 8 | 20区16号石垣 E~E'セクション | (北から) | P.L.42 | 1 | 20区20号墓坑 | 全景 (南東から) |
| P.L.34 | 1 | 19区1号列石 | 全景 (北西から) | | 2 | 20区21号墓坑 | 確認状況 (南から) |
| | 2 | 28区13号列石 | 全景 (西から) | | 3 | 20区21号墓坑 | 人骨出土状況 (東から) |
| | 3 | 20区2号列石 | 全景 (北西から) | | 4 | 20区21号墓坑 | 人骨出土状況近接 (南から) |
| | 4 | 20区3号列石 | 全景 (北から) | | 5 | 20区21号墓坑 | 全景 (南西から) |
| | 5 | 18区41号配石 | 全景 (東から) | | 6 | 20区22号墓坑 | 出土状況 (北西から) |
| | 6 | 20区1号石組遺構 | 確認状況 (東から) | | 7 | 20区22号墓坑 | 人骨出土状況 (南西から) |
| | 7 | 20区1号石組遺構内 | 礎出土状況 (東から) | | 8 | 20区22号墓坑 | 人骨出土状況 (南西から) |
| | 8 | 20区1号石組遺構 | 全景 (北西から) | P.L.43 | 1 | 20区22号墓坑 | 人骨、銭貨出土状況近接 (南から) |
| P.L.35 | 1 | 20区1号石組遺構 | 近接 (北から) | | 2 | 20区22号墓坑 | 全景 (南から) |
| | 2 | 20区1号石組遺構 | 掘り方全景 (南東から) | | 3 | 29区1号墓坑 | 出土状況 (南から) |
| | 3 | 20区1・2・7号石組遺構 | (東から) | | 4 | 29区1号墓坑 | 人骨出土状況 (南西から) |
| | 4 | 20区2号石組遺構内 | 礎出土状況 (南東から) | | 5 | 29区17号配石 | 全景 (南から) |
| | 5 | 20区2号石組遺構 | 遺物出土状況 (東から) | | 6 | 30区1号墓坑 | 人骨、銭貨出土状況 (東から) |
| | 6 | 20区2号石組遺構 | 全景 (南から) | | 7 | 30区1号墓坑 | 全景 (南から) |
| | 7 | 20区2号石組遺構 | 掘り方全景 (南東から) | | 8 | 30区2号墓坑 | 人骨出土状況 (西から) |
| | 8 | 20区7号石組遺構 | 全景 (東から) | P.L.44 | 1 | 30区2号墓坑 | 全景 (西から) |
| P.L.36 | 1 | 20区27号配石 | 全景 (南から) | | 2 | 30区3号墓坑 | 人骨出土状況 (南西から) |
| | 2 | 20区28号配石 | 全景 (北西から) | | 3 | 30区3号墓坑 | 全景 (南から) |
| | 3 | 20区29号配石 | 全景 (北西から) | | 4 | 30区14号配石 | 全景 (南から) |
| | 4 | 20区30号配石 | 全景 (北西から) | | 5 | 30区14号配石 | 銭貨出土状況 (西から) |
| | 5 | 20区31号配石 | 全景 (北西から) | | 6 | 30区19号配石 | 出土状況 (北から) |
| | 6 | 20区32号配石内 | 礎出土状況 (北東から) | | 7 | 30区19号配石 | 全景 (北から) |
| | 7 | 20区32号配石 | 全景 (北東から) | | 8 | 20区10号墓坑 | 全景 (南西から) |
| | 8 | 20区33号配石 | 全景 (北西から) | P.L.45 | 1 | 18区1号墓坑 | 全景 (南西から) |
| P.L.37 | 1 | 20区1・2号石囲い遺構 | 出土状況 (東から) | | 2 | 19区1号墓坑 | 骨片出土状況 (東から) |
| | 2 | 20区1号石囲い遺構 | 全景 (北東から) | | 3 | 19区1号墓坑 | 全景 (北東から) |
| | 3 | 20区1号石囲い遺構 | 掘り方全景 (北東から) | | 4 | 19区1号溝 | 全景 (南から) |
| | 4 | 20区2号石囲い遺構 | 全景 (北から) | | 5 | 19区2号溝 | 全景 (北から) |
| | 5 | 20区2号石囲い遺構 | 掘り方全景 (東から) | | | | |

| | | | |
|----------|---------------------------------------|--------|--|
| 6 | 20区1号ヤックラ 全景 (南から) | P L 53 | 20区屋敷跡 (3)、1号壑穴遺構、30区1号礎石建物出土遺物 |
| 7 | 20区1号ヤックラ 全景 (北東から) | P L 54 | 20区1号鍛冶跡、18区1・3号、20区5・6 (1)号石垣出土遺物 |
| 8 | 20区1号ヤックラ セクション (北から) | P L 55 | 20区6 (2)・8・12 (1)号石垣出土遺物 |
| P L 46 1 | 20区2号ヤックラ 全景 (北から) | P L 56 | 20区12 (2)・13・15号石垣・石垣、2号石列、1号石組遺構出土遺物 |
| 2 | 20区2号ヤックラ セクション (北から) | P L 57 | 20区2・7号石組遺構、1～3号石囲い遺構、1・4号墓坑出土遺物 |
| 3 | 20区2号ヤックラ セクション (北から) | P L 58 | 18区1号、20区8・11・18～22号、29区1号、30区1・2号墓坑、29区17号、30区14・18・19号配石出土遺物 |
| 4 | 20区3号ヤックラ 全景 (東から) | P L 59 | 20区1～3号ヤックラ出土遺物 |
| 5 | 20区6号列石 全景 (北から) | P L 60 | 20区ヤックラ、29区Y 1号畑、18区遺構外 (1)出土遺物 |
| 6 | 20区6号列石 (北から) | P L 61 | 18区 (2)、19区、20区 (1) 遺構外出土遺物 |
| 7 | 20区6号列石 セクション (南東から) | P L 62 | 20区遺構外出土遺物 (2) |
| P L 47 | 19区31・37・44・45 (1)号住居出土遺物 | P L 63 | 20区 (3)、28～30区遺構外、遺構外出土遺物 |
| P L 48 | 19区45 (2)・49、20区83・90 (1)号住居出土遺物 | | |
| P L 49 | 20区90 (2)・91号住居出土遺物 | | |
| P L 50 | 20区屋敷跡1・6号孤立柱建物、3・4・6号石組遺構、5・6号墓坑出土遺物 | | |
| P L 51 | 20区屋敷跡出土遺物 (1) | | |
| P L 52 | 20区屋敷跡出土遺物 (2) | | |

表 目 次

| | |
|------|-------------------------------|
| 表 1 | 周辺遺跡一覧表 |
| 表 2 | 横壁中村遺跡 遺構数集計表 |
| 表 3 | 横壁中村遺跡 古代住居一覧表 |
| 表 4 | 横壁中村遺跡 20区屋敷跡孤立柱建物一覧表 |
| 表 5 | 横壁中村遺跡 孤立柱建物一覧表 |
| 表 6 | 横壁中村遺跡 壑穴遺構一覧表 |
| 表 7 | 横壁中村遺跡 石垣一覧表 |
| 表 8 | 横壁中村遺跡 石列一覧表 |
| 表 9 | 横壁中村遺跡 石組遺構一覧表 |
| 表 10 | 横壁中村遺跡 石囲い遺構一覧表 |
| 表 11 | 横壁中村遺跡 古代以降人骨・獸骨・銭貨出土遺構一覧表 |
| 表 12 | 横壁中村遺跡 中世瀬戸・美濃系陶磁器、貿易陶磁器総量一覧表 |

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（当時。現在は国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（当時。現在は東吾妻町）がその実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、平成6年3月18日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の実施に関する協定書」を締結し、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定されたことによって開始されることとなった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が開始された。平成6年度から実施されている調査は、工事用進入路に関するものが主体となっている。これは、ハッ場ダム建設工事の大規模な工事を円滑に進めるため、機材や重機を搬入・搬出する進入路や仮設道路の整備が先行される状況にあったためである。

平成6年度に締結された協定によると、調査対象遺跡は48遺跡であり、そのうち本遺跡の位置する長野原町横壁地区の遺跡は7遺跡であった。横壁地区でも工事用進入路を原因とする調査が先行され、平成6年度には協定対象遺跡である横壁勝沼遺跡の調査が実施された。

本遺跡も平成6年度に締結された協定での対象遺跡であり、平成6・7年度に行われた横壁勝沼遺跡の調査が終了した後、平成8年度から調査が行われ

第1節 調査に至る経緯

ることになった。工事用進入路部分の調査は平成11年度に終了し、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分の調査に着手した。詳しくは次節「調査の経過」にゆずる。

なお、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成11年4月1日に「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

また、協定書の対象遺跡で、横壁地区に位置する7遺跡のうち上野IV遺跡と観音堂遺跡は、長野原町教育委員会との協議の結果、本遺跡に統合されることになった。

第2節 調査の経過

横壁中村遺跡の調査は平成8年度より行われた。平成8年度から11年度までは工事用進入路部分、平成12年度からは横壁地区護岸工事部分を中心とした調査であるが、これらの工事は一体のもので、調査は継続して行われてきた。各年度ごとの調査範囲は、図示した通りであるが、年度をまたいで調査された範囲もあるので、図示した範囲は調査の終了した年度を表している。各年度ごとの調査経過を調査日誌を元に抜粋する。

平成8年度 調査事務所の設置、調査区への進入路等の造成工事等を行ったため、本調査は7月1日開始となった。本年度は担当者は3名による1班での調査であり、27地区18・28区を中心とする調査を実施した。進入路が狭く重機を導入できず、人力による掘削を強いられ調査は困難であった。11月23日に現地説明会を開催し、見学者は157名であった。

平成9年度 前年度の継続である18・28区の調査とともに、その西側にあたる19・20・29・30区の表土掘削を実施し、調査に着手した。担当者は4名の配置であったが、7月から9月まで1名は

第1章 調査の方法と経過

久々戸遺跡の調査にまわっている。調査面積は約5,000㎡である。11月3・4日に当事業団主催の平成9年度出土文化財巡回展示会が八ッ場地区で実施され、遺物・パネルを出品した。

平成10年度 平成8・9年度の継続調査である。担当者は年度当初4名の配置であったが、うち1名は林地区及び西久保1遺跡の調査を担当することになったため、実質3名の1班体制による調査となった。本年度の調査面積は約6,200㎡であった。

平成11年度 前年度までの継続調査と20・30区で調査区を拡張した。担当者は5名、2班の体制であったが、うち2名が長野原地区の調査を担当することになったため、10月末までは3名、1班での調査となった。4月29日に前年度に検出された大型敷石住居、環状柱穴などを現地説明会で公開し、153名の見学者を集めた。さらに本年度は調査区西側の28地区11区でも調査を行ったが、試掘の結果、遺構は確認できなかった。

また、平成11年8月13日からの豪雨により横壁地区が被災したため、8月22日まで調査を休止した。本年度で工事用進入路部分の調査はすべて終了した。調査面積は6,200㎡である。

平成12年度 工事用進入路部分の調査が終了したため、この南側の代替地護岸工事部分の調査を担当者7名による2班体制で開始する予定であったが、1班は林地区の調査に対応することとなり、残る1班も、西久保1遺跡との掛け持ちとなったため、調査対象面積は当初予定よりも大幅に減少した。本年度の調査は20区の調査が中心となり、一部18区の試掘調査を行った。また、調査区南側にあるゲートボール場の東側にハンザマスト（気象用観測マスト）が設置されるにあたって42㎡を併せて調査し、縄文時代後期の住居、中世の土坑を検出している。調査面積1,800㎡であった。

平成13年度 発掘作業員の雇用システムが変更になり、調査開始が6月4日となった。本年度の調査対象地は遺跡の中央を流れる山根沢の両側にあり、18・19・20区にあたる。工事が予定されている

山根沢の西側は、工事行程にあわせて調査が終了した地区を順次、工事側に引き渡しながら進められた。11月に国土交通省より希少猛禽類の保護のため対策を講じてほしいとの要請があり、12月1日から調査体制を縮小したため調査の一部は次年度に継続となり、調査面積は当初の6,200㎡から5,200㎡となった。

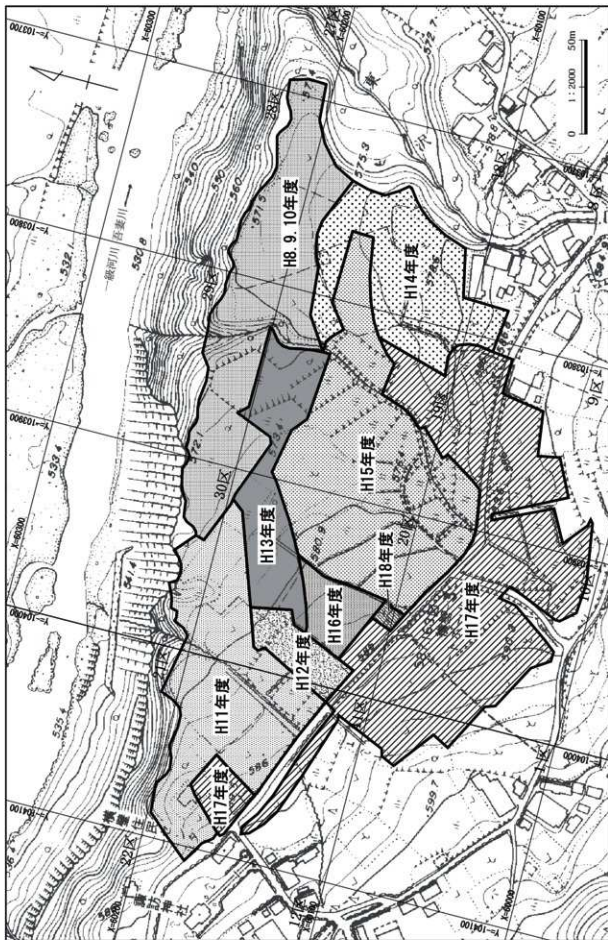
平成14年度 本年度より当事業団八ッ場ダム調査事務所が開所し、八ッ場地区の調査を管轄することになった。担当者は7名の2班体制での調査となり、前年度からの継続である18区を中心に調査を行った。本年度は6月から8月にかけて担当者2名が西ノ上遺跡へ、10月からは担当者4名が上郷原遺跡へ異動している。また、前年度と同様に11月下旬から希少猛禽類保護のため調査体制を縮小しての調査となった。調査面積は5,400㎡であった。

平成15年度 前年度の継続調査の18区と9・10・19・20区の調査を行った。担当者は当初6名の配置であったが、4月から6月は担当者2名が久々戸遺跡の調査を行い、7月から1名が整理事業への異動となった。また11月からは1名が増員となった。調査は前年度からの継続であり、18区の埋没河道の調査から開始し、その後19・20区の調査を行った。本年度は平成12・13年度の調査区まで終了する予定であったが、用地買収が遅れ、一部次年度に継続となった。本年度の調査面積は約8,000㎡であった。

平成16年度 前年度に調査未了となった20区の調査を行った。担当者2名による1班体制である。本年度で代替地護岸工事部分の調査終了の予定であったが、調査区南側の道路沿いの一部が用地買収と墓地移転の遅れにより、調査が未了となり、次年度以降に継続となった。本年度の調査面積は約1,400㎡であった。

平成17年度 国道145号線部分の調査を、担当者5名による2班体制で行った。調査区は9・10区である。調査面積は約14,000㎡であった。

平成18年度 10・20区の平成17年度調査で経



第1図 年度別調査区全体図

第1章 調査の方法と経過

塚が検出された地点を中心に、4月1日から4月13日まで担当者3名による短期間の調査を実施した。調査面積は188㎡である。

第3節 調査の方法

(1) 調査の手順

調査は初めはバックフォーによる表土削削を行い、順次作業員による遺構確認、遺構調査へと進んでいった。遺跡の現況は畑、水田、道路であった。

出土遺物は遺構から出土したものは、その遺構番号を付し、さらに図面上に出土位置を記録したものは個別番号を付し、標高を測定して取り上げた。遺構外から出土した遺物については、後述するグリッド単位で取り上げた。さらに出土位置を記録したものは遺構出土のものと同様に個別番号を付し取り上げた。遺構測量は作業員によるものと測量会社に委託して測量したものがある。縮尺については、住居・土坑・配石等は1/20、炉・埋篋・埋設土器等は1/10、その他の遺構も1/20を原則としたが、溝・列石等規模の大きい遺構については1/40、全体図は1/100、1/200で作成した。また、列石の一部においては、ハルーン撮影による空中写真測量も委託して実施した。

遺構の個別写真は、主に35mmモノクローム及びびりバーサル、6×7判モノクロームで撮影し、一部6×7判りバーサルも状況に応じて使用している。

(2) 遺跡の名称

本遺跡は、吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂に位置する。発掘調査時の遺跡名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で行っている遺跡命名の慣例に従うと大字名+小字名となり、「横壁観音堂遺跡」となるべきであるが、国土地理院1/25,000地形図「長野原」によると遺跡地には「中村」という小字名が記されているため、平成8年度の発掘調査開始時に「横壁中村遺跡」と命名した。しかし、この「中村」という小字名は行政的には用いられておらず、正確には前述の通り「観音堂」である。また、「長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—」（長野原町

教育委員会1990）によると本遺跡は「観音堂遺跡」「上野IV遺跡」の範囲に入っている。さらに群馬県遺跡台帳には「横壁中村遺跡」が記されているが記述によるとこれは本遺跡の南西にあたり、位置がやや異なる。このように、本遺跡の遺跡名に関しては若干混乱があるが、長野原町教育委員会との協議により、「横壁中村遺跡」が本遺跡の正式名称として決定されている。

(3) 調査区の設定

調査区の設定については、平成6（1994）年度から始まった八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては、「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。この方法については、「長野原一本松遺跡（1）」（群理文2002）に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。ここでは概略を記す。

調査区については、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査対象地内を国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（ $X = 58000.00$ 、 $Y = -97000.00$ ）とした。そして、まずこの基点から1km四方の地区（大グリッド）を西に10区画、北に6区画の60地区を設定した。次に各地区を100m四方の区（中グリッド）に区分し、南東隅から西に1～10区、次の列を11～20区のように100区に区部した。さらに各区を4m四方のグリッドに細分した。グリッドは、南東を基点に西へA～Y、北へ1～25までの番号を付し、組み合わせでグリッド名としている（例：20区A-1）。

本遺跡の調査区は、地区では「27地区」を中心とし、一部「28地区」にかかり、「区」では27地区は「9・10・17・18・19・20・28・29・30区」、28地区は「1・11区」に相当している。遺構名称は、区ごとに連続する番号を付し、区をまたぐ遺構の場合は遺構の主体と考えられる区の番号を付している。

第2章 遺跡の環境

八ッ場地区の遺跡の立地する環境については、既刊の『長野原一本松遺跡(1)』(群理文2002)および『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』(群理文2003)に詳述されているので、そちらを参照していただきたい。ここでは、横壁中村遺跡の立地する地理的環境および歴史的環境について概観するにとどめる。

第1節 地理的環境

横壁中村遺跡の位置する長野原町は群馬県北西部に位置し、草津町、嬭恋村、六合村、東吾妻町と接するとともに、長野県とも県境をなしている。

この地域の地質形成に大きな影響を与えたものには吾妻川と浅間山がある。吾妻川は長野県境の烏井峠付近に源を発し、東流して渋川市で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。本遺跡はこの合流点から約43km遡った地点であり、また、本遺跡から約6km下流には「関東の耶麻溪」の異名をとる国指定名勝である吾妻渓谷がある。浅間山は町域の南西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。

本遺跡の立地する長野原地域の段丘面は、この吾妻川と浅間山の活動の影響を多分に受けて形成されている。本地域の段丘面は最上位、上位、中位、下位の4段丘面に区分されるが(長野原町1993)、このうち最上位段丘と上位段丘の2面は約21,000年前の黒斑火山の噴火に伴い発生し、当時の吾妻川河床を数10m以上の厚さで埋めつくした応答泥流堆積物がその基盤となっている。最上位段丘は吾妻川からの比高が約80~90mであり、泥流下後にほとんど浸食されずに段丘面となったもの、上位段丘は比高が約60~65mであり泥流堆積物を浸食し形成されている。これら2面の上には、約11,000年前に噴出した浅間-草津黄色軽石(As-YPK)を含む関東ローム層が堆積している。中位段丘は比高30m前後で、本遺跡のある横壁地区などこの地域に最も

広く分布している。低位段丘は比高約10~15mである。

横壁中村遺跡は、この長野原町の北東に位置し、先述のように吾妻川右岸の中位段丘上に立地する。標高は約570mで、調査区北を流れる吾妻川とは比高差40mほどの急峻な段丘崖により隔てられている。また南側には山地が迫り、西は深沢、東は東沢という2本の沢によって深く区画され、調査区のほぼ中央にも山根沢という小沢が北流している。遺跡のある中位段丘面上は、これらの沢からもたらされた堆積物や土砂崩れなどによる崖堆積物が、吾妻川により形成された段丘礫層上を覆い、吾妻川に向かい緩く傾斜している。山根沢東側では北東方向へ、西側では北西方向へ緩やかに傾斜していることが確認された。調査区内の比高差は約15mである。調査区内には、この崖堆積物の夥しい数の礫が存在し、調査を困難なものとした一因でもあった。中位段丘については、離水時期は明らかでないが、本遺跡の調査では段丘礫層上に関東ローム層及びAs-YPKの堆積が認められないことから、それ以降の離水と考えられる。

浅間山の活動では、本遺跡の中心となる縄文時代中期から後期にかけては大きな影響はないと考えられるが、その後も活動は続き、遺跡内にその痕跡をとどめている。平安時代の住居の埋土の中には、浅間山起源と思われる火山灰の堆積が認められるものも存在し、また江戸時代の天明三(1783)年には、噴火とともに泥流を発生させ、流域に甚大な被害を及ぼしている。本遺跡においても、この天明泥流により埋没した痕跡が検出されている。

また、本遺跡の景観を語る上で欠かせないのが丸岩の存在である。調査区の南南西約1.5kmに位置する標高1,124mをはかる岩峰で、100年ほど前に活動していた菅峰火山の溶岩に由来すると考えられている。南側を除いた3方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、本遺跡から望むと巨大な円柱状にも見える特徴的な山容を呈している。この崖面には、柱状節理による割れ目が顕著に現れており、山の形

第2章 遺跡の環境

状とあわせ見た独特の景観は、この遺跡に暮らした人々がランドマークとして仰ぎ見たであろうことを推測するにたる奇峰と言える。

第2節 歴史的環境

横壁中村遺跡のある長野原町は明治22年の町村制実施の際に、川原畑、川原湯、横壁、林、長野原、大津、羽根尾、古森、与喜屋、応桑の旧十ヶ村を合併して成立した。町内での遺跡の調査は、昭和29年に行われた勘場木遺跡の調査を嚆矢とし、昭和38・47・48年には群馬県による分布調査が行われ、昭和53年には石畑1岩陰遺跡が発掘調査された。

昭和62年からは八ッ場ダム建設に先行して、町教委による埋蔵文化財詳細分布調査が実施され、183箇所の遺跡地が確認された。(その後の調査で、平成17年3月現在では214遺跡に増加している。)これ以降、町教委による発掘調査が行われている。さらに平成6年からは八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業が当事業団によって進められている。これらの調査をもとに横壁中村遺跡の歴史的環境を概観してみる。

旧石器時代 長野原町内では、これまでの調査において旧石器時代の遺跡は確認されていない。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間一草津黄色軽石(As-YPk)によって厚く覆われており、この下位を調査することは、掘削方法や安全上の問題などから難しいのが現状である。ただし、柳沢城跡(14)から遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の削器が1点出土しており、より山間部の遺跡などでこれらの堆積物の下位の調査が実施されれば、当該期の遺跡が確認される可能性は否定できない。

縄文時代 長野原町による埋蔵文化財詳細分布調査によれば現在までに214箇所の遺跡地が確認されており、このうち約半数の105遺跡で縄文時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

まず、草創期の遺跡としては石畑1岩陰遺跡(2)があげられる。奥行4m、幅40mの大規模な岩陰遺

跡であり、草創期から前期、そして晩期にわたる遺物と獣骨が出土している。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代草創期には長野原町域に人間が生活していたことを証明する遺跡である。

早期では、楡木Ⅱ遺跡(27)で多くの燃系文系土器、表裏縄文土器、スタンプ形石器とともに、竅穴住居が31軒検出されている。この住居の中には石囲炉を持つものがあるとともに、重複関係を示すものもあることから、同時期の集落における定住性について新たな視点を与えるものと思われる。また、立馬Ⅰ遺跡(17)でも燃系文系の住居と田戸下層式期の住居が検出されている。この立馬Ⅰ遺跡では、早期から晩期までのほぼすべての時期の遺物が出土している。山間の伏陰な谷に位置するこの遺跡からこのように長い時期にわたって遺物が出土していることは、この地域の縄文時代の環境を復元する上で興味深い事実である。さらに同時期の遺物は幸神遺跡(28)、長野原一本松遺跡(29)、坪井遺跡(35)でも出土が確認されている。

前期の遺跡は、坪井遺跡で花積下層式期の住居と土坑が検出されているほか、長野県域を主体とする塚田式、北陸地方の樞葉寺式と関連すると思われる遺物が出土している。また暮坪遺跡(38)では二ツ木式期の住居が検出されている。さらに長畝Ⅱ遺跡(41)では黒浜式期の住居が検出されている。本遺跡でも関山式、あるいは黒浜式期と思われる遺物が出土しているが、量は少なく、遺構も確認されていない。前期後半では、楡木Ⅱ遺跡で諸磯式期の住居が、川原湯勝沼遺跡(10)で同時期の土坑が検出されており、本遺跡でも同時期の土坑が確認されている。

中期になると遺跡数、遺構量ともに大幅に増加する。本遺跡では勝反式期の住居から中期末まで200軒以上の住居が確認されている。長野原一本松遺跡でも本遺跡と同様に大集落が形成されている。ただその始まりは本遺跡より若干時期が下り、中期後半の加曾利E式期になってからと思われる。この時期の特徴としては他地域との密接な交流がうかがえる点である。本遺跡の出土遺物でも、関東系の土器と

ともに中部高地系、特に長野県東部との強い関連がうかがえる土器が多く、さらに新潟県方面から持ち込まれたと思われる土器も少なくない。これは長野原一本松遺跡でも新潟県方面から伝播したと思われる大木系の土器が出土していることや、坪井遺跡でも新潟県域で主体的な「桶倉類型」などの資料が出土していることから確認できよう。

後期になると長野原一本松遺跡の集落はやや縮小の傾向にあるが、本遺跡は加曾利B式期まで継続する。この時期の住居では、柄鏡形敷石住居の検出例が多く、本遺跡や長野原一本松遺跡のほか、林中原Ⅰ遺跡(20)、上原Ⅳ遺跡(21)、向原遺跡(32)、榎Ⅱ遺跡(37)、滝原Ⅲ遺跡(44)、古屋敷遺跡(45)、上郷岡原遺跡(48)などで確認されている。

晩期になると遺跡数は減少する傾向にあり、前述した石畑Ⅰ岩陰遺跡以外ではほとんど確認されていなかったが、最近の調査により検出例が増加している。川原湯勝沼遺跡では水Ⅱ式土器による再葬墓と思われる土坑が検出され、久々戸遺跡(31)では水式土器の鉢形土器、立馬Ⅰ遺跡でも長野県北部を主体とする女鳥羽川式土器の浅鉢が出土している。本遺跡でも平成15年度の調査で晩期終末から弥生時代初頭と思われる埋設土器、土坑が確認された。検出できた遺構数は少ないが、土器片を中心とする遺物量は多く、県内でも有数のものと考えられる。

弥生時代 長野原町域では、この時期の遺跡は極めて希薄である。遺構では、本遺跡で甕形土器を埋設した前期の再葬墓の可能性のある土坑が検出されているほか、立馬Ⅰ遺跡で前期から中期の住居と中期の甕棺墓が検出されている程度である。また、榎Ⅲ遺跡(25)、坪井遺跡、外輪原Ⅰ遺跡(42)などで前期から中期の遺物、二社平遺跡(4)で後期の遺物が出土している。

古墳時代 昭和13(1938)年に編纂された『上毛古墳総覧』によれば、長野原町には大津の鉄塚と与喜原の五輪塚の2基の古墳が存在するとされている。しかし、現在までに発掘調査によって確認されたものは一つもなく、現時点では東吾妻町の岩島地区が

古墳の西限である。集落としては、林宮原遺跡(22)で1軒、下原遺跡(23)で1軒の住居が確認されているが、いずれも小規模なものである。

奈良時代・平安時代 奈良時代の遺跡は中之条町や東吾妻町に集中してあるが、長野原町では極めて希薄で、分布調査ではわずかに羽根尾Ⅱ遺跡(40)で確認されただけである。特に吾妻溪谷周辺から以西では、1軒の住居も確認できていない。これに対して平安時代の遺跡は多く、97遺跡が確認されている。主な遺跡としては横壁中村遺跡、花畑遺跡(18)、林宮原Ⅱ遺跡、榎Ⅱ遺跡、長野原一本松遺跡、向原遺跡、坪井遺跡などが挙げられる。各遺跡での住居の検出数は数軒と少ないが、榎Ⅱ遺跡では、9世紀後半から10世紀前半にかけての堅穴住居が約30軒とまとまって検出されており、「三家」や「長」と書かれた墨書土器の存在とともに注目される。

この地域の平安時代の集落は、榎Ⅱ遺跡にみられるように9世紀後半に出現し10世紀前半に消滅するものがほとんどであり、特徴的である。本遺跡においても同様で、報告する住居の大半が9世紀後半であり、11世紀に比定できた住居は1軒のみであった。

出土遺物には、コの字口縁の甕も多くみられた。しかし、県内平野部と器形は近似するものの成形の異なる甕が存在するなど、相違点もみられた。また特徴的な遺物としては、町立中央小学校の敷地から出土した瓦塔があり、塔の最上層にあたる屋根部がほぼ完形で残っているもので、現在は同小学校に保管されている。

中世 仁治二(1241)年、本地域は三原荘と呼ばれ海野幸氏の領有であった(『吾妻鏡』)。正確な荘域については不明である。海野一族は、下屋・鎌原・西窪・羽根尾などの一族を輩出し、本地域各所に広がり、領主層として勢力を温存していった。永祿四(1561)年、甲斐武田勢が西上野へ侵攻すると、西吾妻地域へも真田氏を中心とする武田勢が攻め入った。甲斐武田勢による西上野侵攻は、永祿九(1566)年に区切りを迎え、真田氏を中心とする吾妻地域の支配

第2章 遺跡の環境

も確立することとなる。その後、武田氏・織田氏が滅亡すると、大名化した真田氏が領国支配に着手し、羽根尾城に在城した湯本氏が西吾妻から北信濃を支配していく。

中世の遺跡の大部分は、柳沢城跡、丸岩城跡(15)、長野原城跡(33)、羽根尾城跡(39)などの城館跡が中心であったが、近年の発掘調査により遺跡が増えつつある。西久保I遺跡(13)、立馬I遺跡、下原遺跡、二反沢遺跡(24)、檢木II遺跡、長野原一本松遺跡などで遺構が確認され、また平成12年度には、踏査により金花山砦跡(9)が新たに見つかった。

下原遺跡では畑跡や建物跡、二反沢遺跡では区画跡のほか、羽口や鉄洋などが出土した製鉄関連遺跡も検出されている。本遺跡においても、羽口や鉄洋、鍛造片や粒状洋を出土した遺構が検出されている。また石垣を伴う屋敷跡が検出され、内耳土器や貿易陶磁器、古瀬戸を中心とする瀬戸・美濃系陶器も出土している。近隣には丸岩城や柳沢城があり、本遺跡の屋敷跡との関連も指摘される。しかし、柳沢城と本遺跡で検出された屋敷跡出土遺物の時期を比較するとやや異なり、今後文献のみならず発掘調査成果を含めた検証も必要になってくるであろう。また本遺跡より出土した内耳土器は信濃型と思われ、信濃との関わりも注目される。

近世 天正一八(1590)年小田原合戦により北条氏が滅びると、徳川家康が江戸に入部することになった。永祿年間以来吾妻地域を支配していた真田氏は豊臣秀吉との結びつきを背景に勢力を温存していたが、関ヶ原合戦後は一族分離で乗り切り、真田伸幸が沼田藩領に加え、信濃国上田まで領有することになった。やがて真田氏は、本家にあたる上田藩(松代藩)と沼田藩に分かれることとなる。

長野原町の近世遺跡の大部分は、天明三(1783)年の浅間山噴火に伴い発生した泥流堆積物により埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡(7)、西ノ上遺跡(8)、川原湯勝沼遺跡、下田遺跡(19)、中欄II遺跡(26)、尾坂遺跡(30)、久々戸遺跡(31)、小林家屋敷跡(34)などが挙げられる。多くは畑を

中心とする生産遺跡であるが、東宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡、小林家屋敷跡などでは建物跡も検出されている。また小林家屋敷跡は、農業・酒造業を営みこの地域の分限者と呼ばれた小林家の屋敷の一部が検出されたものであり、文献との照合もなされ重要な発見といえる。

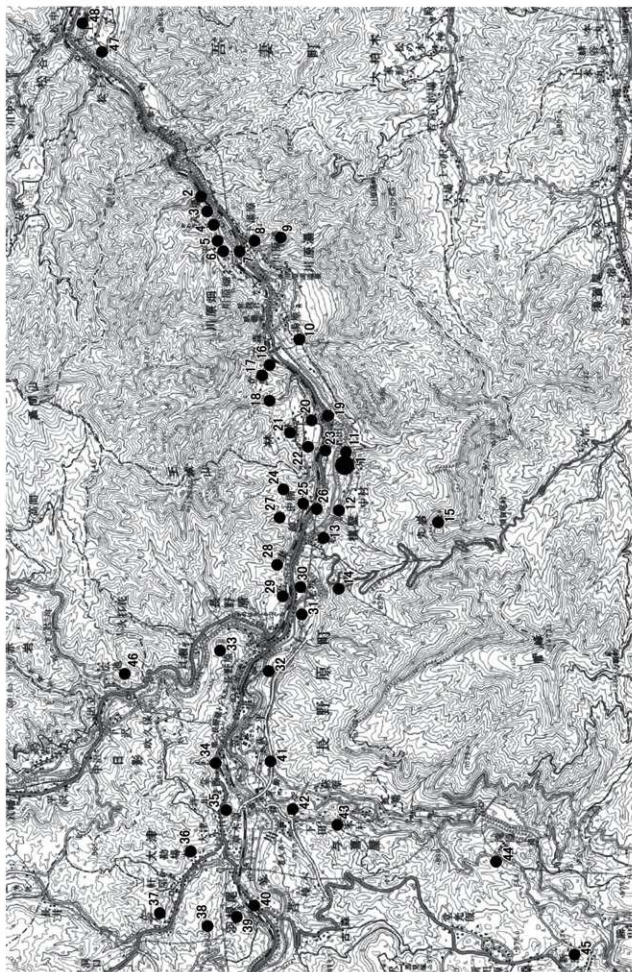
群馬県内ではほかにも、佐波郡玉村町上福島中町遺跡や玉村町越前訪前遺跡で、天明三年泥流堆積物下の建物跡が検出されている。特に東宮遺跡、上福島中町遺跡からは、複数の建物跡が検出されており注目される。また出土遺物でも、陶磁器や金属製品、石製品のほかに、漆器や建築材が出土するなど、その種類や量は他の遺跡とは一線を画する。遺構、遺物ともに大変重要な資料であり、注目される遺跡である。

天明泥流下から発見される遺跡は、旧地表面がそのまま保存されているものが多く、集落や生産域の構成要素及びその関連性を具体的に読み取ることが可能である。泥流の発生した日時が明らかであるため、遺物の時期をほぼ限定することも可能であり、また、通常では残らない建築材や漆器などの植物遺存体の検出例も多い。出土する陶磁器についても、地域性がみられ、吾妻地域では焙烙が出土しないなど興味深い事実も明らかになってきている。今後調査が進展するにつれ、泥流に埋没した遺跡の調査はさらに増えることが予想され、近世農村史研究に多大な寄与をもたらすものと考えられる。

本遺跡からは建物跡は検出されなかったが、泥流堆積物により埋没した畑跡が、19区と29区の一部で検出されている。また平成17年度調査では経塚を検出し、多数の一字一石経が出土している。

参考文献（番号は表1の文献欄に対応）

- 六合村 1973 「六合村誌」
- 群理文 1998 「長野原久々戸遺跡」 第240集
- 群理文 2002 「長野原一本松遺跡（1）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 群理文 2003 「ハツ場ダム発掘調査集成（1）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 群理文 2003 「久々戸遺跡・中標目遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 群理文 2004 「久々戸遺跡（2）・中標目遺跡（2）・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- 群理文 2005 「横壁中村遺跡（2）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 群理文 2005 「川原湯跡沼遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 群理文 2006 「横壁中村遺跡（3）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 群理文 2006 「立馬目遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 群理文 2006 「上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 群理文 2006 「横壁中村遺跡（4）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
- 群理文 2006 「立馬目遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 群理文 2007 「下原遺跡II」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
- 群理文 2007 「三平I・目遺跡」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 群理文 2007 「横壁中村遺跡（5）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 群理文 2007 「長野原一本松遺跡（2）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- 群理文 2007 「上郷阿原遺跡（1）」 ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
- 群理文 1998 「年報17」
- 群理文 2001 「年報20」
- 群理文 2002 「年報21」
- 群理文 2003 「年報22」
- 群理文 2005 「年報23」
- 群理文 2007 「年報26」
- 群馬県史編纂委員会 1988 「群馬県史 資料編」 I
- 塩野新一 1972 「群馬県吾妻郡長野原町 埴場木遺跡調査（概報）」
- 富田孝彦 2000 「外輪原遺跡の発生中間土器」 『群馬考古学手帳』 10
- 長野原町 1976 「長野原町誌」 上巻
- 長野原町 1993 「長野原町の自然」
- 長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局 1979 「石畑遺跡略報」
- 長野原町教育委員会 1990 「長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査報告書—」
- 長野原町教育委員会 1990 「響目遺跡」
- 長野原町教育委員会 1992 「長敵目遺跡・坪井遺跡」
- 長野原町教育委員会 1996 「向原遺跡」
- 長野原町教育委員会 1997 「池原田遺跡」
- 長野原町教育委員会 2000 「坪井遺跡II」
- 長野原町教育委員会 2001 「響目遺跡」
- 長野原町教育委員会 2004 「町内遺跡IV」
- 長野原町教育委員会 2004 「林宮原遺跡II」
- 長野原町教育委員会 2005 「小林家原遺跡」



第2図 道跡位置及び周辺地形図 (国土地理院1/50,000地形図「草津」使用)

表1 周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 遺跡の主な内容 | 文献 |
|----|-----------|---------|--|--------|
| 1 | 横壁中村 | 長野原町横壁 | 本遺跡。 | 5, 7他 |
| 2 | 石畑1岩陰 | 長野原町川原畑 | 町教委昭和53年度調査。縄文草創期から晩期の遺物と断片が出土。 | 30 |
| 3 | 石畑 | 長野原町川原畑 | 事業団平成8・9・10年度調査。縄文前期包含層。弥生中期土坑。近世畑。 | 4 |
| 4 | 二社平 | 長野原町川原畑 | 事業団平成8・10年度試掘。弥生後期土器片。近世畑。 | 4 |
| 5 | 三平I・II | 長野原町川原畑 | 事業団平成16年度調査。縄文前期住居。中世建物。陥し穴多数。 | 15 |
| 6 | 上ノ平I | 長野原町川原畑 | 事業団平成18・19年度調査。縄文中期中葉から後期住居。平安住居。陥し穴多数。 | 24 |
| 7 | 東宮 | 長野原町川原畑 | 事業団平成7・9・19年度調査。近世民家。畑。 | 4 |
| 8 | 西ノ上 | 長野原町川原湯 | 事業団平成14年度調査。近世畑。 | 6 |
| 9 | 金花山菅跡 | 長野原町川原湯 | 町教委・事業団により平成12年度に踏査・確認。中世城跡。 | |
| 10 | 川原湯勝沼 | 長野原町川原湯 | 事業団平成9・16年度調査。縄文前期後半の土坑。晩期終末期の再葬墓。近世畑。 | 8 |
| 11 | 横壁勝沼 | 長野原町横壁 | 事業団平成6・7年度調査。縄文中期から後期の土器。槍先形尖頭器が出土。 | 4 |
| 12 | 山根Ⅱ | 長野原町横壁 | 事業団平成10・13・18年度調査。縄文中期後半の住居。土坑。 | 21, 24 |
| 13 | 西久保I | 長野原町横壁 | 事業団平成6・10・12年度調査。縄文中期末葉の敷石住居。土坑。中間の水場以降。 | 4 |
| 14 | 柳沢城跡 | 長野原町横壁 | 町教委平成5年度調査。中世城跡。郭。堀切。土層等検出。 | 28 |
| 15 | 丸岩城跡 | 長野原町横壁 | 中世城跡。 | 28 |
| 16 | 立馬Ⅱ | 長野原町林 | 事業団平成14年度調査。縄文時代中期初頭から後半の住居。 | 10 |
| 17 | 立馬Ⅰ | 長野原町林 | 事業団平成13・14年度調査。縄文早期初期。晩期の住居。弥生中期の住居。費相墓。 | 13 |
| 18 | 花畑 | 長野原町林 | 事業団平成9～12年度調査。平安住居。陥し穴多数。 | 4 |
| 19 | 下田 | 長野原町林 | 事業団平成7年度調査。近世民家。畑。 | 4 |
| 20 | 林中原Ⅰ | 長野原町林 | 町教委平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。 | 38 |
| 21 | 上原Ⅳ | 長野原町林 | 事業団平成15年度調査。縄文後期前半の敷石住居。晩期後半の土器。近世水路。 | 23 |
| 22 | 林宮原 | 長野原町林 | 町教委15年度調査。古墳住居1軒。平安住居6軒。 | 39 |
| 23 | 下原 | 長野原町林 | 事業団平成12～16年度調査。古墳住居1軒。平安住居2軒。中世建物。近世畑。 | 5, 14 |
| 24 | 二反沢 | 長野原町林 | 事業団平成12年度調査。中世区画。製鉄関連遺物。近世畑。 | 11 |
| 25 | 榎木Ⅲ | 長野原町林 | 事業団平成10年度調査。縄文前期。後期の包含層。弥生中期の包含層。 | 4 |
| 26 | 中榎Ⅱ | 長野原町林 | 事業団平成11・15年度調査。近世畑。石垣。道など。 | 5 |
| 27 | 榎木Ⅱ | 長野原町林 | 事業団平成12・13年度調査。縄文早期初頭の集落。前期。中期初頭の住居。平安住居。中世建物。 | 20, 21 |
| 28 | 幸神 | 長野原町長野原 | 事業団平成8・9年度調査。縄文中期中葉から後半の住居。古代の可能性ある畑。 | 19 |
| 29 | 長野原一本松 | 長野原町長野原 | 事業団平成6～19年度調査。縄文中期後半から後期初頭にかけての拠点集落。 | 3, 17 |
| 30 | 尾取 | 長野原町長野原 | 事業団平成6・7・11・18・19年度調査。近世民家。畑。 | 4 |
| 31 | 久々戸 | 長野原町長野原 | 事業団平成9～15年度調査。縄文晩期土器。近世畑。道。竪立柱建物。 | 5, 6 |
| 32 | 向原 | 長野原町長野原 | 町教委平成5年度調査。縄文中期から後期の住居。平安住居。 | 34 |
| 33 | 長野原城跡 | 長野原町長野原 | 中世城跡。 | 28 |
| 34 | 小林家屋敷跡 | 長野原町長野原 | 町教委平成14年度調査。近世礎石建物。土蔵。石垣。 | 40 |
| 35 | 坪井 | 長野原町大津 | 町教委平成3・10年度調査。縄文前期。中期住居。弥生土器。平安住居。 | 33, 36 |
| 36 | 勘太木石器時代住居 | 長野原町大津 | 昭和29年調査。縄文中期後半の住居。群馬県史跡。 | 26 |
| 37 | 柳Ⅱ | 長野原町大津 | 町教委昭和63年度調査。縄文後期前半の敷石住居4軒。 | 32 |
| 38 | 谷坪 | 長野原町羽根尾 | 町教委平成12年度調査。縄文前期前半の住居。 | 37 |
| 39 | 羽根尾城跡 | 長野原町羽根尾 | 中世城跡。 | 28 |
| 40 | 羽根尾Ⅱ | 長野原町羽根尾 | 奈良散布地。 | 31 |
| 41 | 長畝Ⅱ | 長野原町与喜原 | 町教委平成12年度調査。縄文前期前半。中期後半の住居。 | 33 |
| 42 | 外輪原Ⅰ | 長野原町与喜原 | 町教委平成7年度試掘。縄文前半の土器。弥生土器。 | 27 |
| 43 | 上ノ平Ⅱ | 長野原町与喜原 | 縄文中期。後期の土器。石器類出土。 | 28 |
| 44 | 滝原Ⅲ | 長野原町比奈 | 町教委平成8年度調査。縄文中期後半の住居。中期末の敷石住居。 | 35 |
| 45 | 古屋敷 | 長野原町比奈 | 昭和34年発見。後期前半の敷石住居。 | 28 |
| 46 | 池田 | 六合村赤岩 | 群馬大学昭和44年度調査。中期後半の住居。 | 1 |
| 47 | 上郷A | 東吾妻町三島 | 事業団平成15年度調査。陥し穴多数。押型文土器出土。 | 6 |
| 48 | 上郷原原 | 東吾妻町三島 | 事業団平成14年度調査。縄文中期後半から後期前半住居。近世民家。畑。 | 18 |

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期後半を中心とする集落遺跡で、平成18年度までの調査で竪穴住居220軒以上が確認されており、県内でも有数の大規模集落であることが判明しつつある。

遺跡は、その中央を流下する通称「山根沢」の両側に展開しており、東側は「丸岩」の足下から流れる「東沢」までを範囲としている。北側及び西側の範囲は今後の調査に負うところとなるが、冬には午後3時で日が山に入る北向きの台地に、これほどの大規模集落が維持されたのは、周辺にこれらの沢があったからであろう。

この地で人々の生活が始まるのは、縄文時代早期からで、19区の山根沢沿いで燃糸文土器が少量出土している。前期では、初頭の花楨下層式から諸磯c式までの土器が断続的に出土しているが、この時期の住居はまだ確認されていない。中期では、五領ヶ台式から勝坂式にかけての土器がかなり広範囲で出土しており、土坑はいくつか確認されている。住居が出現するのは勝坂式後半からである。中期後半は集落が最大規模となり、その後も集落はやや規模を縮小しながら継続し、列石遺構や配石遺構、掘立柱建物等が伴う集落が後期前半まで認められる。後期後半になると山根沢の西側に配石墓群が形成され

る。この時期の集落の構成はまだはっきりしない。後期後半以後の様子を示す材料は少ないが、晩期終末期の遺物は多量に出土しており、本地域の主要遺跡の一つと良いだろう。

弥生中期前半の遺物も比較的多く出土しているが、県内で稲作農耕が始まる中期後半期になると活動の痕跡は途絶えてしまう。この状況は、本遺跡に限らず、西吾妻地域全体に認められる傾向である。

その後、本地域に集落が戻るのは9世紀代からで、本遺跡でも平安時代の住居が十数軒確認され、炭化した床材が遺存する焼失住居跡も検出されている。

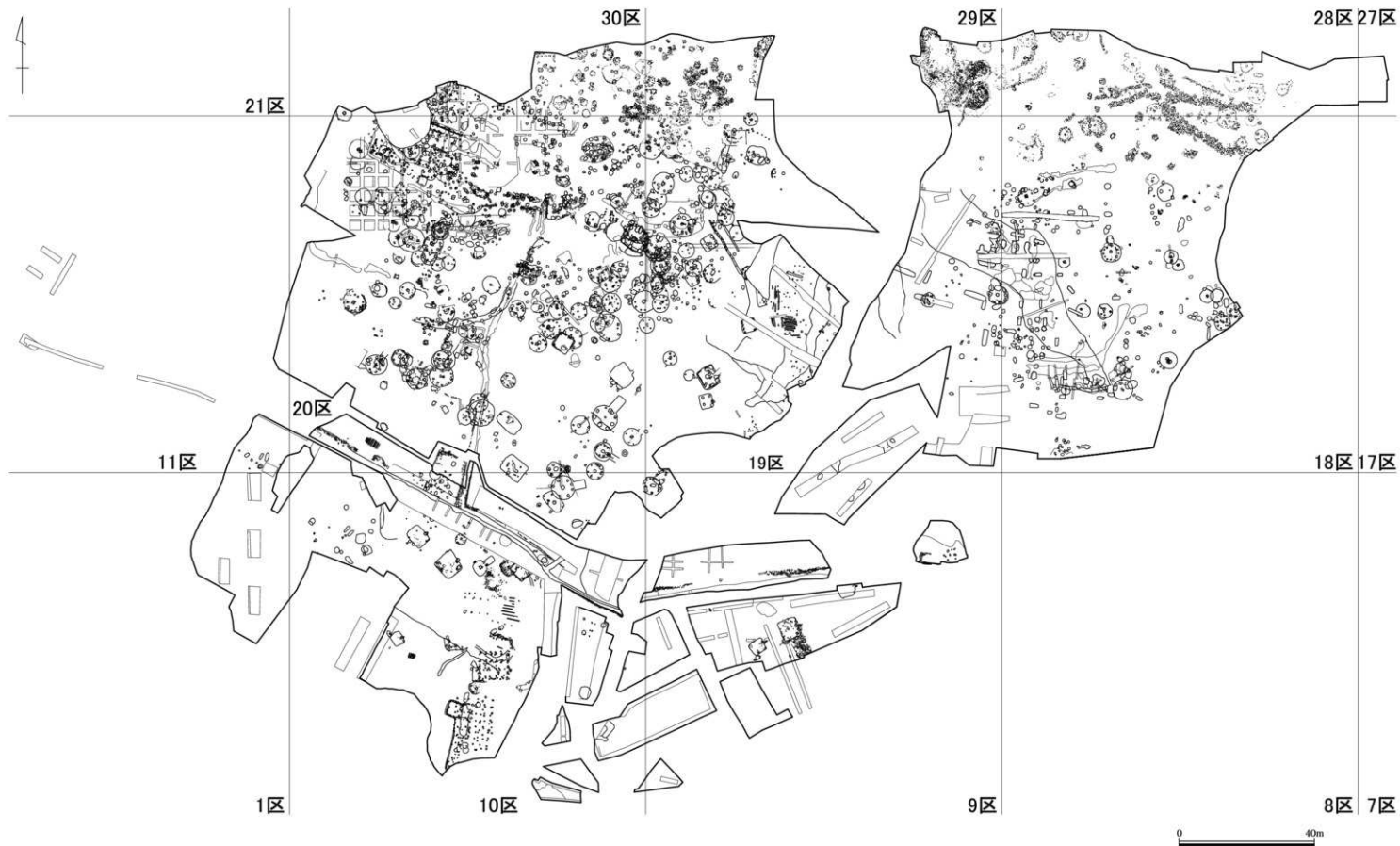
中世になると本地域には、海野一族が支配する「三原荘」が成立し、戦国時代にはその一系でもある真田氏が、甲斐武田氏の指示で本地域を掌握するようになる。本遺跡の南西には棚沢池と丸岩池があり、遺跡内では20区を中心に鍛冶場を伴うだろう中世の屋敷跡が確認されている。また、その他に中世から江戸期の墓坑や経塚、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流で埋没した畑も検出されている。

以上が本遺跡の概要であるが、遺跡の内容は多岐にわたるため、今回は、平成16年度までに調査された古代以降の竪穴住居や屋敷跡、墓坑などの遺構について報告する。表2は現段階における本遺跡の遺構種別ごとにその数を集計したものである。本遺跡の整理は継続中であるため、今後も遺構数の変更される可能性があることをご了解いただきたい。

表2 横壁中村遺跡 遺構数集計表 (平成8～16年度)

| | | 9区 | 10区 | 18区 | 19区 | 20区 | 28区 | 29区 | 30区 | 合計 |
|-------|------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 竪穴住居 | 縄文 | 1 | 3 | 26 | 46 | 101 | 19 | 18 | 13 | 227 |
| | 平安 | | | 1 | 6 | 3 | | | | 10 |
| 土坑 | 縄文 | | | 86 | 110 | 272 | 11 | 21 | 28 | 528 |
| | 弥生 | | | | | 4 | | | | 4 |
| | 平安 | | | | 1 | 1 | | | | 2 |
| | 中世以降 | | | 159 | 133 | 158 | 2 | 1 | 3 | 456 |
| 墓坑他 | 中世以降 | | | 3 | 3 | 32 | | 2 | 6 | 46 |
| 掘立柱建物 | 縄文 | | | 4 | | 6 | | 1 | | 11 |
| | 中世以降 | | | | | 3 | 10 | | | 13 |
| 竪穴遺構 | 中世 | | | | | 4 | | | | 5 |
| 埋没土器 | 縄文 | | 2 | 23 | 9 | 27 | 4 | | | 67 |

| | | 9区 | 10区 | 18区 | 19区 | 20区 | 28区 | 29区 | 30区 | 合計 |
|------|------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 配石遺構 | 縄文 | | | 42 | 17 | 28 | 17 | 53 | 15 | 172 |
| 列石遺構 | 縄文 | | | 7 | 4 | 5 | 12 | 4 | | 32 |
| 集石遺構 | 縄文 | | | 1 | | 4 | | | | 5 |
| 環状穴列 | 縄文 | | | | 2 | | | | 1 | 3 |
| 柱穴列 | 縄文 | | | | 1 | | | 1 | | 2 |
| 焼土 | 縄文 | | | 1 | 2 | 2 | | 2 | 1 | 8 |
| | 中世以降 | | | 12 | 6 | 16 | | | | 34 |
| 石組遺構 | 中世以降 | | | 1 | | 18 | | | | 19 |
| 石列遺構 | 中世以降 | | | | | 3 | | | | 3 |
| 埋没河道 | | | 1 | 5 | | | | | | 6 |



第3図 横壁中村遺跡全体図

第2節 基本土層 (第4図)

本遺跡が乗る段丘面は、岩盤の上に吾妻川が運んだ段丘礫層を基盤としており、その上に南側の岩塊を核とする山地からの崩落土と礫が繰り返して堆積して形成された、北向きの緩傾斜地に遺跡は立地している。台地上の基本土層は、図に示したⅠ～Ⅹ層ま

で確認しているが、この10層が1箇所ですべて揃う断面は今のところ認められない。また、各土層の層厚は地区によって異なっているため、あえて記入していない。

今回の報告対象となる古代の遺構は、土層としてはⅣ層に該当し、中世以降の遺構は、土層としてはⅡからⅢ層に該当する。

| | |
|------|--|
| I | I層 表土 (耕作土) |
| II a | II a層 浅間A泥流 |
| II b | II b層 浅間A軽石 |
| II c | II c層 浅間A軽石下畑の耕作土 |
| III | III層 淡褐色土 軟質で炭化物を含む。中世に比定される土壌で、20区屋敷跡付近では炭化物を多量に含み、黒土化していた。 |
| IV | IV層 灰黒褐色土 やや軟質で均質。古代に比定される土壌であるが、本遺跡では大半が混土化されて、層としてはほとんど残っていない。 |
| V | V層 黄褐色土 やや軟質。縄文時代後期後半頃の土壌で、加曾利B式期の遺構と関連する。今のところ、山根沢周囲に認められることから、Ⅵ層ないしはローム層の2次堆積の可能性が高い。 |
| VI | VI層 灰褐色土 締まりのある土壌で、黄色軽石や白色粒子を多く含む。縄文時代に比定される土壌で、中期から後期前半の遺構・遺物はこの土層中に含まれる。なお、下半部を中心に多量の礫(山石)を含む。 |
| VII | VII層 西側縁辺に特有な土壌で、層位はⅥ層と同じであり、沢治いに流れたものかもしれない。この土層の上層部には縄文時代前期前半の土器が包含され、この土層で埋没した土坑も確認されている。 |
| VIII | VIII層 黄褐色粘質土 崩落したローム層の2次堆積土で、多量の礫・砂礫を含む部分が多い。本遺跡では20区の西半部でのみ確認されており、現在の山根地区集落はこの土層の高まりの上に立地していると考えられる。供給源は山根集落南側の沢上流部、つまり丸岩の北麓で、崩落時期は縄文時代早期後半頃と思われる。 |
| IX | IX層 黒褐色粘質土 硬質で粘性が強く、黄色軽石と白色粒子を多量に含む。 |
| X | X層 黄色砂礫層 吾妻川が運んだ段丘砂礫層で、本遺跡北側の崖面では15 m以上の堆積が確認できる。この下層は基盤の岩塊となる。 |

第4図 横壁中村遺跡基本土層

第3章 発見された遺構と遺物

横壁中村遺跡は、縄文時代から近世までの遺構が重複する複合遺跡である。これまでに、縄文時代中期住居編として「横壁中村遺跡(2)」から「横壁中村遺跡(5)」の4冊が、縄文時代後期住居編として「横壁中村遺跡(8)」及び「横壁中村遺跡(9)」が、縄文時代の掘立柱建物、土器埋設遺構等を「横壁中村遺跡(7)」が、平成16年度までに調査された土坑を「横壁中村遺跡(6)」が報告している。本書は、古代から近世までに比定できた遺構、遺物について報告するものであり、過年度に報告された成果も踏まえて掲載するものである。

本書では、平成8年度から平成16年度までに調査された、古代から近世までに比定された遺構について報告する。本書における遺構名称や遺構番号は、基本的に発掘調査段階に認定した呼称を優先して掲載している。

本遺跡は、多年度に渡り多数の調査担当者が関わった遺跡である。また遺構覆土の判別もし難く、遺構確認面に多数の礫もあり、遺構確認でさえ容易にはできない遺跡であった。また複合遺跡でもあり、遺構重複は著しく、消失または一部壊された遺構も数多いと考えられる。ここで報告する古代以降の遺構でも、出土状況が良好でないものが数多くみられた。また現場での資料に統一性がなく、確認できない資料も多くみられた。限られた整理期間では解決できない課題も多く、注記のない断面図や出土位置に疑問が残る遺物もみられたが、ここでは、資料が少なく判断材料が希薄なものについては、調査段階の見解のまま掲載している。また整理は継続する予定であり、後日確認できる資料もあると考え、断面図等もそのまま掲載している。

古代の遺構としては、住居10軒を報告する。古代に比定できた遺構は希薄で、これまでの報告を含めても、土坑2基と今回報告する住居程度である。遺構外出土遺物も、限られた整理期間で実見した範囲では非常に少なかった。

中世の遺構としては屋敷跡1箇所がある。4箇所の石垣に囲まれた掘立柱建物が9棟、竪穴遺構が4

基、石組遺構が4基、焼土遺構が8箇所、人骨あるいは銭貨が出土した墓坑3基、獣骨が出土した遺構4基、溝1条が検出された。その他の中世、近世の遺構としては、掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、竪穴遺構1基、鍛冶跡1箇所、石垣17箇所、石列3箇所、石組遺構11基、石圍い遺構3基、人骨あるいは銭貨が出土した墓坑31基、獣骨が出土した遺構6基、溝3条、ヤックラ(集石)4箇所、天明三(1783)年記流下畑1箇所があり、屋敷跡も含め本書で報告する。

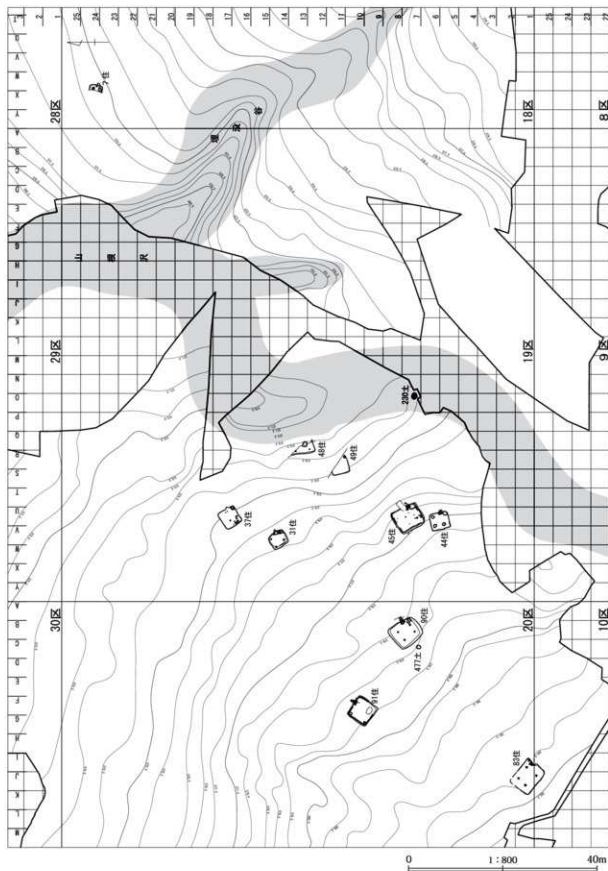
本書では、調査段階の呼称を優先して遺構名称、遺構番号としているが、その後の整理作業の中で異なる見解となった遺構も多い。ここでは、遺構名称は異なるが同様の性格を持った遺構についてはまとめて報告している。また横壁中村遺跡の中世を代表する遺構に、石垣を伴う20区屋敷跡がある。低い石垣に囲まれたような屋敷跡であるが、この屋敷跡内で検出された遺構は屋敷跡に伴う遺構の可能性があると考え、これらをまとめて報告している。結果、遺構名称や遺構番号の不統一、不連続となってしまったが、ご了承いただきたい。また、遺構の詳細については一覧表にまとめている。参照していただきたい。

第3節 古代の竪穴住居

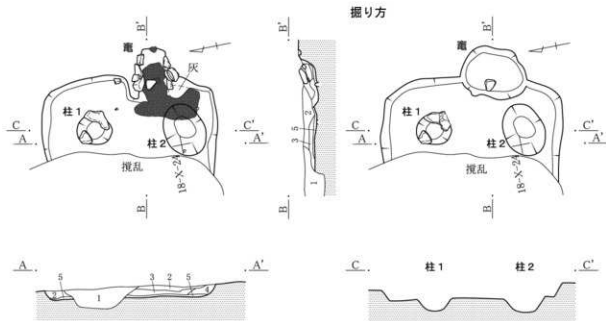
当該節では、18区、28区及び19区、29区で出土し番号を付された、古代の竪穴住居について報告する。報告する住居は18区で1軒、19区で6軒、20区で3軒の計10軒である。

確認できた古代住居の大半は、山根沢西側である19区及び20区南側にて検出されており、山根沢東側の古代遺構は希薄であった。また竈が確認できる住居8軒のうち6軒は、地形の傾斜に沿うように北東方向を向いていた。竈が東または南東方向を向くのは、18区7号住居と20区83号住居のみであった。

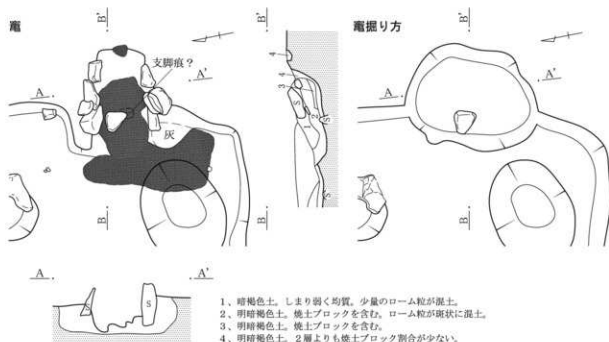
本書で扱う古代住居の詳細については「表3 横壁中村遺跡 古代住居一覧表」に記載した。参照していただきたい。



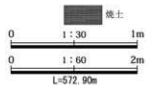
第5図 古代住居全体図



1. 暗褐色土。掘乱。
2. 暗褐色土。しまり弱い。均質。軽石を含まない。
3. 暗褐色土。しまりやや弱い。やや粘性あり。より明るい色調。
4. 暗褐色土。3層よりしまり強い。
5. 暗褐色土。褐色土にローム粒が混土。しまっていて固い面。



1. 暗褐色土。しまり弱く均質。少量のローム粒が混土。
2. 明暗褐色土。焼土ブロックを含む。ローム粒が斑状に混土。
3. 明暗褐色土。焼土ブロックを含む。
4. 明暗褐色土。2層よりも焼土ブロック割合が少ない。



第6図 18区7号住居

以下、各区に分け個別住居ごとに報告する。

1 18区の古代住居

18区は、横壁中村遺跡の東側に位置する。調査区北側には吾妻川が東流し、東側には東沢が北流する。調査区は、北西へ緩やかに傾斜した地形上に位置する。

18区で確認された古代住居は1軒である。当該調査区では古代の遺構は希薄であり、18区11号築土遺構から須恵器坏や壺の破片が出土したが、古代遺物の出土も少なかった。18区7号住居は、調査区中央を流れる山根沢東側で確認されたが、他の古代住居は山根沢西側の19区及び20区にあり、やや離れた位置で確認されている。竈方向も異なるが、本住居の遺存状態は悪く遺物も確認できないため、理由については判然としない。

以下、18区7号住居について報告する。

18区7号住居(6図：PL.2)

調査年度 平成10年度

位置 W・X-23・24

経過 調査は平成10年度に行われた。当初は縄文時代の住居との認識で、竈を石囲炉と考え調査を進めていた。その後、古代の住居の竈であることが確認できたため、一部の写真や図面等には混乱もみられた。

本住居に伴うだろう出土遺物は確認できていない。出土遺物量が少なかったためか、あるいは住居の大半が攪乱により壊されていたためか判然としない。今回の限られた整理期間の中では確認できなかったが、平面図には遺物の記載もあり、今後確認される可能性もあるだろう。遺物は確認できなかったが、住居形態から古代の住居と判断し報告する。18区で出土した古代住居は本住居のみである。

重複 18区8号住居(加曾利E3)と重複し、これを切る。

形状 遺構の大半は攪乱により確認できないが、東壁に竈を持つおよそ隅丸方形の住居と考え

られる。住居規模は、長軸2.73m、攪乱により判然としなが短軸は1.25mまで測れた。住居面積は、確認できた範囲で約3.8㎡。壁高は29cmほどであった。

床面 前述の通り、縄文住居との認識で調査されたためか、床面については不明瞭なところが多い。調査所見もなく詳細は分からないが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。竈付近を中心に焼土の広がりも確認されている。

掘り方調査では、明確な床下土坑等は確認できなかった。

竈 東壁、やや南寄りにある石組みの竈。全長89cm、屋外長49cm、焚き口幅は不明瞭だが34cmほどか。竈の両袖や煙道部分の一部も出土。支脚もその痕跡が確認できた。

貯蔵穴 なし

方位 N-101°-E

柱穴 出土した柱穴は2基を数える。やや規模が大きく、掘り方に近いものかもしれない。各柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：54×(34)×17.7、柱2：85×63×20.4。

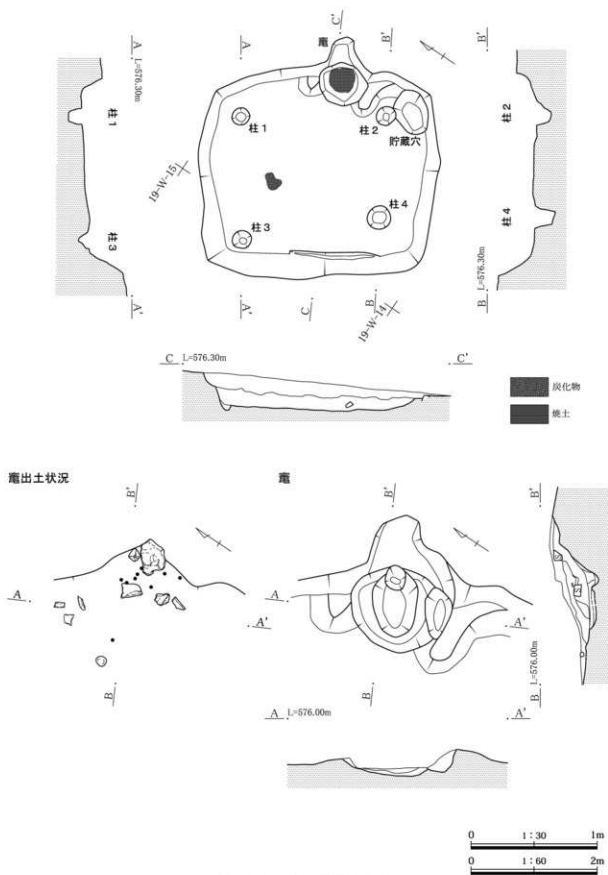
遺物 整理段階では確認できなかった。

時期 9世紀後半頃と思われる。前述の通り、本住居は遺存状態が悪く、住居に伴う遺物も確認することができなかった。住居形態や本遺跡の古代遺構の出土様相等を勘案し、本住居を当該期と考えた。

2 19区の古代住居

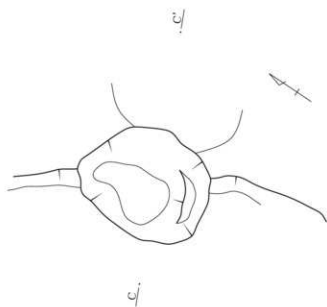
19区は、横壁中村遺跡のほぼ中央に位置する。調査区中央には山根沢が北流し、北側に東流する吾妻川へと流れ込む。19区は、中央の山根沢及び北側へ緩やかに傾斜した地形上に位置する。

19区で確認された古代住居は6軒である。確認された住居は、すべて9世紀後半頃に比定されるものと考えている。同時期であるためか、住居は重複することもなく隣接するように出土している。ま



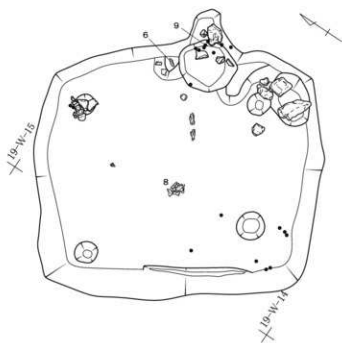
第7図 19区 31号住居 (1)

南掘り方



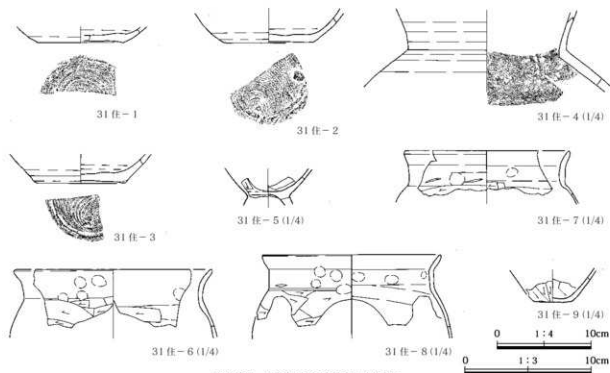
1. 明褐色土。焼土。φ1~5mmの軽石を多量に含む。

0 1:30 1m
L=576.00m



0 1:50 2m

第8図 19区31号住居(2)



第9図 19区31号住居出土遺物

た、竈が確認できた住居は、地形の傾斜に沿うように竈を北東方向へ向けていた。本調査区には、遺跡中央を東西に分ける山根沢が成した南北方向の谷地地形があるが、19区の古代住居は谷の西側、吾妻川とは離れるように調査区南側から出土している。

古代に比定された遺構に、住居以外では230号土坑がある。土坑の詳細については「横壁中村遺跡(6)」に詳しい。参照していただきたい。

以下、個別住居ごとに報告する。

19区31号住居(7~9図:PL 2・3)

調査年度 平成14年度

位置 V-14・15、W-14

経過 調査は平成14年度に行われた。比較的良好な遺存状態であった。

重複 19区30号住居(加曾利E2)と重複し、これを切る。

形状 東側に竈を持つ、およそ隅丸形状の住居である。住居規模は、長軸3.85m、短軸3.39m。住居面積は約11.6㎡。壁高は64cmほどであった。住居南西側には周溝状の掘り込みも確認できた。

床面 調査所見がなく詳細は不明。写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。

掘り方調査では、明確な床下土坑等は確認できなかった。

竈 東壁、ほぼ中央にある。遺存状態は悪いが、竈付近から礫が出土しており石組みの竈であった可能性がある。竈の規模は、全長122cm、屋外長46cm。焚き口幅は45cmであった。竈両袖が検出され、火床面には焼土の広がりもみられた。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅で検出。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸73×短軸(49)×深さ24cm。

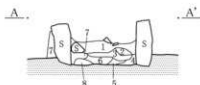
方位 N-59°-W

柱穴 出土した柱穴は4基を数える。各柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1:28×26×22、柱2:31×30×24、柱3:30×28×21、柱4:37×37×23。

遺物 須恵器の坏や埴、壺、土師器の台付き甕やコの字口縁甕もみられた。ともに9世紀後半頃の所産と思われる。

第3章 発見された遺構と遺物

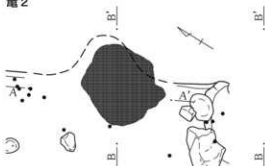
竈1



- 1、暗褐色。やや粘質。赤褐色土をこくわずかに含む。
- 2、明褐色土。焼土ブロック、炭化物、灰をわずかに含む。
- 3、明褐色土。焼土を40~50%含む。
- 4、淡褐色土。赤褐色土を少量含む。
- 5、明褐色土。軽石を少量含む。3層よりやや明るい色調。
- 6、明褐色土。白色軽石を多く含む。
- 7、淡褐色土。やや粘質。φ5mm程の白色軽石を多く含む。
- 8、灰褐色土。しまりあり。白色軽石を少量含む。

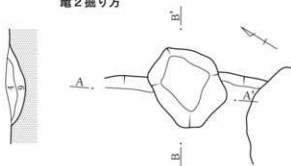


竈2

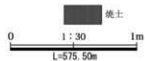


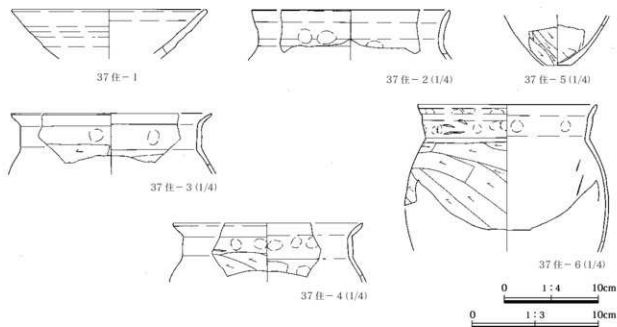
- 1、暗黄褐色土。しまりあり。焼土をわずかに含む。
- 2、淡褐色土。暗黄褐色土粒と焼土をわずかに含む。
- 3、2層より淡褐色土。焼土を少量含む。
- 4、暗赤褐色土。焼土層。
- 5、淡褐色土。焼土を多く含む。白色粒子を少量含む。
- 6、淡褐色土。しまりよく。炭化物をわずかに含む。
- 7、淡褐色土。6層に近似。灰色粒子を少量含む。
- 8、淡褐色土。焼土をわずかに含む。
- 9、褐色土。粘性なし。裏らに焼土のブロックを含む。

竈2掘り方



第11図 19区 37号住居 (2)





第12図 19区37号住居出土遺物

時期 9世紀後半。出土遺物より、本住居を当該期に比定した。

19区37号住居 (10～12図：PL 3・4)

調査年度 平成15年度

位置 T～V-16・17

経過 調査は平成15年度に行われた。本住居の遺存状態はあまり良好ではないが、東壁及び西壁から竈が検出された。2基の竈があるのは本住居のみである。2基の竈の新旧関係等については、調査所見もなく、出土遺物からも判断できなかった。

重複 19区175（堀之内2）・274・275（ともに中世以降）と重複。175号土坑を切り、274・275号土坑に切られる。

形状 北東及び南西側に竈を持つ、隅丸形状の住居である。住居規模は、長軸4.05m、短軸3.91m。住居面積は約15.1㎡。壁高は41cmほどであった。

床面 調査所見がなく詳細は分からないが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。住居中央付近からは、焼土や炭化物がやや集中するように出土している。

掘り方調査では、床下土坑3基が出土している。掘り方調査でも柱穴の痕跡は確認できなかった。

竈 竈は2基検出された。竈1は石組みの竈で、西壁やや南よりで出土した。竈2は石組みであるかは不明。東壁やや南寄りで出土した。前述の通り新旧関係は明らかでない。

竈1は石組みの袖部分を残すが、煙道部分は不明。全長は64cm、焚き口幅は48cmであった。竈2は、全長64cm、屋外長19.5cm。袖の一部と思われる粘土の痕跡があり、火床面からは焼土の広がりも確認できた。

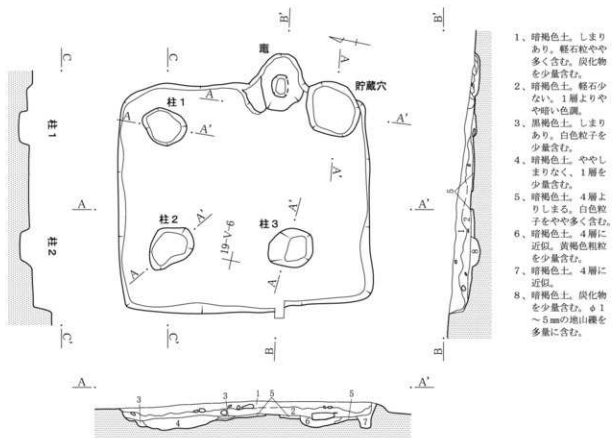
貯蔵穴 竈2の南側、住居南東隅で検出。平面形状はやや歪んだ円形を呈し、この貯蔵穴を囲むように礎が出土している。規模は、長軸110×短軸84×深さ18cm。竈1周辺では、貯蔵穴と思われる痕跡を確認できなかった。

方位 N-59°-E

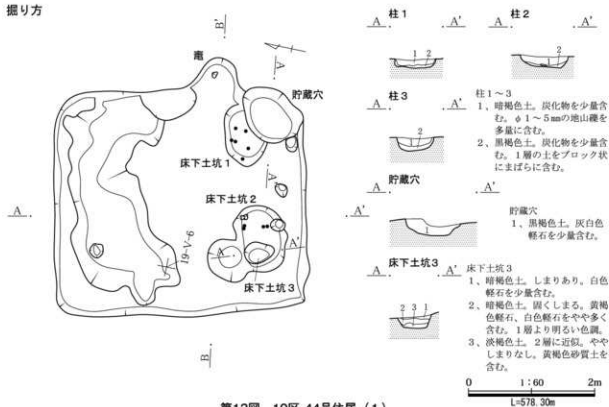
柱穴 柱穴は確認できなかった。

遺物 須恵器の坏や土師器のコの字口縁甕が出土した。ともに9世紀後半頃の所産と思われる。

時期 9世紀後半。出土遺物より、本住居を当該期に比定した。

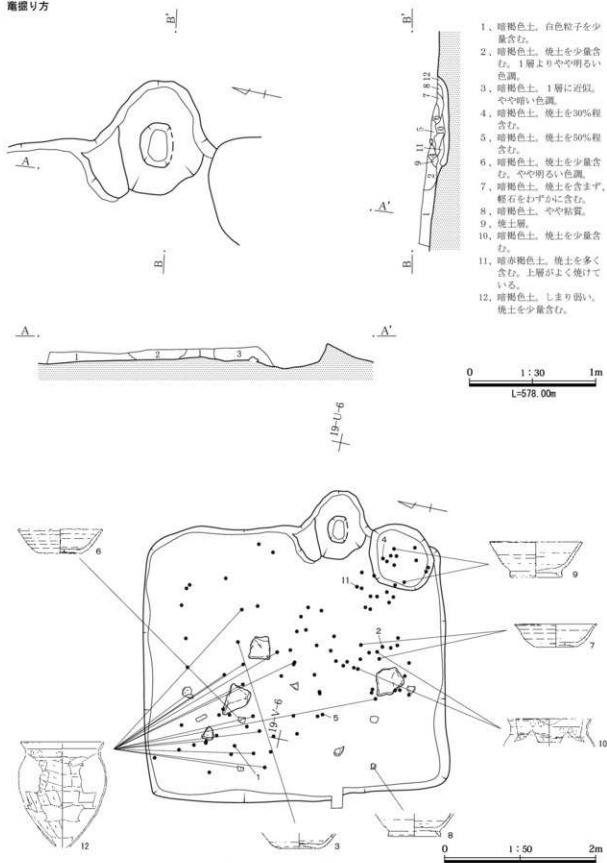


掘り方



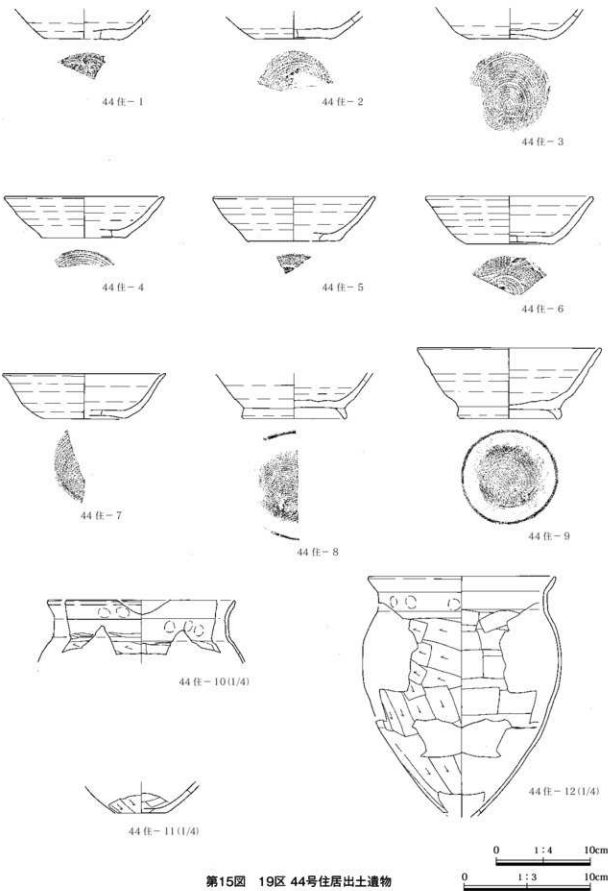
第13図 19区 44号住居 (1)

南掘り方



第14図 19区 44号住居 (2)

第3章 発見された遺構と遺物



第15図 19区 44号住居出土遺物

19区44号住居 (13～15図：PL 4・5)

調査年度 平成15年度

位置 U・V-5・6

経過 調査は平成15年度に行われた。19区45号住居に隣接した位置で検出され、遺存状態は比較的良好であり、遺物も多く出土した。

重複 なし

形状 東壁に竈を持つ方形形状の住居である。住居規模は、長軸3.98m、短軸3.64m。住居面積は約14.2㎡。壁高は42cmほどであった。

床面 調査所見がなく詳細は分からないが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。

掘り方調査では、床下土坑3基が検出された。

竈 東壁やや南寄りで検出。遺存状態が悪く、石組みであったかは不明。規模は、全長98cm、屋外長39cmであった。袖の痕跡は確認できたが、焚き口幅は不明。調査段階での資料はないが、写真では、火床面に焼土のような広がりが見られた。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅で検出。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸96×短軸85×深さ38cm。

方位 N-81°-E

柱穴 出土した柱穴は3基を数える。各柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：72×55×15、柱2：81×61×21、柱3：77×53×22。

掘り方調査の中で、貯蔵穴に隣接して出土した住居南東側の掘り込みが、残りの柱穴の痕跡となる可能性が考えられる。

遺物 須恵器の坏が比較的多く出土した。ほかにも須恵器の埴や土師器のコの字口縁甕が出土した。ともに9世紀中～後半頃の所産と思われる。

時期 9世紀後半。出土遺物より、本住居を当該期に比定した。

19区45号住居 (16～21図：PL 5・6)

調査年度 平成15年度

位置 T-7、U-6～8、V-7・8

経過 調査は平成15年度に行われた。19区44号住居に隣接した位置で検出され、報告する住居の中でも遺存状態は良好な住居であった。遺物も多く出土しているが、トレンチ調査時に竈の一部が壊されており、竈の全体形状については一部不明な部分がある。

明確な柱穴は、掘り方調査でも確認できなかったが、南側壁面に近い柱穴1・2は出入り口に伴う柱穴となる可能性も考え報告している。ただし、調査段階の資料では、周溝と思われる掘り込みに切られていた。

重複 なし

形状 東壁に竈を持つ、およそ方形形状の住居である。住居規模は、長軸5.99cm、短軸5.14cm。住居面積は、一部トレンチにより不明瞭だが約29.5㎡まで測れた。本遺跡で確認された古代住居の中でも大型の住居である。壁高は69cmほどと深く、遺存状態は良い。西壁及び南北の壁の一部に、周溝状の掘り込みが確認できた。

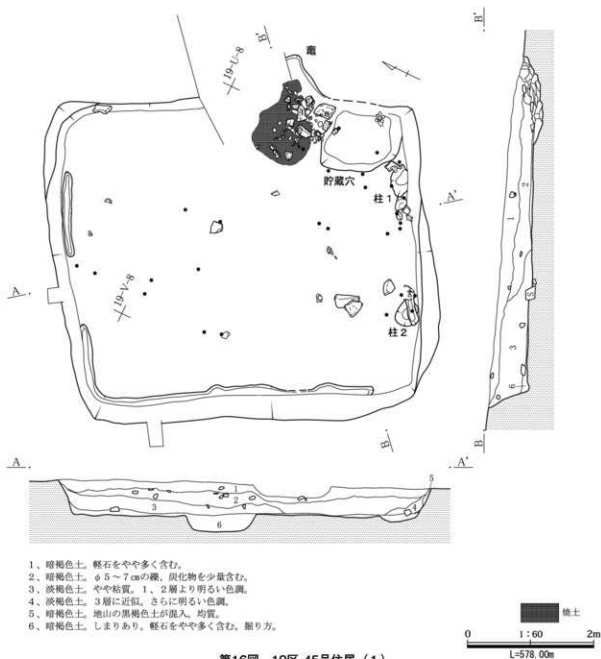
床面 調査所見がなく詳細は分からないが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。土層注記には、踏みしめられたためか掘り方覆土はよくしまっていたとあり、床面にも硬化した部分があったと推測できる。

掘り方調査では、床下土坑5基が出土した。柱穴3～5についても、出土位置から考えるとやや整合性に乏しく、床下土坑になると考えている。そのため、床下土坑は計8基と考えている。

竈 東壁、やや南寄りにある石組み竈。トレンチ調査による欠損部分があり、竈の一部については確認できなかった。ただし、袖の一部は原位置を保っている可能性があり、火床面を中心に多量の焼土が確認できるなど良好な遺存状態であった。

竈の規模は、全長168cm、屋外長71cmまで測れた。両袖が確認できないため、焚き口幅については計測できなかった。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅で検出。平面形状



第16図 19区 45号住居(1)

は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸126×短軸94。深さは16cmと浅い。

方位 N-57°-E

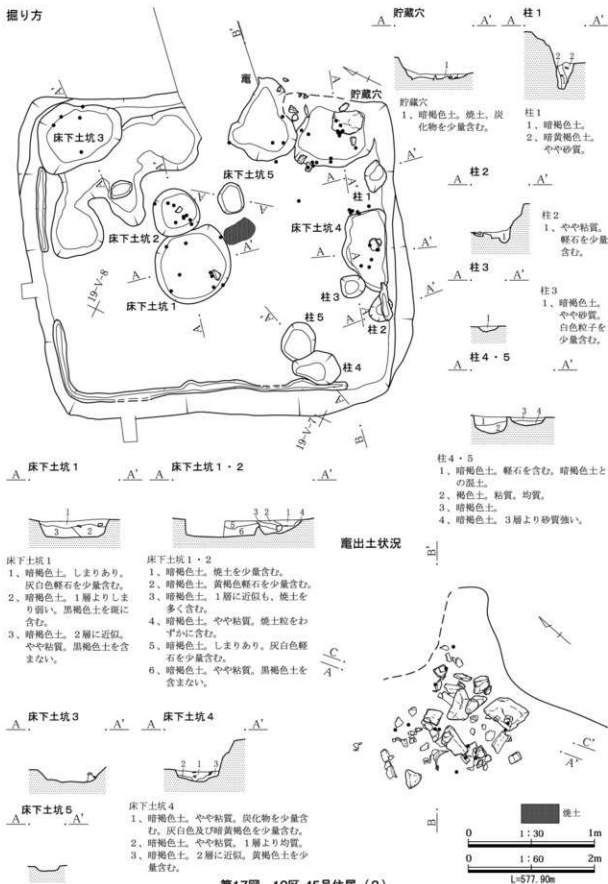
柱穴 調査段階では柱穴5基との認識であったが、出土位置から考えてもやや整合性に欠けるため、可能性のある柱穴1・2を柱穴として報告し、残りの柱穴3~5は床下土坑になると判断した。また、2基の柱穴についても出土位置から本住居の主柱穴にはならないと考えている。

出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1:51×35×26、柱2:41×33×40。

遺物 竈付近を中心に出土遺物が多い。須恵器塊には、内面に重ね焼き時の痕跡を残すものもみられた(No.7)。コの字口縁甕の中には、肩部に刻みのような痕跡を残すものもみられた(No.14)。ともに9世紀中~後半頃の所産と思われる。

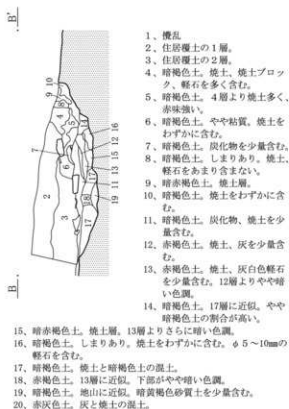
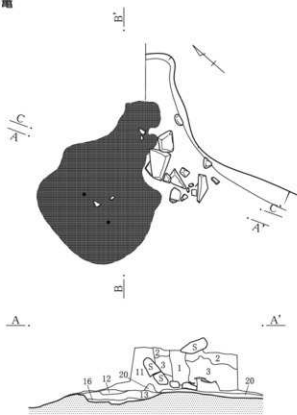
時期 9世紀第3四半期。出土遺物より、本住

掘り方

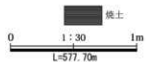
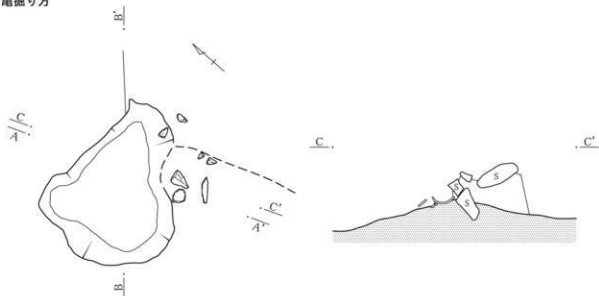


第17図 19区 45号住居 (2)

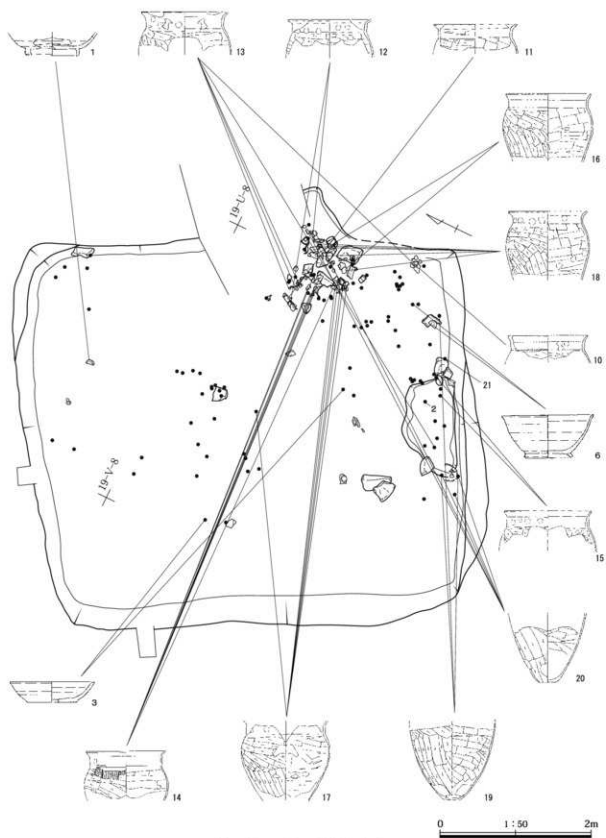
竈



竈掘り方

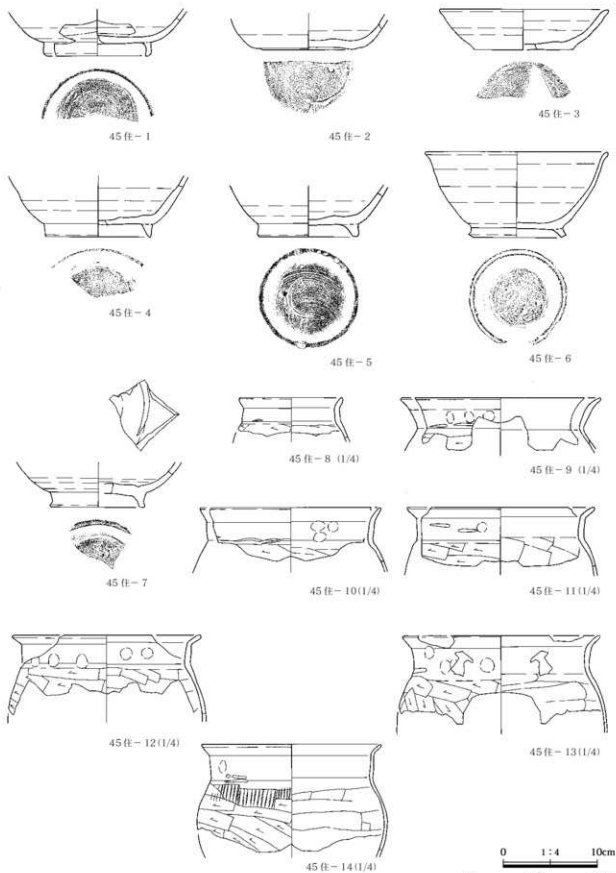


第18図 19区 45号住居 (3)

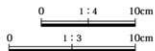


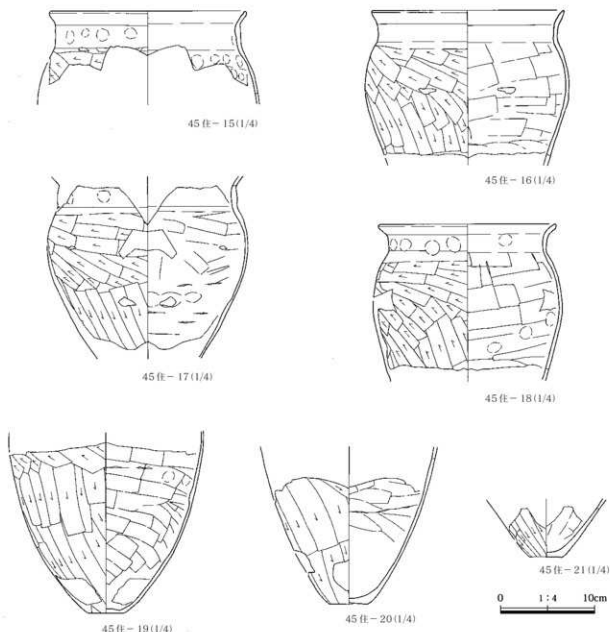
第19図 19区 45号住居 (4)

第3章 発見された遺構と遺物



第20図 19区 45号住居出土遺物 (1)





第21図 19区45号住居出土遺物(2)

居を当該期に比定した。

19区48号住居(22図:PL 6)

調査年度 平成15年度

位置 Q・R-12・13

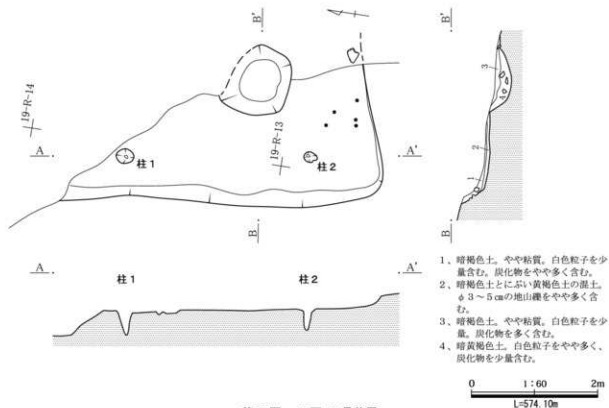
経過 調査は平成15年度に行われた。攪乱により住居の大半が確認できない状況であり、そのため遺物も少なく、実測に耐えない土師器の小破片がわずかに出土したのみであった。竈についても確認できず、住居にすべきか再考が必要な遺構と考え

ている。

重複 19区260・261・267号土坑(ともに中世以降)と重複し、これに切られる。

形状 出土した住居の大半は、攪乱により壊されているが、およそ方形の住居であったと思われる。住居規模は不明瞭だが、長軸は4.95m、短軸は2.56mまで測れた。住居面積は、確認できる範囲で約7.9㎡。壁高は45cmほどであった。

床面 遺存状態が悪く、調査所見もないため不明瞭だが、写真等で判断する限りおよそ平坦であっ



第22図 19区48号住居

たと思われる。住居中央付近の掘り込みは、床下土坑の可能性が高い。

竈 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

方位 N-9°-W

柱穴 出土した柱穴は2基を数える。各柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：28×23×39、柱2：21×17×34。

遺物 土師器甕胴部小破片2点のみ。

時期 9世紀後半頃か。前述の通り、本住居の遺存状態は悪く、出土遺物も土師器甕の胴部小破片2点のみである。本遺跡における古代住居の検出状況や、その出土遺物から本住居を当該期と考えた。

19区49号住居 (23・24図：PL 7)

調査年度 平成15年度

位置 R・S-10・11

経過 調査は平成15年度に行われた。トレン

チ調査時に住居の一部が壊されており、詳細は明らかでない。竈も検出されていないため、住居にすべきか再考が必要な遺構と考えている。

重複 なし

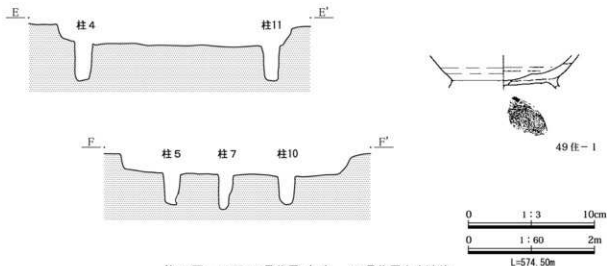
形状 前述の通り、一部トレンチにより壊されてしまったが、およそ方形の住居と思われる。住居規模は不明瞭だが、長軸は3.78m、短軸は3.76mまで測れた。住居面積は、トレンチにより未確認な範囲も含め約14.2㎡。壁高は34cmほどであった。

床面 調査所見もないため不明瞭だが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。住居中央付近では、焼土が多く確認できた。

掘り方調査では、明確な床下土坑等は確認できなかった。

竈 確認できなかった。

貯蔵穴 住居南東隅で検出。平面形状は、やや歪んだ円形を呈する。規模は、長軸56×短軸45×深さ19cm。



第24図 19区49号住居(2)、49号住居出土遺物

方位 N-74°-E

柱穴 出土した柱穴は11基を数える。ただし、すべてが住居壁面近くで並ぶように検出されており、主柱穴とはならないと考えている。また、この様な出土様相は本住居のみであった。

出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：30×25×61、柱2：18×13×7、柱3：31×22×52、柱4：29×26×63、柱5：27×27×57、柱6：29×26×30、柱7：24×23×56、柱8：15×14×30、柱9：(29)×(8)×(27)、柱10：32×26×44、柱11：37×30×56。

遺物 遺存状態が悪いためか、出土遺物は少ない。須恵器の埴などが出土した。9世紀後半頃の所産と思われる。

時期 9世紀後半。前述の通り、本住居の遺存状態は悪く出土遺物もわずかである。掲載した遺物や、そのほかの出土遺物から判断し、当該期に比定した。

3 20区の古代住居

20区は、横壁中村遺跡の西側に位置する。前述の通り、調査区の北側には吾妻川が東流し、中央には山根沢が北流する。このため20区は、吾妻川が流れる北側及び山根沢が流れる東側へ緩やかに傾斜

する地形上に位置する。

20区で確認された古代住居は3軒である。検出された住居のうち2軒は9世紀後半に、1軒は11世紀前半に比定された。11世紀前半に比定された83号住居のみ、竈を南東方向に向けていた。

前述の通り、八ッ場地域における古代住居は、9世紀後半頃から多数確認されるようになり、11世紀には減少する傾向がみられる。本遺跡では、11世紀前半の住居が1軒のみ確認されており、八ッ場地域と同様の出土状況だと考えている。

古代に比定された遺構は、住居以外では477号土坑がある。土坑の詳細については「横壁中村遺跡(6)」を参照していただきたい。

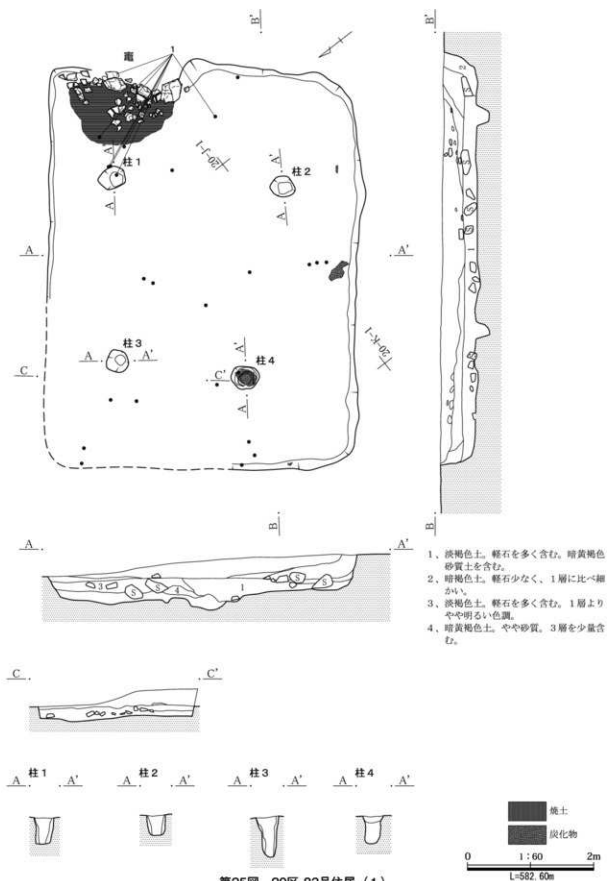
以下、個別住居ごとに報告する。

20区83号住居(25～27図：PL7・8)

調査年度 平成15年度

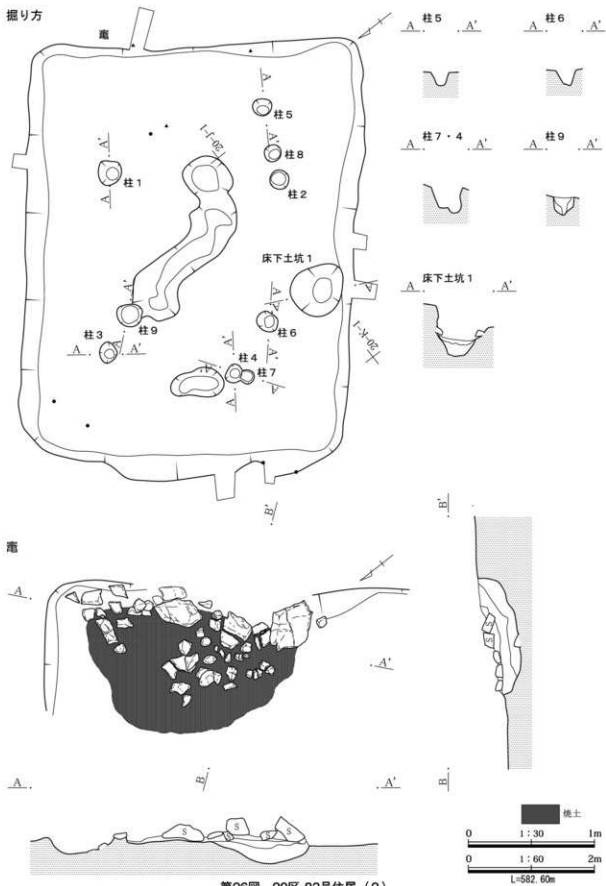
位置 10区1・J-25、20区1-1、J-1・2、K-1

経過 調査は平成15年度に行われた。遺存状態は比較的良好だが、竈の形態については調査段階での資料の一部が確認できず判然としない。住居中央付近では、浅間B軽石と思われる軽石が確認できた。大型の住居ではあるが、出土遺物は少なかった。

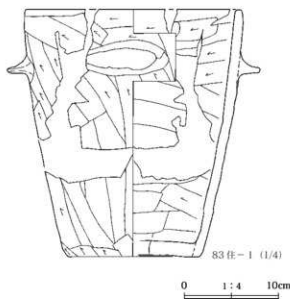


第25図 20区 83号住居 (1)

掘り方



第26図 20区 83号住居 (2)



第27図 20区 83号住居出土遺物

重複 なし

形状 一部確認できない部分はあるが、東壁に竈を持つ長方形の住居と思われる。住居規模は確認できる範囲で、長軸は6.32m、短軸は5.03mまで測れた。住居面積は約31.8㎡。壁高は81cmほどであった。

床面 調査所見もないため不明瞭だが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。住居覆土中からは、焼土の広がりもみられた。

掘り方調査では、床下土坑1基、柱穴5基が検出されたが、すべて床下土坑になる可能性もある。

竈 東壁、住居南東隅に隣接する位置で検出。竈は石組みであったと思われる。竈付近で多くの礫が出土しているが、小型の礫も多く原位置を保っているものは少ないと思われる。

煙道部分の資料が確認できず、竈の規模等では不明瞭な部分もあるが、計測できる全長は117cmほどであった。火床面を中心に焼土の広がりも確認できた。

貯蔵穴 なし

方位 N-146°-E

柱穴 調査段階では柱穴9基との認識であったが、出土位置から考えてもやや整合性に欠けた

め、可能性の高い4基のみを柱穴として報告し、残りの柱穴5～9の5基を床下土坑としたい。

出土した柱穴4基の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：44×35×42、柱2：39×33×33、柱3：37×36×65、柱4：29×24×45。

遺物 底部が確認できず判然としなが、甕と思われる遺物が出土した。逆ハの字状に開く形態で、胴部上方に4箇所の把手を持つものと思われる。11世紀前半頃の所産であろう。

時期 11世紀前半。出土遺物より、本住居を当該期に比定した。

20区90号住居(28～36図：PL.8～10)

調査年度 平成15年度

位置 A-7・8、B-6～8、C-7・8

経過 調査は平成15年度に行われた。本住居は電煙道の一部を欠くものの良好な遺存状態で検出された。特に石組みの竈は良好な遺存状態であった。

出土遺物は多く、種類も多様であった。土師器や須恵器のほかにも、金属製品や鉄斧、砥石などがみられた。今回報告する中で、金属製品や砥石が出土したのは本住居のみである。また、炭化物も数多くみられた。

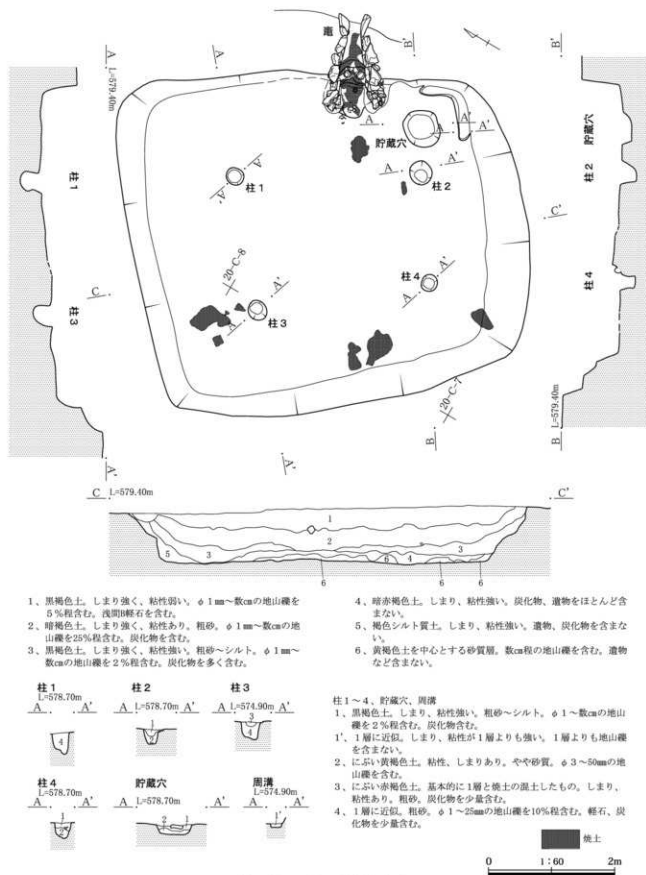
重複 20区525(堀之内1)・531(弥生)号土坑、10号石垣(中世以降)と重複。土坑を切り、石垣に切られる。

形状 東壁に竈を持つ、およそ方形の住居と思われる。住居規模は、長軸は6.34m、短軸は5.5m。住居面積は一部欠損するもの約31.4㎡まで測れた。壁高は105cmほどと深い。また、住居南東隅からは、周溝状の掘り込みもみられた。

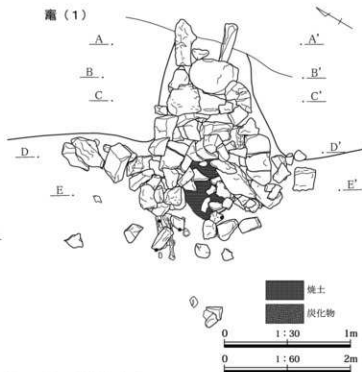
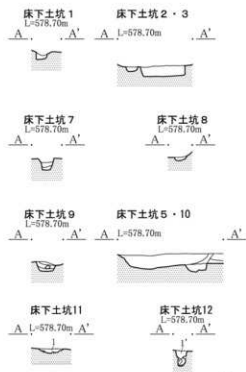
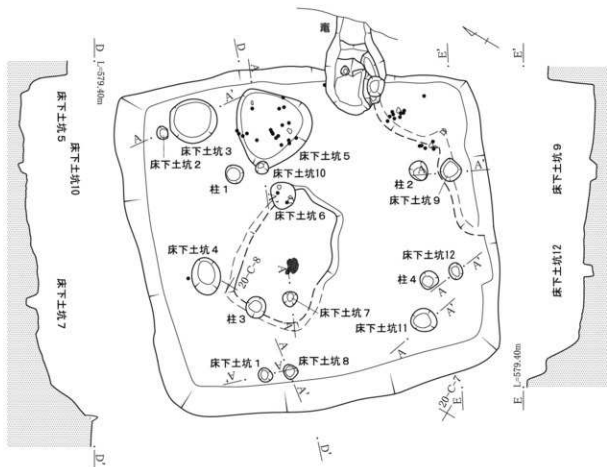
床面 調査所見もないため不明瞭だが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。住居床面からは、遺物とともに多くの炭化物や焼土が確認されている。

掘り方調査では、床下土坑12基が出土した。

竈 煙道の一部が欠損するものの、良好な

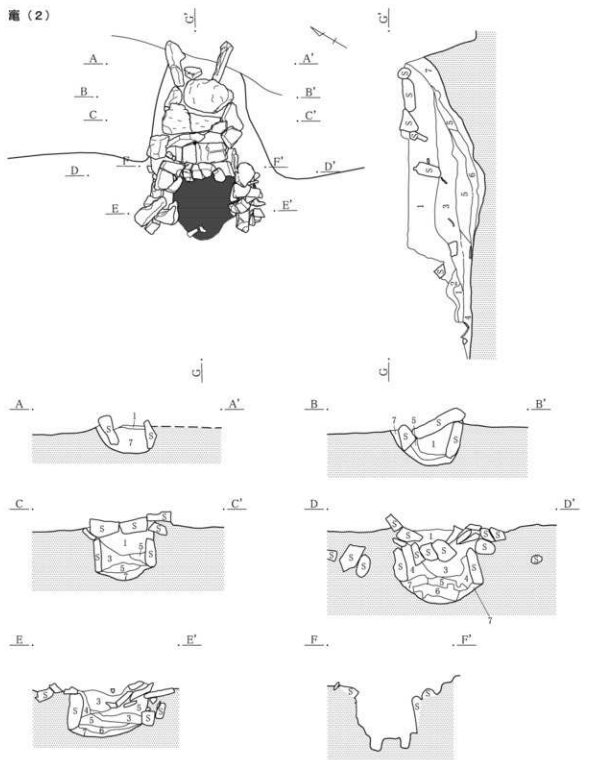


第28図 20区 90号住居 (1)



第29図 20区 90号住居 (2)

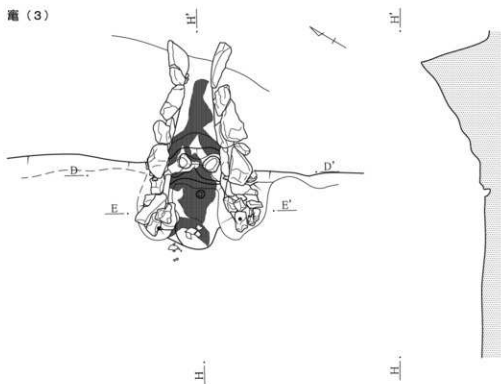
竈(2)



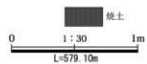
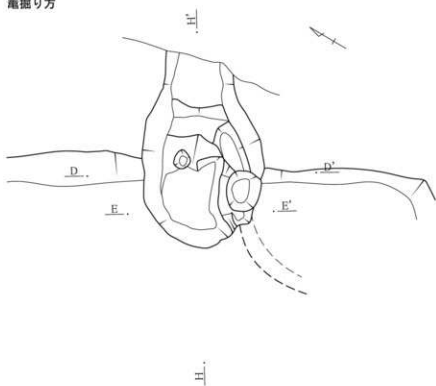
- 1、暗褐色土。しまり強く、粘性あり。粗砂。φ 1mm～数cmの地山礫を25%程含む。炭化物をまばらに含む。
- 2、黒褐色シルト質土。しまり強く、粘性あり。炭化物まばらに含む。
- 3、極暗赤褐。しまり強く、粘性あり。粗砂。φ 1～10mmの焼土ブロックを含む。φ 1mmの地山礫を5%程含む。
- 4、3層を主体とする2層との混土。
- 5、黒赤褐色シルト質土。しまり、粘性強い。
- 6、灰色シルト質土。しまりあり。粘性あり。
- 7、黒赤褐色シルト質土。粘性、しまり強い。

第30図 20区 90号住居 (3)

竪 (3)



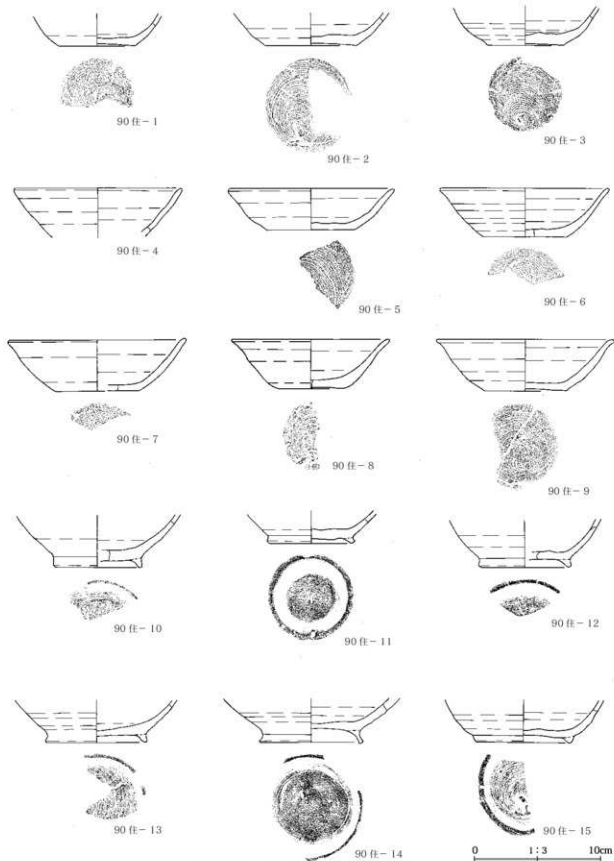
竪掘り方



第31図 20区 90号住居 (4)

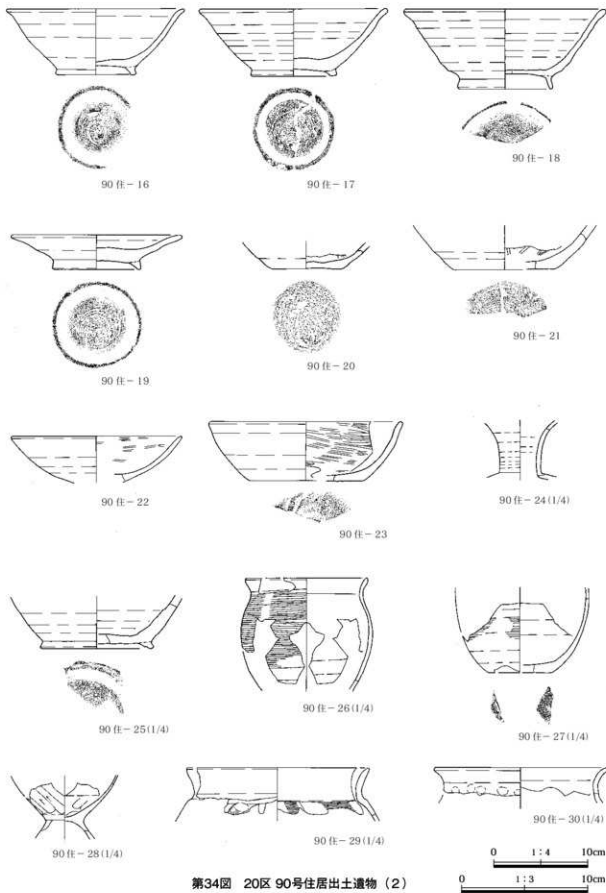


第32図 20区 90号住居 (5)



第33図 20区 90号住居出土遺物 (1)

第3章 発見された遺構と遺物

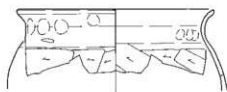


第34図 20区 90号住居出土遺物 (2)

第3節 古代の竪穴住居



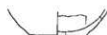
90住-31(1/4)



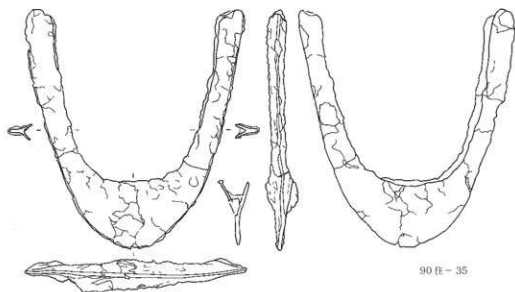
90住-32(1/4)



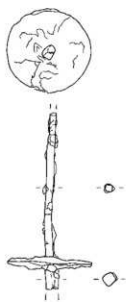
90住-33(1/4)



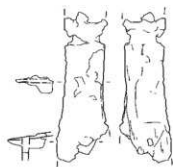
90住-34(1/4)



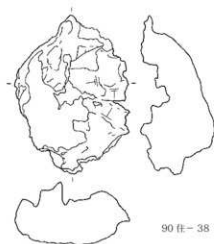
90住-35



90住-36(1/2)



90住-37(1/2)



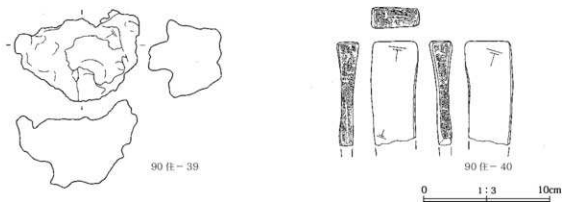
90住-38

0 1:2 5cm

0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第35図 20区 90号住居出土遺物 (3)



第36図 20区 90号住居出土遺物(4)

遺存状態である。東壁、やや南寄りにある石組み竈。規模は、確認できる全長で159cm、屋外長96cm、焚き口幅30cmであった。竈は、天井の礫が崩れた状態で出土したが、煙道部天井石と煙道部から袖までの礫の多くは原位置を保っているものと思われる。

貯蔵穴 竈右側、住居南東隅で出土。平面形状は円形を呈する。規模は、長軸62×短軸58cm。深さは16cmと浅い。

方位 N-59°-E

柱穴 調査段階では柱穴6基との認識であったが、出土位置から考えてもやや整合性に欠けるため、可能性の高い4基を柱穴として報告し、残りの2基を床下土坑として報告する。

出土した柱穴4基の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：28×26×34、柱2：38×35×24、柱3：32×30×28、柱4：27×25×25。

遺物 須恵器や土師器が多く出土した。須恵器では坏や碗、皿のほか、瓶(No.24)、甕(No.25)が出土した。土師器では内黒とも呼ばれる坏(No.21～23)、台付き甕(No.28)やコの字口縁甕が出土した。ともに9世紀中～後半頃の所産と思われる。鉄製の紡錘車(No.36)、鉄製の鋤先(No.35)、椀状の鉄滓(No.38・39)や砥石(No.40)も出土。鋤先と砥石は近接して出土した。出土した金属製品は、

共伴した土師器や須恵器と同様の9世紀中～後半頃の所産と考えている。

本住居からは鍛造剥片や粒状滓は確認できなかったが、出土した鉄滓から考えても本遺跡で古代より鍛冶などを行っていた可能性はあるだろう。出土した椀状鉄滓は2点、985.5gであった。また、砥石の使用痕跡は顕著で、かなり薄くなっていた。

鉄製鋤先の類例としては、月夜野町村主遺跡20号住居より出土した鉄製鋤先がある。住居は奈良時代との記載があり、本住居出土遺物よりも古い時代まで遡るものと思われる。また、高崎市中里見原遺跡32号住居からは、他の金属製品と共伴し、鋤先が2点付着した状態で出土している。住居は10世紀頃と報告されており、本住居出土遺物よりもやや新しいと思われる。

時期 9世紀後半。出土遺物より、本住居を当該期に比定した。

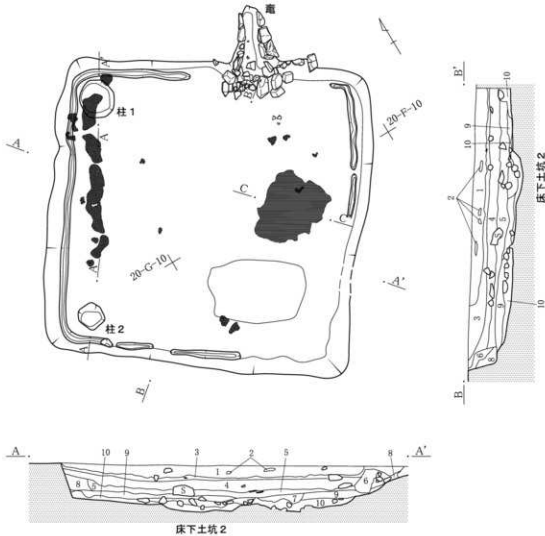
20区91号住居(37～43図：PL10・11)

調査年度 平成15年度

位置 E-10、F・G-9・10

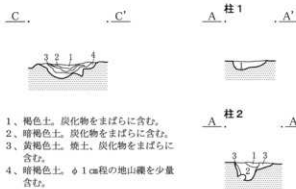
経過 調査は平成15年度に行われた。本住居の遺存状態は良好であり、竈付近を中心に遺物も比較的多く出土した。また住居覆土上面では、浅間B軽石と思われる軽石の広がりも確認できた。

重複 20区85・97号住居(ともに加曾利E3)



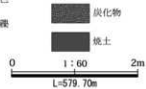
- 1、黒褐色土。砂質。黄褐色砂質土ブロックを含む。浅間B軽石か？
- 2、浅間B軽石？
- 3、暗褐色土。やや粘性あり。φ 2 cmの円礫を少量含む。
- 4、暗褐色土。しまった土。φ 1 cmの地山礫を多量に含む。
- 5、暗褐色土。粘性あり。φ 1 cmの地山礫を少量含む。

- 6、黒褐色土。炭化物、焼土粒を少量含む。
- 7、焼土層。
- 8、黒褐色土。φ 1~10 cmの地山礫を含む。
- 9、暗褐色土。しまりあり。φ 1~5 mmの地山礫を多量に含む。
- 10、黒褐色土。φ 1~10 cmの地山礫を含む。



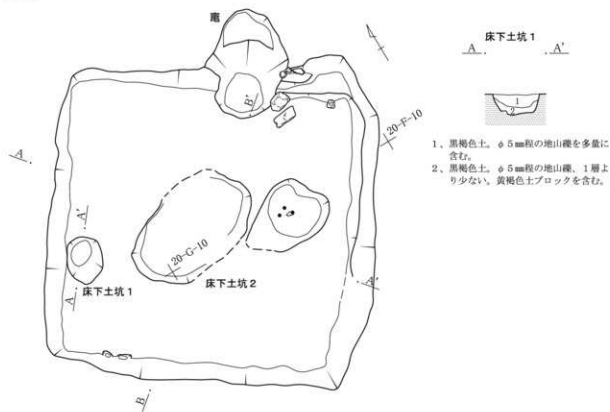
- 柱1
- 1、暗褐色土。φ 1~5 mm程の地山礫を多量に含む。炭化物を少量含む。

- 柱2
- 1、黒褐色土。φ 1 cm程の地山礫を多量に含む。
 - 2、暗褐色土。砂質。φ 1 cm程の地山礫を多量に含む。黄褐色土ブロックを含む。
 - 3、暗褐色土。φ 5 mm程の地山礫を多量に含む。

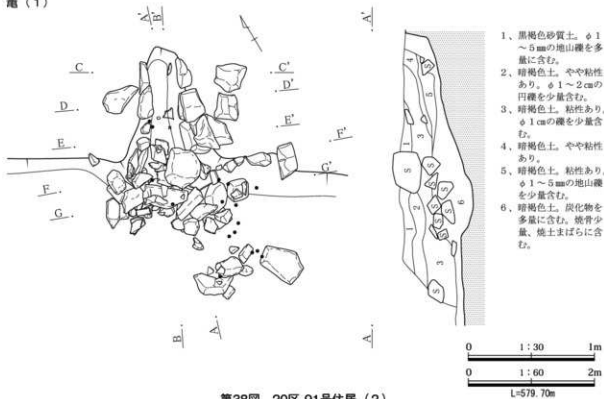


第37図 20区 91号住居 (1)

掘り方

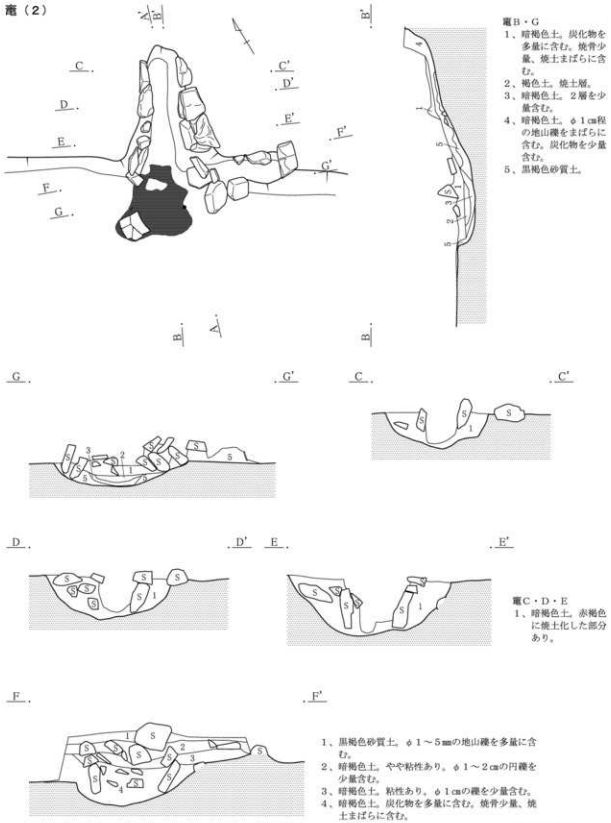


竈 (1)



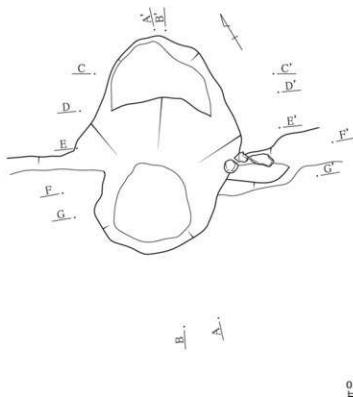
第38図 20区 91号住居 (2)

竪 (2)



第39図 20区 91号住居 (3)

竈掘り方



第40図 20区 91号住居 (4)

と重複し、ともに切る。

形状 東壁に竈を持つ、やや歪んだ方形状を呈する。住居規模は、長軸は5.03m、短軸は4.84m。住居面積は約23.9㎡。壁高は約77cmであった。

本住居からは、南東隅付近が欠損するものの、周溝状の掘り込みが良好に検出された。

床面 調査所見もないため不明瞭だが、写真等で判断する限りおよそ平坦であったと思われる。また住居中央付近では、焼土の広がりも確認することができた。

掘り方調査では、床下土坑1基が検出された。

竈 住居東壁、やや南寄りにある石組み竈。煙道部から袖までの石組みは良好な遺存状態であり、原位置を保っている碑も多いと思われる。

竈の規模は、全長271cm、屋外長169cm。焚き口幅は30cm。火床面を中心に焼土の広がりも確認できた。

貯蔵穴 なし

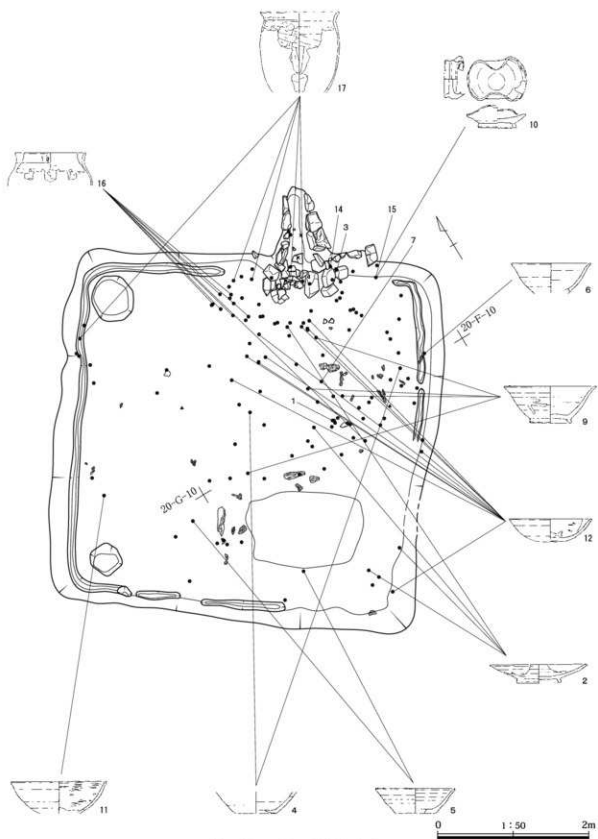
方位 N-34°-E

柱穴 出土した柱穴は2基を数える。各柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：62×55×14、柱2：43×40×29。

遺物 灰軸陶器の塊(No.1)や皿(No.2)、須恵器の环や塊、耳皿(No.10)、土師器では内黒とも呼ばれる环(No.11・12)や甕(No.13)、壺? (No.15)やコの字口縁甕が出土した。本書で扱われた遺物のうち、墨書された土器は非常に少ない。本住居で出土した須恵器塊(No.9)は墨書が明瞭に読める状態ではなく、墨書された土器ではない可能性もある。

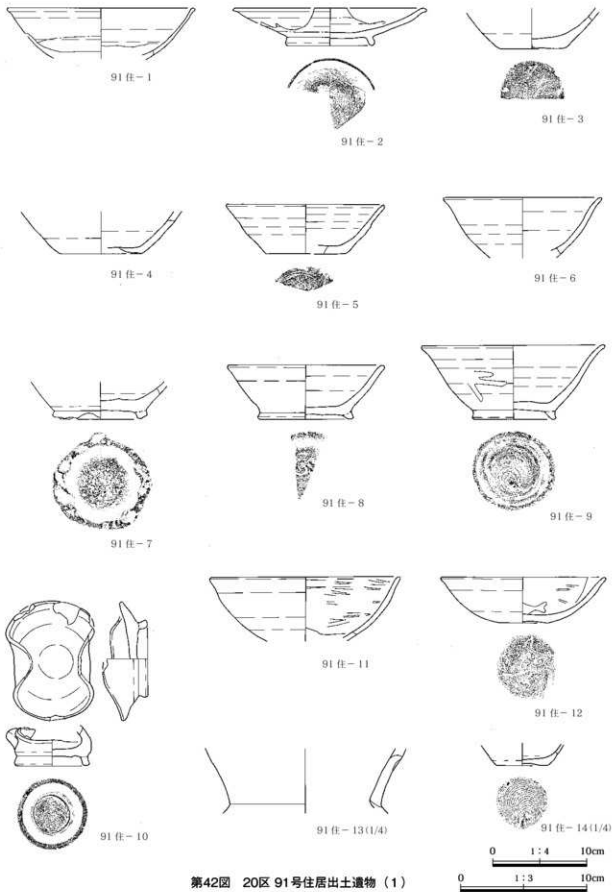
出土した遺物は多様であり時期幅も広い。9世紀後半～11世紀前半頃までの遺物が出土している。

時期 9世紀後半。出土遺物の時期幅は広いが、遺構形態も考慮し、本住居を当該期に比定した。

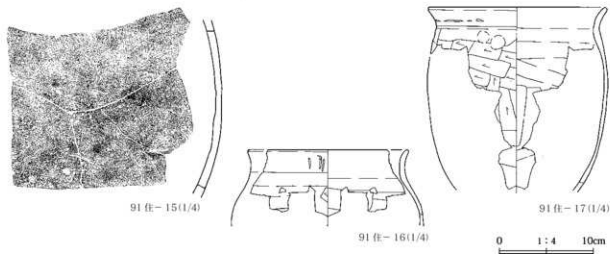


第41図 20区 91号住居 (5)

第3章 発見された遺構と遺物



第42図 20区 91号住居出土遺物(1)



第43図 20区91号住居出土遺物(2)

第4節 中世・近世の遺構

当該節で扱う遺構は、横壁中村遺跡で平成8年度から16年度までに調査された遺構のうち、中世以降と考えられた遺構についてである。

本遺跡の中世を代表する遺構に屋敷跡があり、多様な遺構が検出されている。具体的には、石垣4箇所に囲まれた範囲で出土した掘立柱建物9棟、竪穴遺構4基、石組遺構4基、焼土遺構8箇所、人骨あるいは銭貨が出土した墓坑3基、獣骨が出土した遺構4基、溝1条である。これらについては、「1 屋敷跡」の中でまとめて報告したい。その他の中世・近世の遺構としては、掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、竪穴遺構1基、鍛冶跡1箇所、石垣17箇所、石列3箇所、石組遺構11基、石開い遺構3基、人骨あるいは銭貨が出土した墓坑31基、獣骨が出土した遺構6基、溝3条、ヤックラ(集石)4箇所、天明三年泥流下畑1箇所もあり、これらも順次報告する。

第3節で述べた通り、本遺跡は長期に渡る調査で多くの担当者が携わったため、多くの遺構名称がやや不統一に使用されている。例えば、碑が意図的に組まれた縄文時代には比定できない遺構を「石組遺構」と認定し、石を組みあるいは開いた空間を作った縄文時代には比定できない遺構を「石開い遺構」と認

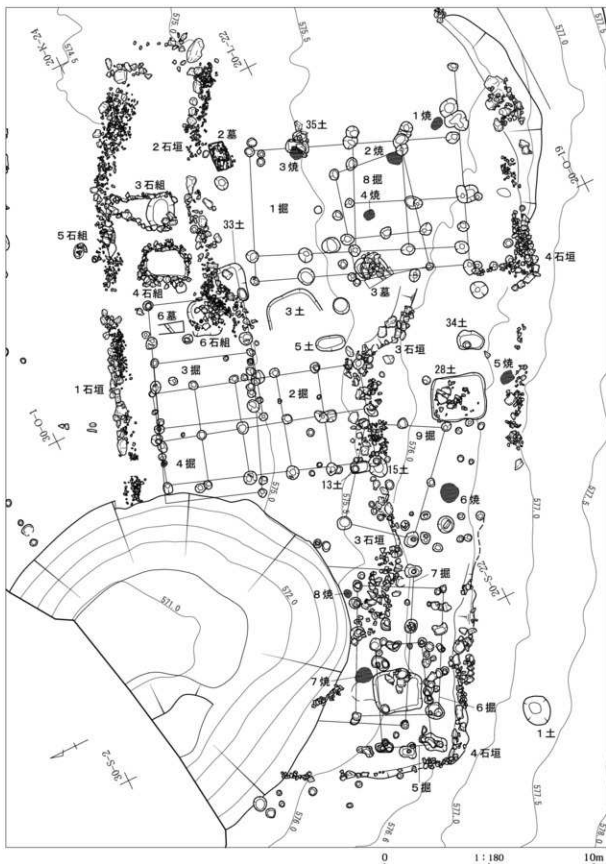
定している。しかし、長い調査期間、多くの担当者が統一した判断基準で調査することは難しく、本来異なる遺構名称が適当と思われる遺構もみられた。本書では、判断材料に乏しいことや、これまでの報告に準ずる意味でも調査段階での遺構名称を優先している。ただし、掘立柱建物については調査段階での建物の理解と整理段階での理解に違いがあり、改めて柱穴の組み直しを行い、建物を認定、新たな遺構番号を付している。

詳細については「表4 20区屋敷跡掘立柱建物一覧表」及び「表5 掘立柱建物一覧表」で報告している。参照していただきたい。

以下、各遺構ごとに報告する。

1 屋敷跡(44図:PL12)

調査段階では、20区北側で検出された掘立柱建物を中心とする一連の中世遺構を、屋敷跡と認定していた。本書では、1~4号石垣に囲まれた範囲で検出された、中世に比定できるだろう遺構を20区屋敷跡に関連する可能性が高い遺構と考え、まとめて報告する。20区屋敷跡の多様な様相をまとめたことの主旨からだが、報告がやや煩雑になってしまったことをこゝ承願したい。また20区屋敷跡関連で報告される遺構については、遺構一覧表の中でまとめられているので参照していただきたい。



第44図 20区屋敷跡全体図

20区屋敷跡として報告する遺構は、20区屋敷跡1～9号掘立柱建物、20区1～4号石垣、20区1号溝、20区3～6号石組遺構、20区1～8号焼土遺構、20区2・3・5・6号墓坑及び、既に「横壁中村遺跡(6)」で報告された20区3・13・28・32～34・46号土坑である。土坑の中には、竪穴遺構や喉骨が出土した特殊な遺構も含まれている。

20区屋敷跡で主な遺構は掘立柱建物であるが、掘立柱建物は重複しており、何時期かに分かれその変遷を追えるものと考えている。しかし、柱穴の切り合い関係の資料がなく、遺構からの出土遺物も少ないなど判断材料が乏しいため、詳細な検証は難しい。およそ4時期ほどに分けられるものと考えているが、新旧関係を明確にすることはできなかった。屋敷跡で検出された建物のおよその変遷については、第4章で詳述しているので参照していただきたい。

20区屋敷跡からは、内耳土器や瀬戸・美濃系陶器、貿易陶磁器などの中世遺物が出土し、特に内耳土器の破片は400点を超えるほど数多く確認できた。出土位置が確認できず各遺構に帰属できなかった遺物も多いが、その出土状況は、20区屋敷跡が本遺跡における中世の主要な遺構であったことを窺わせる内容であった。遺物の出土位置については、各遺構及び付図2にて報告した。参照していただきたい。

以下、20区屋敷跡内で出土した遺構について、各遺構ごとに報告する。

(1) 20区屋敷跡掘立柱建物

20区屋敷跡内で確認された掘立柱建物は9棟を数える。これは、調査段階での成果を考慮し、整理段階で改めて柱穴を組み直して認定した建物である。そのため、現場での遺構写真と若干の差異が生じてしまったことについてはご容赦願いたい。また整理作業は継続中であり、さらに多くの柱穴が確認され、新たな掘立柱建物が認定されることもあると考えている。

20区屋敷跡からは、銭貨が出土した遺構や喉骨が出土した遺構が確認できたが、その一部は掘立柱建物と重複して検出されている。そのすべてではないが、地鎮などの特別な目的を持った遺構もあると考えている。また焼土遺構の一部については、本来は掘立柱建物に伴う遺構もあると考えている。可能性が考えられる焼土遺構については、掘立柱建物とともに掲載し報告している。

20区屋敷跡1号掘立柱建物(45～47図：PL13)

調査年度 平成11年度

位置 L-21・22、M-19～22、N-20～23、O-20・21

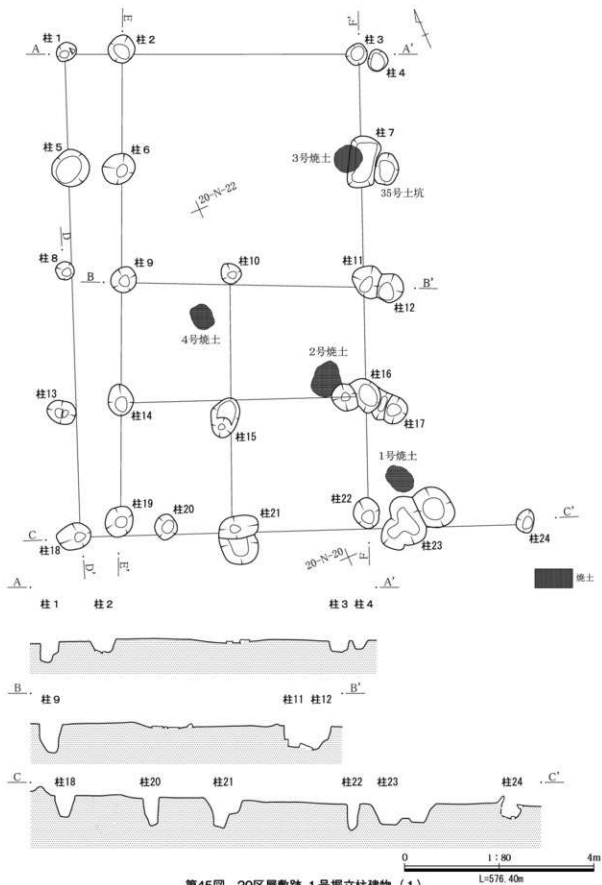
経過 調査は平成11年度に行われた。1号掘立柱建物は、調査段階と整理段階で見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

1号掘立柱建物に重複するように、1～4号焼土遺構が検出された。焼土遺構は掘り込みをほとんど持たず、遺構時期は判断しがたい。出土位置から、1号掘立柱建物との関係が考えられるとしてここで報告したい。

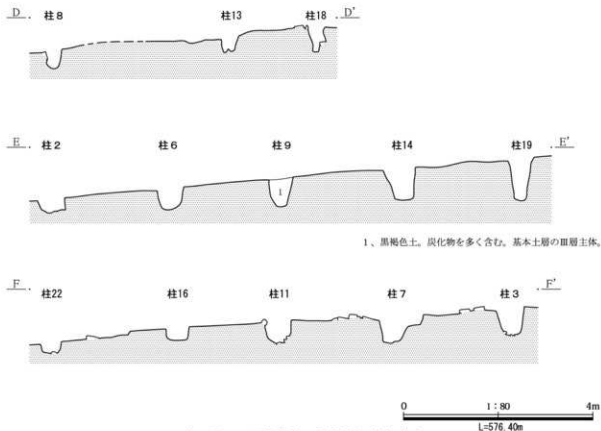
重複 20区19号住居(縄文)、35・37(ともに中世)・97・115(ともに中世以降)・94・95・114・138・140・147(ともに縄文)号土坑、屋敷跡8号掘立柱建物(中世)、3号墓坑(中世以降)と重複。住居及び94・95・114・138・140・147号土坑を切るも、その他の切り合い関係は不明。

形状 平面形状は長方形を呈する、大型の掘立柱建物である。ほぼ南北方向に長軸を持つ建物で、20区屋敷跡2号掘立柱建物と長軸方向が近似している。西側に下屋を持つ建物だと思われ、東側には扉が延びるものと考えている。建物北側は不明瞭だが、南側は総柱となる建物構造である。

規模 長軸10.02～10.22m。短軸6.11～6.19m。下屋までの間を除いた柱穴間平均値は、長軸253cm、短軸258cm。下屋部分を除いた柱穴間平



第45図 20区屋敷跡 1号独立柱建物 (1)



第46図 20区屋敷跡 1号掘立柱建物 (2)

均値は、長軸と短軸でほぼ同様の数値であった。面積は約62.2㎡と大型の掘立柱建物である。

方位 N-21.5°~22°-E

柱穴 1号掘立柱建物に伴う柱穴は24基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：45×38×43、柱2：56×54×29、柱3：44×44×24、柱4：45×42×20、柱5：78×72×、柱6：70×62×49、柱7：110×60×、柱8：38×38×39、柱9：55×50×61、柱10：46×43×45、柱11：70×58×48、柱12：62×55×49、柱13：62×49×65、柱14：67×54×58、柱15：87×60×50、柱16：76×60×43、柱17：60×46×44、柱18：70×55×53、柱19：64×62×86、柱20：50×47×57、柱21：82×48×62、柱22：63×56×52、柱23：110×92×46、柱24：50×36×33。

遺物 柱22から古瀬戸緑軸小皿(No. 1) 1点、

柱23から石鉢(No. 2) 1点が出土した。また、出土位置は不明だが燵臂も出土した。約4ヶ月以下のウマである。

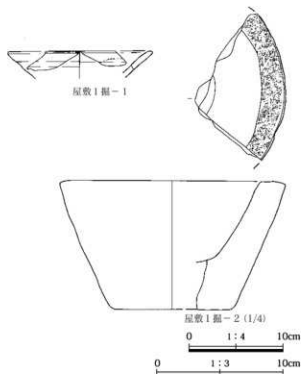
時期 15世紀中～後半頃。出土遺物は少ないが、柱穴より古瀬戸後期IV古に比定された緑軸小皿が出土した。また、20区屋敷跡からは内耳土器片や古瀬戸後期を中心とする瀬戸・美濃系陶器が出土している。この出土様相を傍証とし、1号掘立柱建物を当該期に比定した。

20区屋敷跡 2号掘立柱建物(48図：PL13)

調査年度 平成11年度

位置 N-24、O・P-22～25

経過 調査は平成11年度に行われた。2号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。



第47図 20区屋敷跡 1号掘立柱建物出土遺物

2号掘立柱建物に重複するように、20区13号土坑が出土している。新旧関係は判然としませんが、土坑から獣骨やカワラケが出土しており、地鎮を目的とした遺構の可能性が考えられる。詳細は「横壁中村遺跡(6)」を参照していただきたい。

重複 20区2号配石(縄文)、13(中世)・15(中世以降)・85・104・129・130・134・135・153(ともに縄文)号土坑、屋敷跡3・4・9号掘立柱建物(ともに中世)、3号石垣(中世)と重複。2号配石、85・104・129・130・134・135・153号土坑を切るも、その他の切り合い関係は不明。

形状 平面形状は長方形を呈する、大型の掘立柱建物である。ほぼ南北方向に長軸を持つ建物で、20区屋敷跡1号掘立柱建物と長軸方向が近似している。総柱構造の掘立柱建物であるが、長軸と短軸の柱穴間平均値はやや異なる。

規模 長軸10.0～10.1m、短軸4.46～4.78mを測る。柱穴間の平均値は、長軸201cm、短軸231cm。面積は約46.2㎡と規模の大きな掘立柱建物である。

方位 N-18～20°-E

柱穴 2号掘立柱建物に伴う柱穴は18基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：54×43×67、柱2：58×50×59、柱3：34×28×一、柱4：43×38×49、柱5：43×42×47、柱6：41×40×63、柱7：66×62×60、柱8：56×53×37、柱9：46×36×63、柱10：62×59×59、柱11：45×45×40、柱12：46×42×90、柱13：58×48×67、柱14：(72)×52×62、柱15：51×46×84、柱16：66×50×52、柱17：66×51×50、柱18：59×50×50。

遺物 なし

時期 中世。15世紀中～後半頃。遺構からの出土遺物がなく時期は特定できないが、長軸方向やともに大型掘立柱建物であることから、20区屋敷跡1号掘立柱建物と同様の時期だと判断した。

20区屋敷跡3号掘立柱建物(49回)

調査年度 平成11年度

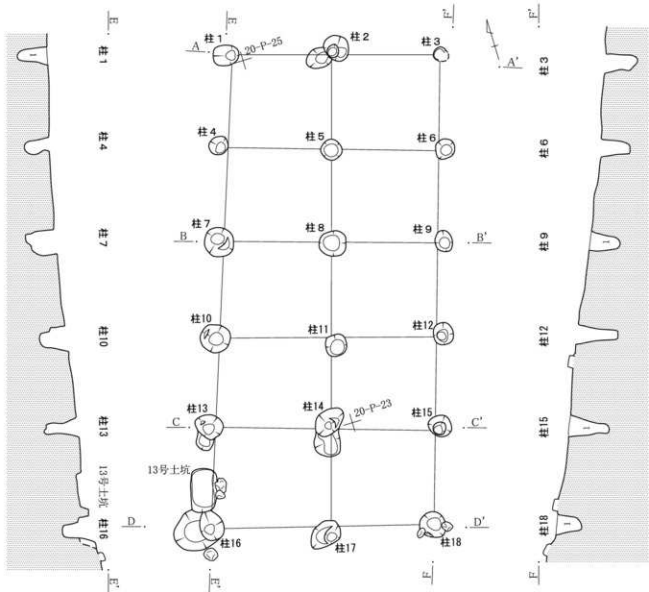
位置 M-24、N・O-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。3号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

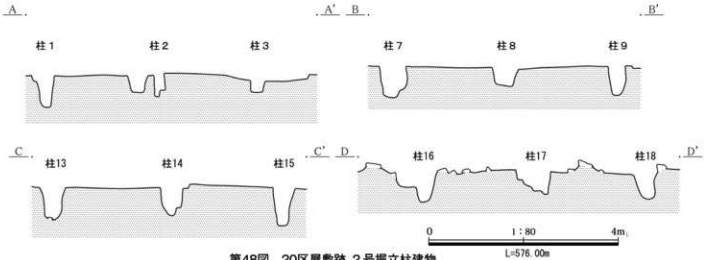
重複 20区2号石垣(中世)、6号石組遺構(中世以降)、6号墓坑(中世)、33(中世)・153(縄文)号土坑、屋敷跡2・4号掘立柱建物(ともに中世)と重複。切り合い関係は不明。

形状 平面形状は長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物で、20区屋敷跡4～6号掘立柱建物と長軸方向が近い。4号掘立柱建物は本掘立柱建物と重複するようにあり、短い期間に建て替えられた可能性もあるだろう。また長軸と短軸の柱穴間平均値が異なる建物である。

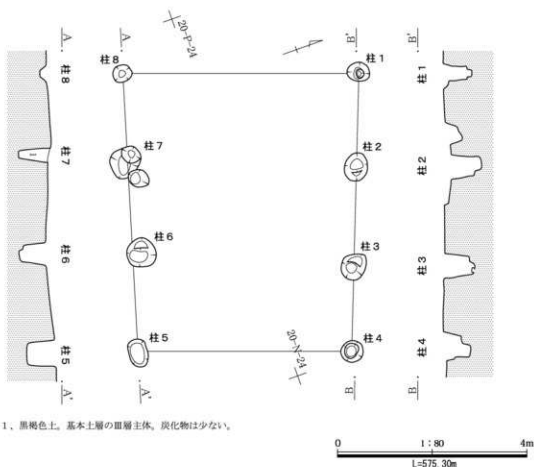
規模 長軸5.89～5.93m、短軸4.52～5.02mを測る。柱穴間の平均値は、長軸197cm、短軸



1、黒褐色土。しまりなし。炭化物を多く含む。基本土層のⅢ層主体。



第48図 20区屋敷跡 2号掘立柱建物



1、黒褐色土。基本土層の田層主体、炭化物は少ない。

第49図 20区屋敷跡 3号掘立柱建物

477cm。面積は約28.3㎡である。

方位 N-69°74'-W

柱穴 3号掘立柱建物に伴う柱穴は8基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：48×40×58、柱2：59×49×64、柱3：62×52×65、柱4：47×46×54、柱5：57×38×(60)、柱6：62×62×58、柱7：44×34×64、柱8：40×36×(20)。

遺物 なし

時期 中世。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区屋敷跡 4号掘立柱建物 (50円)

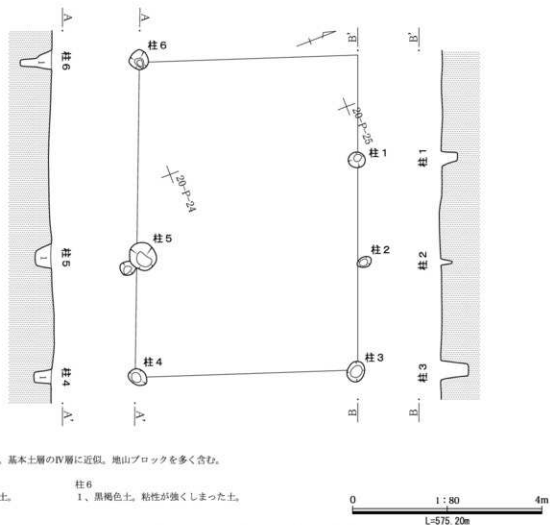
調査年度 平成11年度

位置 N-23・24、O・P-23～25

経過 調査は平成11年度に行われた。4号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。また4号掘立柱建物は、西側の一部が欠損していると思われる。

重複 20区101・104・130号土坑(ともに縄文)、屋敷跡2・3号掘立柱建物(ともに中世)と重複。101・104・130号土坑を切るも、その他の切り合い関係は不明。

形状 一部欠損するものの、平面形状は長方形を呈すると考えられる。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物で、20区屋敷跡3・5・6号掘立柱建物と長軸方向に近い。3号掘立柱建物は本掘立柱建物と重複するようになり、短い期間に建て替えられた可能性もあるだろう。



- 柱4
1、褐色土。基本土層のIV層に近似。地山ブロックを多く含む。
- 柱5
1、黒褐色土。
- 柱6
1、黒褐色土。粘性が強くなった土。

第50図 20区屋敷跡 4号掘立柱建物

規模 一部欠損するものの、長軸は約6.54～6.62m、短軸は約4.64～4.68mまで測れた。柱穴間の平均値は、長軸が約219cm、短軸が約466cm。面積は30.8㎡ほどであった。

方位 N-68.5°-W

柱穴 本掘立柱建物に伴う柱穴は6基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：34×31×(30)、柱2：33×21×(20)、柱3：45×34×(60)、柱4：42×32×39、柱5：60×52×38、柱6：40×40×65。

遺物 なし

時期 中世。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区屋敷跡 5号掘立柱建物(51図：PL13)

調査年度 平成11年度

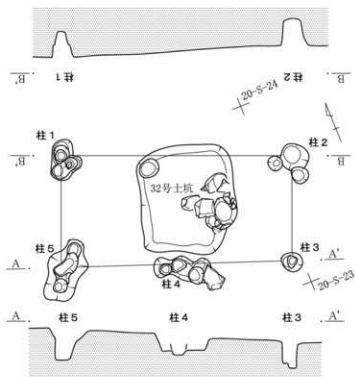
位置 R-23、S・T-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。5号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。また本掘立柱建物と20区32号土坑は、ひとつの遺構である可能性が考えられる。

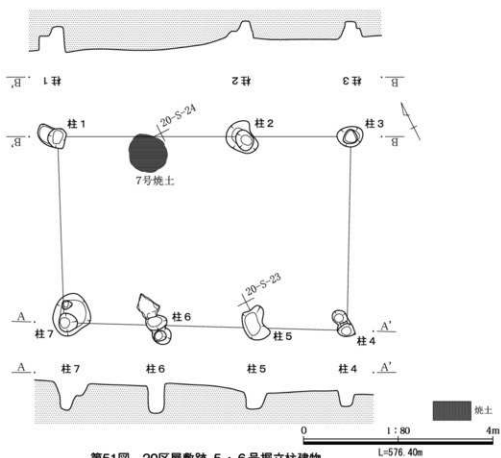
重複 20区32号土坑、屋敷跡6・7号掘立柱建物(すべて中世)と重複。切り合い関係は不明。

形状 平面形状は長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物で、20区屋敷跡6・7号掘立柱建物と長軸方向が近い。ともに重複しており、時

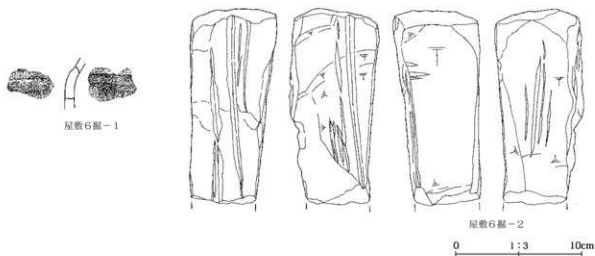
5号掘立柱建物



6号掘立柱建物



第51図 20区屋敷跡 5・6号掘立柱建物



第52図 20区屋敷跡 6号掘立柱建物出土遺物

期は異なる掘立柱建物だと考えている。また長軸と短軸の柱穴間平均値が異なる建物である。

規模 長軸4.82～4.88m、短軸2.23～2.34mを測る。柱穴間の平均値は、長軸241cm、短軸229cm。面積は約11.1㎡である。

方位 N-68～69.5°-W

柱穴 5号掘立柱建物に伴う柱穴は5基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：34×33×54、柱2：59×57×41、柱3：47×40×54、柱4：32×26×36、柱5：58×32×67。

遺物 なし

時期 中世。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区屋敷跡6号掘立柱建物(51・52図：PL13)

調査年度 平成11年度

位置 R-22・23、S-22～24

経過 調査は平成11年度に行われた。6号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

6号掘立柱建物と重複するように、20区7号焼

土遺構が検出された。焼土遺構は掘り込みをほとんど持たず、遺構時期は判断しがたい。出土位置から、6号掘立柱建物との関係が考えられるとしてここで報告したい。

重複 20区60号土坑、屋敷跡5・7号掘立柱建物、3号石垣(すべて中世)と重複。切り合い関係は不明。

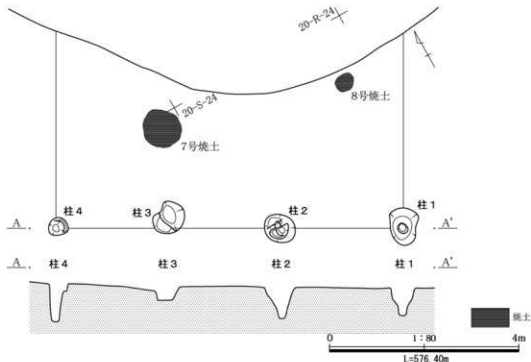
形状 平面形状は長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物で、20区屋敷跡5・7号掘立柱建物と長軸方向が近い。ともに重複しており、時期は異なる掘立柱建物だと考えている。また長軸と短軸との柱穴間平均値が異なる建物である。

規模 長軸5.99～6.22m、短軸3.95～4.09mを測る。柱穴間の平均値は、長軸200cm、短軸402cm。面積は約24.7㎡である。

方位 N-62～63°-W

柱穴 6号掘立柱建物に伴う柱穴は7基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：42×36×35、柱2：40×36×35、柱3：53×43×36、柱4：40×35×49、柱5：69×45×56、柱6：45×30×60、柱7：40×39×63。

遺物 内耳土器片と大型の砥石が出土したが、出土位置に疑問があり、本来どの遺構に伴うものか



第53図 20区屋敷跡 7号掘立柱建物

は判然としない。

時期 中世。遺物は出土したが、内耳土器は小破片で、また出土位置に疑問もあり時期は特定がたい。

20区屋敷跡 7号掘立柱建物 (53図：PL13)

調査年度 平成11年度

位置 Q-23, R-22~24, S-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。7号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。7号掘立柱建物と重複するように、20区7・8号焼土遺構が検出された。出土位置から、7号掘立柱建物との関係が考えられるとしてここで報告したい。また7号掘立柱建物の北側は、一部欠損しているものと思われる。

重複 20区3号石垣、32・60号土坑、屋敷跡5・6号掘立柱建物(すべて中世)と重複。切り合い関係は不明。

形状 建物北側が欠損しているため判然としな

いが、平面形状は長方形を呈すると思われる。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物と考えられ、20区屋敷跡5・6号掘立柱建物と長軸方向が近い。ともに重複しており、時期は異なる掘立柱建物だと考えている。
規模 長軸は、7.38mを測るが、短軸は不明。柱穴間の平均値は、長軸246cm。面積は、確認できる範囲で約29.5㎡であった。

方位 N-60.5°-W

柱穴 7号掘立柱建物に伴う柱穴は4基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：79×60×64、柱2：66×58×61、柱3：59×23×26、柱4：42×37×74。

遺物 なし

時期 中世。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

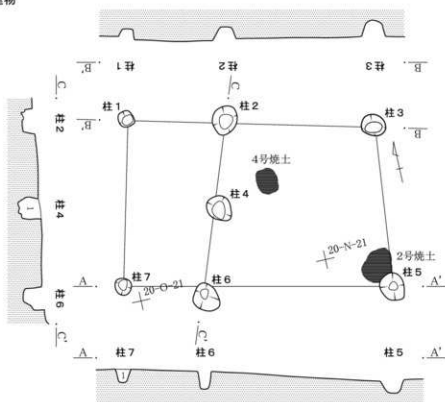
20区屋敷跡 8号掘立柱建物 (54図)

調査年度 平成11年度

位置 M・N-20・21, O-21

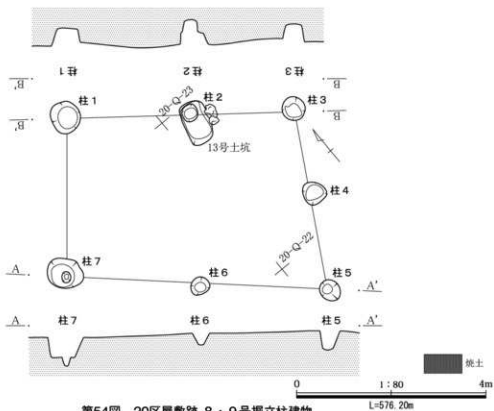
経過 調査は平成11年度に行われた。8号掘

8号掘立柱建物



1、黒褐色土。基本土層のIII層主体。炭化物をわずかに含む。

9号掘立柱建物



第54図 20区屋敷跡 8・9号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と遺物

立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。8号掘立柱建物と重複するように、20区2・4号焼土遺構が検出された。出土位置から関係が考えられるとしてここで報告したい。

重複 20区19号住居(縄文後期)、37(中世)・94(縄文)・115(中世以降)・138(縄文)号土坑、屋敷跡1号掘立柱建物(中世)、3号墓坑(中世以降)と重複。19号住居、94・138号土坑を切るも、その他の切り合い関係は不明。

形状 平面形状は、やや歪んだ長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つと考えられるが、本掘立柱建物と軸方向の近いものはない。

規模 長軸5.21～5.71m、短軸3.39～3.5mを測る。柱穴間の平均値は、長軸273cm、短軸174cm。面積は約19.3㎡である。

方位 N-76～77.5°-W

柱穴 8号掘立柱建物に伴う柱穴は7基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：34×32×23、柱2：64×52×23、柱3：52×44×39、柱4：51×50×46、柱5：60×50×29、柱6：60×54×44、柱7：36×34×31。

遺物 なし

時期 中世。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区屋敷跡9号掘立柱建物(54図)

調査年度 平成11年度

位置 P・Q-21～23

経過 調査は平成11年度に行われた。9号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

重複 20区13(中世)・15(中世以降)号土坑、屋敷跡2号掘立柱建物(中世)、3号石垣(中世)と重

複。切り合い関係は不明。

形状 平面形状は、やや歪んだ長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物と考えられるが、本掘立柱建物と軸方向の近いものはない。

規模 長軸4.84～5.58m、短軸3.34～3.86mを測る。柱穴間の平均値は、長軸261cm、短軸193cm。面積は約18.5㎡である。

方位 N-48～52.5°-W

柱穴 9号掘立柱建物に伴う柱穴は7基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：68×60×47、柱2：36×33×(50)、柱3：50×48×(40)、柱4：50×49×(40)、柱5：46×40×(40)、柱6：41×33×(20)、柱7：80×59×(40)。

遺物 なし

時期 中世。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

(2) 20区屋敷跡関連 石垣、溝

20区屋敷跡からは、屋敷を囲うように4箇所の石垣が検出されている。本調査区は吾妻川に向かって傾斜した地形上に位置しており、掘立柱建物を建てるために整地した結果築かれた石垣だと思われる。そのためか石垣は1段ほどと低く、また地形に沿うような形状を呈していた。また1号溝は、1号石垣の掘り方の一部と考えられるため、1号石垣とともに報告する。

以下、20区屋敷跡内で出土した石垣及び1号溝について、各遺構ごとに報告する。

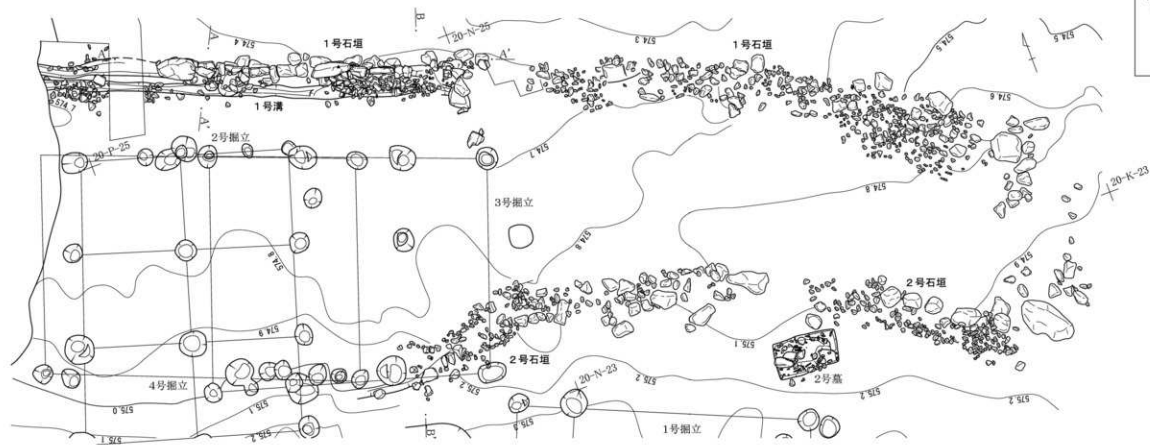
20区1号石垣(55図：PL13・14)

調査年度 平成11年度

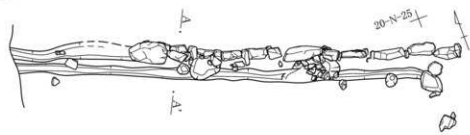
位置 K-23、L-23・24、M-24、N-24・25、O・P-25

経過 調査は平成11年度に行われた。20区2号石垣と並行して検出されており、近似した時期に同様の目的を持って築かれた石垣と思われる。また

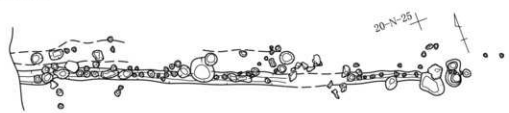
1号石垣立面図 A-A'



1号溝



1号溝掘り方

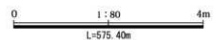
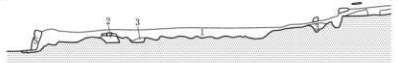


A 1号石垣 A'

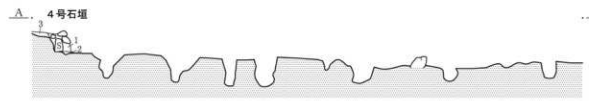
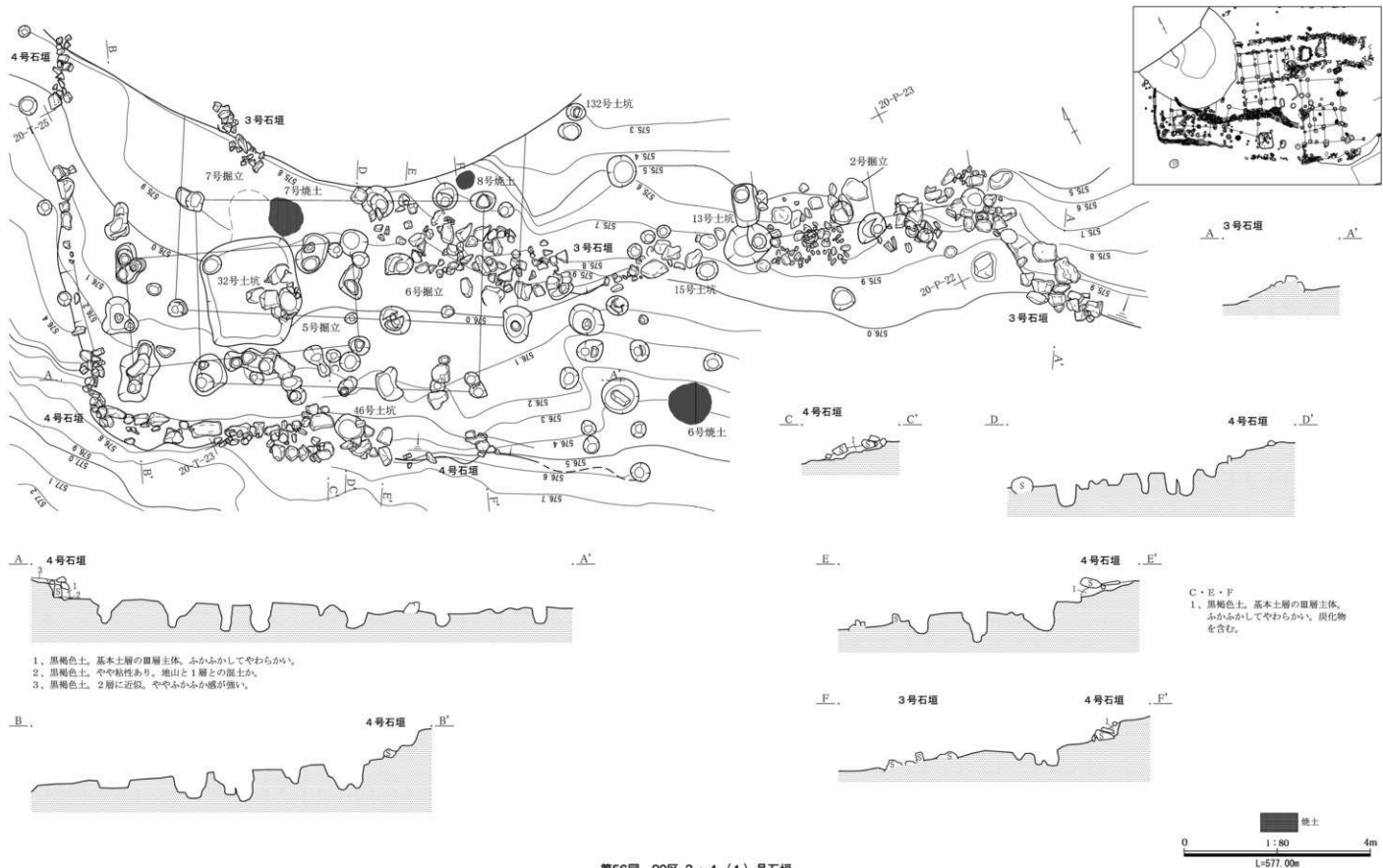


- 1. 黒褐色土。基本土層のIV層主体。ふかふかしてやわらかい。炭化物を含む。
- 2. 黒褐色土。1層と地山土との混土。
- 3. 褐色土。やや粘性あり。基本土層のIV層主体。

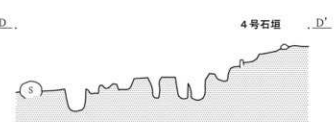
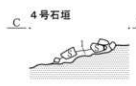
B 1号石垣 B' 2号石垣



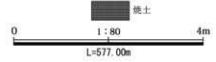
第55図 20区 1・2号石垣、1号溝



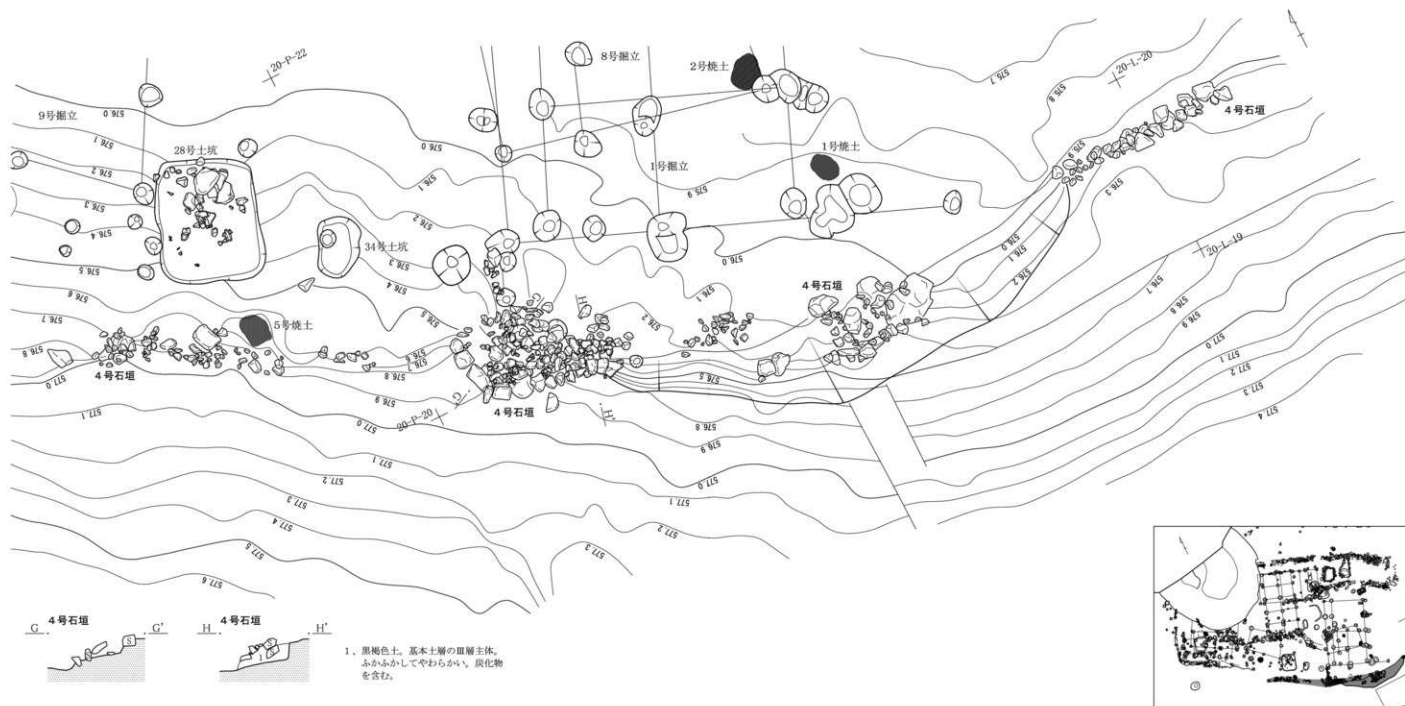
- 1、黒褐色土。基本土層の母層主体。ふかふかしてやわらかい。
- 2、黒褐色土。やや粘りあり。地山と1層との混土か。
- 3、黒褐色土。2層に近似。ややふかふか感が強い。



C・E・F
 1、黒褐色土。基本土層の母層主体。
 ふかふかしてやわらかい。炭化物
 を含む。



第56図 20区 3・4 (1)号石壇



第57図 20区 4号石塚 (2)

1号溝は、1号石垣の一部と思われるためここで報告する。

重複 20区86号土坑(堀之内1)と重複し、これを切る。

形状 北北東から南南西へ、ほぼ直線状を呈する。南南西部分では、2号石垣と並行するように、緩やかな弧状を描く。

規模 一部欠損するも、長さ約21.4m。石垣はほぼ一段のみであり、高さも54cmほどと低い。

遺物 なし

時期 中世。20区屋敷跡に伴う石垣と思われるため、本石垣を当該期に比定した。

20区1号溝(55図：PL14)

調査年度 平成11年度

位置 N-24・25、O・P-25

経過 調査は平成11年度に行われた。調査時は、単独の溝と認定し番号が付されていたが、整理段階で1号石垣の一部である可能性が高いと考え、ここで報告する。

形状 平面形状は直線状、断面形状は不詳。溝底からは、柱穴状の小さな掘り込みが多数検出された。この掘り込みがどの様な性格の遺構であるのかは判然としない。

規模 長さ8.56m、最大幅0.28m。

遺物 なし

時期 中世。1号石垣の一部と考え、本溝を当該期に比定した。

20区2号石垣(55図)

調査年度 平成11年度

位置 K-22、L-22・23、M・N-23

経過 調査は平成11年度に行われた。20区1号石垣と並行して検出されており、近似した時期に同様の目的を持って築かれた石垣と思われる。

重複 20区8(中世以降)・33(中世)号土坑、6号石組遺構(中世以降)、屋敷跡3号掘立柱建物(中世)と重複。切り合い関係は不明。

形状 北東方向に緩やかな弧状を描く。1号石垣の一部と並行するような形状を呈する。

規模 長さ約14.6m。本石垣の遺存状態は良好ではないため段数は不明瞭だが、ほぼ一段のみと考えている。

遺物 なし

時期 中世。20区屋敷跡に伴う石垣と思われるため、本石垣を当該期に比定した。

20区3号石垣(56図：PL14・15)

調査年度 平成11年度

位置 O-21・22、P-22、Q・R-22・23、S-24

経過 調査は平成11年度に行われた。20区屋敷跡掘立柱建物4棟と重複するように検出された。

重複 20区25号住居(加曾利E3)、2号配石(礎文)、13号土坑(中世)、屋敷跡2・6・7・9号掘立柱建物(ともに中世)と重複。25号住居、2号配石を切る。13号土坑、2・6・7・9号掘立柱建物との切り合い関係は不明。

形状 北北東から南南西へ、ほぼ直線状を呈する。東側端部では、ほぼ直角に南側へ屈曲する。

規模 遺存状態が悪く不明瞭な部分はあるが、長さ約19.7m。段数は1段ほどと思われる。

遺物 なし

時期 中世。20区屋敷跡に伴う石垣と思われるため、本石垣を当該期に比定した。

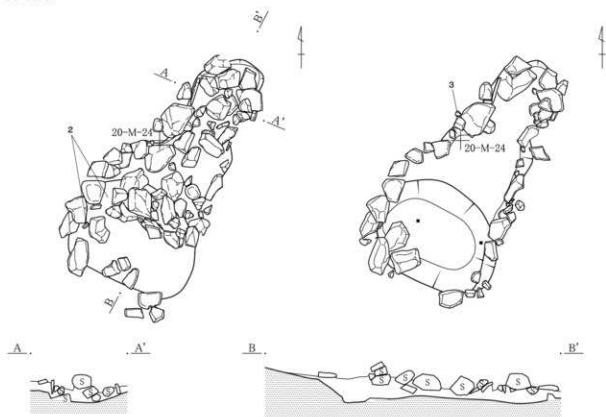
20区4号石垣(56・57図：PL14・15)

調査年度 平成11年度

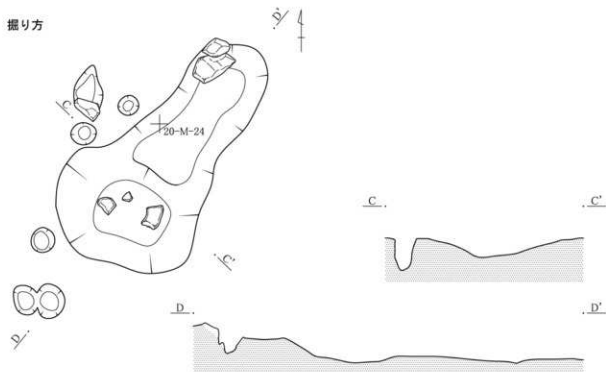
位置 K~N-19、O-19・20、P-20、Q-20・21、R-22、S-22・23・25、T-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。石垣は大規模であり、詳細に見ると数箇所に分かれることから、数度手を加えられたか、あるいはいくつかの石垣をひとつの石垣として呼称しているものと思われる。ここでは、調査段階の遺構名称を優先し、

出土状況



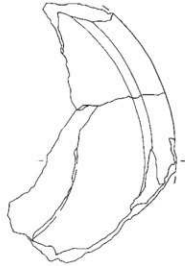
掘り方



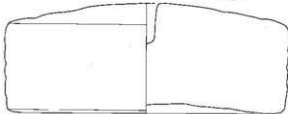
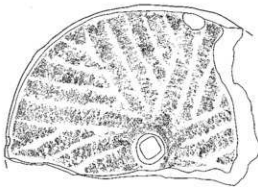
第58図 20区 3号石相遺構



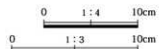
3石組-1



3石組-2 (1/4)

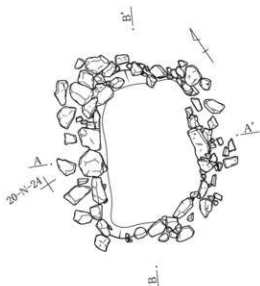
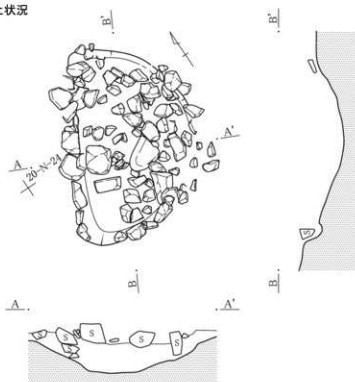


3石組-3 (1/4)



第59図 20区 3号石組遺構出土遺物

出土状況



第60図 20区 4号石相遺構(1)

0 1:50 2m
L=575.00m

すべてを4号石垣として報告したい。

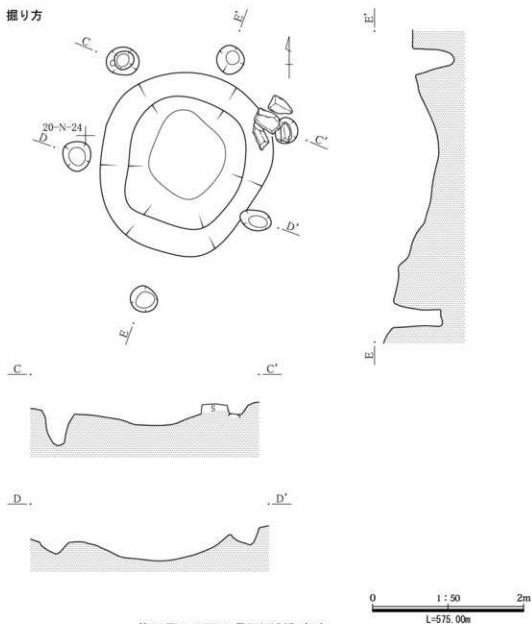
重複 20区40・61号住居(ともに堀之内1)、46号土坑(中世)、5号墓坑(中世)と重複。20区40・61号住居を切る。46号土坑、5号墓坑との切り合い関係は不明。

形状 北西から南東へほぼ直線状を呈するが、

点在するようであり、その形状は不明瞭である。また北西側では、北側へ直角に曲がる形状を呈している。

規模 東西の長さ約39.1m。段数は1段ほどであったと思われる。

遺物 なし



第61図 20区4号石組遺構(2)

時期 中世。20区屋敷跡に伴う石垣と思われるため、本石垣を当該期に比定した。

以下、20区屋敷跡から検出された石組遺構4基について報告する。

(3) 20区屋敷跡関連 石組遺構

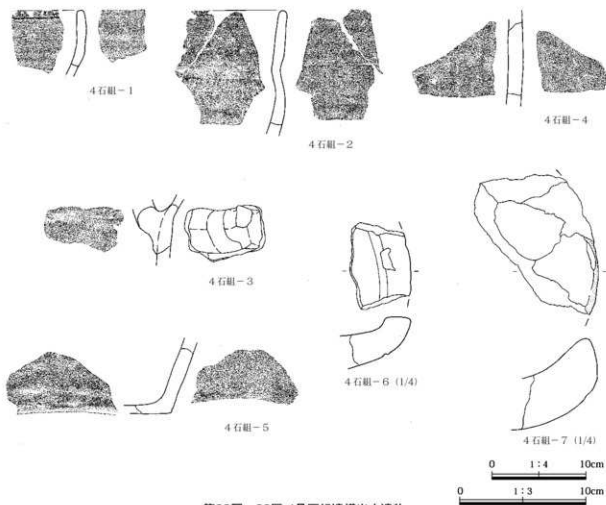
本書で石組遺構と認定された遺構は、人為的に礎が据えられた遺構で、縄文時代の配石ではないと判断された遺構を指す。遺物を伴わない石組遺構は時期が不明瞭ではあるが、20区屋敷跡内で検出されたことから、屋敷跡に関連する可能性があると考えることで報告したい。

20区3号石組遺構(58・59図：PL16)

調査年度 平成11年度

位置 L・M-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。歪んだ楕円形の浅い掘り込みから、礎が多量に出土した。一部の礎は据えられたように検出されたが、意図的に据えられていない礎も多数あると思われる。



第62図 20区4号石組遺構出土遺物

た、掘り込みからは獣骨が出土している。

重複 なし

形状 多量の礫があり平面形状は不明瞭な部分もあるが、歪んだ楕円形を呈するものと思われる。周辺には柱穴状の掘り込みが6基点在する。本石組とどの様な関連があった遺構かは不明。

規模 長軸3.64m、短軸1.77m。深さは50cmほどであった。

方位 N-40°-E

遺物 内耳土器片、粉挽き形の下臼、茶臼の下臼が出土した。成体のニホンジカと推定された獣骨も出土した。

時期 中世以降。内耳土器は小破片であり、時期を特定することはできなかった。

20区4号石組遺構(60～62図：PL16)

調査年度 平成11年度

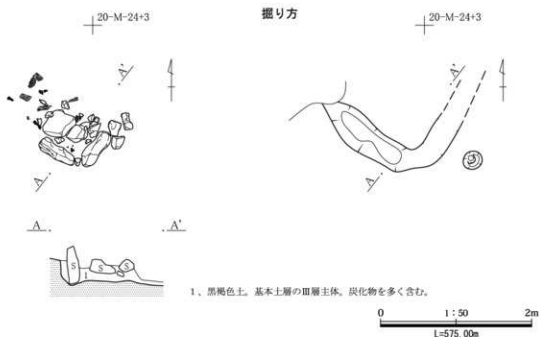
位置 M-23・24、N-23

経過 調査は平成11年度に行われた。歪んだ長方形の掘り込みから、礫が多量に出土した。一部の礫は据えられたように検出されたが、意図的に据えられていない礫も多数あると思われる。

重複 なし

形状 多量の礫があり平面形状は不明瞭な部分もあるが、歪んだ長方形か。ただし掘り方では、平面形状がほぼ円形を呈する掘り込みであり、周囲を巡るように柱穴状の遺構が6基検出されている。本石組とどの様な関連があった遺構かは不明。

規模 長軸3.73m、短軸2.93m。深さは67cmほどであった。



第63図 20区 5号石組遺構

方位 N-17°-E

遺物 信濃型内耳土器片、茶臼の下臼、石鉢が出土した。

時期 中世。出土遺物より、本石組遺構を当該期に比定した。

20区5号石組遺構(63図：PL16)

調査年度 平成11年度

位置 L・M-24

経過 調査は平成11年度に行われた。20区1号石垣に隣接する位置で検出されている。また、周辺からは炭化物が多く出土したが、本遺構に伴うものかは判然としなない。

重複 なし

形状 大型の扁平な礫をおよそ方形に据えたような形状を呈している。

規模 長軸1.22m、短軸0.76m。遺構としての掘り込みは浅いが、礫があるため深さは46cmほどであった。

方位 不明

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区6号石組遺構(64・65図：PL17)

調査年度 平成11年度

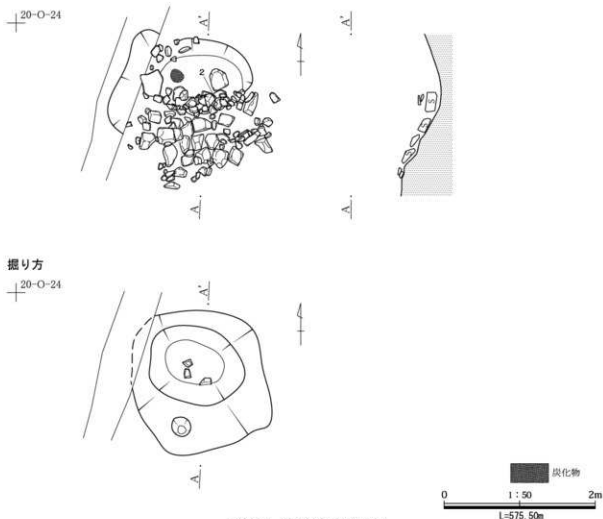
位置 N-23

経過 調査は平成11年度に行われた。不整形の浅い掘り込みの中から、礫が多量に出土した。一部の礫は据えられたように検出されたが、意図的に据えられていない礫も多数あると思われる。

掘り方調査の中で柱穴状の掘り込みが検出された。調査所見では、礫下より検出されたため本遺構よりも古い遺構である可能性が指摘されている。また本石組遺構は、20区2号石垣と隣接するように重複して検出されている。

重複 20区33号土坑、屋敷跡3号掘立柱建物、2号石垣(すべて中世)と重複。切り合い関係は不明。

形状 平面形状は不整形円形を呈する。浅いすり鉢状の掘り込みに、一部の礫が敷かれたような状態で検出されている。



第64図 20区 6号石組遺構

規模 長軸2.38m、短軸1.91m。深さは56cmほどであった。

方位 不明

遺物 内耳土器片、粉挽き形の下臼が出土した。

時期 中世以降。出土した内耳土器は小破片であり、時期を特定することはできない。

(4) 20区屋敷跡関連 焼土遺構

20区屋敷跡内からは、1～8号焼土遺構が検出された。調査所見から、焼土遺構との認定が難しい遺構もあるが、詳細は各遺構ごとに報告したい。

焼土遺構は掘り込みがなく、遺物も出土することが少ないため時期比定が難しい。この遺構の中にも、屋敷跡に伴わない遺構が含まれている可能性は

あるが、屋敷跡の多様な様相を知るため、同範囲で検出された焼土遺構についてはここで報告したい。

以下、各焼土遺構ごとに報告する。

20区1号焼土遺構 (66図：PL17)

調査年度 平成11年度

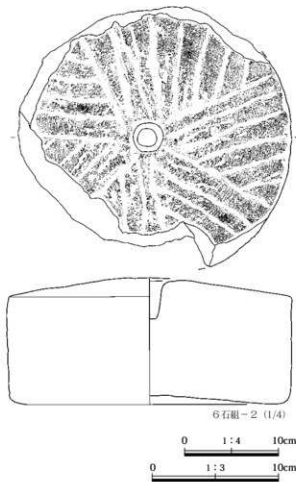
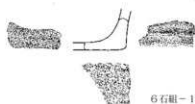
位置 M-20

経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、二次的な焼土の堆積であったとの指摘もあり、焼土遺構にはならない可能性がある。20区屋敷跡1号掘立柱建物と近接するように検出されたが、これに伴うものかは不明。

重複 なし

形状 平面形状は楕円形を呈する。

第4節 中世・近世の遺構



第65図 20区 6号石相遺構出土遺物

規模 長軸65cm、短軸46cm。深さは16cmほどと浅い。
遺物 なし
時期 不詳。中世以降か。

20区2号焼土遺構(66図：PL17)

調査年度 平成11年度
位置 M-20
経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、縄文も含めたがが竈の残骸とあった。2号

焼土遺構は20区屋敷跡1・8号掘立柱建物内で検出されており、3・4号焼土遺構とともに掘立柱建物との関連も考えられる。

重複 柱穴と重複か。
形状 平面形状は楕円形を呈する。
規模 長軸78cm、短軸60cm。深さは40cmほどであった。
遺物 なし
時期 不詳。中世以降か。

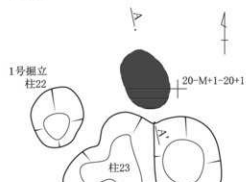
20区3号焼土遺構(66図：PL17・18)

調査年度 平成11年度
位置 M-21
経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、二次的な焼土の堆積との指摘もあり、焼土遺構にはならない可能性がある。3号焼土遺構は20区屋敷跡1号掘立柱建物内で検出されており、2・4号焼土遺構とともに掘立柱建物との関連も考えられる。
重複 なし
形状 平面形状は円形を呈する。
規模 長軸60cm、短軸55cm。深さは25cmほどと浅い。
遺物 なし
時期 不詳。中世以降か。

20区4号焼土遺構(66図：PL18)

調査年度 平成11年度
位置 N-21
経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、二次的な焼土の堆積との指摘もあり、焼土遺構にはならない可能性がある。4号焼土遺構は20区屋敷跡1・8号掘立柱建物内で検出されており、2・3号焼土遺構とともに掘立柱建物との関連も考えられる。
重複 なし
形状 平面形状はほぼ円形を呈する。
規模 長軸54cm、短軸44cm。深さは20cmほど

1号焼土

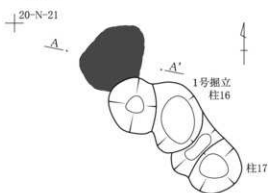


A, L=576.10m



- 1、焼土層。不均質な焼土ブロック。
- 2、黒褐色土。しまりややない。

2号焼土

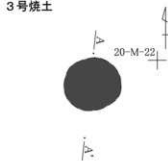


A, L=576.00m



- 1、焼土層。固く焼きしまっている。
- 2、暗褐色土。焼土ブロックを含む。不均質。

3号焼土

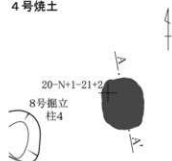


A, L=575.70m



- 1、焼土層。くすんだ色調の焼土ブロック。
- 2、暗褐色土。焼土ブロックをわずかに含み、乱れている。

4号焼土



A, L=576.10m



- 1、焼土。暗い色調の焼土ブロック。

5号焼土

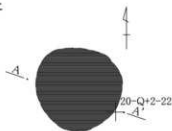


A, L=577.00m



- 1、焼土層。炭化物を少量含む。暗褐色土と焼土の乱れた層。
- 2、暗褐色土。焼土をわずかに含む。

6号焼土



A, L=576.40m

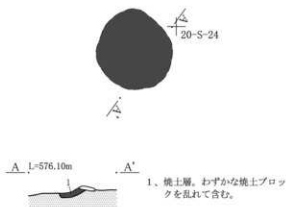


- 1、焼土層。くすんだ色調の焼土ブロック。

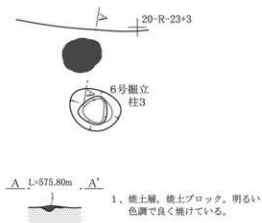


第66図 20区 1～6号焼土遺構

7号焼土



8号焼土



第67図 20区7・8号焼土遺構

と浅い。

遺物 なし

時期 不詳。中世以降か。

20区5号焼土遺構(66図:PL18)

調査年度 平成11年度

位置 P-20

経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、被熱の度合いが弱く遺構ではないとの指摘もあり、焼土遺構にはならない可能性も考えられる。

重複 なし

形状 平面形状は不整形を呈する。

規模 長軸66cm、短軸52cm。深さは30cmほどであった。

遺物 なし

時期 不詳。中世以降か。

20区6号焼土遺構(66図:PL18)

調査年度 平成11年度

位置 Q-21・22

経過 調査は平成11年度に行われた。調査所

見には、二次的な焼土の堆積との指摘もあり、焼土遺構にはならない可能性がある。

重複 なし

形状 平面形状は円形を呈する。

規模 長軸90cm、短軸89cm。深さは20cmほどと浅い。

遺物 なし

時期 不詳。中世以降か。

20区7号焼土遺構(67図:PL18)

調査年度 平成11年度

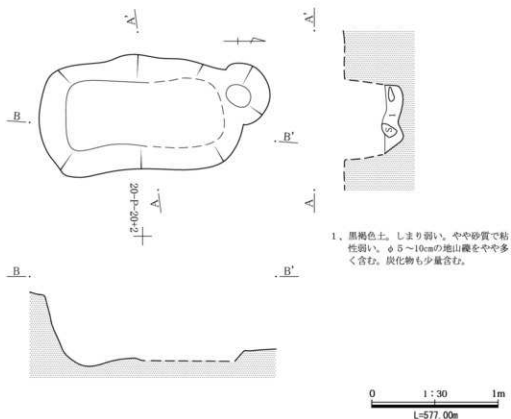
位置 S-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、焼土がわずかに見られるか遺構ではない可能性もあるとの指摘があった。7号焼土遺構は20区屋敷跡6・7号掘立柱建物内で検出されており、掘立柱建物との関連も考えられる。

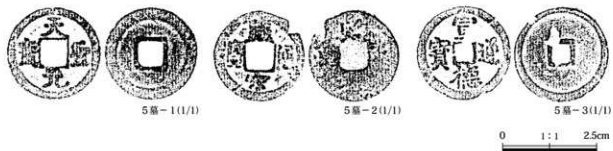
重複 20区60号土坑(中世)と重複。切り合い関係は不明。

形状 平面形状は円形を呈する。

規模 長軸85cm、短軸80cm。深さは20cmほどと浅い。



1、黒褐色土。しまり弱い、やや砂質で粘性弱い。φ5～10cmの地山礫をやや多く含む。炭化物も少量含む。



第68図 20区 5号墓坑、5号墓坑出土遺物

遺物 なし

時期 不詳。中世以降か。

20区8号焼土遺構(67図：PL19)

調査年度 平成11年度

位置 R-23

経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、二次的な焼土の堆積との指摘もあり、焼土遺構にはならない可能性がある。8号焼土遺構は20区屋敷跡7号掘立柱建物内で検出されており、

7号焼土遺構とともに掘立柱建物との関連も考えられる。

重複 なし

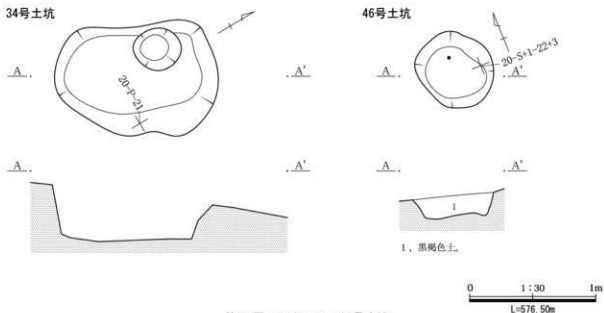
形状 平面形状は円形を呈する。

規模 長軸42cm、短軸36cm。深さは30cmほどであった。

遺物 なし

時期 不詳。中世以降か。

(5) 20区屋敷跡関連 墓坑他



第69図 20区 34・46号土坑

20区屋敷跡内からは、人骨や銭貨、獣骨が出土した遺構が確認できた。人骨や銭貨が出土した遺構は3基、獣骨が出土した遺構は4基である。

遺構からは骨以外に渡来銭などの遺物を伴う例もあった。しかし、遺構の時期を比定できる出土遺物は少なく、20区屋敷跡に伴わない中世以外の遺構が含まれている可能性もあるだろう。また、調査時墓坑の呼称であった遺構から獣骨が出土するなど、遺構名称には混乱もみられるが、ここでは調査段階での呼称を優先している。

本書で報告される土坑の中には、既に「横壁中村遺跡(6)」の中で報告されているものも多い。ここでは概要を述べるに留めるが、詳細は「横壁中村遺跡(6)」を参照していただきたい。また、人骨や銭貨が出土した遺構と獣骨が出土した遺構は性格が異なる遺構だと考えており、ここでは分けて報告したい。

ここでは、20区屋敷跡内で検出された、人骨あるいは銭貨が出土した遺構について報告する。銭貨は六道銭のような葬送儀礼に伴うものと考え、人骨が出土した遺構とともに報告したい。ここで報告する遺構は、「横壁中村遺跡(6)」で既に報告された遺構も含めた3基である。

以下、人骨、銭貨が出土した各遺構ごとに報告する。

20区 5号墓坑(68図: PL19)

調査年度 平成11年度

位置 P-20

経過 調査は平成11年度に行われた。調査所見には、5号墓坑は地山の段差を切って構築しているため、おそらく20区4号石垣より新しく築かれたものとの指摘があった。また柱穴との重複もみられたが、切り合い関係は不明。人骨が出土したか出土状況は不明。土坑規模が大きく、伸展葬での埋葬ではないかと指摘されている。

重複 20区4号石垣(中世)と重複し、4号石垣を切るか。

形状 平面形状は長方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸162cm、短軸91cm。深さは55cmであった。後世に壊されてしまったが、本来はさらに深く掘られた墓坑と考えられる。

方位 N-6°-E

遺物 「天聖元寶」、「皇宋通寶」、「宣徳通寶」各1点が出土した。

第3章 発見された遺構と遺物

人骨 性別不明だが、約7～9歳に推定された人骨が出土した。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区34号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 N・O-20・21

形状 平面形状は楕円形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸130×短軸91×深さ46cm。

方位 N-37°-E

遺物 「嘉定通寶」1点、「皇宋通寶?」1点が出土した。

人骨 なし

時期 中世

20区46号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 S-22

形状 平面形状は円形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸62×短軸55×深さ22cm。

方位 N-34°-W

遺物 「景德元寶」、「紹熙元寶」、「聖宋元寶」各1点が出土した。

人骨 なし

時期 中世

ここでは、20区屋敷跡内で検出された、獣骨が出土した遺構4基について報告する。出土した獣骨はすべてウマであり、20区屋敷跡と関連があるものと考えている。また、20区屋敷跡2号掘立柱建物に重複して検出された13号土坑からは、獣骨やカワラケが出土しており、地鎮を目的とした遺構とも考えられる。ここで報告する遺構は、「横壁中村遺跡(6)」で既に報告された遺構も含めた4基である。

以下、獣骨の出土した各遺構ごとに報告する。

20区2号墓坑(70図：PL19)

調査年度 平成11年度

位置 L-22

経過 調査は平成11年度に行われた。ウマの全身骨格が出土し、大小の礫が遺構上面を覆うように検出されたことから、ウマを埋葬した遺構であった可能性も考えられる。

重複 なし

形状 平面形状は長方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 長軸135cm、短軸83cm。深さは29cmであった。

方位 N-83°-W

遺物 なし

獣骨 約9～10歳のウマと推定された獣骨が出土した。

時期 中世以降。獣骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区3号墓坑(70図：PL20)

調査年度 平成11年度

位置 N-21

経過 調査は平成11年度に行われた。遺存状態はやや悪いが、大小の礫が遺構上面を覆うように出土したことから、ウマを埋葬した遺構であった可能性も考えられる。

重複 20区94(縄文)・115(中世以降)・138(縄文)号土坑、屋敷跡1・8号掘立柱建物(中世)と重複。94・138号土坑を切るも、115号土坑、1・8号掘立柱建物との切り合い関係は不明。

形状 平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿状を呈する。

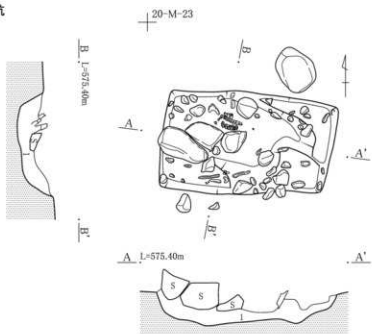
規模 一部欠損しているため規模は判然としないうが、長軸125cmほど、短軸94cmほどか。深さは37cmまで測れた。

方位 N-54°-W

遺物 なし

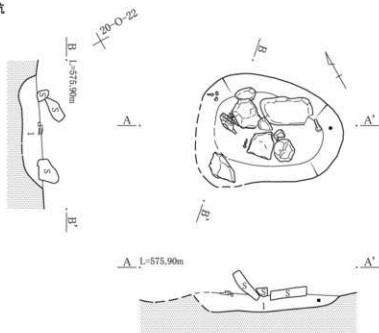
獣骨 約4～5歳のウマと推定された獣骨が出土

2号墓坑



1、黒褐色土。しまり弱い、粘性あり。
白色粒子を少量含む。

3号墓坑

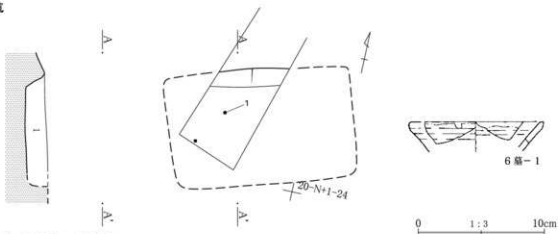


1、黒褐色土。基本土層の珉層主体、IV
層のブロックを少量含む。炭化物を
含む。

0 1:30 1m

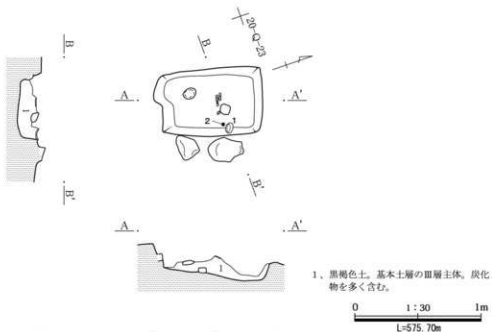
第70図 20区 2・3号墓坑

6号墓坑



1、黒褐色土。しまり弱。粘性あり。
白色粒子を少量含む。

13号土坑



1、黒褐色土。基本土層の面層主体。炭化物を多く含む。

第71図 20区 6号墓坑、6号墓坑出土遺物、13号土坑

土した。

時期 中世以降。獣骨以外の出土遺物がなく、
時期は特定できない。

20区6号墓坑(71図:PL20)

調査年度 平成11年度

位置 N-23・24

経過 調査は平成11年度に行われた。遺構の
大半が欠損しており遺存状態は悪いが、ウマの骨と
ともに古瀬戸緑軸小皿の小破片が出土した。緑軸小
92

皿がウマとともに埋葬されたものかは、調査所見も
ないため不明。

重複 20区屋敷跡3号掘立柱建物(中世)と重
複。切り合い関係は不明。

形状 前述の通り、遺存状態が悪いため形状は
不詳。

規模 遺存状態が悪く、規模も判然としない。

確認できた深さも15cmと浅い。

方位 不明

遺物 古瀬戸後期IV古の緑軸小皿片1点が出土

した。

獣骨 約4歳のウマと推定された獣骨が出土した。

時期 中世。15世紀頃。遺構の遺存状態は悪く、出土した遺物も小破片であり時期を特定することは難しいが、出土遺物より判断し本遺構を当該期に比定した。

20区13号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 P-22

経過 13号土坑は、20区屋敷跡2号掘立柱建物と重複しており、「横壁中村遺跡(6)」でも、地鎮などの特別な目的を持った遺構の可能性が指摘されていた。しかし、報告に不備があり、本来の方位と異なることが分かった。ここで改めて報告したい。
形状 平面形状は長方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 長軸85×短軸55×深さ30cm。

方位 N-72°-W

遺物 小型のカワラケ1点、内耳土器底部片を台形に成形し転用したものの1点が出土した。

獣骨 約3.5歳のウマの上下臼歯と推定された獣骨が出土した。

時期 中世

(6) 20区屋敷跡関連 竪穴遺構

20区屋敷跡内では、掘立柱建物以外に、竪穴状の遺構が確認されている。竪穴遺構は、中世を代表する建物の痕跡と考えられ、20区屋敷跡内からも4基が検出されている。このうち1基については、20区屋敷跡5号掘立柱建物の一部である可能性もある。詳細は各遺構の報告に譲りたい。

ここで報告する竪穴遺構は、土坑として既に「横壁中村遺跡(6)」の中で報告されている。各土坑の詳細については「横壁中村遺跡(6)」を参照していただきたい。

以下、竪穴遺構と思われる土坑4基の概要を報告

する。

20区3号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 N-22

形状 遺構の多くが欠損しているため、形状は判然としない。平面形状はおおよそ方形か。断面形状は皿状を呈する。

規模 長軸264×短軸(134)×深さ27cm。

方位 不明

遺物 なし

時期 中世以降

20区28号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 P-21

形状 平面形状は方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸262×短軸221×深さ29cm。

方位 N-26°-E

遺物 なし

時期 中世

20区32号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 S-23

形状 平面形状は方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸226×短軸201×深さ36cm。柱穴が2基検出されている。

方位 N-16°-E

遺物 内耳土器片1点出土。

時期 中世

20区33号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

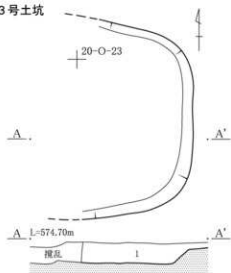
調査年度 平成11年度

位置 N-23

形状 遺構の大半が欠損しているため、形状は

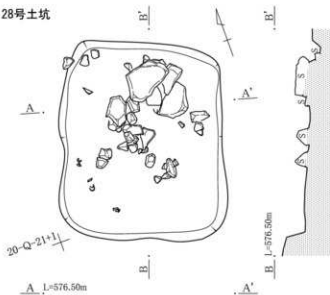
第3章 発見された遺構と遺物

3号土坑

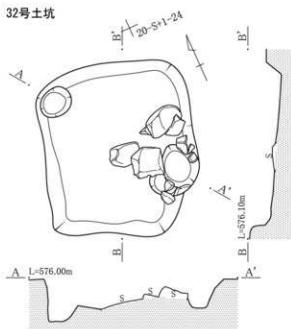


1、黒褐色土。II層にIV層が混土。炭化物を含む。

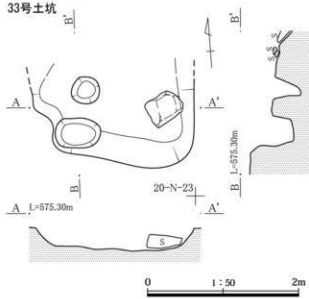
28号土坑



32号土坑



33号土坑



第72図 20区 3・28・32・33号土坑

判然としない。平面形状はおおよそ方形か。断面形状は皿状を呈する。

規模 長軸216×短軸(146)×深さ31cm。柱穴が2基検出されている。

方位 不明

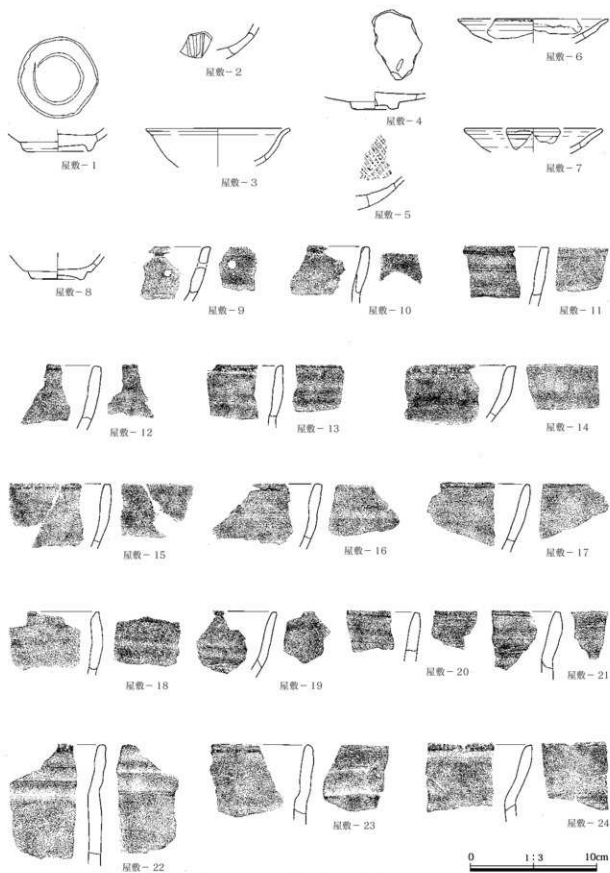
遺物 なし

時期 中世以降

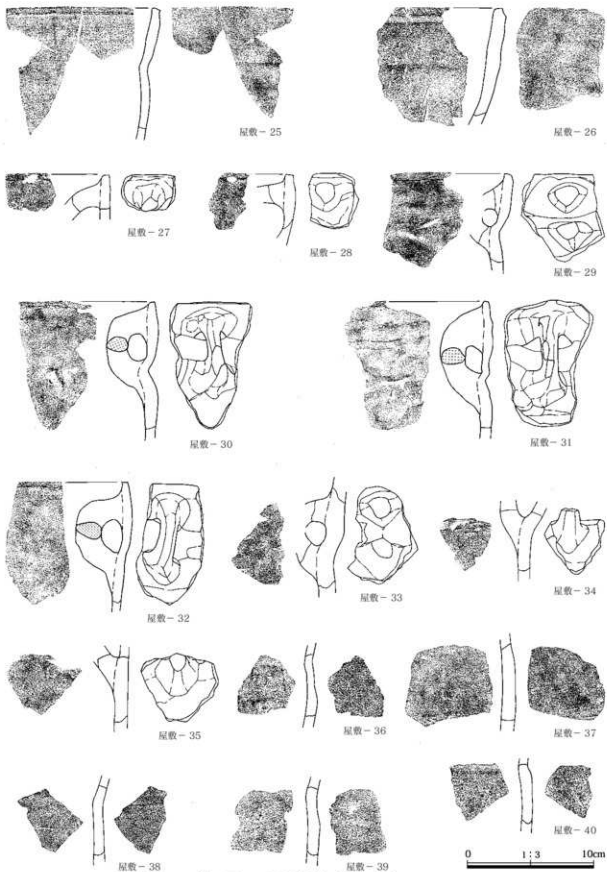
(7) 20区屋敷跡出土遺物

20区屋敷跡からは、多くの中世遺物が出土した。屋敷跡全体で取り上げられた遺物が大半であり、個々の遺構に帰属しきれないものも多くみられた。20区屋敷跡の中世遺物出土位置については、付図2で報告した。参照していただきたい。

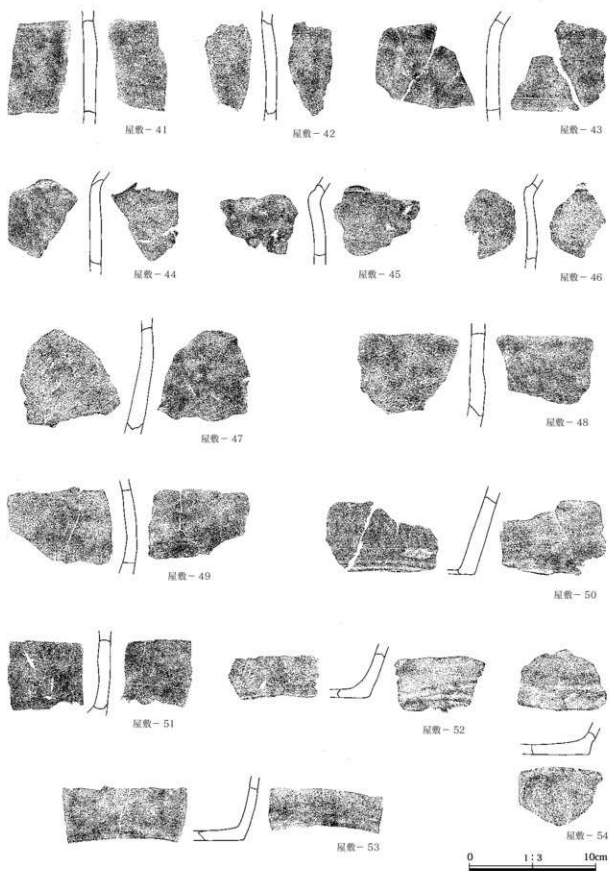
20区屋敷跡の出土遺物を概観すると、石垣に囲まれた屋敷跡内で古瀬戸後期を中心とする施軸陶器



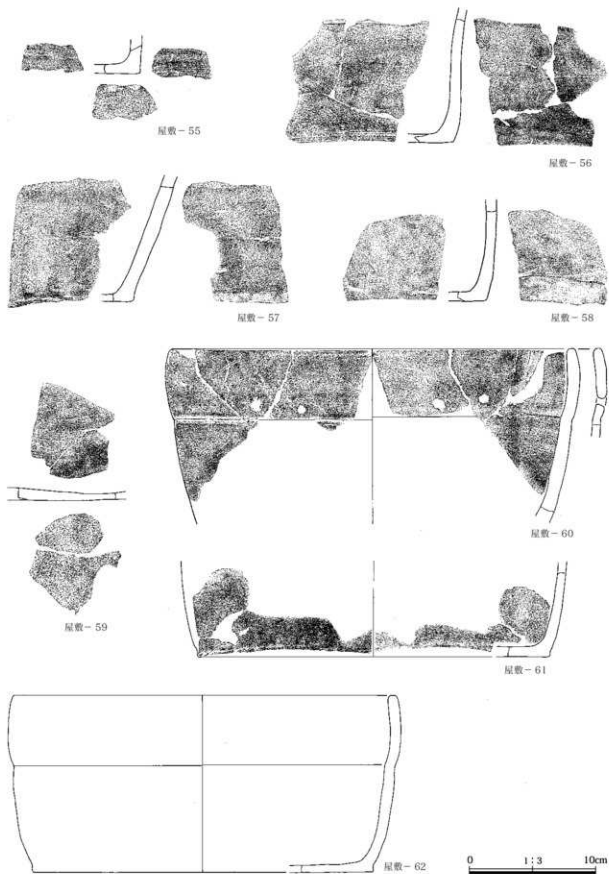
第73図 20区 屋敷跡出土遺物 (1)



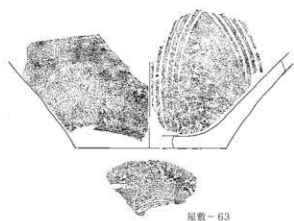
第74図 20区 屋敷跡出土遺物 (2)



第75図 20区 屋敷跡出土遺物 (3)



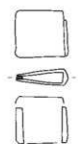
第76図 20区 屋敷跡出土遺物 (4)



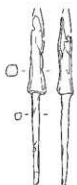
屋敷-63

屋敷-64

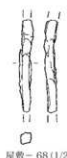
屋敷-65



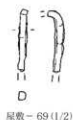
屋敷-66 (1/2)



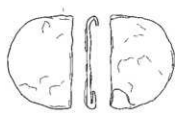
屋敷-67 (1/2)



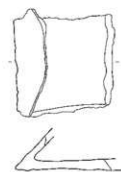
屋敷-68 (1/2)



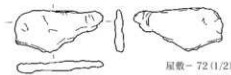
屋敷-69 (1/2)



屋敷-70 (1/2)



屋敷-71 (1/2)



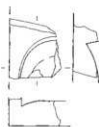
屋敷-72 (1/2)



屋敷-73 (1/2)



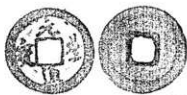
屋敷-74 (1/2)



屋敷-78



屋敷-75 (1/2)



屋敷-76 (1/1)

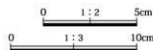


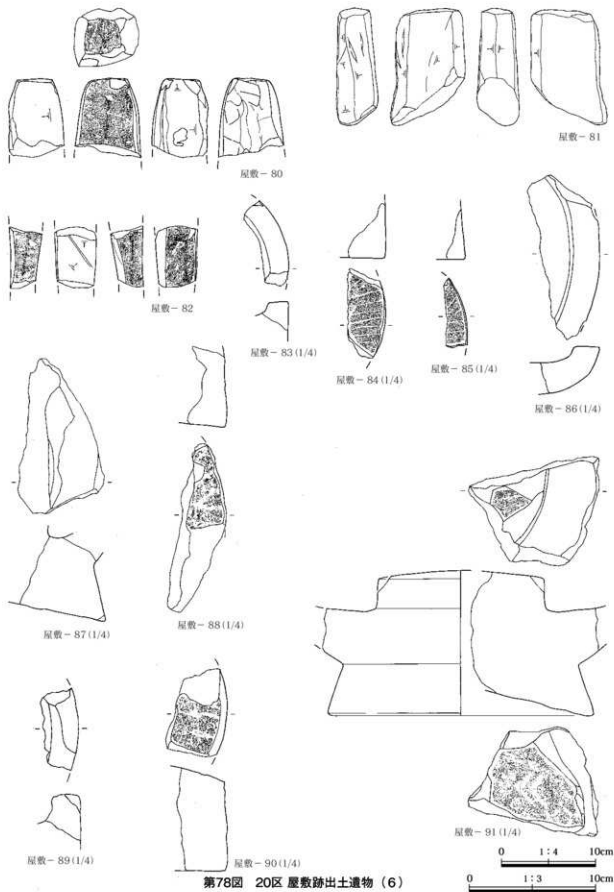
屋敷-77 (1/1)



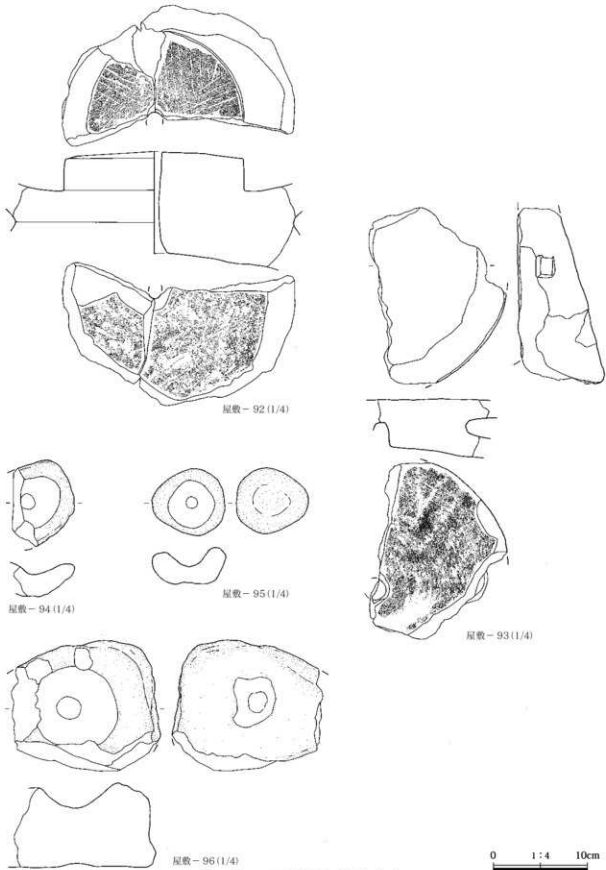
屋敷-79

第77図 20区 屋敷跡出土遺物 (5)





第78図 20区 屋敷跡出土遺物 (6)



屋敷-92(1/4)

屋敷-94(1/4)

屋敷-95(1/4)

屋敷-93(1/4)

屋敷-96(1/4)

第79図 20区 屋敷跡出土遺物(7)

0 1:4 10cm

第3章 発見された遺構と遺物

や貿易陶磁器とともに、多くの内耳土器片が出土している。横壁中村遺跡全体をみても、内耳土器が出土した位置は屋敷跡が中心であり、中世における主要な地域であった事が窺える。また在地鉢の出土がわずかであったことから、中世屋敷として継続した期間は比較的短いと考えている。

出土様相等については第4章に詳述した。参照していただきたい。

2 掘立柱建物

横壁中村遺跡で出土した古代以降の掘立柱建物等の遺構は、20区屋敷跡を中心に検出されているが、本遺跡における中世遺物は、20区以外でも出土している(第180・181図参照)。本遺跡は地山に礫が多く、遺構検出が難しいなどの要因により中世遺構が確認できなかったことも考えられるが、遺構と遺物の双方を概観すれば、20区以外の調査区には中世以降に比定できる遺構は希薄であったと考える方が妥当であろう。

一方で、20区屋敷跡内であっても掘立柱建物の重複は比較的少なく、出土した遺物の時期も比較的まとまっているように思える。屋敷跡として、長い期間使用されていなかった可能性もあるだろう。本遺跡で、掘立柱建物の出土棟数が少ないのは、この様な横壁中村遺跡の中世の様相を表している結果ではないかとも考えている。

20区屋敷跡以外で出土した掘立柱建物は4棟を数える。19区で3棟、20区で1棟である。19区の掘立柱建物2棟については、調査段階での成果を考慮し、整理段階で改めて柱穴を組み直した建物である。そのため、現場での遺構写真と若干の差異が生じてしまったことについてはご容赦願いたい。

20区掘立柱建物は遺構番号の重複があり、遺構番号を付け直す結果となった。また、調査段階で掘立柱建物とされたもののいくつかは、棚列状のものも含まれていた。ここでは掘立柱建物ではないとして欠番とした。詳細については、遺構一覧表を参照していただきたい。

以下、各掘立柱建物ごとに報告する。

19区2号掘立柱建物(80図:PL21)

調査年度 平成15年度

位置 N・O-14・15

経過 調査は平成15年度に行われた。2号掘立柱建物は、調査段階と整理段階とで見解が異なったため、新たに建物を認定し報告するものである。そのため、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

2号掘立柱建物に重複するように、19区9・10号焼土遺構が検出された。本掘立柱建物に伴う遺構の可能性があるととして、ここで報告したい。

重複 20区179号土坑(中世以降)と重複。切り合い関係は不明。

形状 平面形状は長方形を呈する。ほぼ南北方向に長軸を持つ建物である。長軸方向や形状は、隣接する19区3号掘立柱建物に近似する。また長軸と短軸との柱穴間平均値がやや異なる建物である。

規模 長軸3.73～3.89m、短軸2.51～2.53m。柱穴間の平均値は、長軸191cm、短軸252cm。面積は約9.6㎡である。

方位 N-9°-E

柱穴 2号掘立柱建物に伴う柱穴は6基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1:23×21×29、柱2:31×23×31、柱3:26×17×29、柱4:25×24×37、柱5:38×30×35、柱6:24×24×27。

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

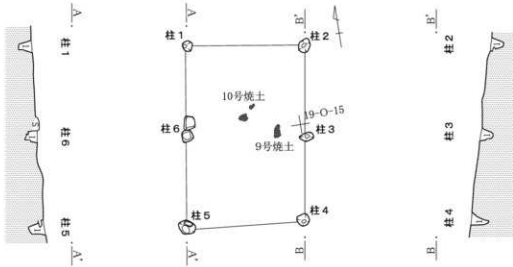
19区3号掘立柱建物(80図:PL21)

調査年度 平成15年度

位置 O-13・14、P-13

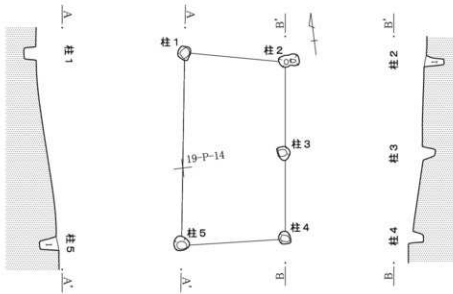
経過 調査は平成15年度に行われた。3号掘立柱建物は、調査段階では単独の土坑とされていた。

2号掘立柱建物



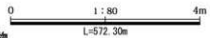
1、黒色土。しまり弱い。混入物少ない。炭化物少量含む。

3号掘立柱建物



1、黒色土。しまり弱い。混入物少ない。

1、黒色土。しまり弱い。混入物少ない。
炭化物少量含む。



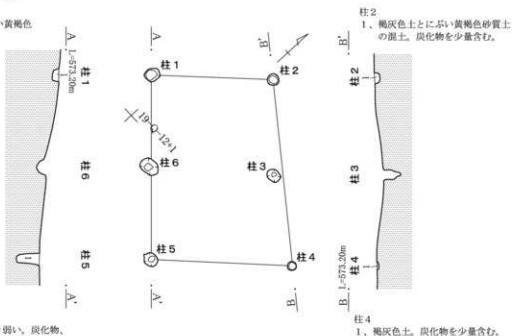
第80図 19区 2・3号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と道物

19区4号掘立柱建物

柱1

1、褐灰色土にぶい黄褐色砂質土の混土。



柱2

1、褐灰色土にぶい黄褐色砂質土の混土。炭化物を少量含む。

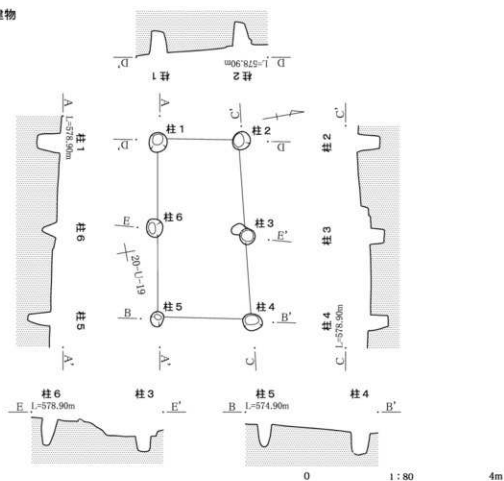
柱5

1、褐灰色土。しまり弱い、炭化物、暗褐色土ブロックを少量含む。

柱4

1、褐灰色土。炭化物を少量含む。

20区11号掘立柱建物



第81図 19区4・20区11号掘立柱建物跡

た。整理段階で新たに建物を認定し報告するものであり、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

重複 なし

形状 平面形状は長方形を呈する。ほぼ南北方向に長軸を持つ建物である。長軸方向や形状は、隣接する19区2号掘立柱建物に近似する。また長軸と短軸との柱穴間平均値がやや異なる建物である。

規模 長軸3.74～4.08m、短軸2.14～2.2m。柱穴間の平均値は、長軸187cm、短軸217cm。面積は約7.7㎡である。

方位 N-8°-E

柱穴 3号掘立柱建物に伴う柱穴は5基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：29×29×25、柱2：25×19×26、柱3：30×25×26、柱4：27×25×31、柱5：32×31×40。

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

19区4号掘立柱建物(81図)

調査年度 平成15年度

位置 O-12、P-11・12、Q-12

経過 調査は平成15年度に行われた。4号掘立柱建物は、調査段階では単独の土坑とされていた。整理段階で新たに建物を認定し報告するものであり、遺構写真などには混乱もみられるがご容赦願いたい。

重複 なし

形状 平面形状は、やや台形に近い長方形を呈する。北西から南東方向に長軸を持つ建物である。形状は、19区2・3号掘立柱建物に近似するが、長軸方向は異なる。また長軸と短軸との柱穴間平均値がやや異なる建物である。

規模 長軸3.9～3.96m、短軸2.58～2.98m。柱穴間の平均値は、長軸197cm、短軸278cm。面積は約10.9㎡である。

方位 N-47.5°-53.5°-W

柱穴 4号掘立柱建物に伴う柱穴は6基を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：33×28×14、柱2：25×25×13、柱3：30×24×36、柱4：19×19×6、柱5：33×27×48、柱6：42×30×20。

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区11号掘立柱建物(81図)

調査年度 平成11年度

位置 T・U-19

経過 調査は平成11年度に行われた。当初は5号掘立柱建物として番号を付され調査されたが、遺構番号に重複があったため、遺構番号を改め、11号掘立柱建物として報告する。

20区では、20区屋敷跡以外で中世以降の掘立柱建物は確認されていない。前述の通り、遺構検出が難しい本遺跡の特徴により確認できなかったことも考えられる。また11号掘立柱建物の時期は不明瞭であり、20区屋敷跡に関連する掘立柱建物かどうかは判然としない。

20区11号掘立柱建物と重複するように21号土坑が検出されている。「横壁中村遺跡(6)」で縄文時代後期と報告されているが、本掘立柱建物の一部である可能性も考えられる。

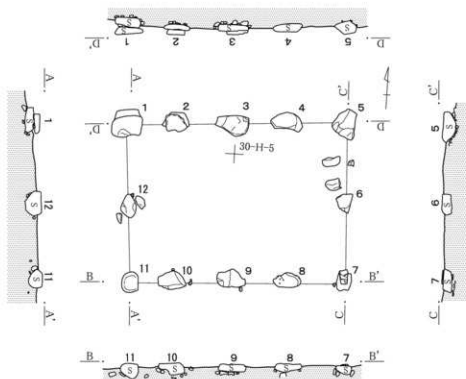
重複 20区21号土坑(縄文後期)と重複し、これを切るか。本掘立柱建物に伴う遺構の可能性も考えられる。

形状 平面形状は、長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物である。

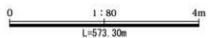
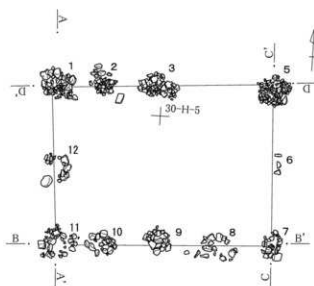
規模 長軸3.77～3.8m、短軸1.7～1.98m。柱穴間の平均値は、長軸189cm、短軸184cm。面積は約7.0㎡である。

方位 N-80°-84°-W

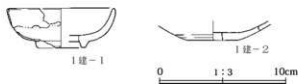
柱穴 20区11号掘立柱建物に伴う柱穴は6基



礎石下割栗石



第82図 30区 1号礎石建物



第83図 30区 1号礎石建物出土遺物

を数える。出土した柱穴の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：42×38×48、柱2：40×37×54、柱3：33×33×32、柱4：42×36×48、柱5：32×27×48、柱6：38×34×60。

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

3 礎石建物

横壁中村遺跡で出土した礎石建物は1棟のみである。30区で確認されており、さらに調査区北側、吾妻川よりで同様の遺構があった可能性も考えられる。

以下、30区1号礎石建物について報告する。

30区1号礎石建物(82・83図：PL22)

調査年度 平成9年度

位置 G・H-4・5

経過 調査は平成9年度に行われた。礎石は比較的規模が大きいものであった。調査所見がなく写真による判断ではあるが、礎石には明瞭な加工痕跡がみられなかった。礎石の一部には、板状に節理した「鉄平石」の使用も確認できた。

横壁中村遺跡で礎石建物は、本建物のみである。

重複 22号配石(縄文)、28(中世)・29(加曾利E1)・32(中世)号土坑と重複。22号配石、29号土坑を切る。28・32号土坑との切り合い関係は不明。

形状 平面形状は、長方形を呈する。ほぼ東西方向に長軸を持つ建物である。

規模 長軸4.79～5.16m。短軸3.67～3.73

m。礎石間の平均値は、長軸115cm、短軸175cm。面積は約20㎡である。

方位 N-85°-E

礎石 1号礎石建物に伴う礎石は12基を数える。出土した各礎石の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸、単位はcmである。礎石1：64×44、礎石2：41×35、礎石3：69×44、礎石4：67×35、礎石5：58×53、礎石6：40×32、礎石7：30×19、礎石8：60×31、礎石9：62×41、礎石10：56×37、礎石11：44×35、礎石12：50×33。

礎石の下からは、割栗石と思われる小型礫が多数検出された。

遺物 近世以降と思われる瀬戸・美濃系陶磁器が出土した。

時期 近世以降。礎石建物であることや出土遺物から、本建物を当該期に比定した。

4 竪穴遺構

本遺跡で中世の竪穴遺構と考えられる遺構は、既に「横壁中村遺跡(6)」の中で土坑として報告されている5基と、本報告の1基とを合わせて6基を数える。

竪穴遺構は、中世の主要な遺構のひとつと考えられている。本遺跡で確認された竪穴遺構は、20区屋敷跡あるいはその周辺で検出されており、20区北側と30区が中世の主要な地域であり、竪穴遺構の多くは20区屋敷跡に関連する遺構であるとも考えられる。

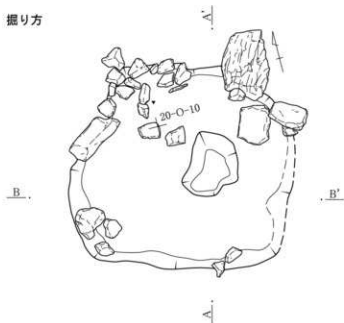
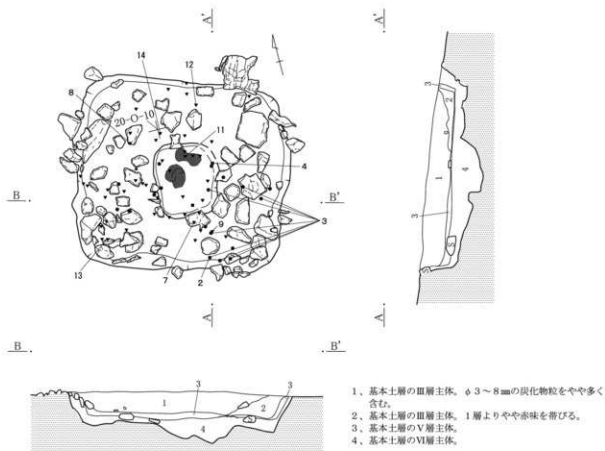
以下、20区1号竪穴遺構について報告する。

20区1号竪穴遺構(84～86図：PL23・24)

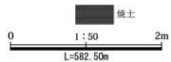
調査年度 平成16年度

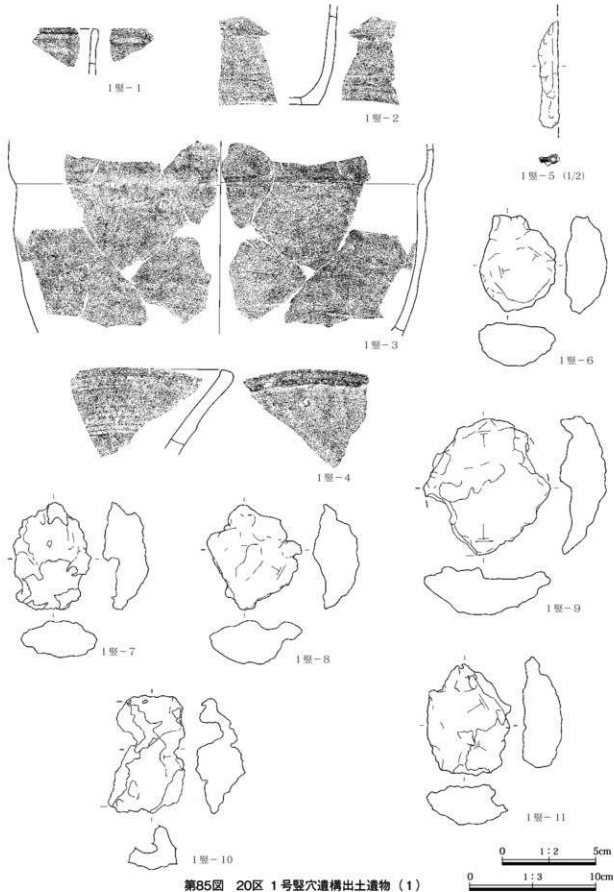
位置 N・O-9・10

経過 調査は平成16年度に行われた。遺構中央には方形の土坑状の掘り込みがあり、焼土が検出されている。鉄滓も出土しており、鍛冶や精錬など鉄に関連する遺構であった可能性もある。ただし、

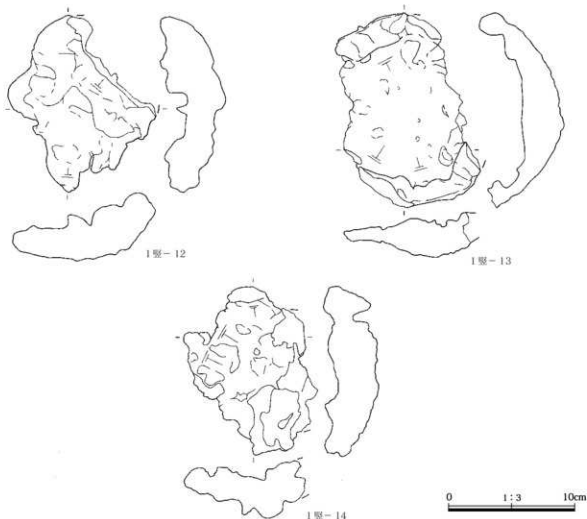


第84図 20区 1号竪穴遺構





第85図 20区 1号壙穴遺構出土遺物 (1)



第86図 20区 1号竪穴遺構出土遺物(2)

鍛造剥片や粒状滓が出土したかどうかは、調査段階での資料や所見がなく、その詳細は明らかでない。

本遺構の近隣からは、鉄滓が多く出土した遺構が検出されている。「横壁中村遺跡(6)」で報告された20区554号土坑では6点、245.7g、20区555号土坑では31点、4,015.6gの塊状滓を含む鉄滓が確認された。555号土坑からは内耳土器口縁部小破片もみられ、口縁部の特徴からも1号竪穴遺構と近似した時期と考えられる。竪穴遺構で行われていたであろう鍛冶の滓が廃棄された可能性も否定できない。また両土坑は、1・2号石囲い遺構と近接あるいは重複するようであった。石囲い遺構の時期は判然としないが、石囲い遺構や土坑が構築される際、鉄滓が混在した可能性もあるだろう。あるいは鉄に

係わる一連の遺構である可能性も考えられる。また、20区22号墓坑からも鉄滓が出土しており、同地域には多量の鉄滓があったことが確認できた。

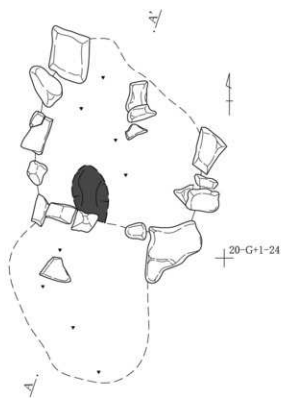
重複 20区119号住居(加曾利E3)、27・28号配石(ともに縄文)と重複。そのすべてを切る。

形状 平面形状は方形、断面形状は円筒状を呈する。遺構中央には、平面方形の土坑状の掘り込みがみられた。

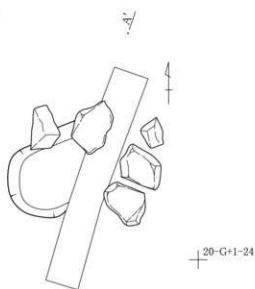
規模 長軸280cm、短軸254cm。深さは47cmであった。

方位 N-76°-W

遺物 在土器では、鉢1点と内耳土器片が出土した。塊状滓も多数出土している。また幼駒馬と推定された獣骨も出土した。



掘り方



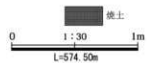
A.



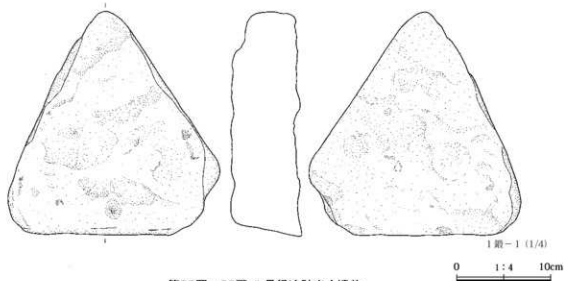
1、赤色土。やや粘性あり。上層1cm程は還元により灰色。表面には酸化した鉄分の沈着が見られる。



1号鍛冶跡 (東から)



第87図 20区 1号鍛冶跡



第88図 20区 1号鍛冶跡出土遺物

時期 中世。15世紀頃。出土遺物等から、本遺跡を当該期に比定した。

しているが、1号鍛冶跡と同地域の遺構との関連は明らかでない。

以下、20区1号鍛冶跡について報告する。

20区3号土坑

「横壁(6)」及び20区屋敷跡関連で報告。

20区1号鍛冶跡(87・88図：PL24・25)

調査年度 平11成年度

位置 G-23・24

20区28号土坑

「横壁(6)」及び20区屋敷跡関連で報告。

経過 調査は平成11年度に行われた。調査段階に、鍛造剥片や粒状滓が多く検出されており、また金床石が出土したことから鍛冶跡と認定した。遺存状態はあまり良好でなく、詳細な鍛冶の様相は不明。遺構中央には焼土を伴う落ち込みがみられた。鍛造剥片や粒状滓はこの焼土からも多く出土したことから、ここを炉とし、炉の周辺に見られる礫は炉の一部と判断された。遺構北側部分からも鍛造剥片や粒状滓が出土したことから、ここを作業場とする鍛冶とも考えられる。

20区32号土坑

「横壁(6)」及び20区屋敷跡関連で報告。

重複 20区164号土坑(加曾利E1)と重複し、これを切る。

20区33号土坑

「横壁(6)」及び20区屋敷跡関連で報告。

形状 平面形状は、不整円が二つ隣接した様な形状である。遺構中央には焼土を伴う落ち込みもみられた。

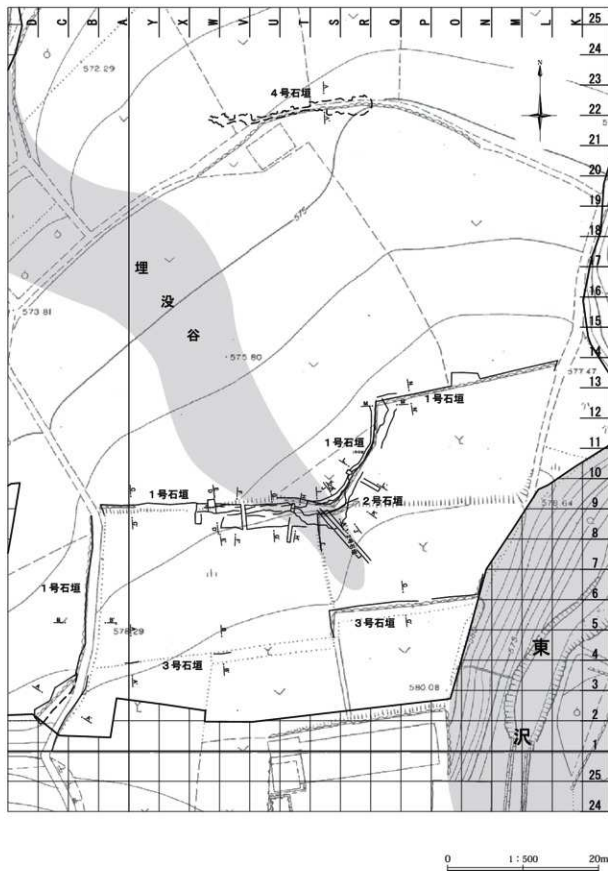
30区4号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

5 鍛冶跡

横壁中村遺跡で、鍛冶跡と確認できた遺構は20区1号鍛冶跡のみである。遺存状態はあまり良好ではないが、鍛造剥片や粒状滓が多く出土しており、鍛冶を行っていた遺構と考えて良いだろう。また、原位置を保っていないようだが金床石も出土しており、その傍証になるものと考えている。前述の通り、20区中央付近では遺構から多くの鉄滓が出土

規模 長軸は290cmほど、短軸は160cmほどか。深さは約20cmと浅い。

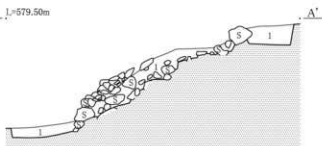
遺物 出土状況から原位置を保っていないと思



第89図 18区 1～4号石垣

第3章 発見された遺構と道物

A L=579.50m



A・B

1、暗褐色土。しまり、粘性ともにあり。φ5cm程の黒褐色石粒を少量含む。

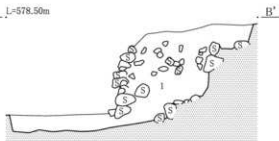
C

1、暗褐色土。しまり、粘性ともにややあり。φ5cm程の黒褐色石粒を少量含む。
2、褐色土。明褐色土を少量含む。

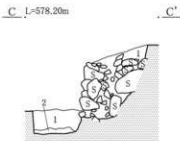
D

1、暗褐色土。しまり、粘性ともにあり。φ5~10mmの灰白色軽石を少量含む。

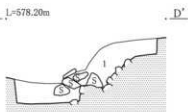
B L=578.50m



C L=578.20m



D L=578.20m



E L=578.20m



F L=578.20m



G L=578.20m



H L=578.20m



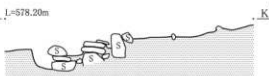
I L=578.20m



J L=578.20m



K L=578.20m



0 1:80 4m

第90図 18区 1号石垣(1)



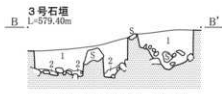
- 1、黒褐色土。しまりなし。粘性なし。φ5mm程の灰白色軽石を少量含む。
- 2、暗褐色土。1層よりも粘性あり。
- 3、褐色土。明褐色土を少量含む。



- 1、褐色土。しまりなし。粘性なし。φ5mm程の灰白色軽石を少量含む。
- 2、黄褐色土。1層よりも、しまり、粘性ともにあり。
- 3、暗褐色土。しまりあり。粘性あり。φ5～8mmの灰白色軽石をわずかに含む。
- 4、褐色土。明褐色土粒を少量含む。



- 1、暗褐色土。しまり、粘性ややあり。φ3cm程の礫を少量含む。



- 1、暗褐色土。しまりあり。粘性あり。φ5cm程の礫を少量含む。
- 2、褐色土。1層よりも、しまり、粘性ともにあり。明黄褐色土を少量含む。

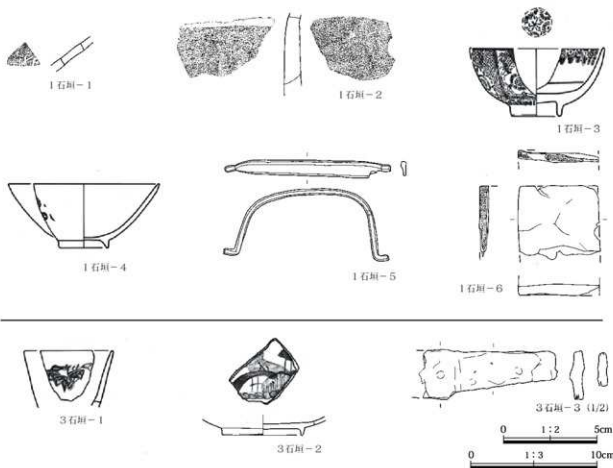


- 1、明黄褐色土。φ8cm程の礫を少量含む。
- 2、黒褐色土。φ5cm程の礫を少量含む。
- 3、褐色土。明黄褐色土を少量含む。



0 1:80 4m

第91図 18区 1 (2) ・ 2～4号石垣



第92図 18区 1・3号石垣出土遺物

われるが、金床石と思われる遺物が出土した。金床石には、鍛造剥片と思われる付着物や打痕の様な痕跡もみられた。本遺構からは、鍛造剥片や粒状滓が多く出土した。鍛造剥片は91.2g、粒状滓は7gであった。また小さな鉄滓が数点、42.5g、微細な鍛造剥片や砂鉄が485g出土した。鍛造剥片や粒状滓の出土位置については、調査段階での詳細な資料がなく不明。

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

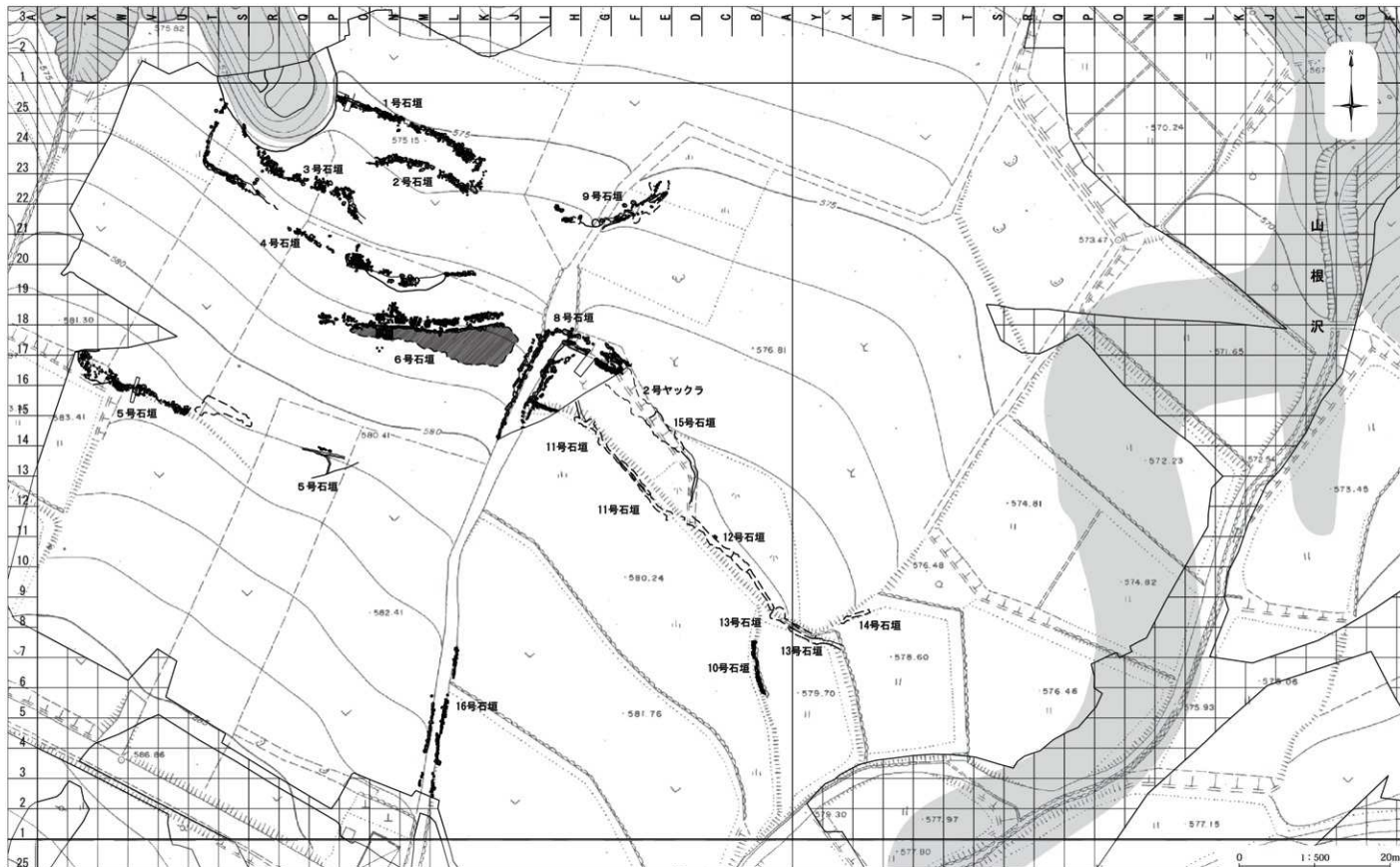
6 石垣

横壁中村遺跡は、吾妻川右岸の第一河岸段丘上に位置し、およそ吾妻川に向かって緩やかに傾斜する地形上にある。石垣は傾斜地を削平し、あるいは整地した結果築かれたものと思われ、遺跡の広範囲で数多く検出されている。これは近隣の遺跡にもみら

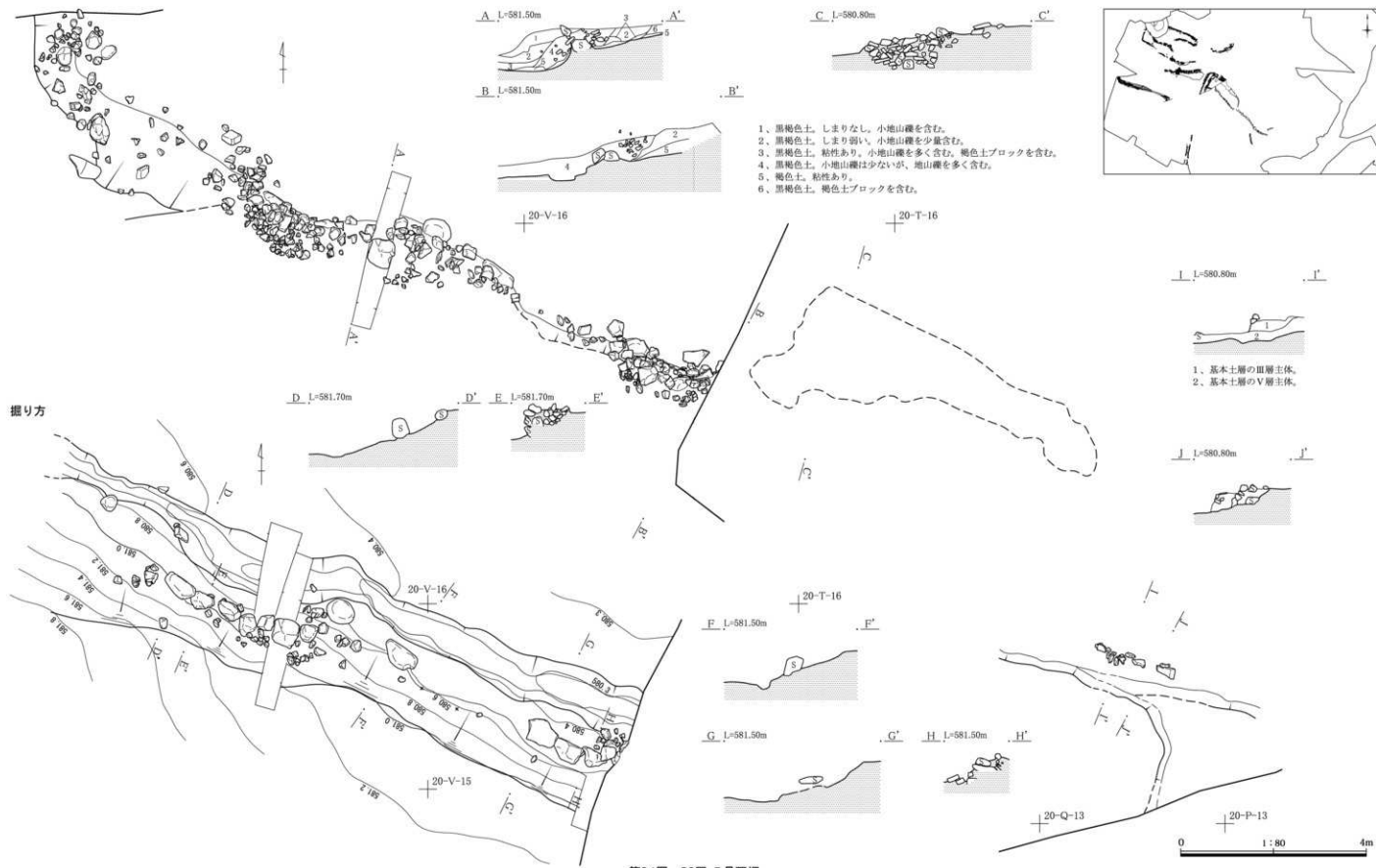
れ、石垣を多用するのは八ッ場地域の特徴とも考えられる。また石垣と発掘調査前の現況図とを重ねると、地形に沿うように、あるいは地境に沿うように石垣が検出されていることも確認できた。ここで報告する石垣は、20区屋敷跡で紹介した4箇所の石垣を除く18区の4箇所、20区の11箇所である。また19区1箇所、28区1箇所の列石についても石垣の可能性が高いとしてここで報告する。

報告する17箇所の石垣は広範囲に及ぶため、詳細な平面図がないものも多い。遺構名所の付け方も不統一であり、どこまでを同一の石垣とすべきか再考も必要と思うが、前述の通り調査段階の呼称を優先して報告したい。出土遺物から考えると、中世まで遡る石垣や長い期間手を加えられた石垣もあるが、比較的新しい石垣も含まれていると思われる。詳細については、各遺構ごとに詳述したい。

以下、区に分け各石垣ごとに報告する。



第93図 20区 1～6・8～16号石壇



第94図 20区 5号石垣

18区1号石垣(89～92図：PL25～27)

調査年度 平成14年度

位置 8区X-21、9区B-21・22・24・25、C-25、D～F-19、18区K～N-13、O-12・13、P-12、Q-11・12、R-8～11、S-8・9、T～W-8・9、X・Y-9、19区A-8・9、B-2～8、C-1～3、D-2

経過 調査は平成14年度に行われた。1号石垣の範囲は広いが、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、一連の石垣と考えて良いであろう。また地境に沿うような形態であることから、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だと考えられる。

重複 18区152・212・220号土坑(ともに縄文)、3号掘立柱建物(堀之内1)と重複し、すべてを切る。

形状 直線状の石垣が複数箇所で見られる。発掘調査前の地境に沿うような、大規模な石垣である。

規模 複数箇所に分かれた大規模な石垣であり、規模はおおよそであるが、東西63.5m、南北60.2mほどであった。南北方向は、北側の8・9区まで29mほど延びている。段数は調査段階の資料が少なく不明瞭だが、高さが2mを越える部分もみられた。写真から判断しても、複数段を持つ比較的高い石垣を含んでいると考えている。

遺物 古瀬戸後期即血や内耳土器の小破片、近世以降の陶磁器、石製品、鉄製の把手が出土した。出土遺物の時期幅は広く、1号石垣が長い期間利用されていた可能性もあるだろうが、中世遺物は混在したものと考えている。

時期 近世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

18区2号石垣(89・91図：PL26)

調査年度 平成14年度

位置 R-9、S-7～9

経過 調査は平成14年度に行われた。18区1号石垣に隣接しており、1号石垣の一部とも考えられる。また発掘調査前の現況図と重ねると、1号石垣と同様に、地境に沿うような形態であった。

重複 なし

形状 直線状の石垣で、ほぼ直角に屈曲する。

規模 長さ8.7mほど。段数は調査段階の資料が少なく不明瞭だが、56cmほどの高さまで測れる部分もあり、複数段を持つ石垣と考えられる。

遺物 なし

時期 近世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。18区1号石垣に隣接することからも本遺構を当該期に比定した。

18区3号石垣(89・91・92図：PL27)

調査年度 平成14年度

位置 18区N・O-6、P～R-5、S-4・5、V・W-4、Y-3、19区A-3

経過 調査は平成14年度に行われた。4箇所を渡る石垣であり、出土範囲は広い。発掘調査前の現況図と重ねると、地境に沿うように検出されており、一連の石垣と考えて良いであろう。また地境に沿うような形態であることから、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だと考えられる。

重複 なし

形状 4箇所を渡る石垣。直線状の石垣と屈曲する石垣がみられた。

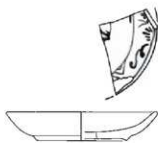
規模 複数箇所に分かれた大規模な石垣であり、規模はおおよそであるが、長さ48.8mほど。段数は調査段階の資料が少なく不明瞭だが、断面図では1mほどの高さまで測れる部分もあった。

遺物 染付皿や猪口、小刀のような金属製品が出土した。染付皿と猪口は、やや時期は異なるものの近世所産と考えている。

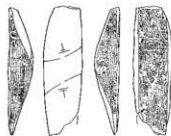
時期 近世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。



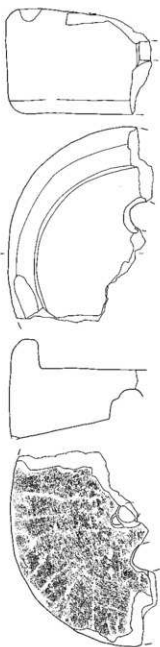
5石組-1



5石組-2

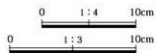


5石組-3

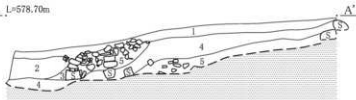


5石組-4 (1/4)

第95図 20区 5号石垣出土遺物



A L=578.70m



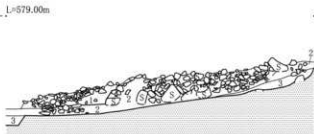
- 1、暗褐色土。基本土層のII層。
- 2、暗褐色土。やや砂質。炭化物、焼土、褐色軽石を含む。
- 3、黒色土。炭化物、焼土を含む。
- 4、黒色土。やや粘性あり。炭化物、焼土を含む。基本土層のIII層主体。
- 5、黒褐色土。さらさらしている。炭化物、焼土を少量含む。

B L=578.30m



- 1、暗褐色土。やや砂質。浅間A軽石？、炭化物、焼土を含む。
- 2、黒色土。固くしまる。炭化物、焼土を含む。
- 3、黒褐色土。ややしまりなし。炭化物、焼土を含む。
- 4、黒色土。ややしまりなし。炭化物、焼土を含む。微かな骨片をわずかに含む。

C L=579.00m



- 1、黒褐色土。ふかふかしている。浅間A軽石？、焼土、炭化物を含む。
- 2、暗褐色土。ふかふかしている。微細の褐色軽石、白色軽石を少量含む。
- 3、黒色土。炭化物、焼土を含む。

0 1:80 4m

第97図 20区 6号石垣 (2)

18区4号石垣(89・91図:PL28)

調査年度 平成14年度

位置 Q-22、R-21・22、S-22、T~V-21・22、W-21

経過 調査は平成14年度に行われた。4号石垣は発掘調査前の現況図と重ねると、地境に沿うように検出された。また地境に沿うような形態であることから、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だと考えられる。

重複 18区13号土器埋設遺構(堀之内1)と重複し、これを切る。

形状 ほぼ直線状の石垣。調査段階の資料が少なく詳細は不明。

規模 長さ21.7mほど。段数は調査段階の資料が少なく不明瞭だが、断面図では56cmほどの高さま

で測れる部分もあり、複数段を持つ石垣と考えられる。

遺物 なし

時期 近世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から本遺構を当該期に比定した。

20区1号石垣

20区屋敷跡関連で報告。

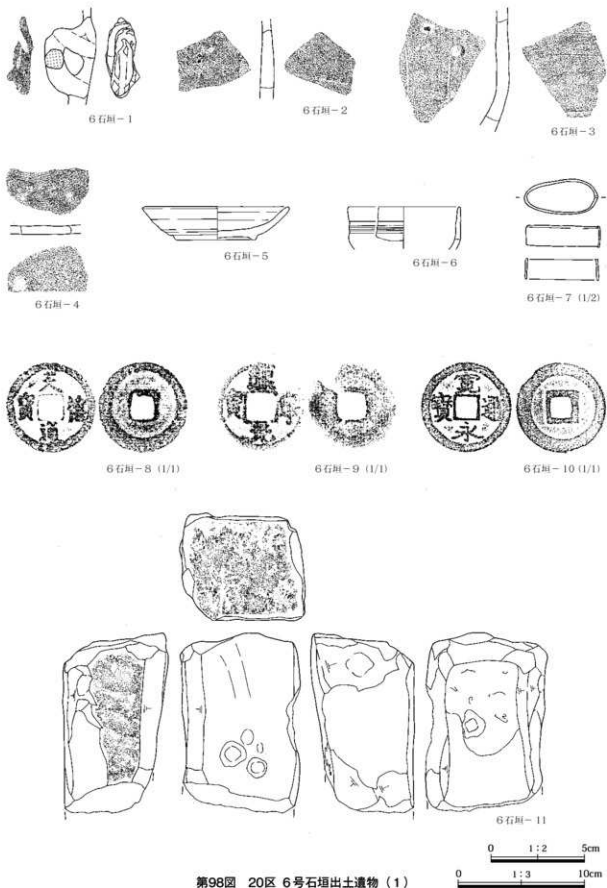
20区2号石垣

20区屋敷跡関連で報告。

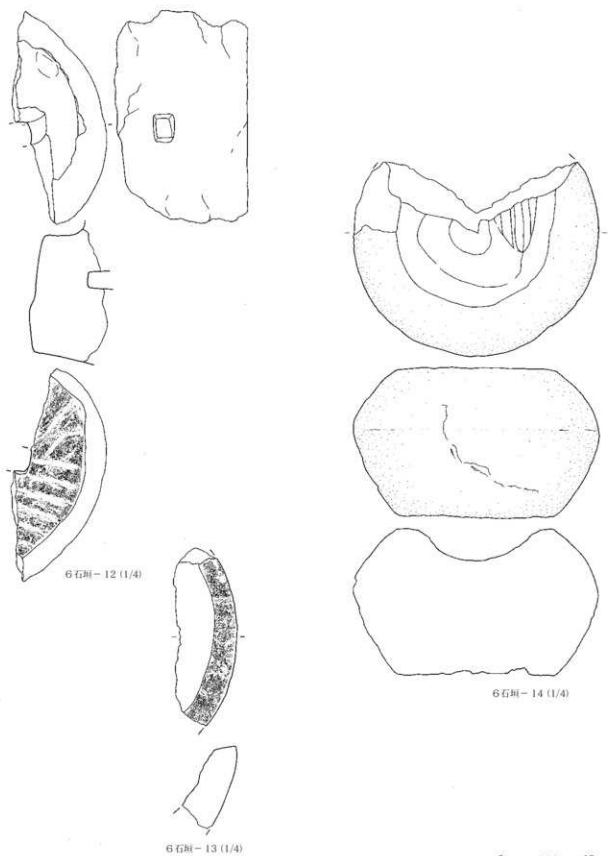
20区3号石垣

20区屋敷跡関連で報告。

第3章 発見された遺構と遺物



第98図 20区 6号石垣出土遺物 (1)



第99図 20区 6号石垣出土遺物 (2)

20区4号石垣

20区屋敷跡関連で報告。

20区5号石垣(93～95図：PL28)

調査年度 平成12年度

位置 O-13、P-13・14、Q-13、R-14、S-14・15、T-15、U-14・15、V・W-15・16、X-15～17

経過 調査は平成12年度に行われた。20区屋敷跡の近くにある石垣であり、屋敷跡と関連する石垣の可能性も考えられるが、発掘調査前の現況図と重ねると、地境に沿うように検出されている部分もあり、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。

重複 なし

形状 ほぼ直線状の石垣。二箇所に分かれている石垣である。

規模 長さ38.9mほど。段数は調査段階の資料が少なく不明瞭だが、断面図では1mほどの高さまで測れる部分もあり、複数段を持つ石垣と考えられる。

遺物 内耳土器片や瀬戸・美濃系陶器、粉挽き形の上白、砥石などが出土した。出土土器の時期幅はやや広い。

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。20区屋敷跡に近く、出土遺物等から本遺構を当該期に比定した。

20区6号石垣(93・96～99図：PL28～30)

調査年度 平成12年度

位置 J～L-16～18、M～P-17・18

経過 調査は平成12年度に行われた。遺存状態が良好な石垣である。20区4号石垣と一部並行するようであり、20区屋敷跡に近接することや、屋敷跡出土の遺物と接合関係がみられたことから、屋敷跡と関連する石垣の可能性も考えられる。

重複 20区40(堀之内1)・44(加曾利E4)・47(堀之内1)号住居、235(縄文)・308・309(と

もに中世以降)・327・354・355・359・361・374～377(ともに縄文)号土坑と重複し、すべてを切る。

形状 ほぼ直線状の石垣で、裏込め部分の遺存状態も良好。比較的広い範囲で裏込めが確認できた。石垣の北側、前面にも礎が多くみられたが、石垣との関わりについては調査所見もなく判然としない。

規模 長さ26.8mほど。遺存状態の良好なところでは1mほどの高さまで測れる部分もあった。図面では4段ほどの段数を持つ箇所もみられた。

遺物 信濃型内耳土器片、大室4後半の志野皿、刀の鞘に付く鏝口?、渡来銭や砥石などが出土した。また、寛永通寶や近世陶磁器も出土した。出土遺物の時期幅は広いが、内耳土器片や刀の一部などは、20区屋敷跡に関連する遺物かもしれない。

また、6号石垣で出土した茶臼と20区屋敷跡で出土した茶臼が接合した(屋敷No.92)。本石垣と屋敷跡とに関連があるのか、屋敷跡を壊して築かれた石垣なのかは不明。成体のニホンジカと推定された獣骨も出土した。

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。20区屋敷跡に近く、出土遺物等から本遺構を当該期に比定した。

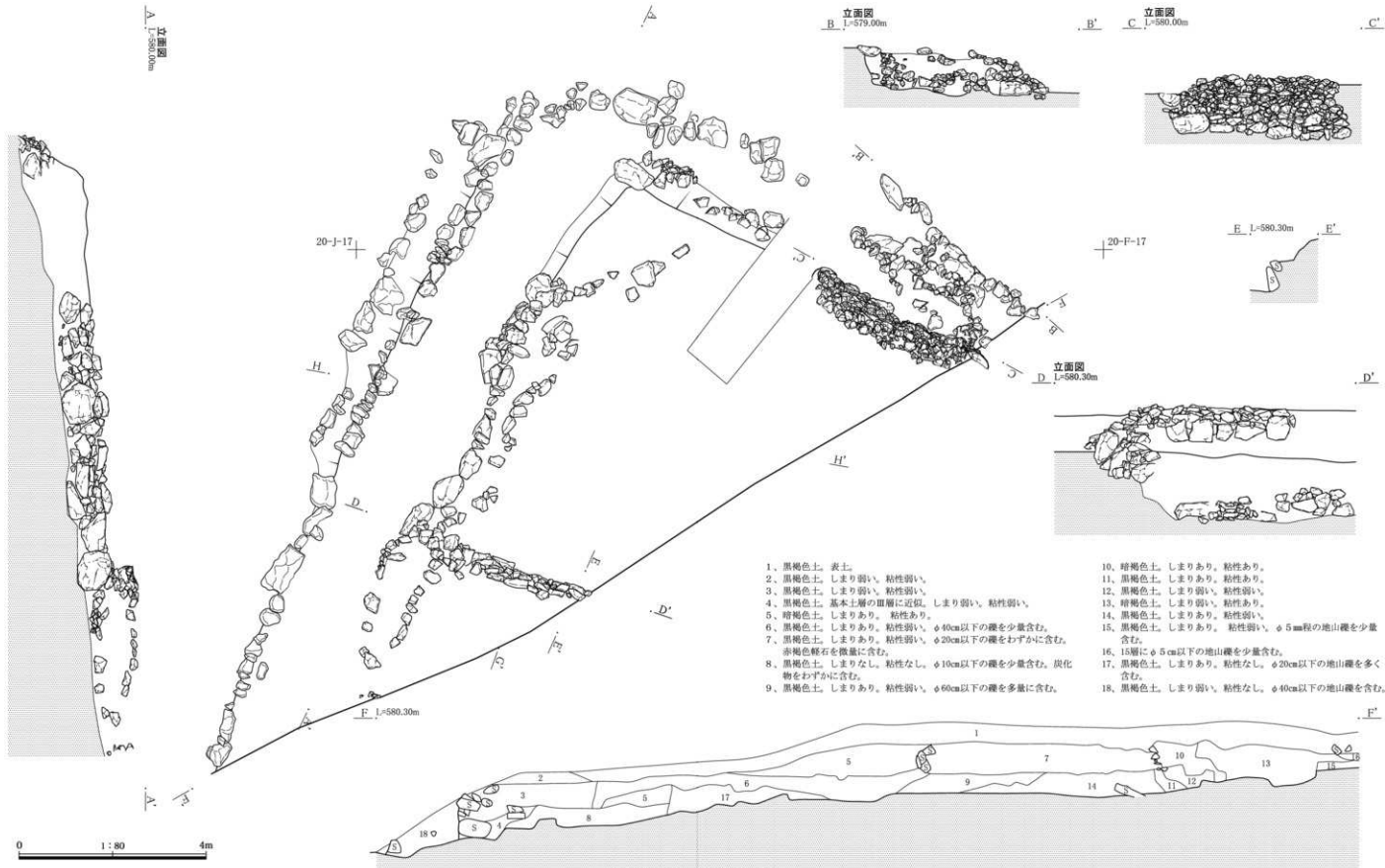
20区8号石垣(93・100～102図：PL30)

調査年度 平成13年度

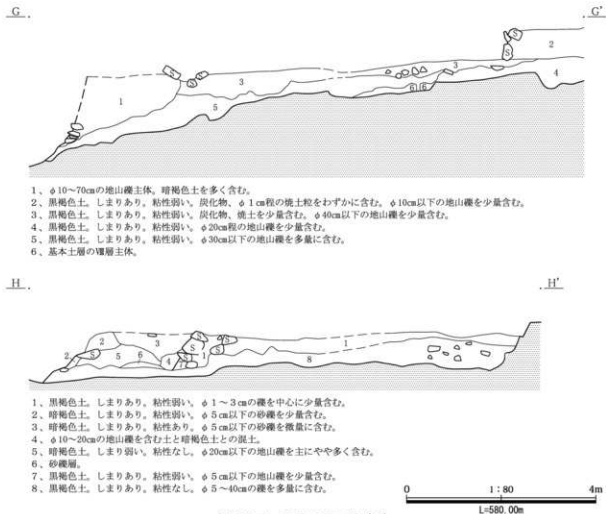
位置 F・G-16・17、H-15～17、I-14～17、J-14～16

経過 調査は平成13年度に行われた。8号石垣は発掘調査前の現況図と重ねると、地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。また本石垣と20区9～15号石垣は連続するようであり、一連の石垣である可能性も考えられる。

重複 20区72・73(加曾利E3)号住居、373(縄文)・411(中世以降)号土坑、1号ヤックラ(中世以降)と重複。72・73号住居、373号土坑



1. 黒褐色土。表土。
2. 黒褐色土。しまり弱い。粘性弱い。
3. 黒褐色土。しまり弱い。粘性弱い。
4. 黒褐色土。基本土層の層に近附。しまり弱い。粘性弱い。
5. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり。
6. 黒褐色土。しまりあり。粘性弱い。φ40cm以下の礫を少量含む。
7. 黒褐色土。しまりあり。粘性弱い。φ20cm以下の礫をわずかに含む。赤褐色軽石を微量に含む。
8. 黒褐色土。しまりなし。粘性なし。φ10cm以下の礫を少量含む。炭化物をわずかに含む。
9. 黒褐色土。しまりあり。粘性弱い。φ60cm以下の礫を多量に含む。
10. 暗褐色土。しまりあり。粘性あり。
11. 黒褐色土。しまりあり。粘性あり。
12. 黒褐色土。しまり弱い。粘性弱い。
13. 暗褐色土。しまり弱い。粘性あり。
14. 黒褐色土。しまりあり。粘性弱い。
15. 黒褐色土。しまりあり。粘性弱い。φ5mm程度の地山礫を少量含む。
16. 15層にφ5cm以下の地山礫を少量含む。
17. 黒褐色土。しまりあり。粘性なし。φ20cm以下の地山礫を多く含む。
18. 黒褐色土。しまり弱い。粘性なし。φ40cm以下の地山礫を含む。



第101図 20区 8号石垣 (2)

を切るも、その他の切り合い関係は不明。

形状 平面形状は、直角に屈曲する石垣である。石垣には段があり、石垣の一部では比較的高く礫を積み上げていた。

規模 東西の長さは11.2mほど、南北の長さは16mほど。遺存状態の良い部分では2.8mほどの高さまで測れた。石垣は複数段あり、石垣下部では大型の礫が横長に据えられていた。石垣上部に向けて小型の礫を使用しているため、10段ほどの段数を数える箇所もみられた。

遺物 青磁碗BⅠ類、信濃型内耳土器片が出土した。近世以降の陶磁器のほかにも、砥石、石鉢、粉挽き形の石臼や煙管などもみられた。出土した遺物は多様で、時期幅も広い。成体のニホンジカと推定された獣骨も出土した。

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区 9号石垣(93・103図：PL30)

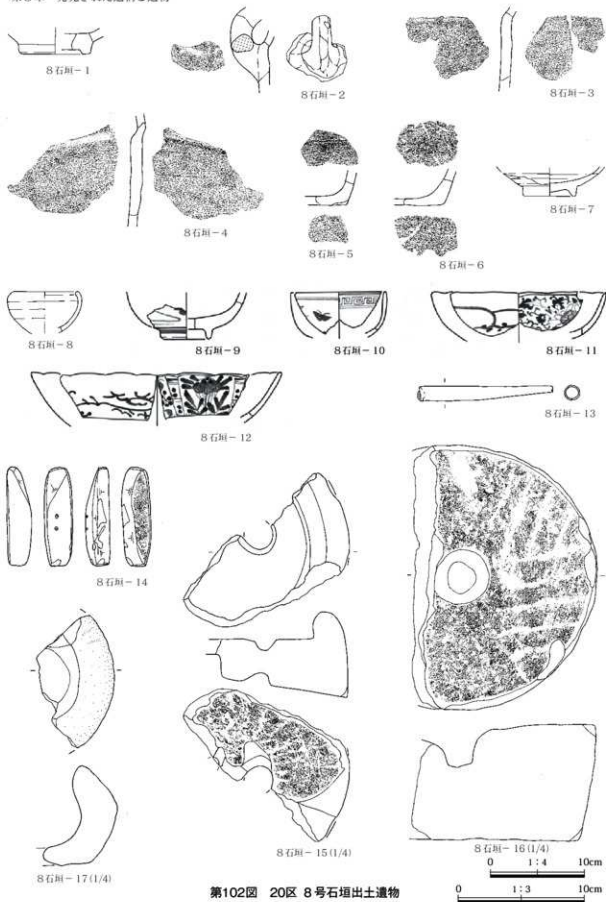
調査年度 平成13年度

位置 E-19・20、F~H-18・19

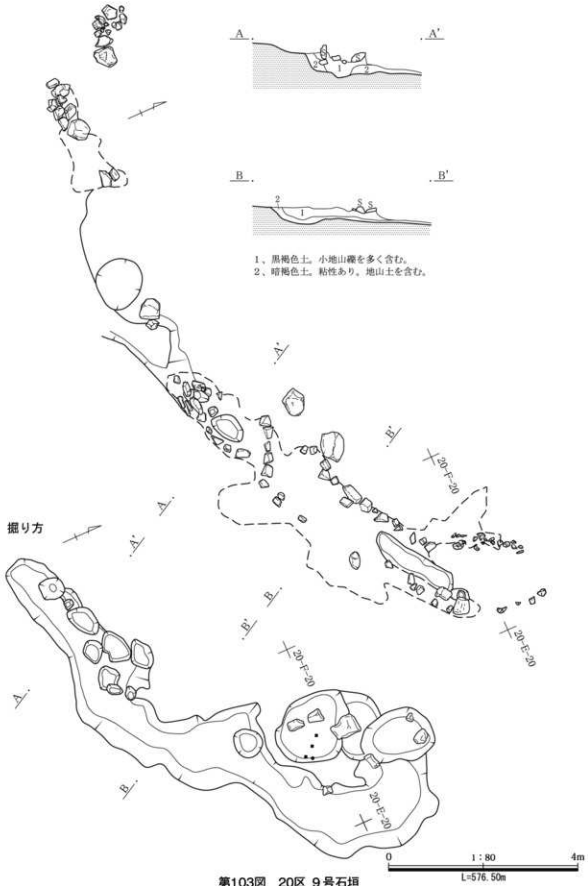
経過 調査は平成13年度に行われた。調査段階の資料が少なく、詳細は不明。発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿わない石垣である。遺存状態が悪く詳細は分からないが、古い段階まで遡る石垣か、あるいは他の遺構の痕跡である可能性も考えられる。やや離れるが、20区屋敷跡1・2号石垣との関連も考えられる。

重複 20区382・383・429・430 (ともに

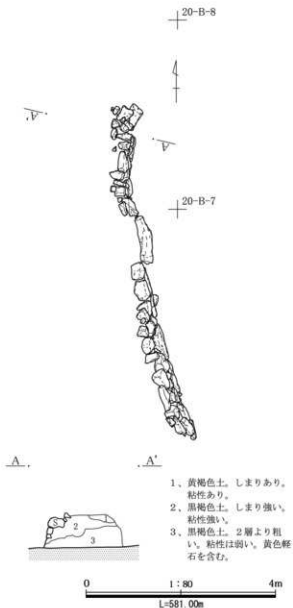
第3章 発見された遺構と遺物



第102図 20区 8号石垣出土遺物



第103図 20区 9号石垣



第104図 20区 10号石垣

縄文)・432・433 (ともに中世以降)、19号焼土遺構(中世以降)、17号墓坑(縄文)、1号ヤックラ(中世以降)、2・7号竪立柱建物(縄文)と重複。382・383・429・430号土坑、17号墓坑、2・7号竪立柱建物を切るも、その他の遺構との切り合い関係は不明。

形状 遺存状態は悪く形状は不明瞭だが、緩やかな弧状を描く石垣である。

規模 遺存状態が悪く、規模はおよそである。長さは15.6mまで測れた。段数は調査段階での資

料が少なく不明瞭だが、断面図では70cmほどの高さまで測れる部分もあった。複数段あると思われるが、遺存状態が悪く判然としない。

遺物 なし

時期 中世以降。遺物もなく、石垣という遺構の特徴から考えても時期を特定することは難しい。

20区10号石垣(93・104図：PL31)

調査年度 平成15年度

位置 A-5・6、B-5~7

経過 調査は平成15年度に行われた。10号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。

重複 20区90号住居(9世紀後半)と重複し、これを切る。

形状 石垣の一部と思われるため、形状はおよそである。小規模だが直線状の石垣。

規模 長さは7.3mまで測れた。段数については、調査段階での資料が少なく不明。断面図では74cmほどの高さまで測れる部分もあった。小型の礫もあるが段数は3段ほどか。

遺物 なし

時期 中世以降。遺物もなく、石垣という遺構の特徴から考えても時期を特定することは難しい。

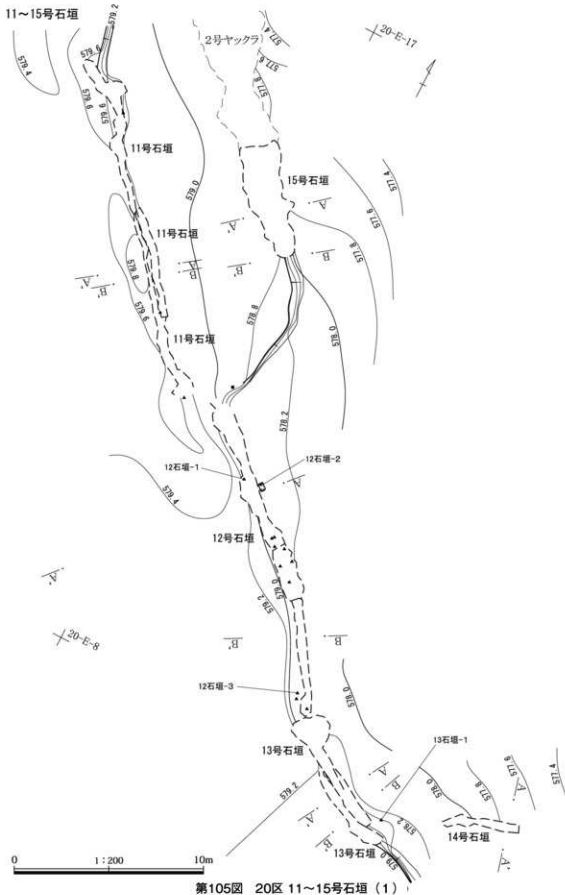
20区11号石垣(93・105・106図：PL31・32)

調査年度 平成15年度

位置 D-11、E-11・12、F-12・13、G・H-14

経過 調査は平成15年度に行われた。11号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。また本石垣と20区8~10・12~15号石垣は、連続する石垣のようにもみえる。

重複 20区88号住居(加曾利E 3)、484・485・487 (ともに縄文)・491 (中世以降)・504



第105図 20区 11~15号石垣 (1)

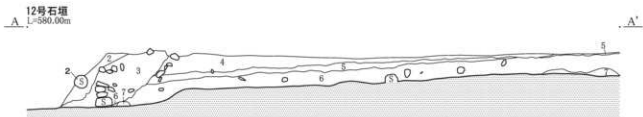
第3章 発見された遺構と道物



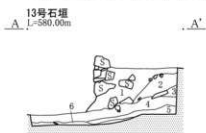
- 11号石垣A
1、茶褐色土。しまりあり。
2、黒褐色土。しまりあり。粘性強い。
3、黒褐色土。しまりあり。粘性なし。
4、黒褐色土。しまりあり。やや粘性あり。



- 11号石垣B
1、茶褐色土。しまりあり。



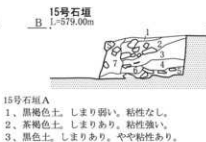
- 12号石垣A・B
1、茶褐色土。しまりあり。やや粘性あり。φ1~3mmの軽石を含む。
2、茶褐色土。しまりあり。粘性なし。1層より暗い色調。
3、黒褐色土。しまりあり。粘性あり。
4、黒褐色土。しまりあり。やや粘性あり。
5、黒褐色土。やや砂質。しまりあり。
6、黒褐色土。しまりあり。粘性が強い。
7、黒褐色土。粘性がとても強い。白色軽石を含む。



- 13号石垣A
1、茶褐色土。粘性あり。φ1~2mmの軽石を含む。
2、茶褐色土。しまりあり。やや粘性あり。1層よりも暗い色調。
3、黒褐色土。しまりあり。粘性なし。
4、茶褐色土。しまりあり。粘性あり。
5、暗褐色土。粘性あり。小地山礫を含む。
6、黒色土。粘性なし。



- 14号石垣A
1、赤褐色土。しまりあり。粘性なし。鉄分の沈着あり。
2、茶褐色土。しまりあり。粘性あり。
3、茶褐色土。しまりあり。やや粘性あり。
4、暗褐色土。しまりあり。粘性あり。小地山礫を多く含む。
5、黒褐色土。しまりあり。粘性なし。

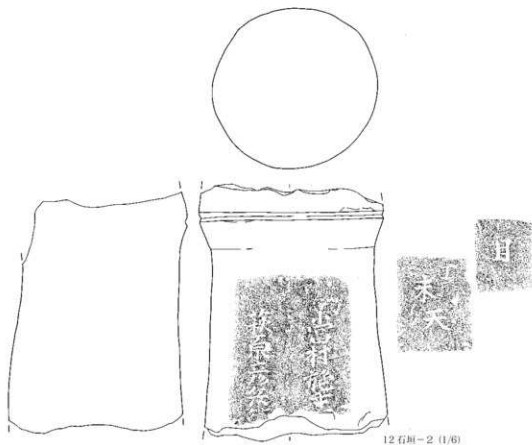
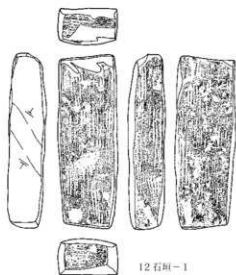


- 15号石垣A
1、黒褐色土。しまり弱い。粘性なし。
2、茶褐色土。しまりあり。粘性強い。
3、黒色土。しまりあり。やや粘性あり。

- 15号石垣B
1、黒褐色土。
2、茶褐色土。
3、黒褐色土。
4、3層よりやや褐色が強い。
5、黒色土。
6、4層に近似。しまり弱い。
7、茶褐色土。

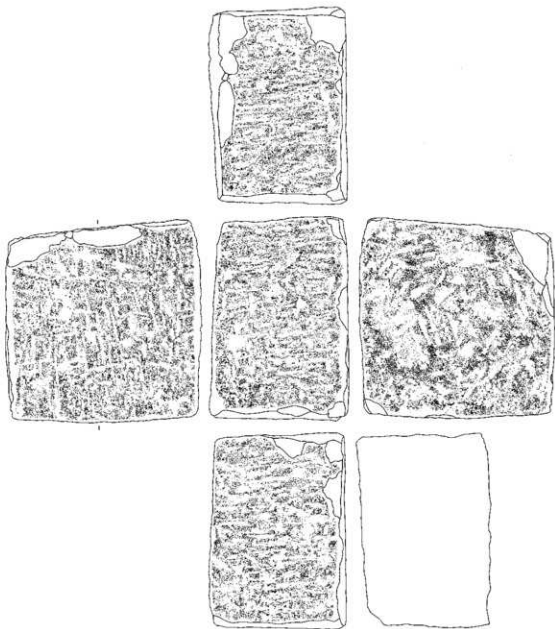
0 1:80 4m

第106図 20区 11~15号石垣 (2)



第107図 20区12号石垣出土遺物(1)

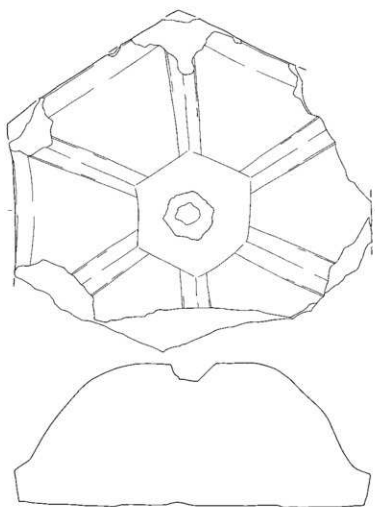
0 1:3 10cm



12石版-3 (1/4)

0 1:4 10cm

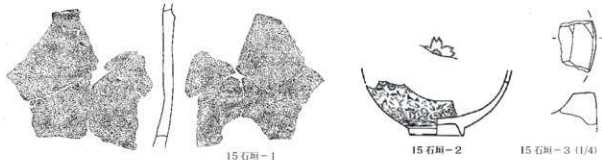
第108図 20区12号石垣出土遺物(2)



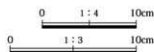
13石垣-1 (1/6)



第109図 20区 13号石垣出土遺物



石垣-1 (1/1)



第110図 20区15号石垣・石垣出土遺物

(縄文)号土坑と重複し、88号住居、484・485・487・504号土坑を切るも、491号土坑との切り合い関係は不明。

形状 ほぼ直線状の石垣。

規模 長さは18.3mまで測れた。段数は調査段階での資料が少なく不明瞭だが、断面図では90cmほどの高さまで測れる部分もあった。

遺物 なし

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。

20区12号石垣(93・105～108図：PL31・32)

調査年度 平成15年度

位置 A-8・9、B-9・10、C-10・11、D-11

経過 調査は平成15年度に行われた。12号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。また本石垣と20区8～11・13～15号石垣は、連続する石垣のようにもみえる。

重複 20区96・104号住居(加曾利E3)と重複し、これを切る。

形状 ほぼ直線状の石垣。

規模 長さは17.2mまで測れた。段数は調査段階での資料が少なく不明瞭だが、断面図では1.3mほどの高さまで測れる部分もあった。

遺物 砥石や一部欠損した石塔が出土した。成体のウマと推定された獣骨も出土した。

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区13号石垣(93・105・106・109図：PL31・32)

調査年度 平成15年度

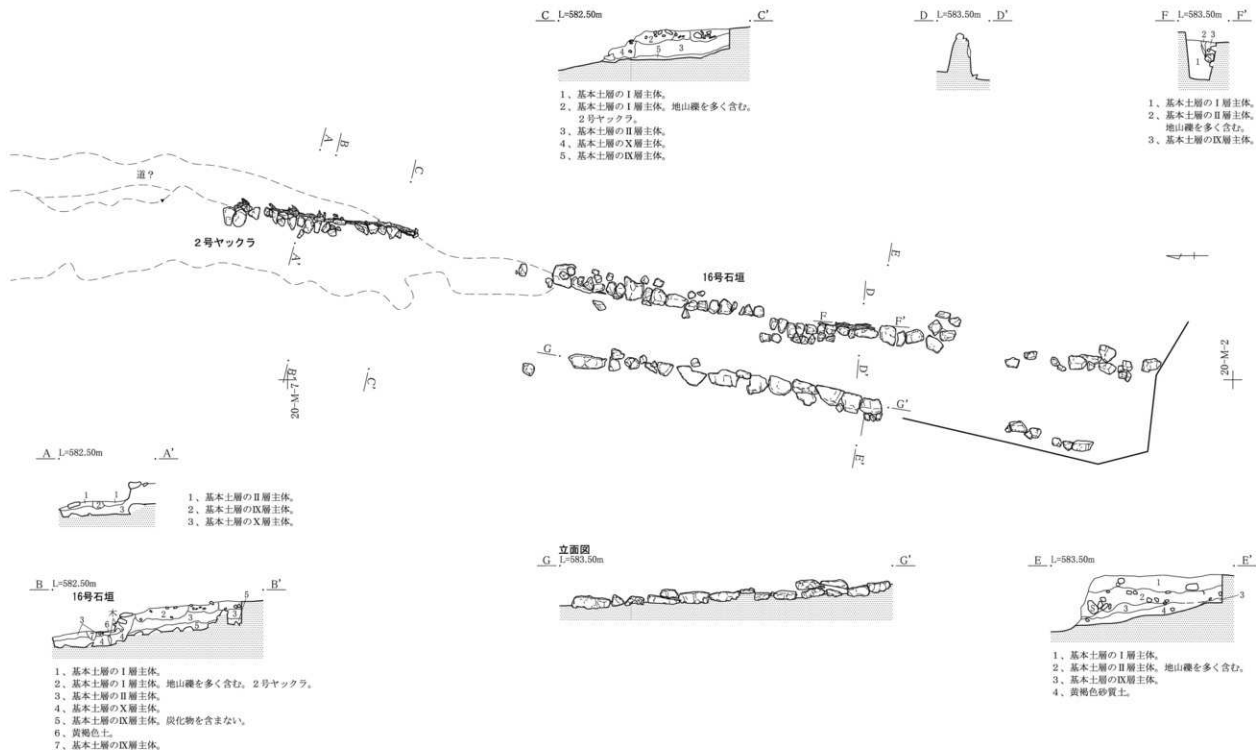
位置 19区Y-7・8、20区A-7・8

経過 調査は平成15年度に行われた。13号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。また本石垣と20区8～12・14・15号石垣は、連続する石垣のようにもみえる。

重複 なし

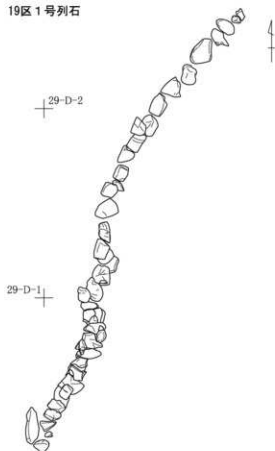
形状 ほぼ直線状の石垣。

規模 長さは7.7mまで測れた。段数は調査段階での資料が少なく不明瞭だが、断面図では1.2mほどの高さまで測れる部分もあった。

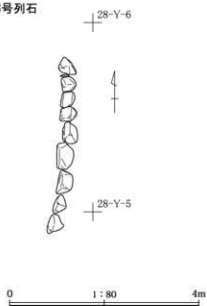


第111図 20区 16号石塚、2号ヤツクラ

19区1号列石



28区13号列石



第112図 19区1号列石、28区13号列石

遺物 一部欠損した石塔が出土。石垣に利用されていたと思われる。

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区14号石垣(93・105・106図：PL31・32)

調査年度 平成15年度

位置 19区W・X-8

経過 調査は平成15年度に行われた。14号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。また本石垣と20区8～13・15号石垣は、連続する石垣のようにもみえる。

重複 なし

形状 ほぼ直線状の石垣。

規模 長さ4.2mほど。段数は調査段階での資料が少なく不明瞭だが、断面図では70cmほどの高さまで測れる部分もあった。

遺物 なし

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。

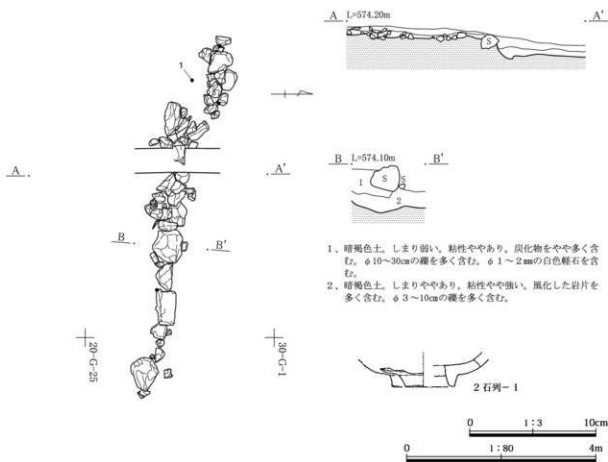
20区15号石垣(93・105・106・110図：PL31・33)

調査年度 平成15年度

位置 D-13・14、E-13～15

経過 調査は平成15年度に行われた。15号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うように検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。また本石垣と20区8～14号石垣は、連続するようにもみえる。

重複 20区501号土坑(縄文)と重複し、これ



第113図 20区 2号石列、2号石列出土遺物

を切る。

形状 ほぼ直線状の石垣。

規模 長さ6.4mほど。段数は調査段階での資料が少なく不明瞭だが、断面図では1.6mほどの高さまで測れる部分もあった。

遺物 内耳土器片や近世以降の陶磁器が出土した。出土遺物の時期幅は広い。

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区16号石垣(93・111図：PL33)

調査年度 平成16年度

位置 L-3～7、M-3・4

経過 調査は平成16年度に行われた。16号石垣は、発掘調査前の現況図と重ねると地境に沿うよ

うに検出されており、比較的新しい段階まで使用されていた石垣だとも考えられる。

重複 20区122号住居(加曾利E3)、651(中世以降)・663・664(縄文)号土坑と重複。122号住居、663・664号土坑を切るも、651号土坑との切り合い関係は不明。

形状 直線状の石垣が二条並行するようにある。

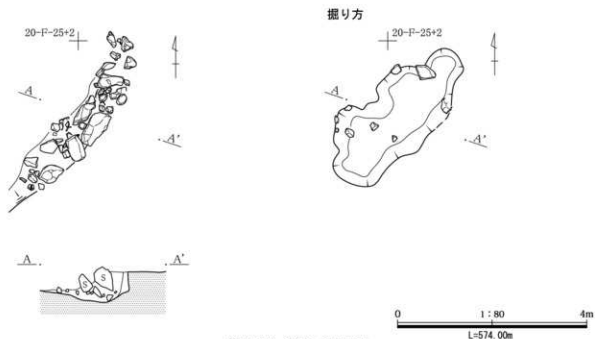
規模 長さ14mほど。段数は調査段階での資料が少なく不明瞭だが、断面図では1.1mほどの高さまで測れる部分もあった。

遺物 なし

時期 中世以降。遺物もなく、石垣という遺構の特徴からも時期を特定することは難しい。

19区1号列石(112図：PL34)

調査年度 平成10年度



第114図 20区 3号石列

位置 19区C・D-25、29区B-2、C-1・2

経過 調査は平成10年度に行われた。調査段階では縄文時代の列石として認定されていたが、整理段階で縄文時代の遺構ではないと判断した。遺構の形態から石垣の可能性が高いとしてここで報告する。

重複 29区3号住居(堀之内1)と重複し、これを切る。

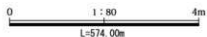
形状 北側では緩やかな弧状を描くが、ほぼ直線状。

規模 長さ10.3mほど。段数等は調査段階の資料が少ないため不明。

遺物 なし

時期 中世以降。遺物もなく、石垣という遺構の特徴からも時期を特定することは難しい。

掘り方



形態から石垣の可能性が高いとしてここで報告する。

重複 なし

形状 ほぼ直線状。

規模 長さ3.7mほど。段数は1段ほどか。

遺物 なし

時期 中世以降。石垣という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。

7 石列

石列は、礎を直線的に据えた縄文時代に比定できない遺構であるが、遺存状態の良好でない低い石垣との差異も明瞭ではなく、遺構認定には混乱もあり欠番もみられた。ここでは調査時の呼称を優先するが、一部の遺構については再考も必要だろう。また、20区1号石列は調査段階の資料がなく、ここでは欠番としたい。ここで掲載する石列は、20区2箇所、30区1箇所の計3箇所である。

以下、各石列ごとに報告する。

20区2号石列(113図：PL34)

調査年度 平成11年度

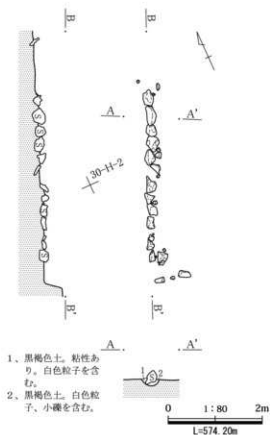
位置 F～H-25

28区13号列石(112図：PL34)

調査年度 平成10年度

位置 Y-4・5

経過 調査は平成10年度に行われた。調査段階では縄文時代の列石として認定されていたが、整理段階で縄文時代の遺構ではないと判断した。遺構の



第115図 30区 1号石列

経過 調査は平成11年度に行われた。調査段階では20区2号列石として調査されていたが、縄文時代の遺構ではないとの判断で、石列に変更された。

重複 20区6号配石、144・146・150・151・171・178号土坑(すべて縄文)と重複し、すべてを切る。

形状 ほぼ南北方向に直線状の石列。大型の礫を中心に直線的に据えられている。

規模 長さ7.86m、幅0.97m。

遺物 尾呂茶碗の小破片が出土した。

時期 中世以降。石列という遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区3号石列(114図：PL34)

調査年度 平成11年度

位置 E・F-24・25

経過 調査は平成11年度に行われた。調査段階では20区3号列石として調査されていたが、縄文時代の遺構ではないと判断され石列に変更された。

重複 なし

形状 小規模ではあるが、北西から南東方向に直線状の石列。

規模 長さ3.54m、幅0.95m。

遺物 なし

時期 中世以降。遺物もなく、石列という遺構の特徴からも時期を特定することは難しい。

30区1号石列(115図)

調査年度 平成9年度

位置 G-1・2

経過 調査は平成9年度に行われた。30区1号列石と混同されており、混乱がみられた。

重複 なし

形状 北西から南東に直線状の石列。

規模 長さ4.08m、幅0.4m。

遺物 なし

時期 中世以降。遺物もなく、石列という遺構の特徴からも時期を特定することは難しい。

8 石組遺構

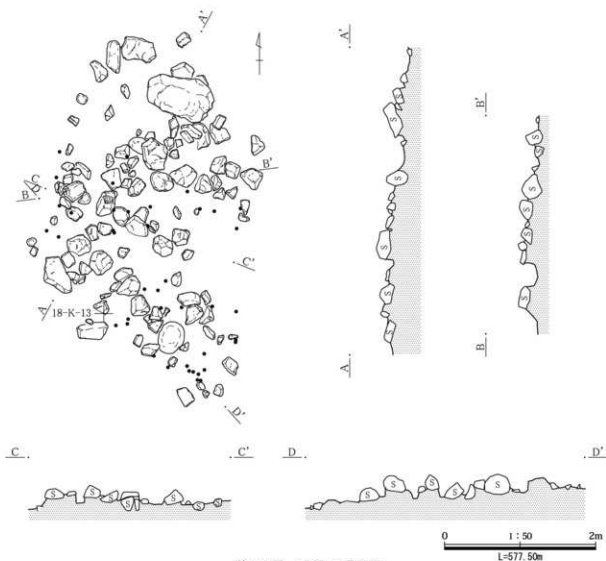
石組遺構は、礫を人為的に据えた縄文時代に比定できない遺構であるが、遺構認定には混乱もあり、欠番もみられた。調査段階では縄文時代の配石として調査されたものの、石組遺構に変更となった遺構も多くあった。また石組遺構の形態は多様であり、同様の性格を持つ遺構かどうかも含め、一部については再考が必要だと考えている。

ここで掲載する石組遺構は20区屋敷跡で記載した4基を除く、20区3基と、18区配石1基、20区配石7基の計11基である。

以下、各石組遺構ごとに報告する。

18区41号配石(116図：PL34)

調査年度 平成14年度



第116図 18区41号配石

位置 J・K-12・13

経過 調査は平成14年度に行われた。18区41号配石は、調査段階では縄文時代の配石遺構と捉えられていたが、整理段階で中世以降の石組遺構の可能性が高いと判断し、ここで報告する。

重複 26号住居(加曾利E3)、221号土坑(中世以降)と重複。26号住居を切るも、221号土坑との切り合い関係は不明。

形状 不定形。大型の礫などが集まったようにも見えるが、形状は不明。

規模 形状も判然としないため規模はおおよそであるが、長軸492cmほど、短軸325cmほどであった。

方位 不明

遺物 なし

時期 中世以降。出土遺物がなく、時期は特定できない。

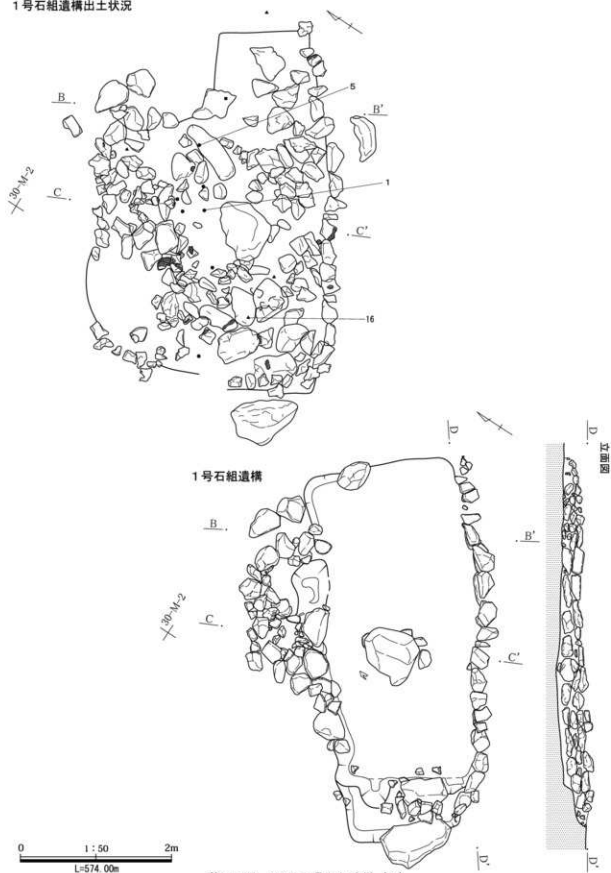
20区1号石組遺構(117～120図：PL34・35)

調査年度 平成11年度

位置 20区L・M-25、30区L・M-1

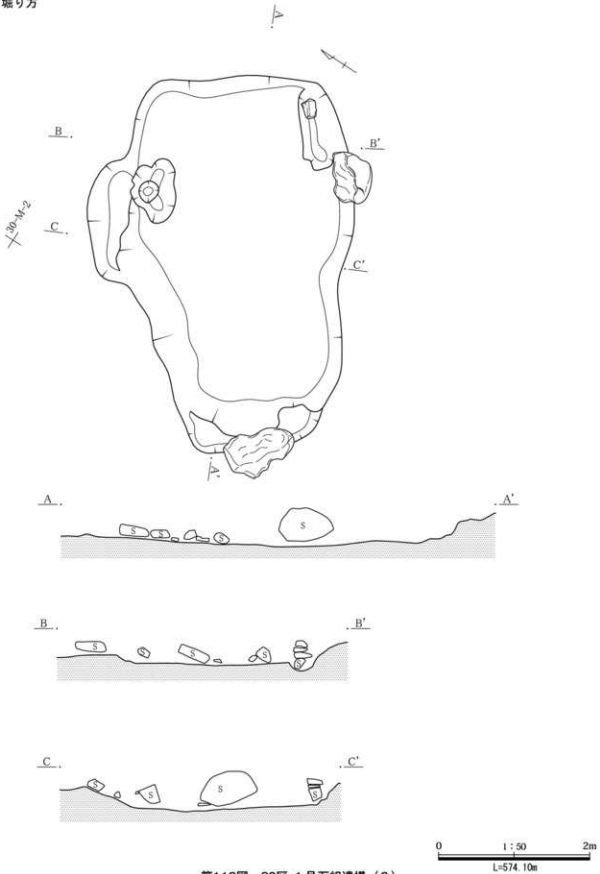
経過 調査は平成11年度に行われた。遺構番号に重複がみられたため、30区1号石組遺構を欠番とした。平面長方形の掘り込みの壁面に礫を据えた遺構である。特に遺存状態の良い南側の壁面に

1号石組遺構出土状況



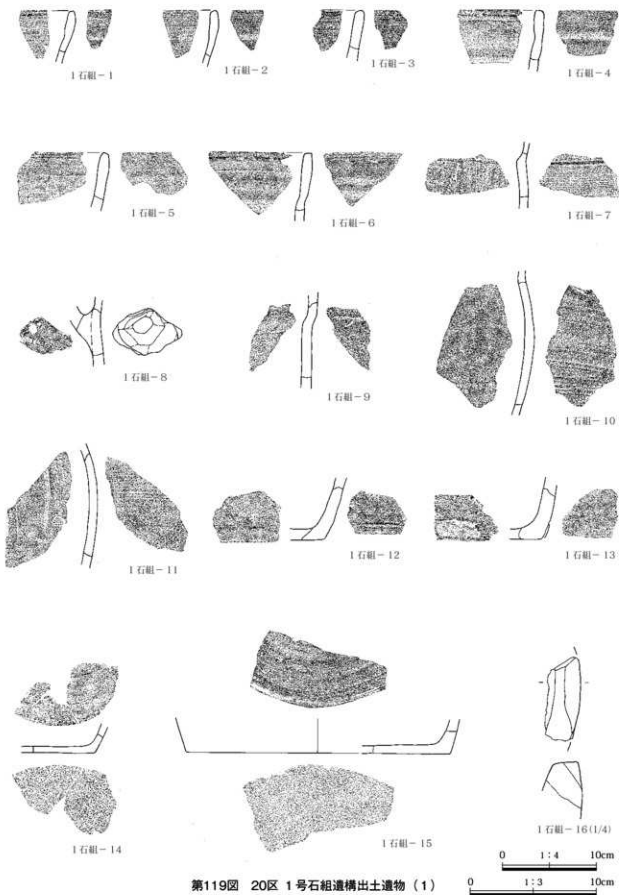
第117図 20区 1号石組遺構 (1)

掘り方

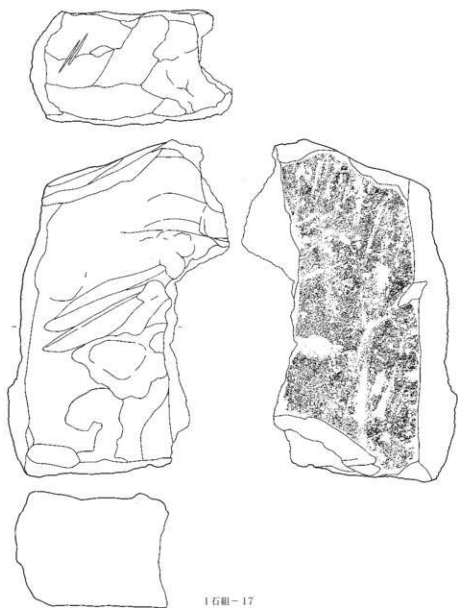


第118図 20区1号石組遺構(2)

第3章 発見された遺構と遺物



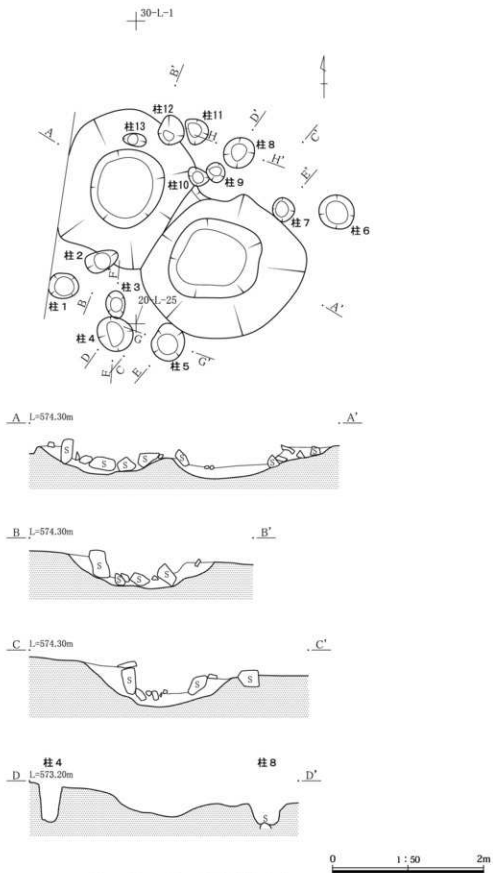
第119図 20区 1号石組遺構出土遺物 (1)



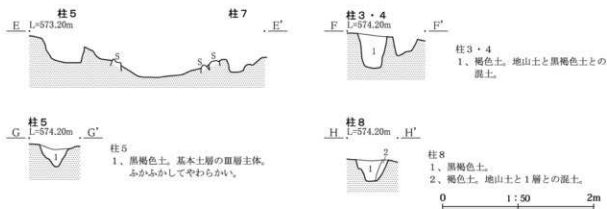
1号石組-17

0 1:3 10cm

第120図 20区 1号石組遺構出土遺物(2)



第121図 20区 2号石組遺構 (1)



第122図 20区2号石組遺構(2)

は、礫が石垣状に組まれていた。また北側には小さな張り出し部分がみられた。20区屋敷跡にも近く、中世の竪穴遺構の可能性もあるだろう。

重複 なし

形状 平面形状はほぼ長方形を呈する。北側には張り出し部分を持ち、西側には階段状の段を有する。長方形の掘り込みの壁面に、礫を組んだような形態である。

規模 長軸563cm、短軸342cm。深さは53cmほどであった。

方位 N-53°-E

遺物 内耳土器片が多数出土。自然礫を利用した大型の砥石も出土した。死亡年齢は不明だがウマに推定された獣骨も出土した。

時期 中世。出土遺物より、本遺構を当該期に比定した。

20区2号石組遺構(121～123図：PL35)

調査年度 平成11年度

位置 K・L-24・25

経過 調査は平成11年度に行われた。礫が据えられていた状況の平面図がなく、石組遺構とすべきかは判然としない。断面図を参考に判断すると、2号石組遺構は平面円形の掘り込みが隣接するようにある形態で、そこに大型の礫が据えられていたと思われる。20区7号石組遺構に近接しており、一連の遺構である可能性も考えられる。また、内耳土

器やカワラケが出土したことや、20区屋敷跡に近い位置にあることから、屋敷跡との関わりも考えられる。

円形の掘り込みには、近接して多くの柱穴状の掘り込みが確認されたが、本遺構に伴うかは調査所見もなく不明。

重複 なし

形状 平面は、二つの円形状の土坑が接したような形状である。断面形状はすり鉢状。

遺構周辺からは、13基の柱穴状の掘り込みが検出された。遺構の一部とも考えられていたようだが、調査所見もなく判然としない。

規模 長軸356cm、短軸323cm。深さは58cmほどであった。

方位 不明

遺物 内耳土器片が出土した。本遺跡ではカワラケの出土量は極めて少ないが、ここでは小型のカワラケが出土した。また粉挽き形の土白、石鉢なども出土した。

時期 中世。出土遺物より、本遺構を当該期に比定した。

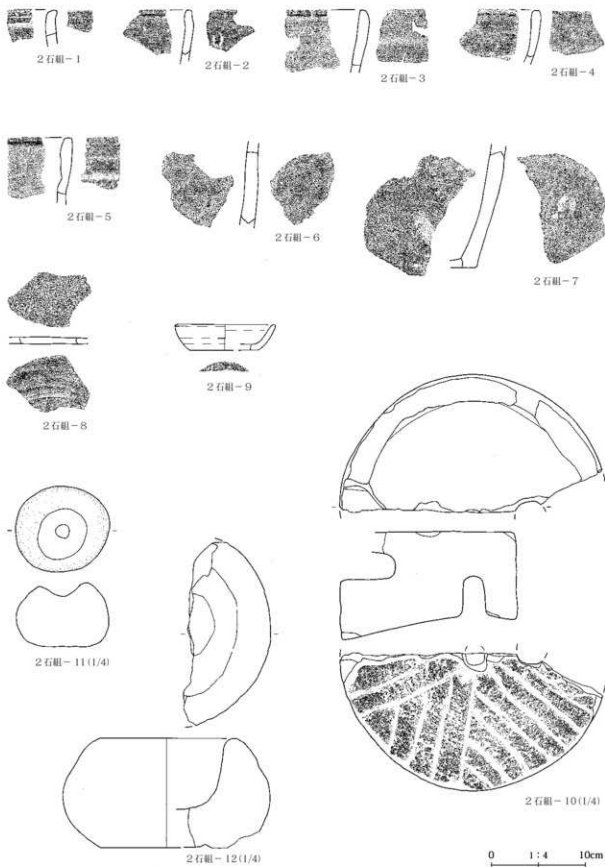
20区3号石組遺構

20区屋敷跡関連で報告。

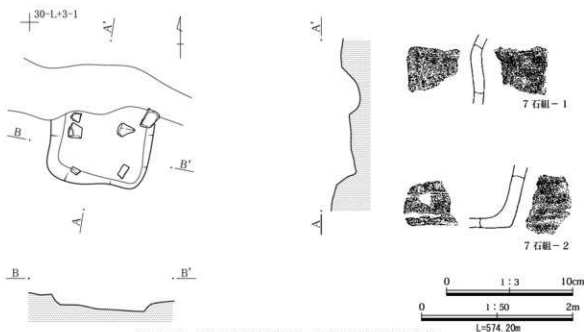
20区4号石組遺構

20区屋敷跡関連で報告。

第3章 発見された遺構と遺物



第123図 20区 2号石組遺構出土遺物



第124図 20区 7号石組遺構、7号石組遺構出土遺物

20区5号石組遺構

20区屋敷跡関連で報告。

20区6号石組遺構

20区屋敷跡関連で報告。

20区7号石組遺構(124図:PL35)

調査年度 平成11年度

位置 L-25

経過 調査は平成11年度に行われた。遺構の一部は欠損しており、遺存状態は悪い。形状も不明瞭である。20区2号石組遺構に近接しており、一連の遺構である可能性も考えられる。また、内耳土器が出土したことや、20区屋敷跡に近い位置にあることから、屋敷跡との関わりも考えられる。

遺構覆土中には小型の礫が多いものの、意図的に据えられたような礫の痕跡は少なく、石組遺構の呼称が適切かどうか再考が必要だと思われる。

重複 なし

形状 一部欠損しており不明瞭だが、平面形状は方形を呈するものと思われる。

規模 一部欠損しており規模はおよそである

が、長軸は138cmほど、短軸は109cmほど。深さは25cmほどであった。

方位 N-87°-W

遺物 内耳土器片が出土した。

時期 中世以降。遺存状態が悪いため時期を特定することは難しい。出土遺物等より、本遺構を当該期に比定した。

20区27～31号配石(125図:PL36)

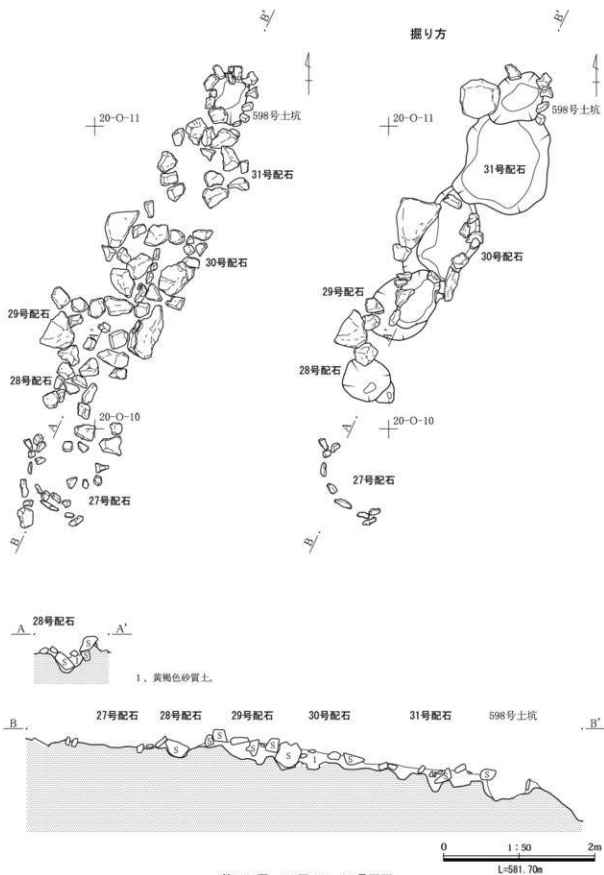
調査年度 平成16年度

位置 N-9～11、O-9・10

経過 調査は平成16年度に行われた。20区27～31号配石は、調査段階では縄文時代の配石遺構と認定されていたが、整理段階で中世以降の石組遺構の可能性が高いと判断し、ここで報告する。

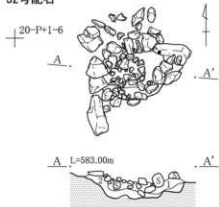
遺構名称は27～31号配石と5基に分かれる。掘り方調査では、それぞれに不整形の掘り込みがあり異なる遺構の可能性もあるが、平面形状は直線上に礫が並ぶようにみえるため、ここではまとめて報告したい。

重複 20区554号土坑、1号竪穴遺構(ともに中世以降)と重複。切り合い関係は不明。



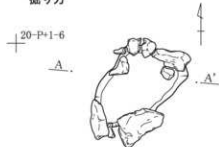
第125図 20区 27~31号配石

32号配石

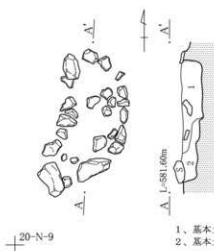


- 1、基本土層のII層主体。
- 2、基本土層のVI層主体。

掘り方

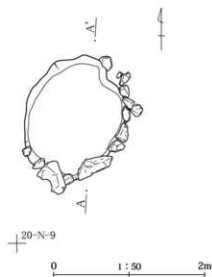


33号配石



- 1、基本土層のII層主体。
- 2、基本土層のVI層主体。

掘り方



第126図 20区 32・33号配石

形状 平面形状は、直線上に礫が並ぶようにもみえる。掘り方調査では、それぞれ不整形の掘り込みがあり礫が据えられたようにもみえるが、調査所見もなく判然としない。

規模 ここでの規模は、5基の遺構すべてを含めた規模である。長さ596cm、幅154cm。

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

位置 O・P-5・6

経過 調査は平成16年度に行われた。20区32号配石は、調査段階では縄文時代の配石遺構と認定されていたが、整理段階で中世以降の石組遺構の可能性が高いと判断し、ここで報告する。

重複 なし

形状 平面形状は歪んだ楕円形、断面形状はすり鉢状を呈する。土坑状の掘り込みからは、多数の礫が出土した。

規模 長軸184cm、短軸146cm。深さは36cmであった。

方位 不明

20区32号配石(126図:PL36)

調査年度 平成16年度

第3章 発見された遺構と遺物

遺物 なし
時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区33号配石(126図：PL36)

調査年度 平成14年度
位置 M-9
経過 調査は平成14年度に行われた。20区33号配石は、調査段階では縄文時代の配石遺構と認定されていたが、整理段階で中世以降の石組遺構の可能性が高いと判断し、ここで報告する。
重複 なし
形状 平面形状は楕円形、断面形状は円筒状を呈する。土坑状の掘り込みからは、多数の礫が出土した。
規模 長軸202cm、短軸92cm。深さは39cmであった。
方位 N-18°-E
遺物 なし
時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

9 石囲い遺構

石囲い遺構は、礫を人為的に囲い、中央に空間を作っているようにみえる遺構で、縄文時代に比定できないと判断された遺構である。石組遺構との明確な違いがあるのかは判断しがたいが、前述の通り本書では調査段階の呼称を優先したい。

ここで報告する石囲い遺構は、20区で確認された3基である。20区以外で石囲い遺構と呼称される遺構は確認されていない。

以下、各石囲い遺構ごとに報告する。

20区1号石囲い遺構(127・128図：PL37)

調査年度 平成16年度
位置 L-7～10、M-8～10、N-9
経過 調査は平成16年度に行われた。遺構の重複などにより遺存状態は悪いが、空間を方形に開

くような溝状の浅い掘り込みの中から、礫が充填されたように出土したことから、石囲い遺構と認定された。

20区1号石囲い遺構は、2号石囲い遺構と隣接し同様の平面形状を呈している。1号石囲い遺構は、2号石囲い遺構と近似した遺構と思われる。しかし、20区555号土坑との切り合い関係もあり、遺存状態が悪く不明瞭な部分が多い。

1・2号石囲い遺構は、本来はひとつの遺構として捉えるべきものであるとも考えられるため、ここでは2基が隣接した遺構図を掲載した。

重複 20区555(中世)・597(中世以降)・643(堀之内2)号土坑、33号配石(縄文)と重複。643号土坑、33号配石を切るが、555・597号土坑との切り合い関係は不明。

形状 遺存状態が悪く判然としないうが、平面形状は方形を呈していたと思われる。遺構中央にある方形の空間を、礫がドーナツ状に囲うような平面形状を呈していたと推測される。中央にみえる礫は、その残骸か。

規模 遺存状態が悪く、規模はおおよそである。長軸は938cmほど、短軸は511cmほどまで測れた。深さは49cmほどであった。

方位 不明

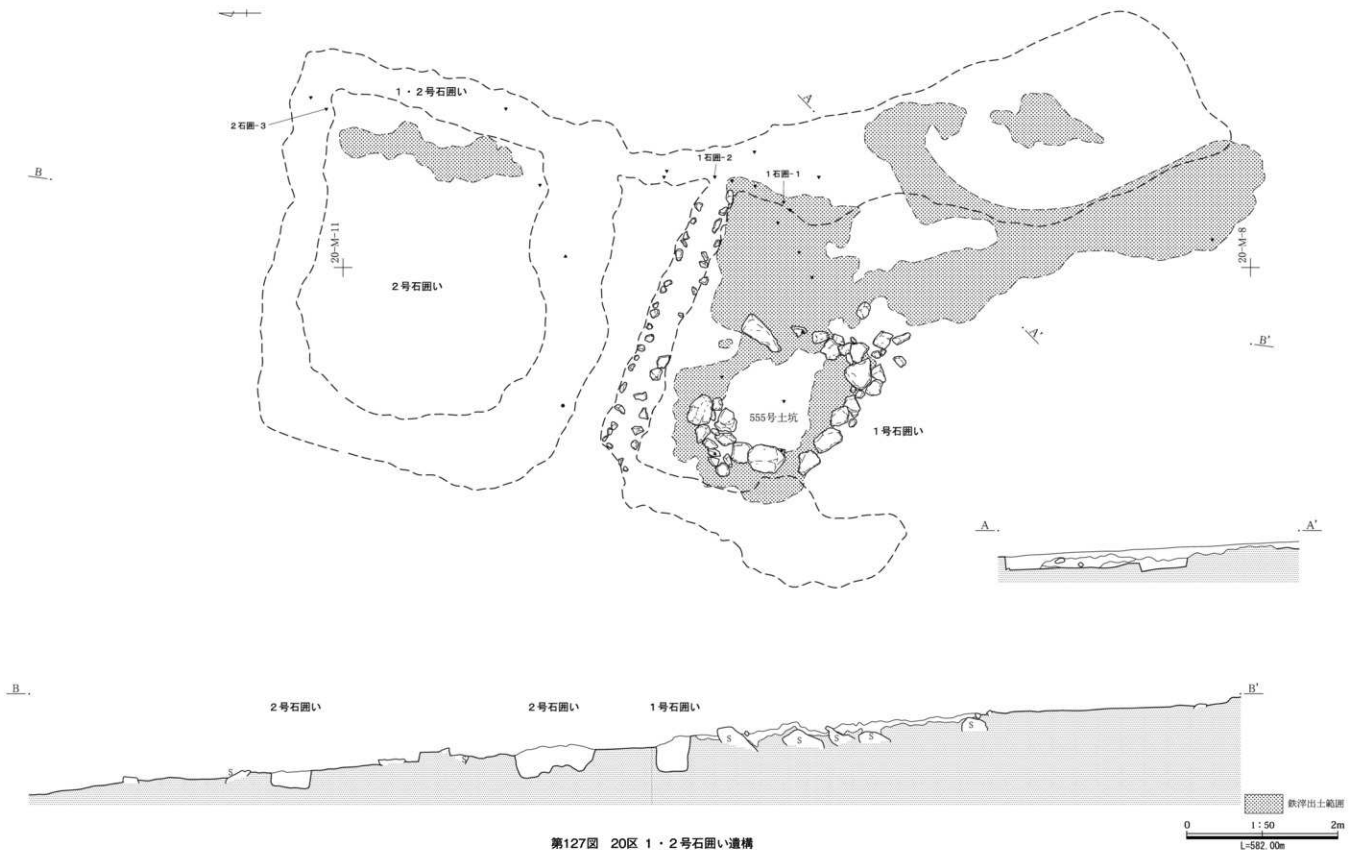
遺物 鉄滓が14点、羽口片1点が出土した。鉄滓の総重量は1,245.9gであった。また切り合い関係のある20区555号土坑からも鉄滓が出土している。既に「横聖中村遺跡(6)」で報告されているが、31点、総重量4,015.6gの鉄滓が出土した。

1・2号石囲い遺構と555号土坑が鉄に関連する遺構であったのかは、調査所見もなく判断材料は少ない。近隣にあった遺構から混入した鉄滓である可能性も否定できない。

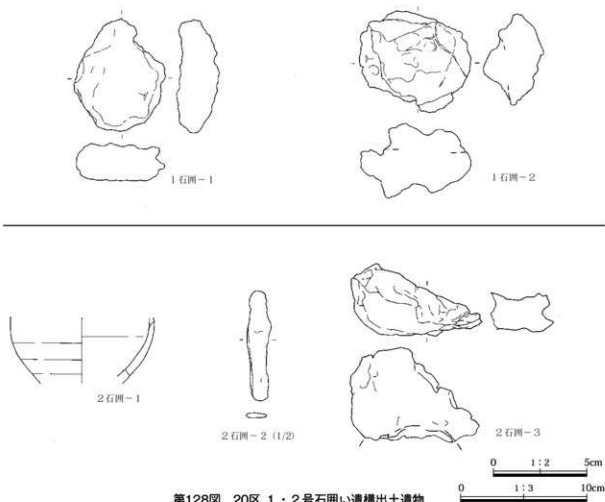
時期 中世以降。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区2号石囲い遺構(127・128図：PL37)

調査年度 平成16年度



第127図 20区 1・2号石囲い遺構



第128図 20区 1・2号石囲い遺構出土遺物

位置 L-9~11、M-10・11

経過 調査は平成16年度に行われた。空間を方形に囲うような溝状の浅い掘り込みの中から、礫が充填されたように出土したことから、石囲い遺構と認定された。

前述の通り、20区2号石囲い遺構は、1号石囲い遺構と隣接しており、同様の平面形状を呈していることなどから、本来ひとつの遺構であった可能性も考えられる。そのため、ここでは2基が隣接した遺構図を掲載した。

重複 20区116号住居(加曾利E3)、647・650号土坑(中世以降)、3号ヤックラ(中世以降)と重複。116号住居を切るが、647・650号土坑、3号ヤックラとの切り合い関係は不明。

形状 平面形状は方形を呈する。遺構中央にある方形の空間を、礫がドーナツ状に囲うような平面

形状を呈している。中央にある空間の一部からは鉄滓が出土した。

規模 長軸520cm、短軸457cm。深さは45cmであった

方位 N-75°-W

遺物 古瀬戸後期IかIIの天目茶碗、金属製品が出土した。鉄滓も3点出土した。鉄滓の総重量は259.1gであった。

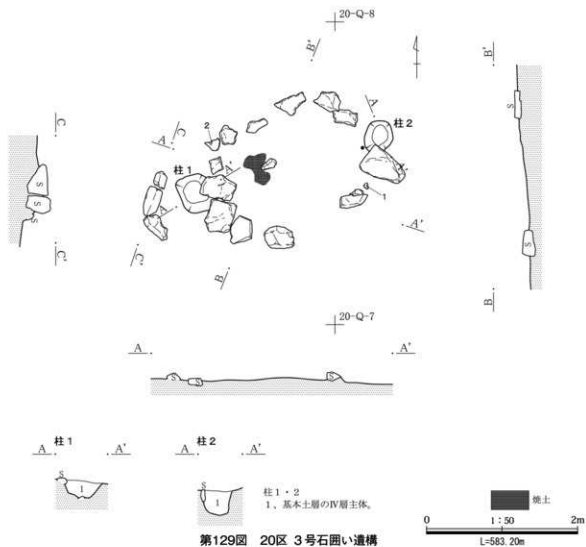
時期 中世以降。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

20区3号石囲い遺構(129・130図：PL38)

調査年度 平成16年度

位置 P・Q-7

経過 調査は平成16年度に行われた。浅い溝状の掘り込みのみはみられなかったが、礫が囲うように



第129図 20区 3号石囲い遺構

出土したことから、調査段階に石囲い遺構と認定された。

円周ようにあった礎の外縁からは柱穴状の掘り込み2基が、遺構中央からは焼土が検出された。検出された柱穴、礎、焼土が3号石囲い遺構に伴うものかは、調査所見もなく判断しがたい。また3号石囲い遺構は、1・2号石囲い遺構とは平面形状なども異なり、本来異なる遺構とも考えられる。

重複 なし

形状 遺構の平面形状はおおよそ楕円形を呈するものと思われる。礎が円周ようにある遺構で掘り込みはない。柱穴状の掘り込み2基が確認できたが、一連の遺構であるかは判断しがたい。

規模 長軸352cm、短軸174cmほど。前述の通

り、掘り込みは確認できないため、深さは不明。

柱穴2基の規模は以下の通りである。規模は長軸×短軸×深さ、単位はcmである。柱1：51×46×19、柱2：45×37×33。

方位 N-75°-W。掘り込みがなく、遺構の平面形状も不明瞭であり、方位はおよそである。

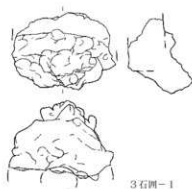
遺物 羽口片、粉挽き形の下臼が出土した。

時期 中世以降。出土遺物等から、本遺構を当該期に比定した。

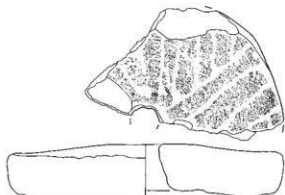
10 墓坑他

ここでは墓坑他として、主に人骨及び獣骨の出土した遺構について報告する。

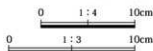
調査段階、骨が出土した遺構の多くについては、



3石函-1



3石函-2 (1/4)



第130図 20区 3号石函い遺構出土遺物

墓坑と認定していた。整理作業において、出土した骨類を調査した結果、人骨が出土した遺構と獣骨が出土した遺構が同様に墓坑として呼称されていることがわかった。前述の通り、本書では調査段階での遺構名称を優先しており、遺構名称はそのまま報告している。しかし、人骨と獣骨が出土した遺構の性格は異なるものと考え、ここでは人骨の出土した墓坑と思われる遺構と、獣骨の出土した遺構とを分けて報告したい。

人骨が出土した遺構からは銭貨が共存する出土例もみられた。六道銭のような葬送儀礼に伴う可能性が高いと考えている。そのため、骨が確認できず銭貨のみ出土した遺構についても、人骨が出土した遺構と同様の性格を持つ遺構の可能性が考えられるとして、ここではまとめて報告したい。ただし、銭貨が出土した遺構の中には規模の小さいものもあり、すべてが同様の性格を持つ遺構ではないだろう。調査段階での資料が少なく判断しがたいため、ここでは一括して扱い報告する。

第131図は、墓坑他に報告するすべての遺構と、発掘調査前の現況図とを重ねた遺構分布図である。人骨が出土した墓坑では、被葬者の頭位や性別、年齢、銭貨出土の有無が記載されているので参考にしていただきたい。

ここで人骨、銭貨出土遺構として報告する遺構は34基、獣骨出土遺構として報告する遺構は10基で

ある。そのうち20区屋敷跡関連として報告されている人骨、銭貨出土遺構は3基、獣骨出土遺構は4基あるが、この7基についても簡潔に概略を報告する。また、既に「横壁中村遺跡(6)」で報告されている12基の遺構についても同様に、概要のみを報告したい。

以下、人骨、銭貨出土遺構と獣骨出土遺構に分け、各遺構ごとに報告する。

(1) 人骨、銭貨出土遺構

ここでは、人骨、銭貨が出土した遺構について報告する。整理段階、出土骨類の調査をしたが、古代に比定できる出土例は確認できなかった。また、報告する遺構から出土した銭貨は渡来銭であり、寛永通寶は確認できなかった。そのため、ここで報告する遺構の多くは中世に比定されるものと考えている。

ここで報告する遺構は、18区2基、19区2基、20区25基、29区2基、30区5基の計36基である。そのうち、20区屋敷跡関連で報告された遺構は3基、「横壁中村遺跡(6)」で報告された遺構は3基である。また、36基のうち、人骨が出土した遺構は21基を数える。

出土人骨については、第4章の中で橋崎修一郎氏により詳述されている。ここでは、その概要についてののみ報告したい。

人骨が出土した21基の墓坑の埋葬方法は、屈葬

第3章 発見された遺構と遺物

が19基と最も多い。また被葬者の頭位は、北東方向が13基と最も多く、北方向は3基のみであった。頭位が確認できた遺構は20区及び30区で検出されているが、調査区は北東方向に傾斜していた。発掘調査前の現況図をみても、地形に合わせるように地境が北東方向へ振れていた。埋葬時、被葬者の頭を北へ向けようとしていたが、地形の傾斜や地境などから、多くは北東方向へ頭位を向けることになった可能性も考えられる。ただし、すべての遺構を一括に扱うことはできず、推測の域は出ない。

被葬者の性別は、男性9体、女性9体、不明3体である。死亡年齢は、未成年が3体、約20歳代が1体、約30歳代が9体、約40歳代が4体、老齢が1体、成人が3体と推定されている。性別や年齢によって、埋葬場所の傾向はみられなかった。しかし、出土例は2基と少ないが、10歳に満たない被葬者が20区屋敷跡近辺で確認されている。屋敷跡との関連については判然としない。

第4章の中で橋嶋氏が指摘するように、横壁中村遺跡のある長野原町では、埋葬のための「埋め墓」と墓参りをする「詣り墓」を分ける「両墓制」が認められる。すべての墓坑に共伴遺物はないが、ここで報告する墓坑から出土した銭貨はすべて渡来銭であり、中世に比定できる遺構が多いと考えている。また、出土した墓坑はやや集中する箇所もあるものの、散在しているようにも見える。両墓制が近世からの葬制と考えられていることや、横壁中村遺跡での出土様相を考え併せると、報告する遺構は両墓制の埋め墓ではないと思われる。同地域での両墓制は、中世まで遡らない可能性が高いだろう。

以下、各遺構ごとに詳細を報告する。

18区125号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成14年度

位置 V-6・7

形状 平面形状は長方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸257×短軸80×深さ52cm。

方位 N-8°-W

遺物 「開元通寶?」1点出土。

人骨 なし

時期 近世

18区129号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成14年度

位置 X-7

形状 平面形状は長方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 長軸281×短軸100×深さ24cm。

方位 N-76°-E

遺物 「紹聖元寶?」1点出土。

人骨 なし

時期 中世

19区75号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成14年度

位置 A-10・11

形状 平面形状は長方形、断面形状は皿状を呈する。

規模 長軸206×短軸116×深さ26cm。

方位 N-12°-E

遺物 「紹聖元寶」1点出土。

人骨 なし

時期 中世

19区293号土坑(133図・PL38)

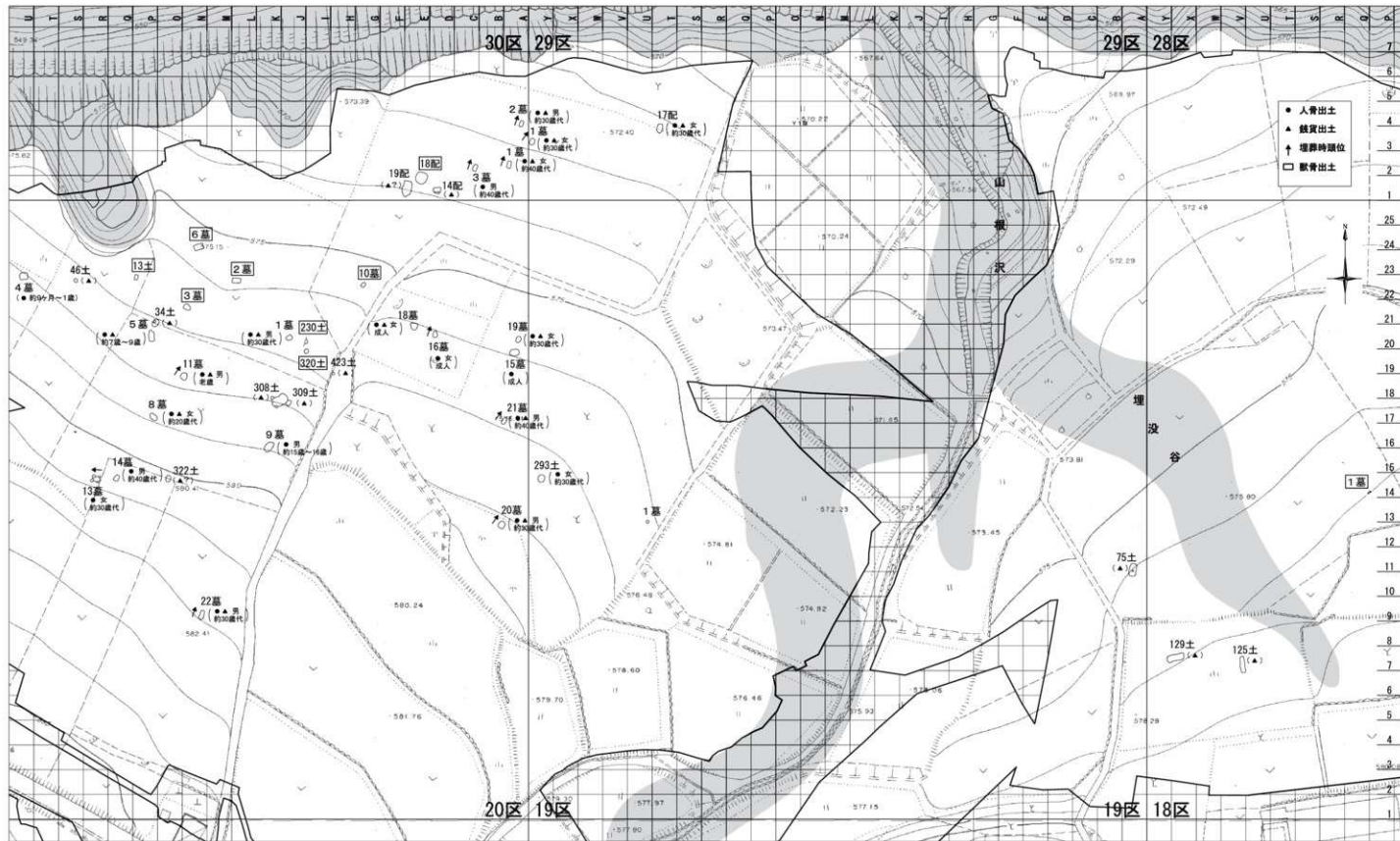
調査年度 平成16年度

位置 Y-14

経過 調査は平成16年度に行われた。調査段階には土坑と認定されていたが、整理段階に墓坑と判断されたため、「横壁中村遺跡(6)」の中で詳細な報告はされていない。

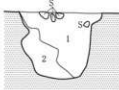
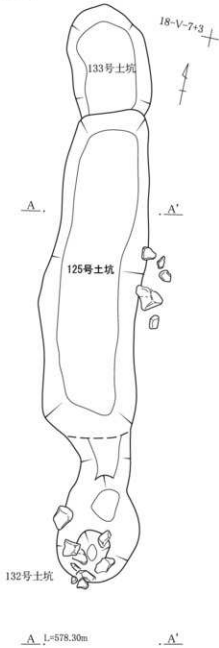
出土した人骨の遺存状態はやや悪いが、出土状況から頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。覆土中からは礎も出土した。

重複 52号住居(縄文)と重複し、これを切る。



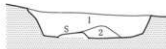
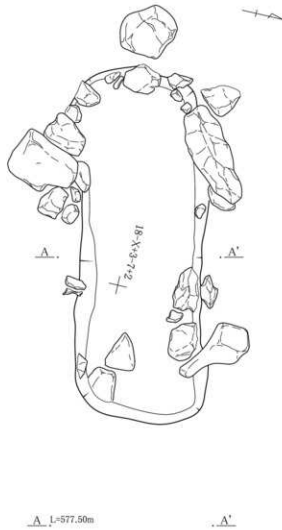
第131圖 人骨、獸骨、錢貨出土遺構分布圖

125号土坑



- 1、暗褐色土。ややしまりあり。2mm程の白色粒子少量含む。
- 2、暗褐色土。1層よりやや暗い色調。

129号土坑

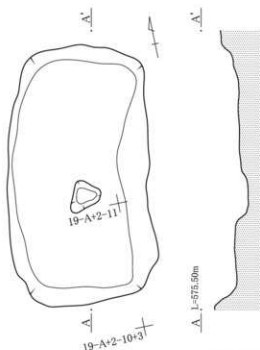


- 1、暗褐色土。しまりなし。粘性なし。1~2mm程の砂礫を少量含む。
- 2、暗褐色土。地山土を少量含む。

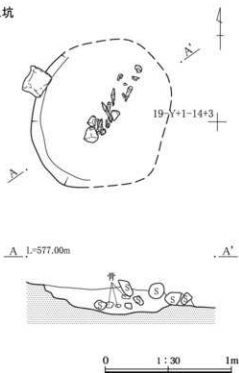
0 1:30 1m

第132図 18区 125・129号配石

75号土坑



293号土坑



第133図 19区 75・293号土坑

形状 平面形状は円形、断面形状は皿状を呈する。

規模 長軸122cm、短軸108cm。深さは28cmと浅い。

方位 N-55°-E。

遺物 なし

人骨 約30歳代の女性。

時期 中世以降。遺構から人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

呈する。墓坑の北東方向からは、大型の地山礫が出土した。

規模 長軸140cm、短軸76cm。深さは53cmであった。

方位 N-54°-E

遺物 「照寧元寶?」、「元豊通寶」各1点が出土した。

人骨 約30歳代の男性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区1号墓坑(134図:PL38)

調査年度 平成11年度

位置 J-20

経過 調査は平成11年度に行われた。調査段階で、人骨や銭貨が出土したことから墓坑と認定された。出土した人骨の遺存状態は悪いが、出土状況から頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし

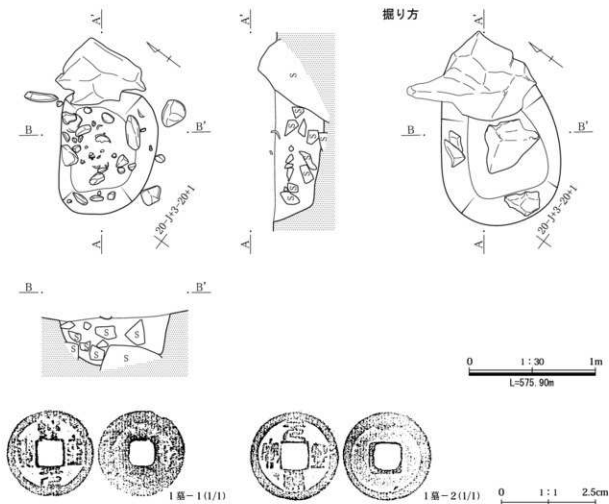
形状 平面形状は楕円形、断面形状は円筒状を

20区4号墓坑(135図:PL39)

調査年度 平成11年度

位置 U-22・23

経過 調査は平成11年度に行われた。当初は20区23号土坑とされていたが、その後人骨が出土したことから墓坑の可能性が高いと判断され、23号土坑を欠番とし、20区4号墓坑へ遺構名称が変更された。出土した人骨の遺存状態は非常に悪く、埋葬状態は不明である。



第134図 20区1号墓坑、1号墓坑出土遺物

重複 20区8(加曾利E1)号住居と重複し、これを切る。

形状 平面形状は方形、断面形状は浅いすり鉢状を呈する。

規模 長軸133cm、短軸112cm、深さは12cmと浅い。

方位 N-85°-E

遺物 内耳土器片が出土した。

人骨 遺存状態も悪く性別は不明だが、約9ヶ月～1歳と推定された人骨が出土した。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区5号墓坑

20区屋敷跡関連で報告。渡来銭が出土。人骨の

遺存状態は悪く、性別は不明。約7～9歳と推定された。墓坑の規模が大きいことから、伸展葬での埋葬の可能性が高い。

20区8号墓坑(136図：PL39)

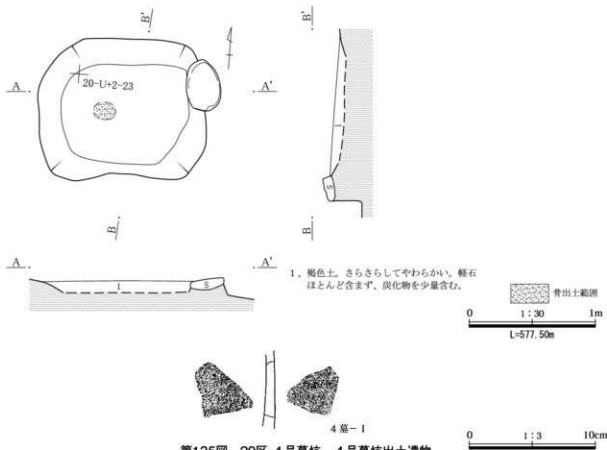
調査年度 平成12年度

位置 P-17

経過 調査は平成12年度に行われた。南東方向を中心に大型の礎が出土した。出土した人骨の遺存状態は悪いが、出土状況から頭位は北西方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 20区60号住居(加曾利E2)と重複し、これを切る。

形状 平面形状は楕円形、断面形状は皿状を呈する。



第135図 20区 4号墓坑、4号墓坑出土遺物

規模 長軸136cm、短軸84cm。深さは38cmであった。

方位 N-42'-W

遺物 「開元通寶」1点、「景祐元寶?」1点、「熙寧元寶」2点、「永樂通寶」2点が出土した。

人骨 約20歳代の女性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

呈する。

規模 長軸210cm、短軸138cm。深さは62cmであった。

方位 N-43'-E

遺物 なし

人骨 約15～16歳の男性。

時期 中世以降。遺構から人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区9号墓坑(137図: PL39)

調査年度 平成12年度

位置 K-15・16

経過 調査は平成12年度に行われた。出土した人骨の遺存状態は比較的良好で、出土部位は全身に及んだ。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし

形状 平面形状は楕円形、断面形状は円筒状を

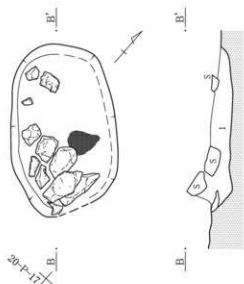
20区11号墓坑(138図: PL39・40)

調査年度 平成12年度

位置 N・O-18・19

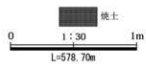
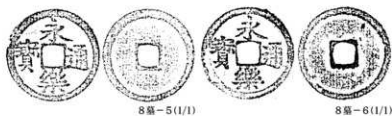
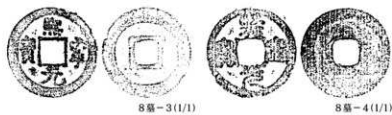
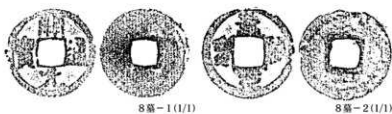
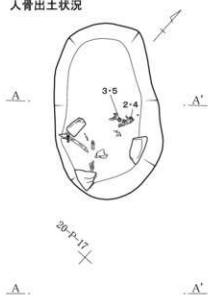
経過 調査は平成12年度に行われた。出土した人骨の遺存状態はあまり良好ではないが、少しずつ全身が出土した。人骨の出土状況から、頭位は北方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 20区47号住居(堀之内1)と重複し、これを切る。

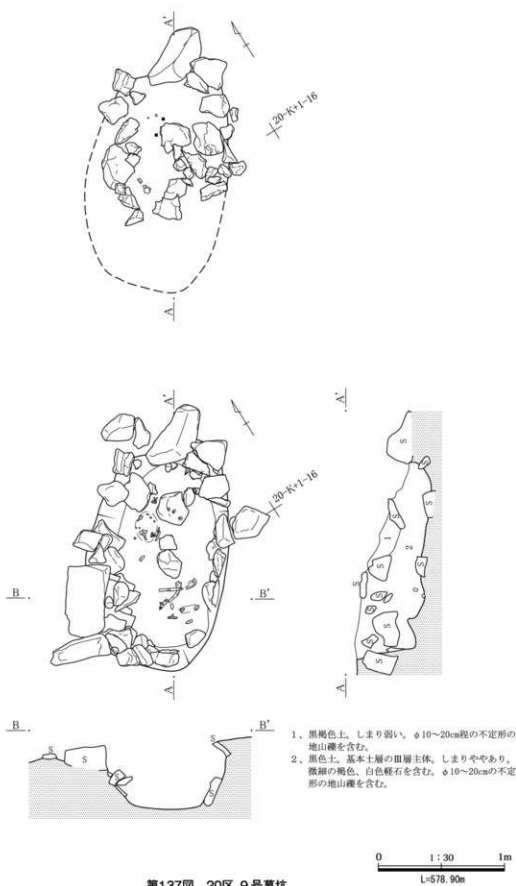


1、黒褐色土。基本土層の目録主体、ややしまりあり。
 焼土粒をわずかに含む、軽石を少量含む。

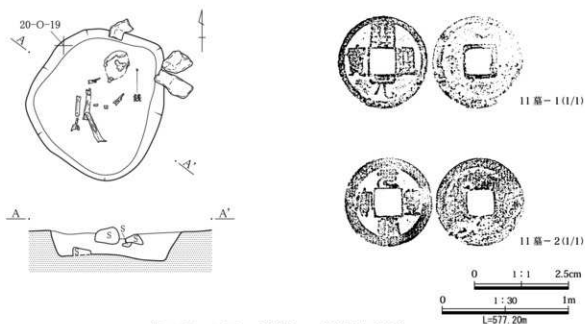
人骨出土状況



第136図 20区 8号墓坑、8号墓坑出土遺物



第137図 20区 9号墓坑



第138図 20区11号墓坑、11号墓坑出土遺物

形状 平面形状は不整形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 長軸118cm、短軸107cm。深さは26cmと浅い。

方位 N-36°-E

遺物 「開元通寶」、「元豊通寶」各1点が出土した。

人骨 老齢の男性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

規模 長軸133cm、短軸113cm。出土した礎から遺構底面までの深さは51cmであった。

方位 N-75°-W

遺物 なし

人骨 約30歳代の女性。

時期 中世以降。遺構から人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区13号墓坑(139図：PL40)

調査年度 平成12年度

位置 R-14

経過 調査は平成12年度に行われた。遺構中央から大型の礎が集中するように出土した。出土した人骨の遺存状態は比較的良好で、出土部位は全身に及んだ。人骨の出土状況から、頭位は西方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし

形状 平面形状は楕円形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

20区14号墓坑(140図：PL40)

調査年度 平成12年度

位置 Q-14

経過 調査は平成12年度に行われた。出土した人骨の遺存状態は比較的良好で、出土部位は全身に及んだ。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、仰臥屈葬で埋葬されていたと思われる。

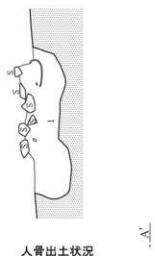
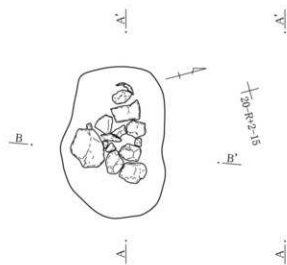
重複 なし

形状 平面形状は長方形、断面形状は遺存状態が悪く不明。

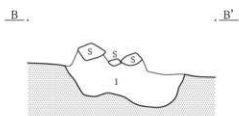
規模 長軸113cm、短軸60cm。深さは23cmと浅い。

方位 N-30°-E

遺物 なし



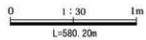
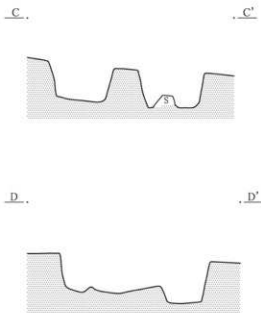
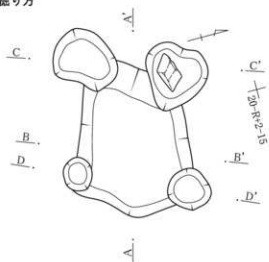
人骨出土状況



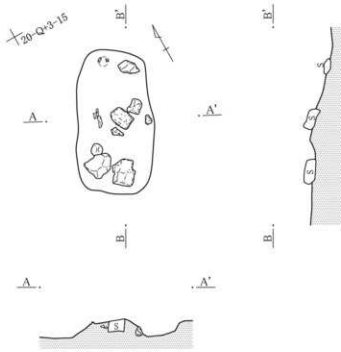
1、黒褐色土。ふかふかしてやわらかい。



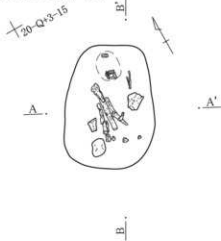
掘り方



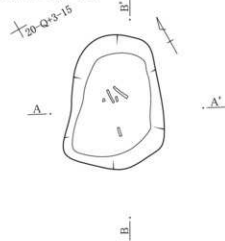
第139図 20区 13号墓坑



人骨出土状況 (1)



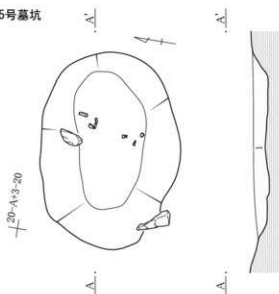
人骨出土状況 (2)



0 1:30 1m
L=580.00m

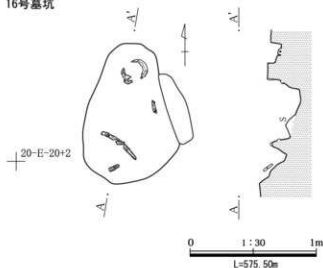
第140図 20区 14号墓坑

15号墓坑



1. 褐色土を主体とする黒色土ブロックとの混土。

16号墓坑



第141図 20区15・16号墓坑

人骨 約40歳代の男性。

時期 中世以降。遺構からは人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区15号墓坑(141図:PL40)

調査年度 平成13年度

位置 A-19

経過 調査は平成13年度に行われた。人骨の遺存状態は非常に悪いが、出土状況から頭位を西に

した屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし

形状 平面形状は楕円形、断面形状は皿状を呈する。

規模 長軸156cm、短軸111cm。深さは14cmと浅い。

方位 N-81°-E

遺物 なし

人骨 遺存状態が悪く性別は不明だが、成人と推定された人骨が出土した。

時期 中世以降。遺構から人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区16号墓坑(141図:PL41)

調査年度 平成13年度

位置 D-20

経過 調査は平成13年度に行われた。人骨の遺存状態は非常に悪いが、出土状況から頭位を北にした屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし

形状 平面形状は楕円形、断面形状は不定形を呈する。

規模 長軸112cm、短軸87cm。深さは33cmであった。

方位 N-9°-E

遺物 なし

人骨 成人の女性。

時期 中世以降。遺構から人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

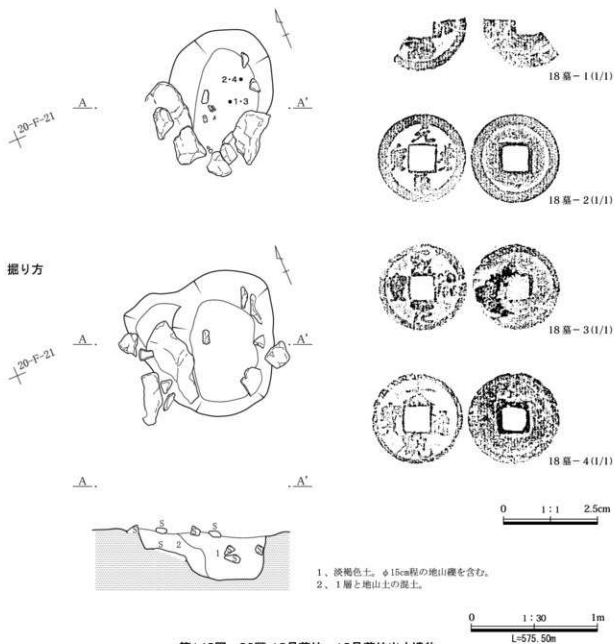
20区18号墓坑(142図:PL41)

調査年度 平成13年度

位置 E-20・21

経過 調査は平成13年度に行われた。出土した人骨の遺存状態は悪い。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし



第142図 20区 18号墓坑、18号墓坑出土遺物

形状 地山に礫が多いためか形状は判然としない。平面形状は不整形、断面形状は不定形を呈すると思われる。

規模 地山に礫が多く規模はおよそである。長軸は133cmほど、短軸は116cmほどまで測れた。深さは44cmほどであった。

方位 N-56°-W

遺物 「天聖元寶?」、「元豊通寶」、「聖宋元寶?」、「大観通寶」各1点が出土した。

人骨 成人の女性。

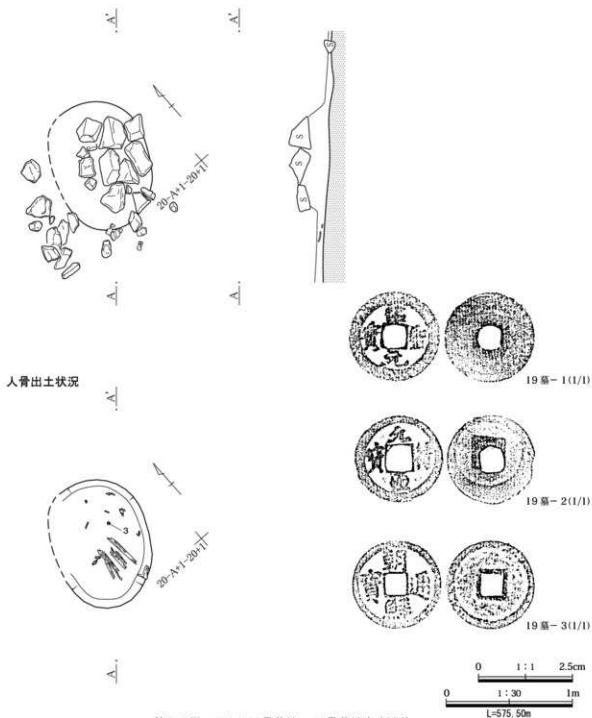
時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区19号墓坑(143図:PL41)

調査年度 平成13年度

位置 A-20

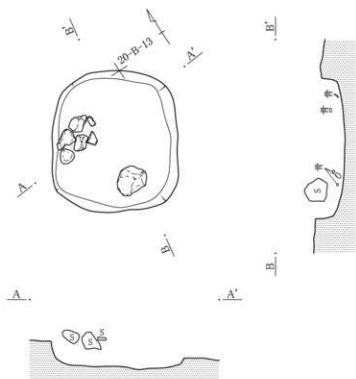
経過 調査は平成13年度に行われた。当初は20区19号配石として調査されていたが、中世以降



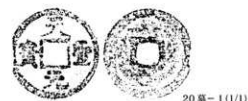
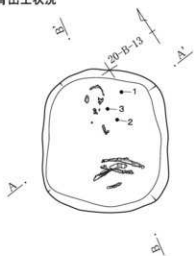
第143図 20区 19号墓坑、19号墓坑出土遺物

の墓坑の可能性が高いとされ、19号配石を欠番とし、20区19号墓坑へ遺構名称を変更した。遺構中央からは大型の礫が集中するように出土した。出土した人骨の遺存状態はあまり良好ではない。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

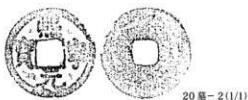
重複 なし
 形状 平面形状は楕円形を呈する。遺存状態が悪く、断面形状は不詳。
 規模 長軸102cm、短軸66cm。深さは37cmであった。
 方位 N-34°-E



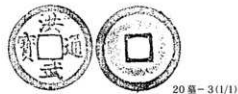
人骨出土状況



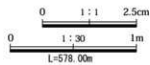
20 墓-1 (1/1)



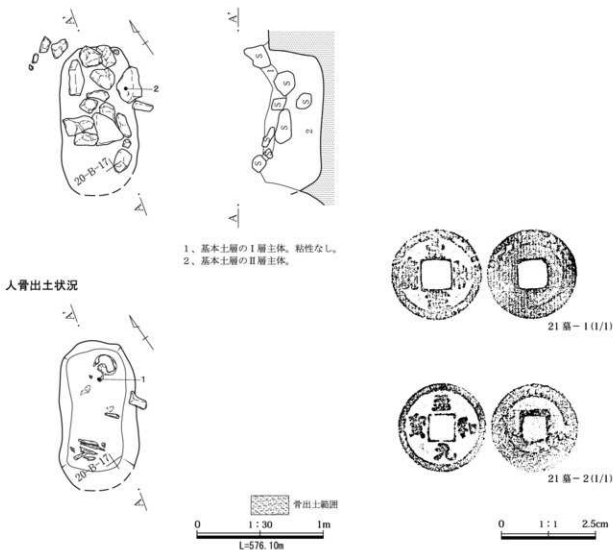
20 墓-2 (1/1)



20 墓-3 (1/1)



第144図 20区 20号墓坑、20号墓坑出土遺物



第145図 20区 21号墓坑、21号墓坑出土遺物

遺物 「紹聖元寶」、「元符通寶」、「朝鮮通寶」各1点が出土した。

人骨 約30歳代の女性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区20号墓坑(144図:PL41・42)

調査年度 平成15年度

位置 A-12、B-12・13

経過 調査は平成15年度に行われた。出土した人骨の遺存状態は比較的良く、出土部位は全身に及んだ。人骨の出土状況から、頭位は北方向で、

屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 なし

形状 平面形状は方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸113cm、短軸100cm。深さは32cmであった。

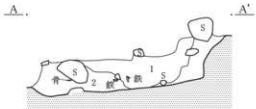
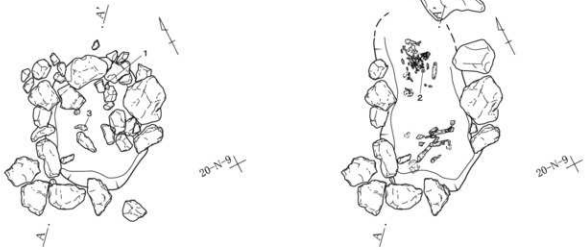
方位 N-34°-E。頭骨出土位置を考慮し、計測した。

遺物 「天聖元寶」、「熙寧元寶」、「洪武通寶」各1点が出土した。

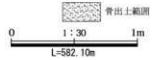
人骨 約30歳代の男性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に

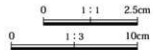
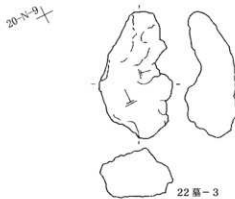
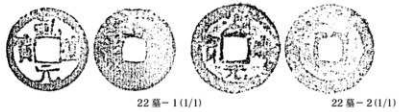
人骨出土状況



- 1、基本土層の1層主体、粘性なし。
- 2、基本土層の2層主体。

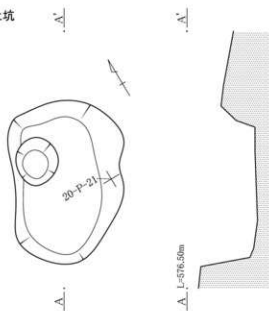


掘り方

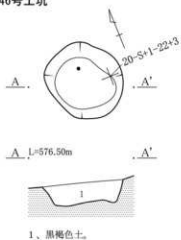


第146図 20区 22号墓坑、22号墓坑出土遺物

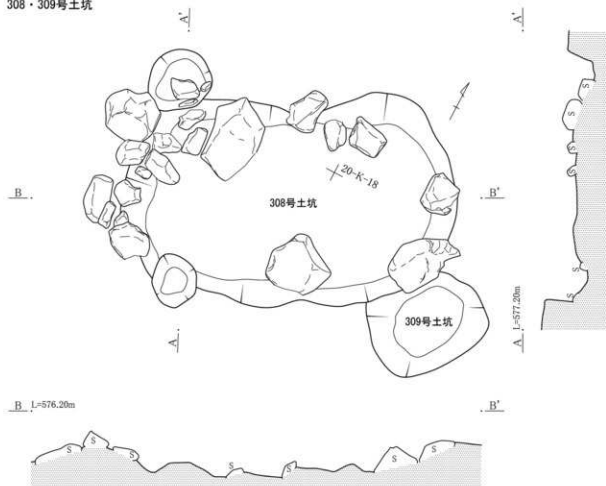
34号土坑



46号土坑



308・309号土坑



第147図 20区 34・46・308・309号土坑

0 1:30 1m

320号土坑



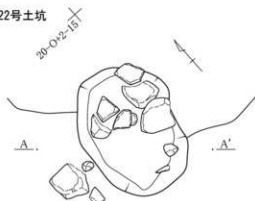
423号土坑



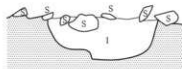
A-A' L=576.50m



322号土坑



A-A' L=580.00m



1、黒褐色土。

0 1:30 1m

第148図 20区 320・322・423号土坑

比定した。

20区21号墓坑(145図:PL42)

調査年度 平成16年度

位置 A・B-16・17

経過 調査は平成16年度に行われた。遺構の北東側を中心に大型の礫が出土した。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 95号住居(堀之内1)と重複し、これを切る。

形状 遺構の一部は欠損しているが、平面形状は長方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸は116cmまで測れた。短軸60cm、

深さは63cmであった。

方位 N-36°-E

遺物 「至和元寶」2点が出土した。

人骨 約40歳代の男性。

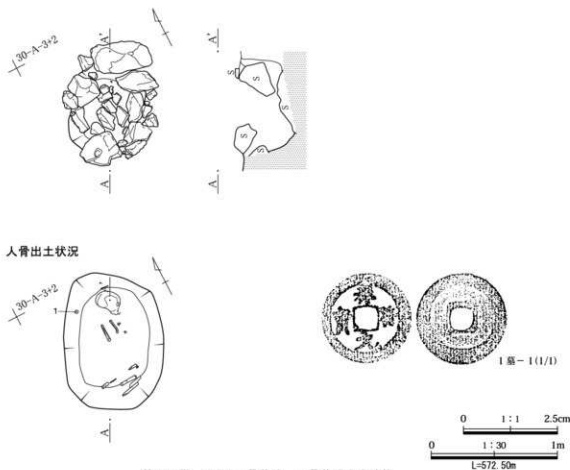
時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区22号墓坑(146図:PL42・43)

調査年度 平成16年度

位置 N-9

経過 調査は平成16年度に行われた。遺構上面からは大型の礫が出土した。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。



第149図 29区1号墓坑、1号墓坑出土遺物

重複 20区119号住居(加曾利E3)と重複し、これを切る。

形状 平面形状は長方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 遺構上面に礫が多く、規模はおよそである。長軸147cmほど、短軸113cmほど。深さは63cmほどであった。

方位 N-26°-E

遺物 「乳元通寶」1点、判読困難な銭貨1点が出土。鉄滓も出土した。

人骨 約30歳代の男性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

20区34号土坑

20区屋敷跡関連で報告。渡来銭のみ出土した。

20区46号土坑

20区屋敷跡関連で報告。渡来銭のみ出土した。

20区231号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

遺構は未確認であるが、「政和通寶」1点が出土。

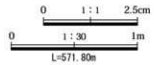
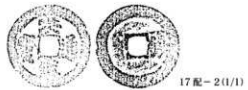
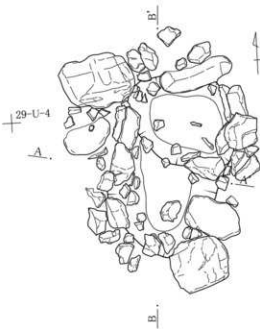
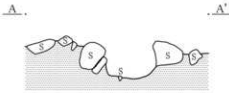
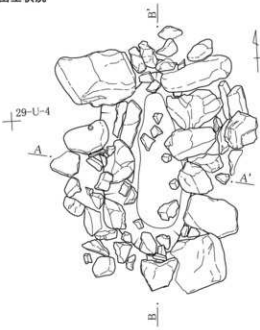
20区308・309号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

遺物の記載に混乱があり、どちらの土坑出土か判然としないが、「開元通寶」、「皇宋通寶」各1点が出土した。

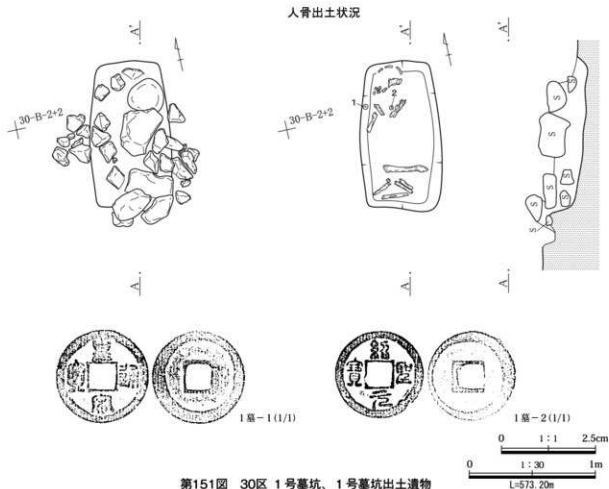
20区320号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査所見には骨片出土とあったが、確認することはできなかった。

出土状況



第150図 29区 17号配石、17号配石出土遺物



20区322号土坑〔横壁(6)〕で報告済み

調査所見には中世銭貨出土とあったが、確認することはできなかった。

人 骨 なし

時 期 中世。出土遺物より、本土坑を当該期に比定した。

20区423号土坑〔横壁(6)〕で報告済み

調査年度 平成13年度

位 置 H-18・19

経 過 調査は平成13年度に行われた。遺構形状や規模から、墓坑ではない可能性も考えられる。

重 複 なし

形 状 平面形状は不整形、断面形状はすり鉢状を呈する。

規 模 長軸49cm、短軸48cm。深さは26cmであった。

方 位 不明

遺 物 「景德元寶」1点出土。

29区1号墓坑(149回：PL43)

調査年度 平成10年度

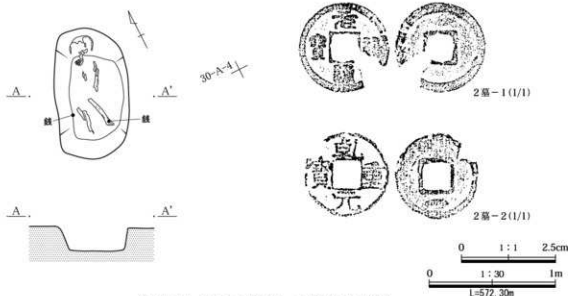
位 置 Y-3

経 過 調査は平成10年度に行われた。遺構上面からは大型の礎が多数出土した。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重 複 23号住居(縄文後期)と重複し、これを切る。

形 状 平面形状は楕円形、断面形状は円筒状か。

規 模 長軸106cm、短軸90cm。深さは48cmであった。



第152図 30区 2号墓坑、2号墓坑出土遺物

方位 N-31°-E

遺物 「祥符元寶」1点が出土した。

人骨 約30歳代の女性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

29区17号配石 (150図：PL43)

調査年度 平成11年度

位置 T-3・4

経過 調査は平成11年度に行われた。墓坑として報告するが、縄文時代の配石である可能性も否定できない。遺構上面を中心に大型の礫が多数出土した。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 14号土坑(加曾利B)と重複し、これを切るか。

形状 平面形状は楕円形か。断面形状は浅い円筒状か。

規模 遺構上面に礫が多く、規模はおよそである。長軸206cmほど、短軸153cmほど。深さは49cmほどであった。

方位 N-4°-E

遺物 「祥符元寶」、「洪武通寶」各1点が出土した。

人骨 約30歳代の女性。

時期 中世か。出土遺物等から、本配石を当該期の可能性が高いと判断した。

30区1号墓坑 (151図：PL43)

調査年度 平成10年度

位置 A-2

経過 調査は平成10年度に行われた。遺構上面を中心に大型の礫が多数出土した。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 30区33a号住居(堀之内1・2)と重複し、これを切る。

形状 平面形状は長方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

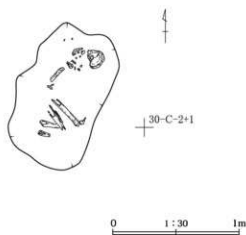
規模 長軸118cm、短軸68cm。深さは48cmであった。

方位 N-15°-E

遺物 「皇宋通寶」、「紹聖元寶」各1点が出土した。

人骨 約40歳代の女性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。



第153図 30区 3号墓坑

30区2号墓坑(152図:PL43・44)

調査年度 平成10年度

位置 A-3・4

経過 調査は平成10年度に行われた。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

重複 30区34号住居(高井東)と重複し、これを切る。

形状 平面形状は楕円形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 長軸104cm、短軸60cm。深さは約20cmと浅い。

方位 N-29°-E

遺物 「元祐通寶」、「寛元通寶」各1点が出土した。

人骨 約30歳代の男性。

時期 中世。出土遺物より、本墓坑を当該期に比定した。

30区3号墓坑(153図:PL44)

調査年度 平成9年度

位置 C-2

経過 調査は平成9年度に行われた。墓坑の北東側から頭骨が出土した。人骨の出土状況から、頭位は北東方向で、屈葬で埋葬されていたと思われる。

る。

重複 なし

形状 平面形状は長方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 長軸114cm、短軸66cm。深さは18cmと浅い。

方位 N-28°-E

遺物 約40歳代の男性。

時期 中世以降。遺構から人骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

30区14号配石(154図:PL44)

調査年度 平成9年度

位置 D-1

経過 調査は平成9年度に行われた。調査段階では縄文時代の配石遺構と認識されていたが、渡米銭が出土したことで墓坑の可能性が高いと判断し、ここで報告する。遺構上面を中心に大型の礫が多く出土した。

重複 なし

形状 平面形状は長方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 遺構上面には礫が多く、規模はおよそである。長軸149cmほど、短軸108cmほど。深さは51cmほどであった。

方位 N-89°-W

遺物 在土器鉢片、茶臼と思われる破片が出土した。「後漢五銖」と思われる銭貨も1点出土した。

人骨 なし

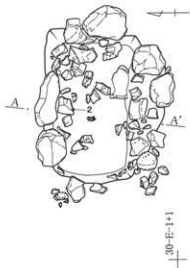
時期 中世か。出土遺物より、本配石を当該期に比定した。

30区19号配石(155図:PL44)

調査年度 平成10年度

位置 E・F-I

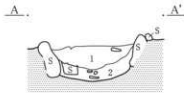
経過 調査は平成10年度に行われた。調査段階では縄文時代の配石遺構と認定されていたが、銭貨が出土したことで墓坑の可能性が高いと判断し、



14配-1



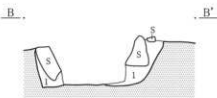
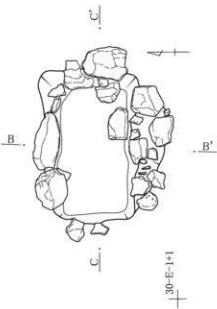
14配-2(1/1)



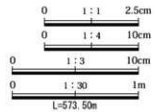
1、黒褐色土、地山土を含む。
2、黄色地山土主体。



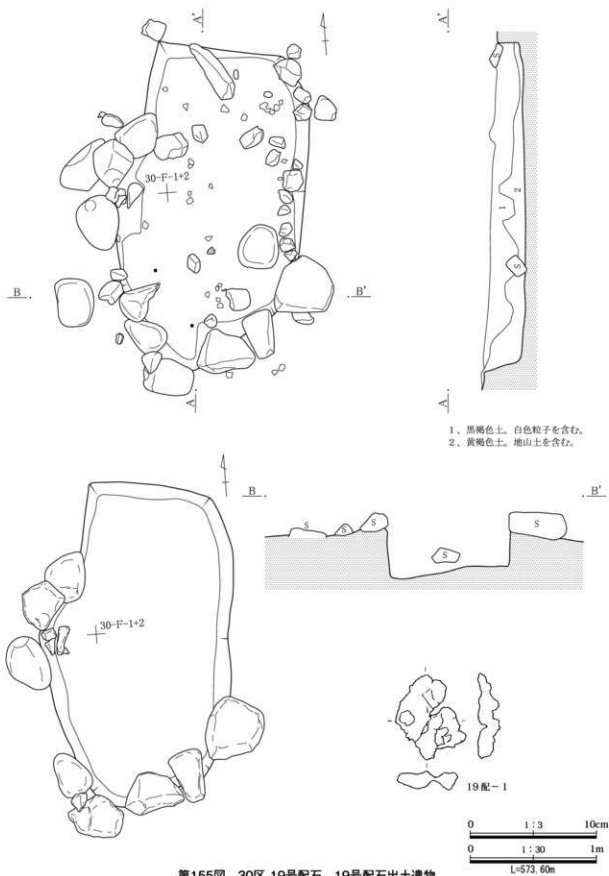
14配-3(1/4)



1、黒褐色土、炭化物をわずかに含む。

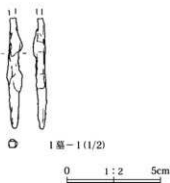
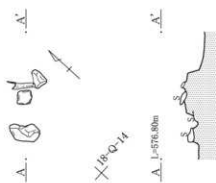


第154図 30区 14号配石、14号配石出土遺物

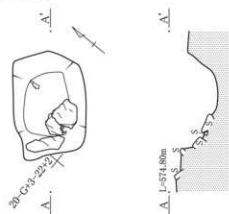


第155図 30区 19号配石、19号配石出土遺物

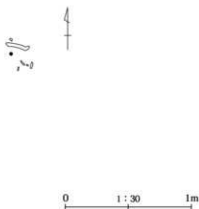
18区1号墓坑



20区10号墓坑



20区12号墓坑



第156図 18区1号・20区10・12号墓坑、18区1号墓坑出土遺物

ここで報告する。ただし、整理段階では銭貨を確認することはできなかった。遺構上面を中心に大型の礫が出土した。

重複 なし

形状 平面形状は長方形、断面形状は円筒状を呈する。

規模 遺構上面には礫が多く、規模はおよそである。長軸279cmほど、短軸219cmほど。深さは52cmほどであった。

方位 N-8°-E

遺物 調査所見には銭貨出土とあるが、整理段階では確認できなかった。鉄滓1点が出土した。

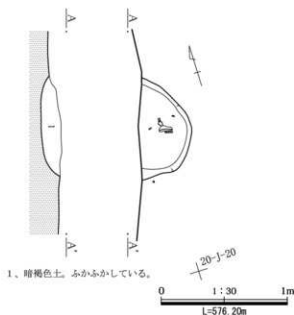
人骨 なし

時期 中世以降か。出土遺物も少なく、時期は特定できない。

(2) 獣骨出土遺構

ここでは、獣骨が出土した遺構について報告する。覆土中に混在して出土したと思われる遺構もみられるが、多くは土坑状の掘り込みから獣骨が出土している。ここでは土坑状の掘り込みから獣骨が出土した遺構について報告したい。

遺構から出土した獣骨はウマが多く、獣骨の種類が確認できた7基のうち6基とその大半を占めてい



第157図 20区 230号土坑

た。前述の通り20区屋敷跡の掘立と重複するような出土例もみられた。カワラケなどが共伴したことから地鎮の目的があったとも考えられる。

獣骨が出土した遺構10基のうち、半数近い4基が20区屋敷跡内で検出されたが、出土した獣骨はすべてウマであった。また遺物が共伴する例もあり、20区6号墓坑ではカ瀬戸緑軸小皿が、20区13号土坑ではカワラケなどが出土した。丁寧に埋葬された可能性も考えられる。

以下、獣骨が出土した遺構10基について報告する。

18区1号墓坑(156図：PL45)

調査年度 平成13年度

位置 P・Q-14

経過 調査は平成13年度に行われた。調査段階の資料がなく、獣骨が出土した以外の状況は不明。遺構形態や出土位置も分からないため、全体図にも掲載できなかった。

重複 不明

形状 不明

規模 不明

方位 不明

遺物 釘1点が出土した。

獣骨 成体のウマ。

時期 中世以降。出土遺物等より、本遺構を当該期に比定した。

20区2号墓坑

20区屋敷跡関連で報告。獣骨(ウマ)が出土。

20区3号墓坑

20区屋敷跡関連で報告。獣骨(ウマ)が出土。

20区6号墓坑

20区屋敷跡関連で報告。獣骨(ウマ)が出土。

20区10号墓坑(156図：PL44)

調査年度 平成12年度

位置 G-22

経過 調査は平成12年度に行われた。調査所見では、遺構規模が小さく獣骨の出土量も少ないことから、祭祀の可能性が指摘されていた。

重複 なし

形状 平面形状は長方形、断面形状はすり鉢状を呈する。

規模 長軸82cm、短軸58cm。深さは34cmであった。

方位 N-50°-E

遺物 なし

獣骨 約2歳以上のウマ。

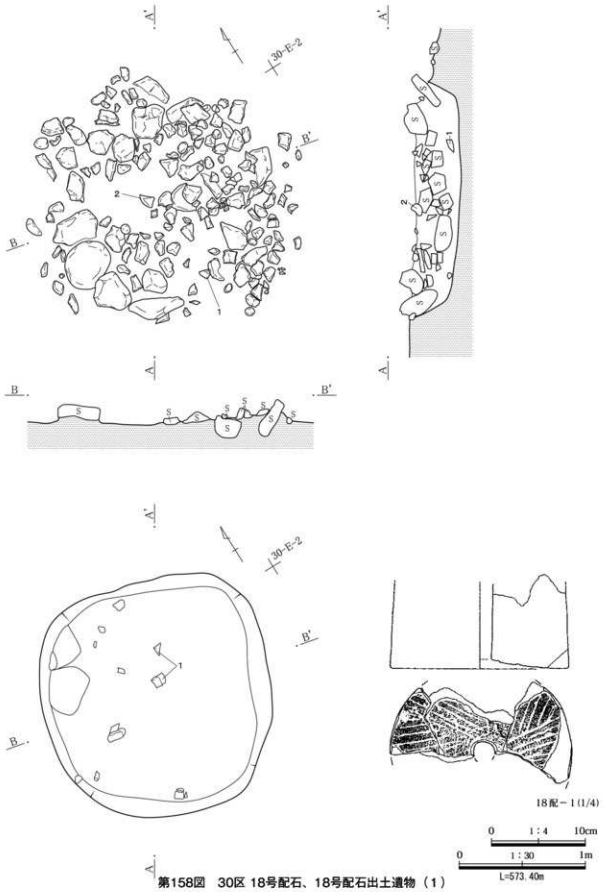
時期 中世以降。遺構から獣骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区12号墓坑(156図)

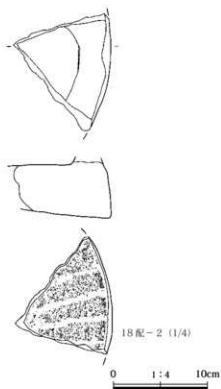
調査年度 平成12年度

位置 不明

経過 調査は平成12年度に行われた。当初は骨の出土から墓坑と認定したが、その後獣骨であることが確認できた。ただし、獣骨出土状況以外の資



第158図 30区 18号配石、18号配石出土遺物(1)



第159図 30区 18号配石出土遺物(2)

料がなく、出土位置も確認できない。全体図にも掲載できなかった。

重複 不明

形状 不明

規模 不明

方位 不明

遺物 なし

獣骨 遺存状態が悪く、死亡年齢や種は不詳。

時期 中世以降。遺構から獣骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区13号土坑

20区屋敷跡関連で報告。獣骨(ウマ)が出土。

20区230号土坑(「横壁(6)」で報告済み)

調査年度 平成12年度

位置 I・J-20

形状 遺構の大半が欠損しており、形状は判然

としないが、およそ円形か。断面形状はおおよそ皿状か。

規模 長軸(69)×短軸(44)×深さ16cm。

方位 不明

遺物 なし

獣骨 約8.5歳のニホンジカの下顎骨。

時期 中世以降

30区18号配石(158・159図)

調査年度 平成10年度

位置 E-1・2

経過 調査は平成10年度に行われた。当初は縄文時代の配石遺構と認定されていたが、獣骨が出土したためここで報告する。遺構からは多数の鏝が出土した。

重複 30区23号土坑(縄文後期)と重複し、これを切る。

形状 平面形状は隅丸方形、断面形状は浅い円筒状を呈する。

規模 長軸192cm、短軸186cm。深さは50cmであった。

方位 不明

遺物 茶臼の上臼、粉挽き形の上臼が出土した。

獣骨 遺存状態が悪く、死亡年齢や種は不詳。

時期 中世以降か。出土遺物等より、本遺構を当該期に比定した。

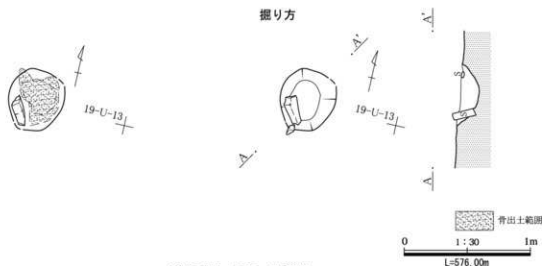
19区1号墓坑(160図：PL45)

調査年度 平成14年度

位置 U-12・13

経過 調査は平成14年度に行われた。当初は骨の出土から墓坑と認定されたが、その後獣骨の可能性も指摘された。ただし、出土量も少なく遺存状態も悪かったため、詳細は不明。遺構に伴わない可能性もある。また、遺構規模は小さく、ここでの記載に適さない遺構とも考えられるため、最後に報告する。

重複 19区36号住居(縄文後期)と重複し、こ



第160図 19区 1号墓坑

れを切る。

形状 平面形状は円形、断面形状は皿状を呈する。

規模 長軸50cm、短軸45cm。深さは19cmと浅い。

方位 不明

遺物 なし

時期 中世以降。遺構から獣骨以外の出土遺物がなく、時期は特定できない。

11 溝

横壁中村遺跡からは、19区で3条、20区で1条の溝が出土した。20区1号溝は、20区屋敷跡内にある1号石垣の一部である可能性が高い。そのため、20区屋敷跡で検出された1号石垣とともに報告した。19区2号及び3号溝は、並行し直行する溝である。発掘調査前の現況図と比較すると、地境に沿うような溝にも思われる。他の遺構の痕跡である可能性も考えられる。

以下、各溝ごとに報告する。

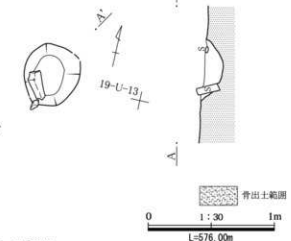
19区1号溝(161図：PL45)

調査年度 平成13年度

位置 T-22・23

経過 調査は平成13年度に行われた。遺存状

掘り方



態が悪く、溝としてもごく一部のみを確認しただけだが、出土状況から南から北へ傾斜する溝と考えられる。土層注記がなく、溝の性格については判断しがたい。

重複 19区68号土坑(中世以降)と重複も、切り合い関係は不明。

形状 遺存状態が悪く判然としないが、およそ直線状の溝と思われる。

規模 長さ8m、幅1.8mほど。深さは50cmほどであった。

遺物 なし

時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

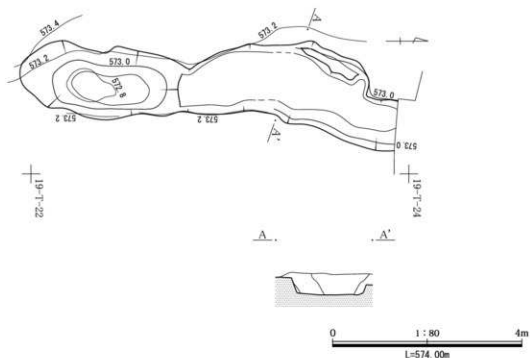
19区2号溝(162図：PL45)

調査年度 平成15年度

位置 S-14～16、T-16・17、U-17・18

経過 調査は平成15年度に行われた。直線状の溝で、同様の形状を示す3号溝と並行するように検出された。前述の通り、発掘調査前の現況図と比較すると、地境に沿うような溝にも思われる。他の遺構の痕跡である可能性も考えられる。土層注記がなく、溝の性格については判断しがたい。

重複 19区38号住居、143号土坑、6号焼土遺構(すべて縄文)と重複し、すべてを切る。



第161図 19区 1号溝

形状 直線状の溝。3号溝と並行する。
規模 長さ17.9m、幅0.7mほど。深さは20cmほどと浅い。
遺物 なし
時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

cmほどと浅い。
遺物 なし
時期 中世以降。遺構からの出土遺物がなく、時期は特定できない。

20区 1号溝

20区屋敷跡関連で報告。20区1号石垣の一部か。

19区 3号溝 (162図)

調査年度 平成15年度

位置 S-16・17、T-17・18

経過 調査は平成15年度に行われた。直線状の溝で、同様の形状を示す2号溝と並行するように出土した。前述の通り、発掘調査前の現況図と比較すると、地境に沿うような溝にも思われる。他の遺構の痕跡である可能性も考えられる。土層注記がなく、溝の性格については判断しがたい。

重複 19区8・43号住居(ともに縄文)と重複し、ともに切る。

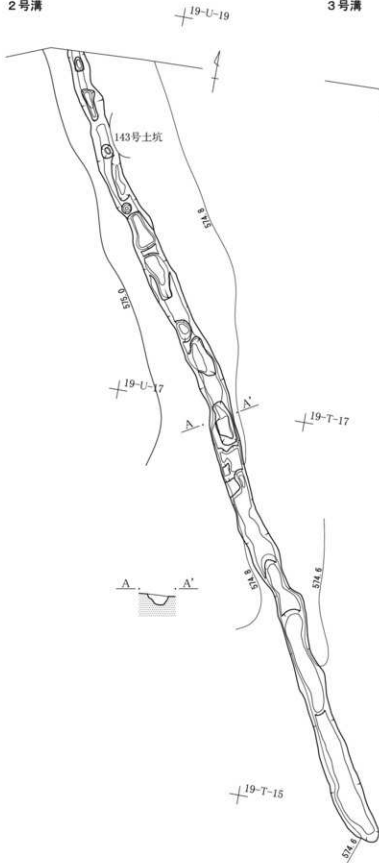
形状 直線状の溝。2号溝と並行する。
規模 長さ10.3m、幅0.6mほど。深さは30

12 ヤックラ

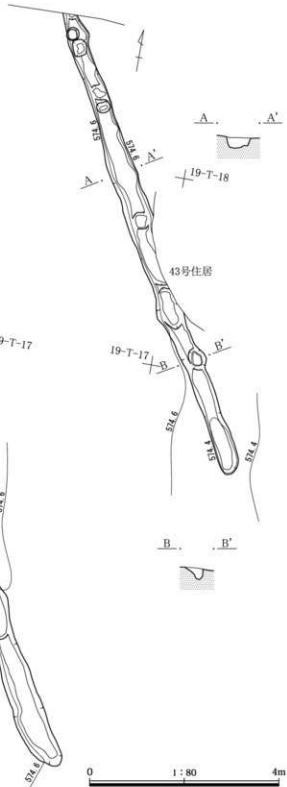
ヤックラとは、地山中に多く混在する不要な礫をまとめて廃棄した集石状の遺構である。地境などに多く、この地域では通称「ヤックラ」と呼称している。時期も判然とせず、遺構として捉えるべきかも判断しがたい。本書では、調査段階の呼称を優先させる意味でも、また出土した遺物のおよその位置を知る上でも、各ヤックラについて報告したい。

遺物の中にはヤックラとのみ注記されたものもあった。限られた整理期間では、すべての課題を解決することはできないため、これまでと同様に調査段階の記載を優先してヤックラとのみ報告したい。

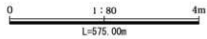
2号溝



3号溝



第162図 19区 2・3号溝



第3章 発見された遺構と遺物

ここで報告するヤックラは、20区の3箇所と20区6号列石である。6号列石は、調査段階では縄文時代の列石と認定されていたが、ヤックラの可能性が高いとしてここで報告する。

以下、各遺構ごとに報告する。

20区1号ヤックラ(163・164図：PL45)

調査年度 平成12年度

位置 F-17、G-16～19、H-16～22、I-15～22、J-15・16

経過 調査は平成12年度に行われた。大型の礫が直線状にあり、その中を小型の礫が充填するような形態である。

重複 20区14号配石(縄文)、399・406・412(ともに中世以降)・423(中世)号土坑、2・7号掘立柱建物(ともに縄文)、8号石垣(中世以降)と重複。14号配石、2・7号掘立柱建物を切るも、その他の遺構との切り合い関係は不明。

形状 およそ直線状。

規模 長さは27.2m、幅は10.3mほどであった。

遺物 古瀬戸後期の即皿や内耳土器片とともに、近世陶磁器が出土。出土遺物の時期幅は広い。上白や石鉢も出土した。

時期 中世以降。ヤックラという遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物などから、本ヤックラを当該期に比定した。

20区2号ヤックラ(163～165図：PL46)

調査年度 平成15・16年度

位置 E-14・15、F-14～16、G-15・16

経過 調査は平成15・16年度に行われた。一部には、1号ヤックラと同様に、大型の礫が直線状にあり、その中を小型の礫が充填するような形態であった。礫が充填されたまっすぐな道状にも見える。

重複 20区122号住居(加曾利E3)、502・508・509・643(ともに縄文)・645・649(ともに中世以降)号土坑、15・16号石垣(ともに中世

以降)、1号石囲い遺構(中世以降)、6号列石(中世以降)と重複。122号住居、502・508・509・643号土坑を切るも、その他の遺構との切り合い関係は不明。

形状 およそ直線状。

規模 長さは7.3m、幅は3.8mほどであった。

遺物 在土器では、内耳土器や鉢が出土。近世陶磁器も比較的多くみられた。出土遺物の時期幅は広い。眼骨も出土した。成体のニホンジカであった。

時期 中世以降。ヤックラという遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物などから、本ヤックラを当該期に比定した。

20区3号ヤックラ(163・166図：PL46)

調査年度 平成16年度

位置 L・M-10

経過 調査は平成16年度に行われた。3号ヤックラは小規模であり、礫を充填したような形態であった。

重複 20区116号住居(加曾利E3)、650号土坑、2号石囲い遺構(ともに中世以降)と重複。116号住居を切るも、その他の遺構との切り合い関係は不明。

形状 不定形

規模 長さは4m、幅は1mほどであった。

遺物 粉挽き形の下白が出土した。

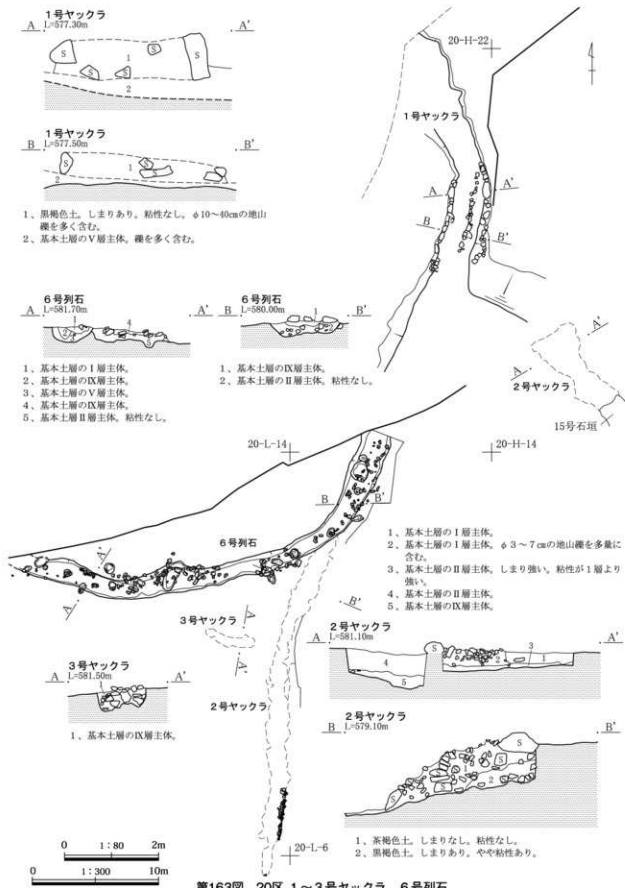
時期 中世以降。ヤックラという遺構の特徴から時期を特定することは難しい。出土遺物などから、本ヤックラを当該期に比定した。

20区6号列石(163図：PL46)

調査年度 平成16年度

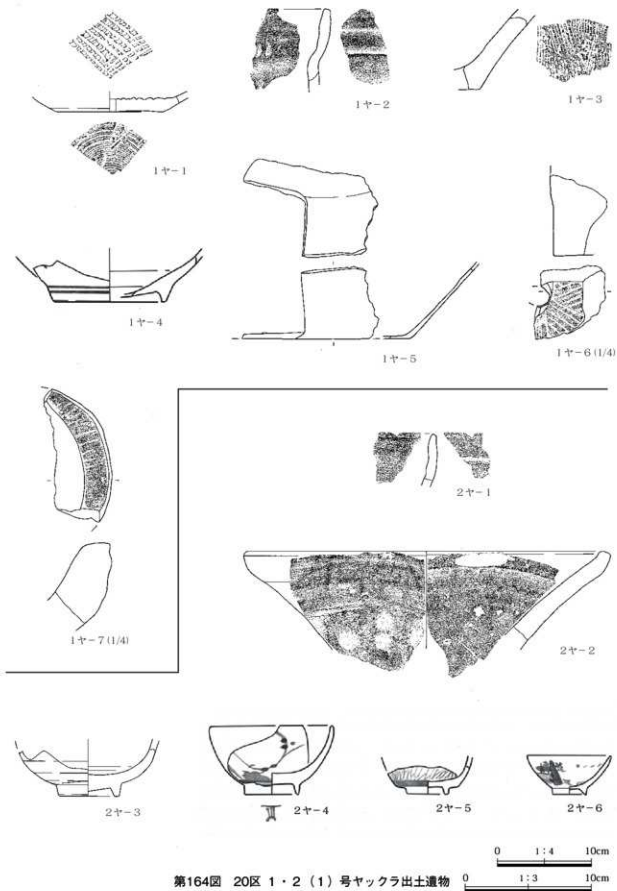
位置 J-12～14、K-11～13、L-11・12、M-11、N-11・12、O～Q-11

経過 調査は平成16年度に行われた。調査段階では縄文時代の列石として認定されていたが、整理段階に列石ではなくヤックラの可能性が高いと判

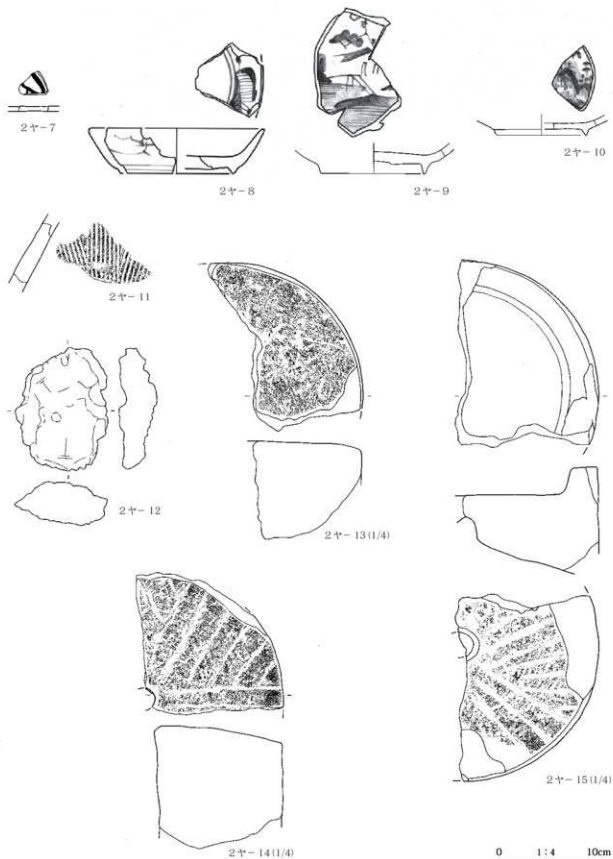


第163図 20区 1~3号ヤックラ、6号列石

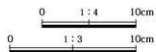
第3章 発見された遺構と遺物

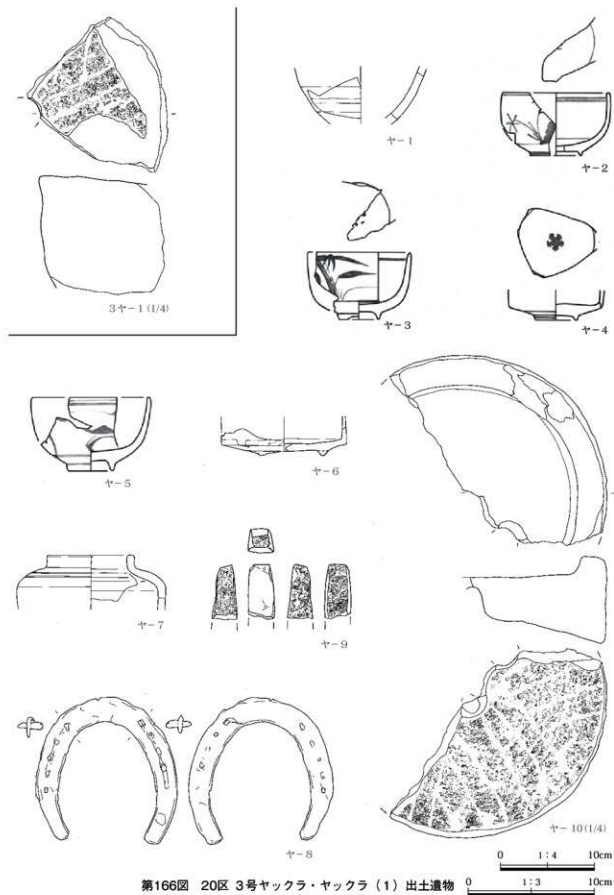


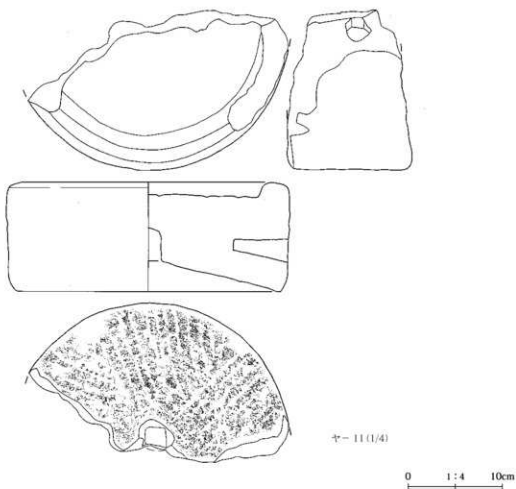
第164図 20区 1・2 (1)号ヤックラ出土遺物



第165図 20区 2号ヤックラ出土遺物 (2)







第167図 20区 ヤックラ出土遺物(2)

断されたため、ここで報告する。礫が充填されたような形態であった。

重複 20区116号住居(加曾利E3)、2号ヤックラ(中世以降)、554・586・595・599・602・603・611～617・620～628・631・633(ともに中世以降)号土坑と重複。116号住居を切るも、その他の遺構との切り合い関係は不明。

形状 緩やかに弧状を描く。

規模 長さは31m、幅は4mほどであった。

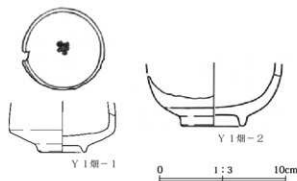
遺物 なし

時期 中世以降。出土遺物もなく、遺構の特徴からも時期を特定することは難しい。

13 天明泥流下畑

横壁中村遺跡では、29区で天明三(1783)年浅間山噴火に伴う泥流に埋没した畑跡が出土している。天明泥流下畑として調査された面積は320㎡と、横壁中村遺跡のごく一部である。

この天明泥流下畑については、既に「久々戸遺跡・中標II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」の中で「横壁中村遺跡 Y1号畑」として報告されている。その際は、掲載すべき遺物が確認できなかったとしていたが、その後の整理作業の中でY1号畑出土遺物が確認できた。本書では、遺物のみ2点を報告したい。遺構図は付図1に掲載されているが、遺構の詳細については「久々戸遺跡・中標II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」を参照していただきたい。



第168図 29区 Y1号畑出土遺物

29区 Y1号畑(久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡)で報告済み)

調査年度 平成11年度

位置 19区H～K-24・25、L-25、29区H～J-1、K-1・2、L-1～4、M-1～5、N-2～5、O-3～6、P-4～6

重複 なし

遺物 肥前産青磁染付碗や陶胎染付碗が出土した。

時期 天明三(1783)年

第5節 遺構外出土遺物

ここでは出土した陶磁器を中心に、遺構外出土遺物を概観したい。横壁中村遺跡は、縄文時代中期後半から後期前半の大規模な集落跡を含む複合遺跡である。特に縄文時代から弥生時代中期前半頃までの遺物量は多く、これまでも多くの遺構や遺物が報告されている。しかし、本遺跡において弥生時代中期後半から9世紀中頃までに比定できる遺構は確認できていない。報告する住居も9世紀後半が中心であり、長く継続しないことも確認できた。横壁中村遺跡では縄文土器を中心に遺構外出土遺物が多数ある。限られた整理期間にそのすべてを実見することはできなかったが、遺構外出土遺物の中に実測に耐える古代遺物がなかったことは、この様な地域性に起因するものと考えている。

中世に比定された陶磁器は、縄文土器の出土量に

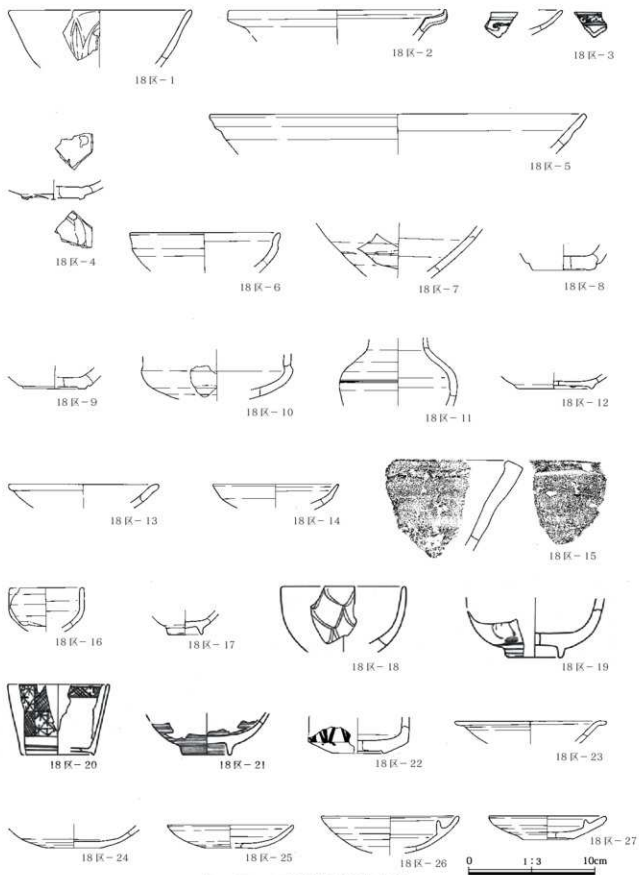
比べると少ない。そのため、本報告書では中世における横壁中村遺跡の様相を知る手掛かりとして、中世に比定された陶磁器、在地土器の総量把握を行った。詳細については第4章で詳述しているので、参照していただきたい。中世陶磁器は各調査区で出土したが、20区を中心に古瀬戸後期や15世紀頃に比定できる貿易陶磁器が多くみられた。また内耳土器も数多く、20区に限定しても500点近い破片数が確認できた(第180・181図参照)。18区では明確に中世と比定できる遺構はわずかであったが、青磁蓮弁文碗などの遺物が確認できた。本遺跡は地山に礫が多く遺構検出も難しいが、18区近隣も含め、より多くの中世遺構があった可能性は否定できない。

横壁中村遺跡で近世陶磁器が多く出土するようになるのは、17世紀後半頃からである。出土した近世陶磁器は、瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器が多くその大半を占めていた。瀬戸・美濃系陶磁器では、尾呂茶碗や腰錆茶碗、鉦茶碗などの碗類、菊皿や香炉、鬘皿などが確認できた。肥前系陶磁器では、「くらわんか」と呼ばれる碗や陶胎染付碗、青磁染付碗、呉器手碗、京焼風碗、三島手皿などが確認できた。ともに碗類が多い。また県内では類例の少ない、16世紀末～17世紀初頭に比定された鉄絵唐津(18区No.22)も確認できた。

石製品では、砥石や石臼、茶臼などが確認できた。茶臼がやや多いのは、中世屋敷があったことも関連すると考えている。金属製品では、釘や煙管、火打ち金などが確認できた。刀の一部(19区No.15)と思われる金属製品や円弾(29区No.21)、飾り金具? (18区No.32)もあった。しかし、形状も分からず器種も不明瞭な金属製品も多くみられた。

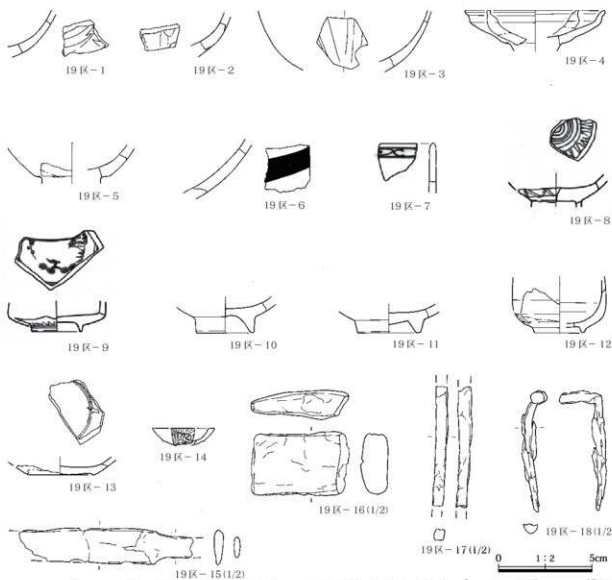
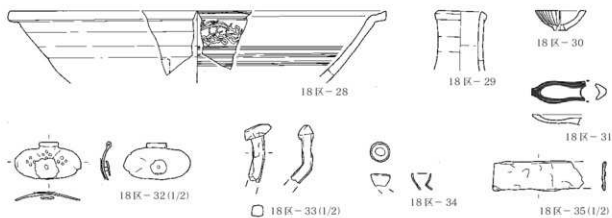
20区No.83は土製品と思われるが、形状も器種も不明である。鼠のような縁を持ち、内面に線刻が格子状にみられた。詳細は観察表及び実測図を参照していただきたい。

第5部 遺構外出土遺物

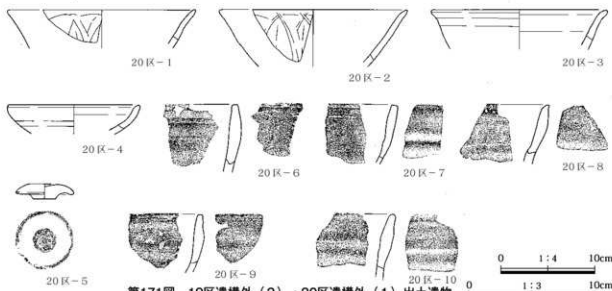
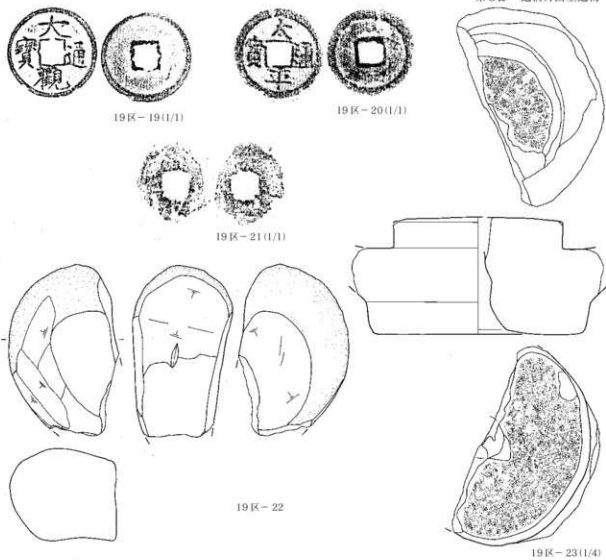


第169図 18区遺構外出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

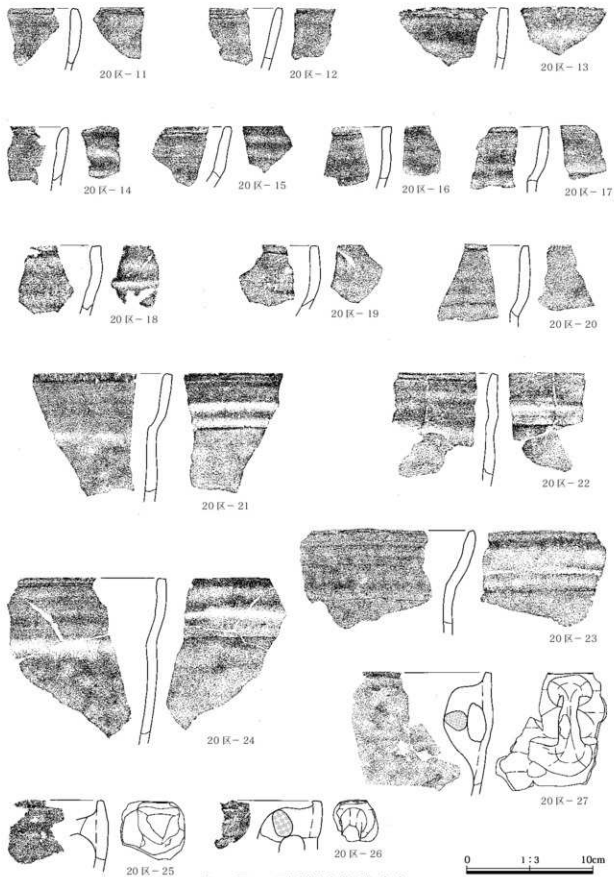


第170図 18区遺構外(2)・19区遺構外(1)出土遺物

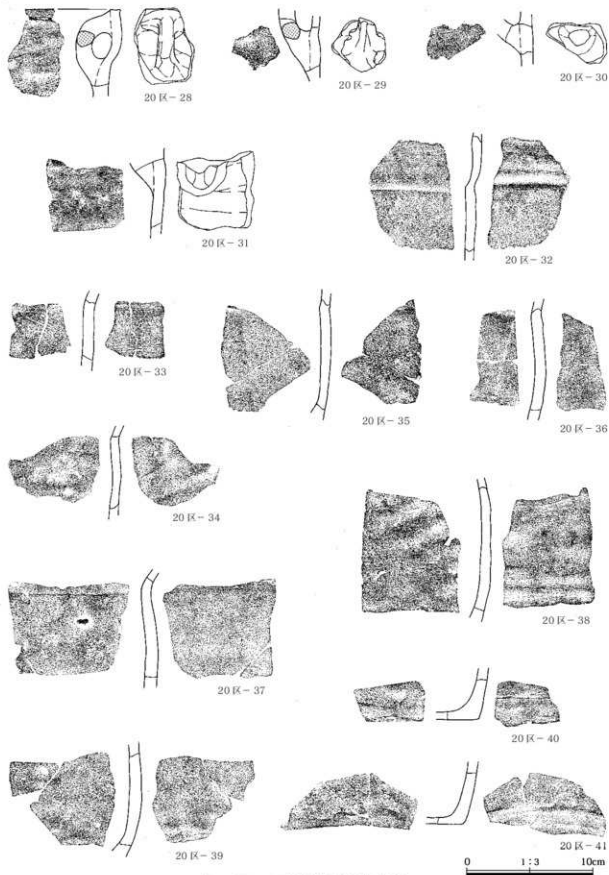


第171図 19区遺構外(2)・20区遺構外(1)出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

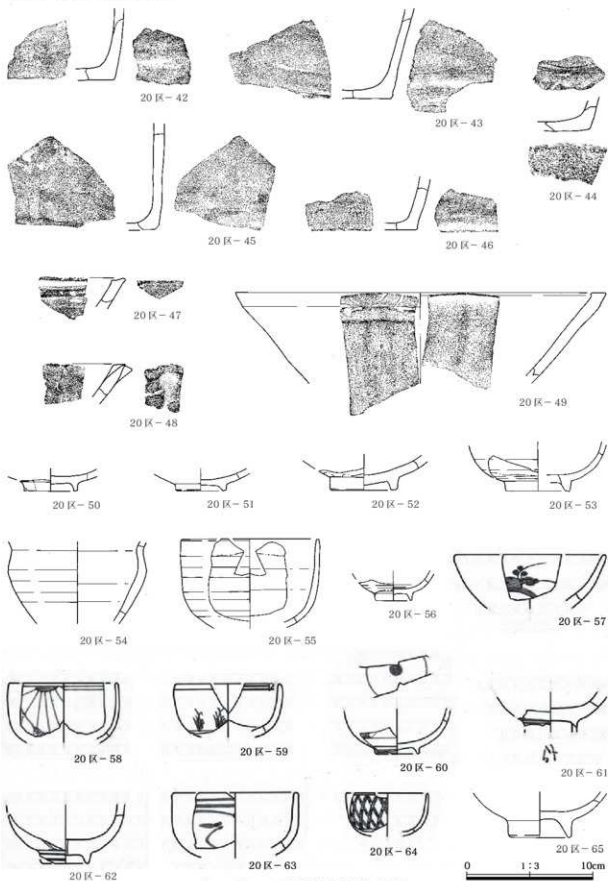


第172図 20区遺構外出土遺物(2)



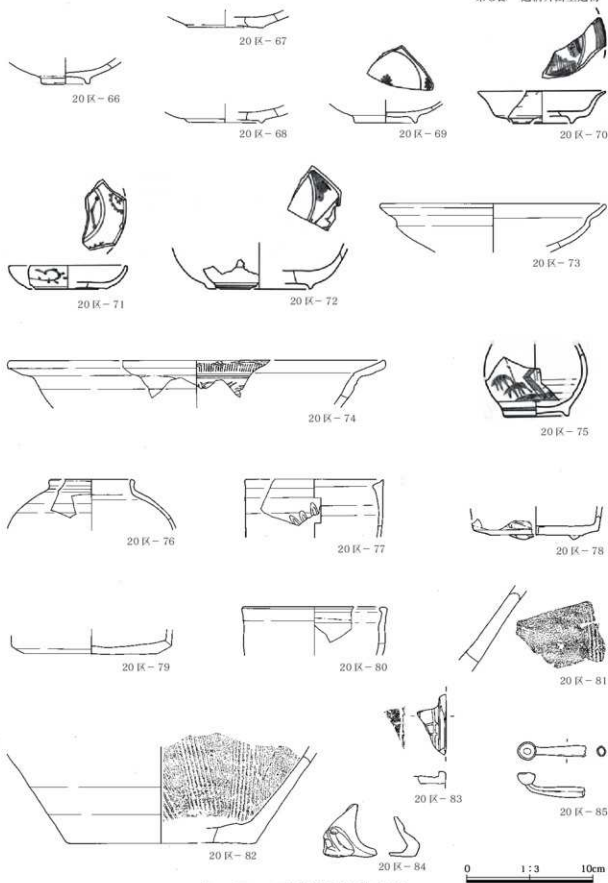
第173図 20区遺構外出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物



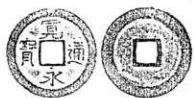
第174図 20区遺構外出土遺物(4)

第5節 遺構外出土遺物

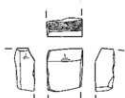


第175図 20区遺構外出土遺物 (5)

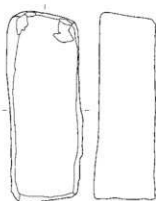
第3章 発見された遺構と遺物



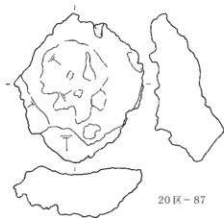
20 K-86 (1/1)



20 K-88



20 K-91



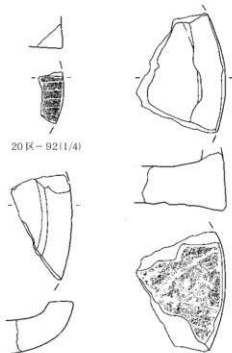
20 K-87



20 K-89



20 K-90



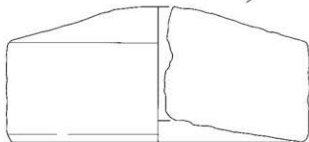
20 K-92 (1/4)

20 K-93 (1/4)

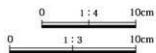
20 K-94 (1/4)



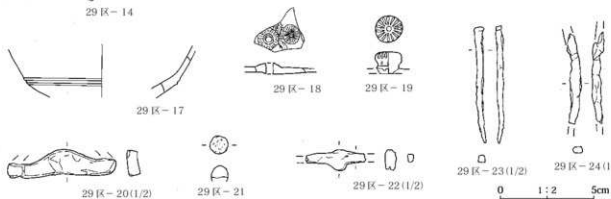
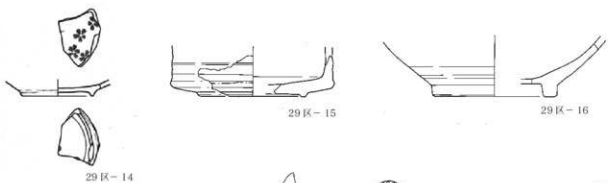
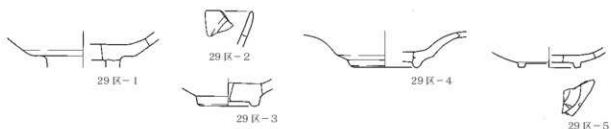
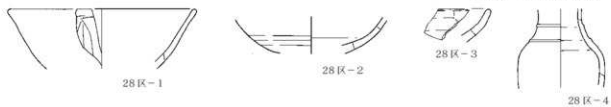
20 K-95 (1/4)



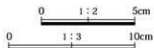
第176図 20区遺構外出土遺物 (6)



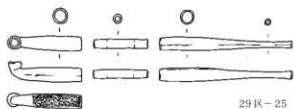
第5節 遺構外出土遺物



第177図 28区遺構外・29区遺構外(1)出土遺物



第3章 発見された遺構と遺物



29区-25

明徳
水方
明徳
蓋生蓋



29区-26



30区-1



30区-2



30区-3



30区-4



30区-5



30区-6



30区-7



30区-8



30区-9



30区-10



30区-11



30区-12



30区-13



30区-14



1



2



3

0 1:3 10cm

第178図 29区遺構外(2)・30区遺構外・遺構外出土遺物

第4章 調査の成果とまとめ

1 20区屋敷跡の変遷

20区屋敷跡では、9棟の掘立柱建物と4基の竪穴遺構が検出されたが、遺構出土遺物は少なく、遺構時期を判断する材料はわずかであった。また、遺構の切り合い関係を記した調査所見も確認できないため、屋敷にあった建物がどの様な変遷をたどったのか判断することは難しい。ここでは、少ない資料から屋敷地内で同時期であったろう掘立柱建物と竪穴遺構とを4グループに分け、20区屋敷跡のおよそその変遷について言及したいと考えている。

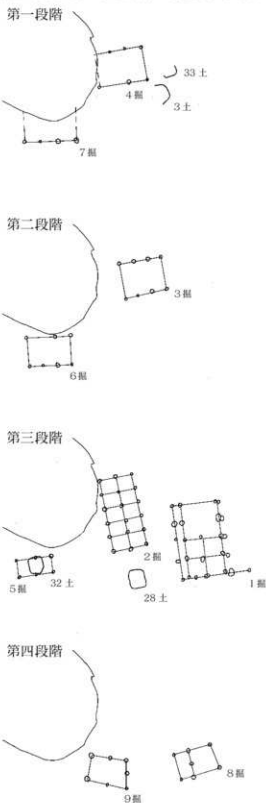
9棟の掘立柱建物のうち、実際に重複している建物は、2・3・4号掘立柱建物及び5・6・7号掘立柱建物である。少なくともこの二箇所で検出された各3棟の掘立柱建物は、同時には存在しない。そのうち一部欠損している掘立柱建物が、4・7号掘立柱建物の2棟である。そこで、この2棟が最も古い段階まで遡る可能性があるとして、第一段階と考えたい。また、3・33号土坑である竪穴遺構は、重複せず隣接するように出土していることから、仮に第一段階に含めておきたい。

第一段階の4・7号掘立柱建物と同様の形態であるのが、3・6号掘立柱建物である。建て替えられた建物とも考えられるが、少なくとも時期は近似していると考え、この2棟を第二段階と考えたい。

中世屋敷に相応しい大型の掘立柱建物として、1・2号掘立柱建物の2棟がある。これと近似した軸方向の掘立柱建物及び竪穴遺構を第三段階とした。具体的には、1・2・5号掘立柱建物と28・32号土坑である。1号掘立柱建物からは古瀬戸後期Ⅳ古の緑軸小皿が出土している。また中世陶磁器の総量把握も考慮し、第三段階を15世紀中～後半頃に比定しておきたい。20区屋敷跡から出土した遺物は、大半が中世、15世紀頃に取まり、あまり時期幅がないように思われる。これは20区屋敷跡で遺構重複がさほど顕著にみられないことでも頷け、屋敷として継続した期間は短かったと考えている。

最後に、他の建物と軸方向が異なる2棟の建物、8・9号掘立柱建物を第四段階としたい。

以上を踏まえ、20区屋敷跡の変遷を示したもの



第179図 20区屋敷跡変遷案

が第179図である。ここでは、柱穴間平均値等を考慮してさらに細分化することは避けている。資料が少ない中での細分化は、かえって状況を把握しにくくすると判断したためだ。また20区屋敷跡は15世紀頃の中世屋敷だと考えられるが、屋敷で検出された隔立柱建物すべてがその時期に比定できるかは判断としない。判断材料も少なく、屋敷の変遷も含め推測の域を出ないことはご容赦願いたい。

2 中世陶磁器総量把握の成果と課題

本書では中世における横壁中村遺跡の様相を知る手掛かりとして、中世に比定された遺物の総量把握を行った。具体的には、中世遺物のうち編年研究の進んでいる陶磁器、在土器についてその総量を破片数で数え、出土位置が確認できる遺物をグリッドごとに分けた。これを生産地別、時期別に出土量把握を行い、資料化したものが第180・181図である。なお、貿易陶磁器については小野正敏氏に、瀬戸・美濃系陶器については藤澤良祐氏に鑑定していただいた(第180・181図及び表12参照)。

第180図には、古代以降の全体図と在土器である内耳土器及び古瀬戸中期から大窯段階までの瀬戸・美濃系陶器の出土位置と破片数を掲載した。第181図には、貿易陶磁器をおよそ12～14世紀頃と15～16世紀頃に分け、出土位置と破片数を掲載した。

貿易陶磁器は28点確認できた。青磁蓮弁文の碗であるB1類が最も多く、可能性のあるものも含め15点を数えた。また青磁碗A類・皿Ⅲ類と比定された遺物も3点あった。貿易陶磁器については、13世紀中～14世紀前半を中心によく確認できたが、遺跡全域に散在するような出土状況であり、この時期に比定できる明確な遺構も確認できなかった。15～16世紀前半頃では青磁後花皿4点や白磁皿C群・B群が4点、染付碗B群が1点確認できた。出土量は少ないが、20区屋敷跡にやや集中するようにもみえる。

古瀬戸から大窯段階までの瀬戸・美濃系陶器は

38点確認できた。古瀬戸中期が3点、古瀬戸後期が32点、大窯期が6点であった。古瀬戸中期は、四耳壺(梅瓶か)1点と鉦皿1点であったが、梅瓶や四耳壺は伝世することが多く、遺構の時期を表していない可能性もある。古瀬戸では後期が最も数多く、特に古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ古段階が16点とその多くを占めていた。大窯は1段階がなく、大窯4段階が4点ほど確認できた。

在土器である内耳土器は585点確認できた。そのほかの在土器である鉢は7点、カワラケは2点のみであった。カワラケが少ないのは八ッ場地域の特徴と考えられる。在土器の鉢か少なく内耳土器が大半を占めるのは、本遺跡における中世段階の遺構が15世紀頃を中心にしていたためと考えている。前述の通り14世紀以前の貿易陶磁器はみられるが、古瀬戸中期はわずかで大窯期も少なく古瀬戸後期が大半を占めていることから、このことは首肯できる。しかし、14世紀以前の状況については、遺構もなく遺物が散在しているのみであり、その実態は明らかではない。

20区屋敷跡周辺からは多数の内耳土器や中世陶磁器が出土した。屋敷跡は30区T～J-1、20区T～J-18～25の範囲に位置する。ここで出土した在地土器、中世陶磁器は以下の通りである。

在地鉢3点

カワラケ1点

内耳土器401点

古瀬戸後期Ⅰ～Ⅲ合子蓋1点

古瀬戸後期Ⅱ緑軸小皿3点

(20区K0-24、29区KY-1、30区E-1各1点と接合)

古瀬戸後期Ⅳ古緑軸小皿3点

古瀬戸後期Ⅳ新天目茶碗1点

大窯3段階丸皿1点

青磁碗B1類1点

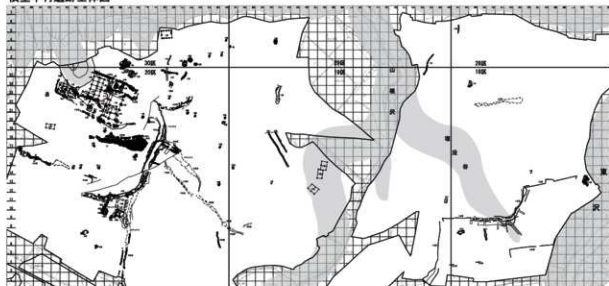
青磁後花皿1点

白磁皿B群1点

白磁皿C群1点

※数量は破片数。出土位置は180・181図及び付図2参照

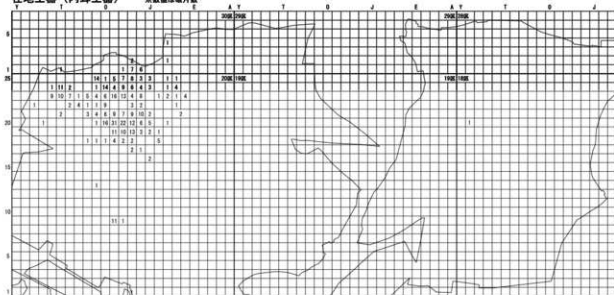
横壁中村遺跡全体図



在地土器 (内耳土器)

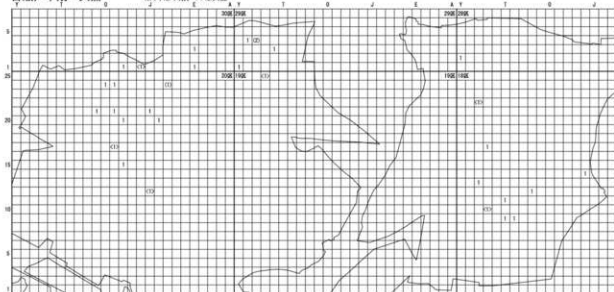
※数値は破片数

1/1,700



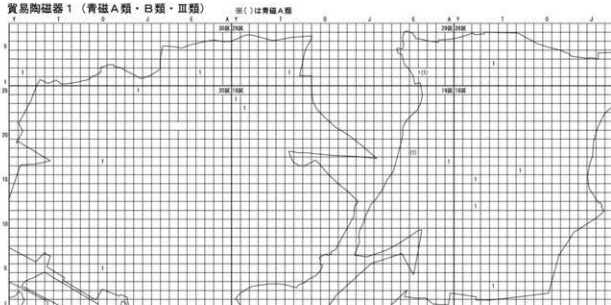
古瀬戸中期～大窯

※(<)は中期、>は大窯

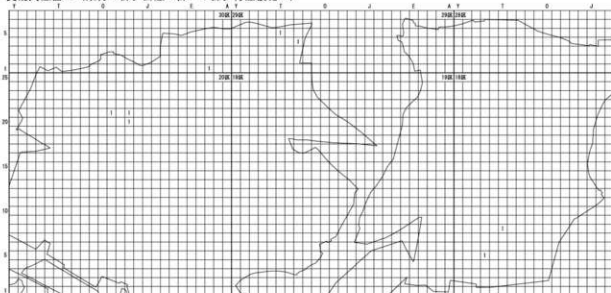


第180図 中世陶磁器出土数量 (1)

貿易陶磁器 1 (青磁A類・B類・Ⅲ類)



貿易陶磁器 2 (染付B群、白磁B群・C群、青磁稜花皿)

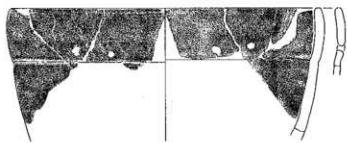


第181図 中世陶磁器出土数量 (2)

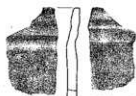
横壁中村遺跡出土の内耳土器は585点を数えるが、20区屋敷跡付近からはそのうちの401点が出土した。在地鉢やBⅠ類の青磁碗など、14世紀以前に遡るだろう遺物は少ない。また大窯もわずかだ。一方、古瀬戸後期Ⅳを中心に15世中～後半頃に比定できる遺物が多く確認できた。青磁稜花皿、白磁ⅢB群・C群も、15世紀前半～16世紀前半頃には取まるもので、古瀬戸後期Ⅳの出土量が多いこととも齟齬はない。20区屋敷跡は15世紀中～後半頃が中心であり、14世紀までは遡らず16世紀まで

は下らない中世屋敷数だと考えられる。

総量把握の結果を考慮し、屋敷の年代や本遺跡の中世の傾向に言及したが、限られた整理期間の中ですべての遺物を実見した成果ではない。整理作業は継続中であり、総量把握の結果が変更される可能性もあるだろう。今後も検討したいと考えている。また、掘り込みを持つ遺構で良好な共存関係が確認できた出土例はなく、遺跡全体をひとつの遺構のように扱った結果でもある。実際の様相をどれだけ反映しているか、今後も検証が必要だと考えている。



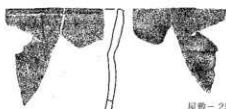
屋敷-60



屋敷-22



屋敷-62



屋敷-25



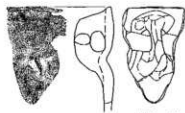
屋敷-29



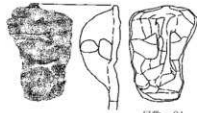
20区-28



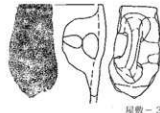
20区-27



屋敷-30



屋敷-31



屋敷-32



屋敷-28



屋敷-27



20区-25



第182図 横壁中村遺跡出土土内土器

第4章 調査の成果とまとめ

係ではない出土遺物で詳細な時期までは限定しかたないが、内耳土器も同様に、多くは15世紀中～後半頃に収まるものではないかと考えている。しかし、器高が確認できた内耳土器は1点と少ないが、やや低く疑問も残る(屋敷No.62)。八ッ場地域における信濃型内耳土器出土例も増えてきたが、良好な共存関係を持つ出土例は少なく、年代観については今後も検証が必要だと考えている。

最後に20区6号石垣からは、孔を穿ち内耳部分を付ける形態(6石垣No.1)の内耳土器が確認できたことを付け加えておく。

4 まとめ

ここでは、本書をまとめる中で得られた成果と課題について述べていく。

横壁中村遺跡では弥生中期後半以降、9世紀頃までの遺構や遺物が確認できなかった。これは八ッ場地域に認められる傾向でもある。本書では9世紀後半に比定できる住居9軒を報告したが、建物は重複せず近接しており、ほぼ同時期の住居と考えられる。また比較的規模の大きな住居もあり、竈は石組みで堅牢な作りのものもみられた。20区90号住居からは多数の遺物とともに、鉄製の紡錘車(90住No.36)や鋤先(90住No.35)、鉄滓(90住No.38・39)、砥石(90住No.40)が出土した。鋤先は、砥石とともに竈脇から出土しており注目される。また土師器の中には、県内平野部で多数出土するコノ字口縁の甕が多くみられた。甕を観察すると、器形は近似するものの整形が異なるものがあり、県内平野部との相違点も確認できた。また20区83号住居No.1の甕は、県内平野部ではほとんど出土例がない。また次年度以降の報告ではあるが、信濃地域を中心に出土例のある凸帯付四耳甕も出土しており、古代の八ッ場地域が、信濃とも密接に関わり合いを持っていたことが出土遺物からも確認できた。

横壁中村遺跡の中世は、20区屋敷跡が中心であり、他の地域では遺構も遺物も希薄であった。屋敷跡からは陶磁器のほかにも、石臼(屋敷No.93)

や茶臼(屋敷No.91・92ほか)、甕(屋敷No.78)などの石製品や鉄釜(屋敷No.67)や刀の一部(屋敷No.66)などの金属製品が出土した。時期不明な遺物もあるが、多くは屋敷に伴うものであり、中世屋敷の様相を伝える遺物だと考えている。また次年度以降に報告予定の調査区からは、中国産の天目茶碗口縁部片や中国産の壺?の底部片が確認できた。横壁中村遺跡が中世においてどのような地域であったのかを知るための、重要な遺物と考えている。

確認できた墓坑は、渡来銭の出土例が多いことから大半が中世に比定できるものと考えている。墓坑の多くは山根沢西側で検出されているが、屋敷跡からはほとんど確認できなかった。屋敷跡と同時期あるいは近似した時期に埋葬された可能性も考えられる。20区中央付近からは多くの鉄滓が出土している。これまでに報告された20区554号土坑や1号堅穴遺構、1・2号石囲い遺構は同様の軸方向であり、出土遺物からも、中世の鉄に係わる一連の遺構であった可能性も考えられる。

横壁中村遺跡の近世遺構の一部は、「久々戸遺跡・中欄II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」の中で報告されている。天明三(1783)年浅間山噴火に伴う火山性堆積物下の調査で、天明泥流下畑が検出されたが、これ以外、明確に近世と比定できた遺構は少ない。石垣についても、発掘調査前の現況図と比較すると地境に沿って出土しており、比較的新しい時期のものが多いと考えている。ただし、次年度以降の報告では五輪塔や一字一石経などの出土例もあり、今後、横壁中村遺跡の近世についてもさらに明らかになるものと考えている。

出土遺物では、中世の内耳土器は確認できたが密接は確認できなかった。八ッ場地域の遺跡発掘調査でも同様の出土傾向がみられ、西吾妻地域に認められる地域性だと考えている。また16世紀末～17世紀初頭に比定された鉄銚唐津が出土したが、確認できなかった中世末から近世初頭の遺構があったのかもしれない。次年度以降報告予定の調査区とともに検討していきたいと考えている。

横壁中村遺跡(10)出土中近世人骨

生物考古学研究所 橋崎 修一郎

はじめに

横壁中村遺跡は、群馬県長野原町に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成9(1997)年4月～同16(2004)年3月まで実施された。

本遺跡の19区・20区・29区・30区から、主に中世の人骨が出土したので以下に報告する。

出土した人骨は、水洗後、できる限りの接着復元後、観察・計測・写真撮影を行った。なお、出土歯の計測方法は、藤田の方法に従った。

1. 19区出土人骨

19区では、293号土坑から人骨が出土している。

(1) 293号土坑出土人骨[2004年4月26日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は円形を呈し、規模は直径約108cm～122cm・深さ約28cmである。

②副葬品：副葬品は、検出されていない。

③被葬者：本人骨は現場で保存処理が施され、土と人骨とが一緒に固められているため、十分な観察は不可能であった。しかしながら、出土人骨は、頭蓋骨、上腕骨、大腿骨、脛骨が確認できた。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：大腿骨及び脛骨の大きさが小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：観察可能な歯の咬耗度は一部象牙質が露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

2. 20区出土人骨

20区では、1号墓坑・4号墓坑・5号墓坑・8号墓坑・9号墓坑・11号墓坑・13号墓坑・14号墓坑・15号墓坑・16号墓坑・18号墓坑・19号墓坑・20号墓坑・21号墓坑・22号墓坑の、15基から人骨が出土している。

(1) 1号墓坑出土人骨[1999年11月8日・同9日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は

長軸約140cm・短軸約76cm・深さ約53cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の元豊通宝1点・熙寧元宝1点が検出されている。

③被葬者：人骨の残存状態は、あまり良くない。頭蓋骨片・遊離歯・四肢骨片が出土している。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土遊離歯の歯冠計測値が比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、約30歳代であると推定される。



写真1. 20区1号墓坑出土人骨[上顎歯咬合面観]

(2) 4号墓坑出土人骨[1999年10月22日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸約133cm・短軸約112cm・深さ約12cmである。

②副葬品：副葬品は、検出されていない。

③被葬者：出土人骨の残存状態は非常に悪く、わずかに遊離歯の乳歯の歯冠が出土している。

・埋葬：被葬者の埋葬状態は不明である。

・性別：永久歯が出土していないので、被葬者の性別は不明である。

・死亡年齢：歯冠のみで歯根が残存していないが、咬耗は認められないので、萌出前か萌出直後と考えられるため、被葬者の死亡年齢は約9ヶ月～1歳であると推定される。

(3) 5号墓坑出土人骨[1999年11月11日]

- ①土坑の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約162cm・短軸約91cm・深さ約55cmである。
- ②副葬品：副葬品は、銭貨の皇宋通宝1点・宣徳通宝1点・天聖元宝1点が検出されている。
- ③被葬者：人骨の残存状態は非常に悪く、わずかに遊離歯片が出土しているのみである。被葬者の性別は不明で、出土永久歯には咬耗が認められないことから、死亡年齢は約7歳～9歳であると推定される。土坑の大きさから、被葬者は伸展葬で埋葬された可能性が高い。

(4) 8号墓坑出土人骨[2000年8月2日～8月18日]

- ①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約136cm・短軸約84cm・深さ約38cmである。
- ②副葬品：副葬品は、銭貨の熙寧元宝2点・開元通宝1点・永樂通宝2点・景祐元宝1点が検出されている。
- ③被葬者：出土人骨の残存状態は、悪い。
- ・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北西にした屈葬で埋葬されたと推定される。
- ・性別：出土人骨の歯冠計測値は比較的小さく、四肢骨は小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。
- ・死亡年齢：出土遊離歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1度であるので、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。

(5) 9号墓坑出土人骨[2000年9月25日～27日]

- ①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約210cm・短軸約138cm・深さ約62cmである。
- ②副葬品：副葬品は、検出されていない。
- ③被葬者：人骨の出土部位は、全身に及ぶ。
- ・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。
- ・性別：大腿骨は大きく、頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。
- ・死亡年齢：下顎左M3(第3大臼歯)の歯根が一部完成していないため、被葬者の死亡年齢は約15歳～16歳であると推定される。歯の咬耗度も、エナメ

ル質のみのマルティンの1度である。

(6) 11号墓坑出土人骨[2000年10月4日出土]

- ①土坑の概要：土坑の形状は不整形を呈し、規模は直径約107cm～118cm・深さ約26cmである。
- ②副葬品：副葬品は、銭貨の開元通宝1点・元豊通宝1点が検出されている。
- ③被葬者：人骨の残存状態はあまり良くないが、少しずつ全身が出土している。
- ・埋葬：人骨の出土状況から、頭位を北にした屈葬で埋葬されたと推定される。
- ・性別：頭蓋骨の乳様突起及び四肢骨は、大きく頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：歯は検出されなかった。一部残存している、右下顎骨を観察すると、無歯顎である。また、頭蓋縫合の内、矢状縫合は内板及び外板共に癒合して消失しているため、被葬者の死亡年齢は老齢であると推定される。

(7) 13号墓坑出土人骨[2000年12月13日出土]

- ①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約133cm・短軸約113cm・深さ約51cmである。
- ②副葬品：副葬品は、検出されていない。
- ③被葬者：人骨の出土部位は、全身に及ぶ。
- ・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を西にした屈葬で埋葬されたと推定される。
- ・性別：四肢骨は比較的小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。
- ・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。但し、全般的に咬耗は少ない。また、矢状縫合は内板及び外板共に癒合している状態である。被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。但し、全般的に咬耗は少ない。また、矢状縫合は内板及び外板共に癒合している状態である。被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

(8) 14号墓坑出土人骨[2000年12月13日出土]

- ①土坑の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約113cm・短軸約60cm・深さ約23cmである。
- ②副葬品：副葬品は、検出されていない。
- ③被葬者：人骨の出土部位は、全身に及ぶ。
- ・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東

にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土人骨の四肢骨及び歯冠計測値が大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状及び面状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。被葬者の死亡年齢は、約40歳代であると推定される。

・古病理：上顎左右M3(第3大臼歯)に、歯冠が崩壊し歯根のみになった状態の齶触が認められた。

(9) 15号墓坑出土人骨[2001年6月28日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約156cm・短軸約111cm・深さ約14cmである。

②副葬品：副葬品は、検出されていない。

③被葬者：人骨の残存状態は、非常に悪い。わずかに、大腿骨片が出土している。しかしながら、大腿骨は土坑の東側から出土しているため、被葬者は頭位を西側にした屈葬で埋葬されたと推定される。性別及び死亡年齢は、不明である。恐らく成人であると推定される。

(10) 16号墓坑出土人骨[2001年7月6日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約112cm・短軸約87cm・深さ約33cmである。

②副葬品：副葬品は、検出されていない。

③被葬者：出土人骨の残存状態は、悪い。わずかに、脛骨片のみが出土している。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土脛骨の大きさが比較的小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：成人であると推定される。

(11) 18号墓坑出土人骨[2001年8月20日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は不整形を呈し、規模は直径約116cm～133cm・深さ約44cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の大観通宝1点・元豊通宝1点・聖宋元宝1点・天聖元宝1点が検出されている。

③被葬者：出土人骨の残存状態は、悪い。わずかに、上腕骨片と大腿骨片のみが出土している。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：上腕骨と大腿骨は、大きさが比較的小さく華奢であるため、性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：成人であると推定される。

(12) 19号墓坑出土人骨[2001年9月21日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約102cm・短軸約66cm・深さ約37cmである。

②副葬品：副葬品は、元符通宝1点・朝鮮通宝1点・紹聖元宝1点が検出されている。

③被葬者：人骨の残存状態は、あまりよくない。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土人骨の歯冠計測値は、比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

・古病理：出土歯のほとんどに、齶触が認められた。

(13) 20号墓坑出土人骨[2003年5月9日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は方形を呈し、規模は長軸約113cm・短軸約100cm・深さ約32cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の熙寧元宝1点・天聖元宝1点・洪武通宝1点が検出されている。

③被葬者：人骨の出土部位は、全身に及ぶ。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：四肢骨は、大きく頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。被葬者の死亡年齢は、約30歳代であると推定される。

・古病理：出土歯には、齶触が認められた。

(14) 21号墓坑出土人骨[2004年5月11日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約116cm・短軸約60cm・深さ約63cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の至和元宝2点が検出されている。

③被葬者：人骨の残存状態は、悪い。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土頭蓋骨の乳棟突起が大きく、四肢骨も大きく頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が面状に露出する程度のマルティンの2度から3度の状態である。被葬者の死亡年齢は、約40歳代であると推定される。

(15) 22号墓坑出土人骨[2004年7月12日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約147cm・短軸約113cm・深さ約63cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の寛元通宝1点・〇〇元宝1点が検出されている。〇〇部分は不詳である。

③被葬者：人骨の残存状態は、悪い。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土歯の歯冠計測値は比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

3. 29区出土人骨

29区では、1号墓坑及び17号配石から人骨が出土している。

(1) 1号墓坑出土人骨[1998年9月14日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約106cm・短軸約90cm・深さ約48cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の祥符元宝1点が検出されている。

③被葬者：出土人骨の残存状態は、あまりよくない。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：四肢骨は、比較的小さく華奢であり、出土歯

の歯冠計測値も比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

(2) 17号配石出土人骨[1999年5月17日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約206cm・短軸約153cm・深さ約49cmである。

②副葬品：副葬品は、洪武通宝1点・祥符元宝1点が検出されている。

③被葬者：出土人骨の残存状態は、非常に悪い。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土歯の歯冠計測値は比較的小さく、出土四肢骨は比較的小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

4. 30区出土人骨

30区では、1号墓坑・2号墓坑・3号墓坑の3基から人骨が出土している。

(1) 1号墓坑出土人骨[1998年7月16日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約118cm・短軸約68cm・深さ約48cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の皇宋通宝1点・紹聖元宝1点が検出されている。

③被葬者：人骨の残存状態は悪いが、全身に及ぶ。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土歯の歯冠計測値は、比較的小さいため被葬者の性別は女性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状から面状に露出する程度のマルティンの2度から3度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

(2) 2号墓坑出土人骨[1998年5月7日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約104cm・短軸約60cm・深さ約20cmである。

②副葬品：副葬品は、銭貨の元祐通宝1点・乳元通宝1点が検出されている。

③被葬者：人骨の残存状態は悪いが、全身に及ぶ。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土歯の歯冠計測値が比較的大きいので、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、エナメル質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

・古病理：出土歯には、齧蝕が認められた。

(3) 3号墓坑出土人骨[1997年11月25日出土]

①土坑の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約114cm・短軸約66cm・深さ約18cmである。

②副葬品：副葬品は、検出されていない。

③被葬者：人骨の残存状態は悪いが、全身に及ぶ。

・埋葬：人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした屈葬で埋葬されたと推定される。

・性別：出土歯の歯冠計測値が比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

・死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状から面状に露出する程度のマルティンの2度から3度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

まとめ

横壁中村遺跡から、中近世の墓坑21基が検出され、人骨21体が出土した。

埋葬方法は、屈葬19基・伸展葬1基・不明1基で、屈葬が多い。また、被葬者の頭位は北東13基・北西1基・北3基・西2基・不明2基で、北東位が多い。

被葬者の性別は、男性9体・女性9体・不明3体である。死亡年齢は、未成年3体・約20歳代1体・約30歳代9体・約40歳代4体・老齢1体・成人3体であると推定された。

横壁中村遺跡が位置する長野原町は、民俗学の研究で墓制に「両墓制」が認められる地域である。これは、遺体を埋葬する「埋め墓」と墓参りをする「詣り墓」との2つの墓が存在するものである。分布域は、近畿地方が多いことが知られており、この墓制の始まりは一般的に近世であると考えられている。

この横壁中村遺跡の主の中世における墓坑の分布は、「埋め墓」のような集中的なものではなく、散在している。このことは、この地域において「両墓制」は少なくとも、中世には存在しなかったことが推定できる。

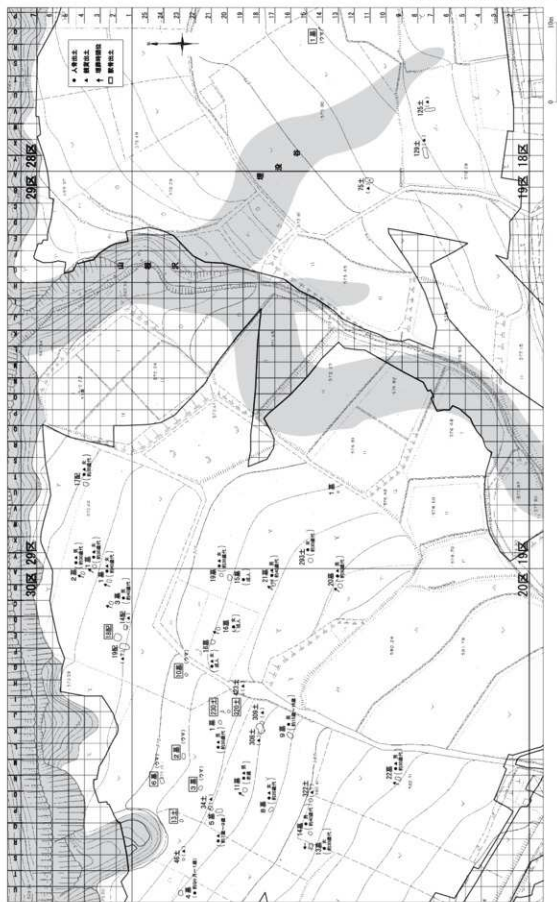
なお、この「両墓制」と横壁中村遺跡における墓制の関係は、横壁中村遺跡の主担当として長年、発掘調査を行われた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の藤巻幸男氏からご指摘を受けたものである。

謝辞

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の黒澤照弘氏には、本遺跡出土人骨を報告する機会を与えていただき、本遺跡に関する考古学的情報を与えていただきました。また、同事業団の藤巻幸男氏には、本遺跡の墓制と両墓制に関するご指摘をいただきました。ここに、両氏に感謝いたします。

表1. 横壁中村遺跡出土中近世人骨まとめ

| 区名 | 遺跡名 | 個体数 | 性別 | 死亡年齢 | 副葬品 | |
|------|--------|-------|-----|----------|-------|------|
| 19区 | 250号土坑 | 1個体 | 女性 | 約30歳代 | — | |
| | 1号墓坑 | 1個体 | 男性 | 約30歳代 | 銭貨2点 | |
| | 4号墓坑 | 1個体 | 不明 | 約9ヶ月～1歳 | — | |
| | 5号墓坑 | 1個体 | 不明 | 約7歳～9歳 | 銭貨3点 | |
| | 8号墓坑 | 1個体 | 女性 | 約20歳代 | 銭貨6点 | |
| | 9号墓坑 | 1個体 | 男性 | 約15歳～16歳 | — | |
| | 11号墓坑 | 1個体 | 男性 | 老齢 | 銭貨2点 | |
| | 13号墓坑 | 1個体 | 女性 | 約30歳代 | — | |
| | 14号墓坑 | 1個体 | 男性 | 約40歳代 | — | |
| | 15号墓坑 | 1個体 | 成人 | 成人 | — | |
| | 16号墓坑 | 1個体 | 女性 | 成人 | — | |
| | 18号墓坑 | 1個体 | 女性 | 成人 | 銭貨4点 | |
| | 19号墓坑 | 1個体 | 女性 | 約30歳代 | 銭貨3点 | |
| | 20号墓坑 | 1個体 | 男性 | 約30歳代 | 銭貨3点 | |
| | 21号墓坑 | 1個体 | 男性 | 約40歳代 | 銭貨2点 | |
| | 22号墓坑 | 1個体 | 男性 | 約30歳代 | 銭貨2点 | |
| | 29区 | 1号墓坑 | 1個体 | 女性 | 約30歳代 | 銭貨2点 |
| | | 17号焼石 | 1個体 | 女性 | 約30歳代 | 銭貨2点 |
| | 30区 | 1号墓坑 | 1個体 | 女性 | 約40歳代 | 銭貨2点 |
| 2号墓坑 | | 1個体 | 男性 | 約30歳代 | 銭貨2点 | |
| 3号墓坑 | | 1個体 | 男性 | 約40歳代 | — | |



人骨、獸骨、錢貨出土遺構分布図

横壁中村遺跡(10) 出土中近世獣骨

はじめに

横壁中村遺跡は、群馬県長野原町に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成11(1999)年～同16(2004)年まで実施された。

本遺跡の18区・20区・30区から、中近世の獣骨が出土したので、以下に報告する。出土した獣骨は、水洗後、観察・計測・写真撮影を行った。

なお、獣骨の計測方法は、フォン・デン・ドリッシュ [von den DRIESCH] (1976)の方法に従った。また、馬の年齢区分は、1歳～5歳が幼駒馬・6歳～16歳が牡駒馬・17歳以上が老駒馬とした。さらに、馬の場合、性別の推定は犬歯の有無及び寛骨の形態から可能であるが、今回、犬歯及び寛骨が検出された事例は無かった。なお、この犬歯は、人為的に抜歯する可能性がある。

横壁中村遺跡出土獣骨は、これまでに、縄文時代を中心に本報告者により報告されているので、参照されたい(橋崎, 2008・2009a・2009b)。

1. 18区出土獣骨

18区では、1号墓坑から獣骨が出土している。

(1) 1号墓坑出土獣骨[2001年11月23日出土]

①遺構の概要：遺構の形状や規模等は、不明である。

②獣骨の概要：破片で出土したが、接合の結果、ウマ(馬) [*Equus caballus*] の中手骨幹部であることが判明した。性別不明で、成体であると推定される。

2. 20区出土獣骨

20区では、2号墓坑・3号墓坑・6号墓坑・10号墓坑・12号墓坑・1号竪穴遺構・1号竪立柱建物・20区屋敷跡・1号石組遺構・3号石組遺構・6号石垣・8号石垣・12号石垣・2号ヤックラ(集石遺構)から、獣骨が出土している。

(1) 2号墓坑出土獣骨[1999年11月8日出土]

①遺構の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約135cm・短軸約83cm・深さ約29cmである。本土坑では、大小の石が覆われた状態で検出さ

生物考古学研究所 橋崎 修一郎

れている。恐らく、使役に使用した馬の死亡後に丁寧に埋葬した墓坑であると推定される。

②獣骨の概要：獣骨は、ウマ(馬) [*Equus caballus*] の全身骨格である。性別は、不明である。死亡年齢は、全歯高から、約9歳～10歳の牡駒馬であると推定される。本馬歯の下顎左右P2(第2小臼歯)を観察すると、右P2の方が左P2よりも咬耗の度合いが強い。出土状況から、本馬歯は同一個体に属することは明らかであるので、本個体は右側で咬む傾向があったことが推定される。



写真1. 20区2号墓坑全景 [北から撮影]



写真2. 20区2号墓坑出土下顎右馬歯 [頬側面観]



写真3. 20区2号墓坑出土下顎左馬歯 [頬側面観]

(2) 3号墓坑出土獣骨[1999年11月10日出土]

①遺構の概要：土坑の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約125cm・短軸約94cm・深さ約37cmである。本土坑では、大小の石が覆われた状態で検出されている。恐らく、使役に使用した馬の死亡後に丁寧に埋葬した墓坑であると推定される。

②獣骨の概要：獣骨は、ウマ(馬) [*Equus caballus*]の頭蓋骨片と馬歯片である。性別は、不明である。死亡年齢は、全歯高から、約4歳～5歳の幼齢馬であると推定される。

(3) 6号墓坑出土獣骨[1999年11月25日出土]

①遺構の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は短軸約90cm・深さ約15cmである。

②副葬品：副葬品は、中世の緑釉小皿1点が検出されている。

③獣骨の概要：獣骨は、ウマ(馬) [*Equus caballus*]の上顎右M1(第1大臼歯)である。性別は、不明である。死亡年齢は、全歯高から約4歳の幼齢馬であると推定される。

(4) 10号墓坑出土獣骨[2000年8月29日出土]

①遺構の概要：土坑の形状は長方形を呈し、規模は長軸約82cm・短軸約58cm・深さ約34cmである。馬骨の残存状態は悪いため、不明であるが、使役に使用した馬の死亡後に丁寧に埋葬した墓坑であると推定される。

②獣骨の概要：獣骨は、ウマ(馬) [*Equus caballus*]の右脛骨遠位端部が同定された。性別は不明である。ウマの脛骨の遠位端部は、約2歳で癒合するとされているので、死亡年齢は約2歳以上であると推定される。

(5) 12号墓坑出土獣骨[2000年9月21日出土]

①遺構の概要：調査段階の資料がなく、土坑形状は不明。規模も不詳。

②獣骨の概要：獣骨の残存状態が悪いため、種は不明である。しかしながら、人骨では無い。

(6) 1号竪穴遺構出土獣骨[2004年出土]

①遺構の概要：竪穴の形状は方形を呈し、規模は長軸約280cm・短軸約254cm・深さ約47cmである。

②獣骨の概要：獣骨の残存状態は非常に悪い。馬 [*Equus caballus*]の頭蓋骨片である。性別は不明で、幼齢馬であると推定される。

(7) 1号掘立柱建物出土獣骨[1999年8月31日出土]

①遺構の概要：遺構の概要は不明である。

②獣骨の概要：獣骨は、馬(ウマ) [*Equus caballus*]の上顎乳臼歯片である。破片であるため、歯種の同定は不可能であった。性別は、不明である。ウマの場合、臼歯は約2ヶ月半から4ヶ月で永久歯に替わるため、死亡年齢は4ヶ月以下であると推定される。

(8) 20区屋敷跡出土獣骨[1999年9月1日・28日出土]

①遺構の概要：20区屋敷跡は、石垣を伴う中世の掘立柱建物である。

②獣骨の概要：獣骨は、ニホンジカ [*Cervus nippon*]の下顎右M3(第3大臼歯)である。性別は不明で、成体であると推定される。

(9) 1号石組遺構出土獣骨[1999年12月2日・同21日出土]

①遺構の概要：遺構の形状は長方形を呈し、規模は長軸約563cm・短軸約342cm・深さ約53cmである。

②獣骨の概要：獣骨は、ウマ [*Equus caballus*]の中足骨の近位端である。骨端部の癒合は完了している。但し、ウマの中足骨の近位端の癒合は産まれる前に完了するとされているので、性別及び死亡年齢不明個体としか推定できない。

(10) 3号石組遺構出土獣骨[1999年11月19日・24日出土]

①遺構の概要：遺構の形状は楕円形を呈し、規模は長軸約364cm・短軸約177cm・深さ約51cmである。

②獣骨の概要：獣骨は、ニホンジカ [*Cervus nippon*]の中足骨・距骨・中節骨片である。性別は不明で、成体であると推定される。

(11) 6号石垣出土獣骨[2000年10月13日出土]

①遺構の概要：規模は、全長約26.8mである。

②獣骨の概要：獣骨は、ニホンジカ [*Cervus nippon*]の下顎臼歯である。性別は不明で、成体であると推定される。

(12) 8号石垣出土獣骨[2001年8月6日出土]

横壁中村遺跡(10)出土中近世獣骨

①遺構の概要：規模は東西約11.24m,南北約15.96mである。

②獣骨の概要：獣骨は、ニホンジカ[Cervus nippon]の下顎臼歯である。性別は不明で、成体であると推定される。

(13) 12号石垣出土獣骨[2003年6月19日出土]

①遺構の概要：規模は、全長約17.2mである。

②獣骨の概要：獣骨は、ウマ(馬)[Equus caballus]の右肩甲骨である。骨端部の癒合は完了しているので、性別不明で成体であると推定される。

(14) 2号ヤックラ(集石)出土獣骨[2004年4月15日出土]

①遺構の概要：規模は、全長約7.3mである。

②獣骨の概要：獣骨は、ニホンジカ[Cervus nippon]の上顎臼歯である。性別不明で、成体であると推定される。

3. 30区出土獣骨

30区では、18号配石から獣骨が出土している。

(1) 18号配石出土獣骨[1998年5月11日出土]

①遺構の概要：遺構の形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸約192cm・短軸約186cm・深さ約50cmである。

②獣骨の概要：獣骨の残存状態が悪いので、種名は不明である。しかしながら、人骨では無い。

まとめ

以下の表1に、出土獣骨のまとめを示した。

表1. 横壁中村遺跡出土獣骨まとめ

| 区名 | 遺構名 | 獣骨名 | 死亡年齢 |
|--------|--------|-------|---------|
| 18区 | 1号墓坑 | ウマ | 成体 |
| | 2号墓坑 | ウマ | 約9歳～10歳 |
| | 3号墓坑 | ウマ | 約4歳～5歳 |
| | 6号墓坑 | ウマ | 約4歳 |
| | 10号墓坑 | ウマ | 約2歳以上 |
| | 12号墓坑 | 不明 | 不明 |
| | 1号竪穴遺構 | ウマ | 幼駒馬 |
| | 1号竪柱建物 | ウマ | 約4ヶ月以下 |
| | 20区屋敷跡 | ニホンジカ | 成体 |
| | 1号石組遺構 | ウマ | 不明 |
| | 3号石組遺構 | ニホンジカ | 成体 |
| | 6号石垣 | ニホンジカ | 成体 |
| | 8号石垣 | ニホンジカ | 成体 |
| | 12号石垣 | ウマ | 成体 |
| 2号ヤックラ | ニホンジカ | 成体 | |
| 30区 | 18号配石 | 不明 | 不明 |

表2. 横壁中村遺跡20区2号墓坑出土馬歯計測値

| | 右 | | 左 | |
|----|------|--------|--------|--------|
| | MD | BL | MD | BL |
| P2 | 30mm | 14mm | 30mm | 14mm |
| P3 | 26mm | 17mm | 27mm | 16.5mm |
| P4 | 27mm | 18mm | 27mm | 17.5mm |
| M1 | 24mm | 14mm | 25mm | 14mm |
| M2 | 24mm | 13.5mm | 25.5mm | 13mm |
| M3 | 30mm | 12mm | 30mm | 12mm |

謝辞

本遺跡出土獣骨を報告する機会を与えていただき、遺跡に関する考古学情報を与えていただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の黒澤照弘氏に感謝いたします。

引用文献

- 久保和上・松井 章 1999 『第10章 家畜その2：ウマ・ウシ』、『考古学と自然科学②』、『考古学と動物学』(西本豊弘・松井章編)、同成社
- 植崎修一郎 2008 「横壁中村遺跡土坑出土獣骨」、『横壁中村遺跡(6)：土坑編』、『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団』, p.293-296.
- 植崎修一郎 2009a 「横壁中村遺跡29区6号住居出土獣骨」、『横壁中村遺跡(8)：縄文時代後期住居編』、『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団』, p.221-224.
- 植崎修一郎 2009b 「横壁中村遺跡(9)住居出土獣骨」、『横壁中村遺跡(9)』、『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団』, p.349
- Von den DRIESCH, Angela 1976 "A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites", Peabody Museum Bulletin No.1, Peabody Museum Press, Harvard University.

遺物観察表

| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
|---------------------|-----|-------|---------|------|-----------------------|-------|----------|
| 7818 | 20 | 原形 89 | 石目 上白 | 破片 | — — 15.1 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 7818 | 20 | 原形 96 | 石目 下白 | 破片 | — — 10.7 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 7818 | 20 | 原形 91 | 茶目 下白 | 30% | 15.4 — (15.1) | — | 安山岩(彫刻) |
| 7948 | 20 | 原形 92 | 茶目 下白 | 50% | 19.0 — 11.7 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 7948 | 20 | 原形 93 | 石目 上白 | 40% | — — (8.3) | — | 彫刻石(安山岩) |
| 7948 | 20 | 原形 94 | 石製品 | 70% | 9.1 6.5 3.1 | — | 安山岩(彫刻) |
| 7948 | 20 | 原形 95 | 石製品 | 完全 | 7.0 — 3.5 | 109.9 | 安山岩(彫刻) |
| 7948 | 20 | 原形 96 | 石製品 | 一説欠損 | 13.8 15.9 8.9 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 30区1号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 8818 | 20 | 1號 1 | 安山岩 | 完全 | 23.5 22.3 7.5 | 5600 | 安山岩(石目) |
| 30区1号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 9218 | 118 | 1号 6 | 石製品 | 30% | 15.8 6.4 0.8 | — | 彫刻(石目) |
| 30区5号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 9518 | 20 | 5号 3 | 砥石 | ほぼ完全 | 10.2 3.1 2.0 | 69.6 | 砥石(石) |
| 9518 | 20 | 5号 4 | 石目 上白 | 40% | — — 5.3~(10.3) | — | 安山岩(彫刻) |
| 30区6号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 9818 | 20 | 6号 11 | 砥石 | 70% | 14.1 9.5 8.4 | — | 安山岩(彫刻) |
| 9818 | 20 | 6号 12 | 石目 上白 | 40% | — — (11.8) | — | 安山岩(彫刻) |
| 9818 | 20 | 6号 13 | 石目 上白 | 20% | 18.8 6.5 3.9 | — | 安山岩(彫刻) |
| 9818 | 20 | 6号 14 | 玉軸巻 木軸付 | 70% | — — 15.8 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 30区8号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 10218 | 20 | 8号 14 | 砥石 | ほぼ完全 | 7.8 2.2 2.0 | 48.0 | 砥石(石) |
| 10218 | 20 | 8号 15 | 石目 上白 | 30% | — — 4.2~8.6 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 10218 | 20 | 8号 16 | 石目 下白 | 60% | 27.8 — (12.3) | — | 彫刻石(安山岩) |
| 10218 | 20 | 8号 17 | 石目 | 30% | 14.0 8.2 10.5 | — | 安山岩(彫刻) |
| 30区12号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 10718 | 20 | 12号 1 | 砥石 | ほぼ完全 | 13.7 4.6 — | 553.6 | 砥石(石) |
| 10718 | 20 | 12号 2 | 石目 | 30% | — — 39.8 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 10818 | 20 | 12号 3 | 石製品 榫付 | ほぼ完全 | 20.7 20.5 14.3 | 8200 | 安山岩(彫刻) |
| 30区13号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 10918 | 20 | 13号 1 | 石目 茶 | 70% | — — 23.0 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 30区15号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 11018 | 20 | 15号 3 | 石目 上白 | 破片 | — — (3.4) | — | 彫刻石(安山岩) |
| 30区1号石目彫刻 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 11618 | 20 | 1号 16 | 石目 上白 | 破片 | — — (5.0) | — | 彫刻石(安山岩) |
| 12018 | 20 | 1号 17 | 砥石 | 70% | 26.7 17.5 8.9 | — | 安山岩(彫刻) |
| 30区2号石目彫刻 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 12318 | 20 | 2号 10 | 石目 上白 | 40% | (29.0) — 9.0~10.2 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 12318 | 20 | 2号 11 | 石製品 | 完全 | — 9.1 6.8 | 585.9 | 安山岩(彫刻) |
| 12318 | 20 | 2号 12 | 石目 | 30% | — 8.7 11.8 | — | 安山岩(彫刻) |
| 30区3号石目彫刻 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 13018 | 20 | 3号 2 | 石目 下白 | 40% | (29.4) — 5.6 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 30区14号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 14418 | 20 | 14号 3 | 茶目 下白 | 彫刻片 | — — (2.3) | — | 彫刻石(安山岩) |
| 30区15号石目 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 15818 | 20 | 15号 1 | 茶目 上白 | 20% | (19.5) — (10.8) | — | 彫刻石(安山岩) |
| 15818 | 20 | 15号 2 | 石目 上白 | 30% | — — (5.6) | — | 安山岩(彫刻) |
| 30区1号マツタテ 石目、石製品観察表 | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値(長さ×幅×高さ) 単位:cm | 石材 | 備考 |
| 16418 | 20 | 1号 6 | 石目 上白 | 20% | — — 8.6 | — | 彫刻石(安山岩) |
| 16418 | 20 | 1号 7 | 石目 | 20% | 14.0 8.3 8.2 | — | 彫刻石(安山岩) |

20区2号ヤツクワ 右器、石製品観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 計測値(長さ・幅・厚さ) [単位:cm,g] | 石材 | 備考 |
|-------|----|-------|----------|------|---------------------------|----|---|
| 16508 | 20 | 2号 13 | 石臼 下臼 | 30% | — — (2.5) — (10.3) | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、腐風りあり、磨り面は、周縁部ほど平滑、使用によるためか、磨り面部。 |
| 16509 | 20 | 2号 14 | 石臼 下臼 | 30% | — — (8.0) — (11.0) | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、磨り面は比較的良好に遺存し、周縁部は平滑。 |
| 16510 | 20 | 2号 15 | 石臼 上臼 | 40% | — — (4.9) — (10.5) | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、磨り面は良好に遺存し、周縁部ほど平滑、著しい腐風りはみられない。 |

20区3号ヤツクワ 右器、石製品観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 計測値(長さ・幅・厚さ) [単位:cm,g] | 石材 | 備考 |
|-------|----|------|----------|------|---------------------------|----|-------------------------------|
| 16608 | 20 | 3号 1 | 石臼 下臼 | 30% | — — — — | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、磨り面は、周縁部ほど平滑。 |

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 計測値(長さ・幅・厚さ) [単位:cm,g] | 石材 | 備考 |
|-------|----|------|----------|------|---------------------------|----|--|
| 16609 | 20 | ヤ 9 | 砥石 | 30% | 4.4 2.0 1.8 | — | 砥石石 上面を使用、使用頻度は少ない。4面には調整剤の磨き粉の磨り面跡を残す。 |
| 16610 | 20 | ヤ 10 | 石臼 上臼 | 40% | — — (4.0) — (9.0) | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、磨り面は、軸受け穴周辺と周縁部ほど平滑、磨り面にもみられる。 |
| 16710 | 20 | ヤ 11 | 石臼 上臼 | 50% | (30.0) — 7.1—11.4 | — | 安山質頁岩質 初焼き形、磨り面は、周縁部ほど平滑、腐風り顕著、使用のためか周縁不明瞭、引き下りかみられる。 |

18区1番遺物 右器、石製品観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 計測値(長さ・幅・厚さ) [単位:cm,g] | 石材 | 備考 |
|-------|----|------|----------|------|---------------------------|----|--|
| 17118 | 19 | 23 | 砥石 | 一部欠損 | 13.7 8.7 7.9 | — | 安山質頁岩質 行跡の上面を使用、刃物面状の磨り面。 |
| 17119 | 19 | 23 | 茶臼 下臼 | 40% | — — 12.3 | — | 粗粒輝石安山岩 耐用のためか欠損部ほど調整した痕跡がみられる。磨り面、周縁不明瞭、使用頻度も低くない。 |

20区4番遺物 右器、石製品観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 計測値(長さ・幅・厚さ) [単位:cm,g] | 石材 | 備考 |
|-------|----|------|----------|------|---------------------------|-------|---------------------------------|
| 17608 | 20 | 88 | 砥石 | 破片 | 3.4 3.3 1.6 | — | 硝子石 上面を使用。 |
| 17609 | 20 | 89 | 砥石 | ほぼ完全 | 7.7 2.3 2.2 | 383.3 | 硝子石 軸の古い段階を主に、4面全てを使用、かなり磨く。 |
| 17610 | 20 | 90 | 砥石 | 30% | 5.1 5.5 1.3 | — | 硝子石 軸の古い段階を主に使用し、かなり磨く。 |
| 17611 | 20 | 91 | 砥石 | ほぼ完全 | 15.1 6.1 4.8 | 935.6 | 粗粒輝石安山岩 上面を使用、使用頻度は非常に少ない。 |
| 17612 | 20 | 92 | 茶臼 上臼 | 破片 | (2.3) — — | — | 粗粒輝石安山岩 磨り面、平滑。 |
| 17613 | 20 | 93 | 茶臼 下臼 | 周縁部欠 | — — (5.6) | — | 粗粒輝石安山岩 |
| 17614 | 20 | 94 | 茶臼 下臼 | 20% | — — (6.1) | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、磨り面、周縁部平滑。 |
| 17615 | 20 | 95 | 茶臼 下臼 | 50% | (32.0) — (10.9) — (11.9) | — | 粗粒輝石安山岩 初焼き形、磨り面、周縁部ほど平滑。 |

遺物観察表(金属器)

20区5号石臼 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|------|----|----------|----------|------|--|----|----|
| 3501 | 20 | 90(1) 35 | 鉄製品 磨石 | ほぼ完全 | 鉄質、鉄質の軸、磨りにより不明瞭な磨き面が認められる。 | — | 古代 |
| 3502 | 20 | 90(1) 36 | 鉄製品 磨石 | 一部欠損 | 鉄質磨石跡、軸の両端部は欠損するも、良好な遺存残存。 | — | 古代 |
| 3503 | 20 | 90(1) 37 | 鉄製品 不詳 | 不詳 | 鉄製の鉄製品、1ヶ所に釘を残す。裏面に木目層の痕跡あり、磨り面の残存あり。長さ17.0、幅12.0、厚さ0.5。 | — | 古代 |
| 3504 | 20 | 90(1) 38 | 鉄製品 不詳 | 一部欠損 | 磨りに鉄質、欠損もあるが、磨り面を全する粗粒鉄片。長さ12.6、幅10.0、厚さ5.9、重量0.154。 | — | 古代 |
| 3505 | 20 | 90(1) 39 | 鉄製品 不詳 | 完全 | 平直な磨り面を全する鉄片、磨石跡あり。長さ9.4、厚さ4.9、重量0.091。 | — | 古代 |

20区6号磨石 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|------|----|-------|----------|------|--|----|----|
| 7718 | 20 | 原形 66 | 磨石 ほぼ完全 | 完全 | 日本刀の刃身に行くはばき、磨石面が平直で、長さ2.5、幅2.5、厚さ0.1。 | — | — |
| 7719 | 20 | 原形 67 | 鉄製品 磨 | 一部欠損 | 磨石面が、長さ(推定)は約6cm、先端部欠損、長さ19.0、幅1.0。 | — | — |
| 7720 | 20 | 原形 68 | 鉄製品 刃 | 破片 | 両端部欠損のため、磨石面は不明、磨石面が、長さ14.0、厚さ0.6。 | — | — |
| 7721 | 20 | 原形 69 | 鉄製品 刃 | 破片 | 両端部欠損のため、磨石面は不明、磨石面が、長さ13.3、厚さ0.5。 | — | — |
| 7722 | 20 | 原形 70 | 鉄製品 不詳 | 一部欠損 | 平直な磨り面を全する鉄製品、磨石跡あり。長さ5.0、幅3.4、厚さ0.5。 | — | — |
| 7723 | 20 | 原形 71 | 鉄製品 不詳 | 不詳 | 欠損のため不明瞭な磨り面を全する。鉄質、磨石のため不明瞭。 | — | — |
| 7724 | 20 | 原形 72 | 鉄製品 不詳 | 不詳 | 鉄製の鉄製品、上面で片だけになる。 | — | — |
| 7725 | 20 | 原形 73 | 鉄製品 不詳 | 不詳 | 約一握りを持つ、鉄製の鉄製品。 | — | — |
| 7726 | 20 | 原形 74 | 金属製品 不詳 | 不詳 | 極めて薄い鉄片、中央のみを持つ。長さ0.05。 | — | — |
| 7727 | 20 | 原形 75 | 鉄製品 不詳 | 不詳 | 鉄製の鉄製品、軸の破片あり。 | — | — |

20区11号磨石 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|------|----|-------|----------|------|---|----|----|
| 8508 | 20 | 1号 5 | 鉄製品 不詳 | 不詳 | 鉄製の鉄片を磨り付けたものか、磨り面は不明。 | — | — |
| 8509 | 20 | 1号 6 | 鉄製品 完全 | 完全 | 磨り面を全する、小型の粗粒鉄片。長さ17.6、幅5.8、厚さ3.3、重量224.3。 | — | — |
| 8510 | 20 | 1号 7 | 鉄製品 一部欠損 | 一部欠損 | 一部磨り面を全する、小型の粗粒鉄片。長さ8.4、幅3.4、厚さ3.6、重量183.3。 | — | — |
| 8511 | 20 | 1号 8 | 鉄製品 完全 | 完全 | ほぼ円形を全する、小型の粗粒鉄片。長さ8.3、幅3.7、厚さ2.5。 | — | — |
| 8512 | 20 | 1号 9 | 鉄製品 破片 | 破片 | ほぼ円形を全する粗粒鉄片。長さ10.0、幅10.0、厚さ3.5、重量306.0。 | — | — |
| 8513 | 20 | 1号 10 | 鉄製品 完全 | 完全 | 欠損により不明瞭な磨り面を全する。長さ19.2、幅11.1、厚さ13.9、重量1157.9。 | — | — |
| 8514 | 20 | 1号 11 | 鉄製品 完全 | 完全 | 磨り面を全する、小型の粗粒鉄片。長さ8.9、幅6.4、厚さ3.5、重量232.8。 | — | — |
| 8515 | 20 | 1号 12 | 鉄製品 70% | 70% | ほぼ円形を全する、大型の粗粒鉄片。長さ13.5、幅11.2、厚さ5.4、重量432.3。 | — | — |
| 8516 | 20 | 1号 13 | 鉄製品 一部欠損 | 一部欠損 | 大型の粗粒鉄片、周縁部の両面部分磨り面に残る。長さ15.3、幅10.0、厚さ3.4、重量494.2。 | — | — |
| 8517 | 20 | 1号 14 | 鉄製品 完全 | 完全 | 欠損により不明瞭な磨り面を全する。粗粒鉄片、引付の付着もわずかにみられる。長さ13.3、幅9.5、厚さ4.3、重量449.0。 | — | — |

18区3号石臼 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|------|----|------|----------|------|----------------------------------|----|----|
| 5010 | 18 | 1号 5 | 鉄製品 磨石 | 完全 | 鉄製の磨り面あり。長さ13.1、幅11.2、厚さ0.45。 | — | — |

18区3号石臼 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|------|----|------|----------|------|------------------------------------|----|----|
| 5010 | 18 | 3号 3 | 鉄製品 小刀 | 30% | 小刀の身か、刀身部分のみが欠損。長さ17.4、幅2.6、厚さ0.7。 | — | — |

20区1号石臼 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|------|----|------|----------|------|------------------------------------|----|----|
| 5010 | 20 | 石臼 7 | 磨石 磨石 | 一部欠損 | 磨りに付いた、磨石跡の遺存残存。長さ3.8、幅1.1、厚さ0.16。 | — | — |

20区1号石臼 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|-------|----|-------|----------|------|----------------------------------|----|----|
| 10108 | 20 | 石臼 13 | 磨石 磨石 | 完全 | 磨りに磨り付けた磨石。長さ10.7、厚さ1.2。 | — | — |

20区11号石臼 磨石 金属観察表

| 調査番号 | 区 | 探検番号 | 種類 器種 | 残存状態 | 形状・文様の特徴 計測値[単位:cm,g] (1は推定値) | 時期 | 備考 |
|-------|----|------|----------|------|--|----|----|
| 77608 | 20 | 1号 1 | 鉄製品 | ほぼ完全 | 磨り面を全する小型の粗粒鉄片。長さ9.0、幅7.3、厚さ3.3、重量176.2。 | — | — |

遺物観察表

| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
|------------------|----|-------|-----|-------|---|-------|
| 2284 | 20 | 1石川 2 | 襦袢 | 完形 | 袖口形を定する、やや小型の襦袢。襟・袖・裾には何層も縫い目が付く。長さ57.8、幅7.1、厚3.4、重量290.0g。 | |
| 202区石川郡 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 2284 | 20 | 2石川 2 | 襦袢 | 不詳 | 薄い肌地の襦袢。小方の刀身か。長さ15.20、幅1.30、厚2.0。 | |
| 2284 | 20 | 2石川 3 | 袴 | 40% | 裾口の一部分が付いた袴。襦袢厚か。長さ72.20、幅10.2、厚5.2、重量321.21g。 | |
| 202区石川郡 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 3008 | 20 | 3石川 1 | 羽口 | 破片 | 羽口の先端部。先端部には厚付布、やや大型の羽116、厚15.1、重量193.6g。 | |
| 202区22区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 4408 | 20 | 22区 3 | 襦袢 | ほぼ完形 | 平面型で片側開きをする。襦袢厚。長さ101.1、幅15.5、厚3.1、重量206.6g。 | |
| 202区22区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 5508 | 20 | 15区 1 | 袴 | 一部欠損 | 小型の袴。不定形を示す。一部欠損。長さ67.2、幅7.9、厚3.1、重量47.9g。 | |
| 202区15区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 5508 | 18 | 1区 1 | 襦袢 | 一部欠損 | 裾深欠損。裾面方形。長さ59.4、幅0.5、厚3.0。 | |
| 202区1号ヤマト 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 6548 | 20 | 1号 5 | 襦袢 | 不詳 | 袖先の襦袢。袖面方形。襦袢の一部分。長さ0.5。 | |
| 202区1号ヤマト 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 6548 | 20 | 1号 12 | 襦袢 | 完形 | 袖口形を定する、やや小型の襦袢厚。長さ57.8、幅7.3、厚3.2、重量328.2g。 | |
| 202区1号ヤマト 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 6668 | 20 | ヤ 3 | 襦袢 | 完形 | 裾をよめる孔10×9のうす。3×9に縦6個。長さ11.5、幅1.3、厚3.1。 | |
| 202区3区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 8708 | 18 | 32 | 襦袢 | 一部欠損 | 平面型襦袢。裾口を縫い合わせる。内側で縫い止めた裾が付く。表面に四つ星状の文様3つあり。長さ3.5、幅0.5、厚3.0。 | |
| 8708 | 18 | 33 | 襦袢 | 約60% | 裾深薄く伸ばした襦袢。裾口を縫い合わせる。長さ13.11、幅0.6。 | |
| 8708 | 18 | 34 | 襦袢 | 厚約20% | 裾深欠損した襦袢。厚1.1。 | |
| 8708 | 18 | 35 | 襦袢 | 不詳 | 平面型襦袢。裾口を縫い合わせる。襦袢の一部分。長さ14.10、幅1.5、厚3.0。 | |
| 202区3区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 8708 | 19 | 15 | 襦袢 | 小方 | 小型の刀身。両端欠損。比較的白い布。長さ19.20、幅1.5、厚3.0。 | |
| 8708 | 19 | 16 | 襦袢 | 不詳 | 型い肌地の襦袢。刀身を穿つものか。長さ3.4、幅0.5、厚3.1。 | |
| 8708 | 19 | 17 | 襦袢 | 約80% | 両端欠損。裾か。裾面方形。長さ16.4、幅0.7。 | |
| 8708 | 19 | 18 | 襦袢 | ほぼ完形 | 裾深欠損が弊り着る。裾深の一部分は不詳。裾面方形。長さ8.3、幅0.5。 | |
| 202区3区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 8708 | 20 | 25 | 襦袢 | 一部欠損 | 大裾部分が多い。裾面に印が付く。長さ5.5。 | 近世 |
| 8708 | 20 | 27 | 襦袢 | 完形 | 平面型襦袢。襦袢厚。長さ11.7、幅10.2、厚3.5、重量893.4g。 | |
| 202区3区 金輪部遺物表 | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 遺物・文様の特徴 [詳細図(単位:cm, g)は後記] | 時期・備考 |
| 8778 | 29 | 20 | 襦袢 | 50% | 両端裾が欠損。平面型襦袢は山形。刀身は中央付近で付く。肩のため使用痕跡は不詳。長さ0.5、幅0.5、厚3.0。 | 近世 |
| 8778 | 29 | 21 | 金輪部 | 破損 | 裾面方形。片側。袖口不詳。厚1.3。 | |
| 8778 | 29 | 22 | 襦袢 | 不詳 | 両端裾欠損。平面型襦袢は上下に折り目を持つ襦袢。裾面方形。襦袢の一部分か。長さ1.2、幅0.2、厚3.0。 | |
| 8778 | 29 | 23 | 襦袢 | 約40% | 裾深を折り目付で縫い止めた襦袢。裾面方形。長さ8.2。 | 近世? |
| 8778 | 29 | 24 | 襦袢 | 約70% | 両端裾欠損。裾面方形。長さ14.30、幅0.4。 | |
| 8788 | 29 | 25 | 襦袢 | 完形 | 袖口、裾口、裏口が縫い止められ、袖口には厚付布と細糸を縫い止めた。裏口には印が付く。袖口には厚付布と細糸を縫い止めた。裏口には、袖口と裏口との縫合を施す。 | |

遺物観察表(銭貨)

20K銭貨類

202区5号 泉貨(202区泉貨類) 銭貨類

| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲ | 時期・備考 | | | | | | |
|---------------|----|-------|----|------|--|-------|-------|-------|------|------|-----|---------|
| 6808 | 20 | 5号 1 | 銭貨 | 完形 | 24.96 | 25.15 | 20.47 | 31.07 | 1.40 | 1.40 | 3.2 | 北史1023年 |
| 6808 | 20 | 5号 2 | 銭貨 | ほぼ完形 | 24.61 | 24.16 | 19.35 | 19.75 | 1.04 | 1.36 | 2.3 | 北史1039年 |
| 6808 | 20 | 5号 3 | 銭貨 | ほぼ完形 | 25.43 | 25.19 | 20.96 | 31.13 | 1.30 | 1.39 | 2.6 | 北史1433年 |
| 202区泉貨類 銭貨類 | | | | | | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲ | 時期・備考 | | | | | | |
| 7778 | 20 | 泉貨 76 | 銭貨 | 完形 | 23.96 | 24.07 | 18.49 | 18.49 | 1.22 | 1.20 | 3.3 | 北史1074年 |
| 7778 | 20 | 泉貨 77 | 銭貨 | ほぼ完形 | 23.91 | 24.52 | 20.38 | 19.12 | 1.33 | 1.63 | 2.4 | 北史1094年 |
| 202区石川郡 銭貨類 | | | | | | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲ | 時期・備考 | | | | | | |
| 9808 | 20 | 石川 2 | 銭貨 | 完形 | 24.51 | 24.43 | 19.49 | 19.49 | 1.36 | 1.47 | 2.4 | 北史1017年 |
| 9808 | 20 | 石川 3 | 銭貨 | 完形 | 24.34 | 24.21 | 20.11 | 20.54 | 1.19 | 1.31 | 2.1 | 北史1098年 |
| 9808 | 20 | 石川 10 | 銭貨 | 完形 | 24.39 | 24.35 | 19.88 | 20.03 | 1.26 | 1.37 | 3.0 | 北史1639年 |
| 202区石川郡 銭貨類 | | | | | | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲ | 時期・備考 | | | | | | |
| 1108 | 20 | 石川 1 | 銭貨 | 完形 | 16.03 | 16.02 | 14.64 | 14.16 | 1.26 | 1.56 | 0.6 | 北史1711年 |
| 202区1号泉貨類 銭貨類 | | | | | | | | | | | | |
| 国庫番号 | 区 | 国庫番号 | 種類 | 現存状態 | 計測値①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲ | 時期・備考 | | | | | | |
| 1348 | 20 | 1区 1 | 銭貨 | 完形 | 23.55 | 23.55 | 18.16 | 18.16 | 1.33 | 1.40 | 2.9 | 北史1068年 |
| 1348 | 20 | 1区 2 | 銭貨 | 完形 | 23.81 | 23.94 | 19.33 | 19.53 | 1.23 | 1.26 | 2.9 | 北史1078年 |

抄 録

| | |
|-----------|--|
| 書名ふりがな | よこかべなかわらいせきかつこじゅうこだいちゅうせいきんせいへんいち |
| 書名 | 横壁中村遺跡(10) 古代・中世・近世編1 |
| 副書名 | 八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | 33 |
| シリーズ名 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 |
| シリーズ番号 | 488 |
| 編著者名 | 黒澤照弘、檜崎修一郎、中沢 悟 |
| 編集機関 | 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行機関 | 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行年月日 | 20090325 |
| 作成法人ID | 21005 |
| 郵便番号 | 377-8555 |
| 電話番号 | 0279-52-2511 |
| 住所 | 群馬県渋川市北碓町下箱田 784 番地 2 |
| 遺跡名ふりがな | よこかべなかわらいせき |
| 遺跡名 | 横壁中村遺跡 |
| 所在地ふりがな | ぐんまけんあかがつまぐんなかのほらまちおおあぎよこかべ |
| 遺跡所在地 | 群馬県吾妻郡長野原町大字横壁 |
| 市町村コード | 10424 |
| 遺跡番号 | 24 |
| 北緯(日本測地系) | 363210 |
| 東経(日本測地系) | 1384025 |
| 北緯(世界測地系) | 363221 |
| 東経(世界測地系) | 1384013 |
| 調査期間 | 19960401-20061231 |
| 調査面積 | 30000 |
| 調査原因 | ダム建設 |
| 種別 | 集落 |
| 主な時代 | 縄文/弥生/平安/中世/近世 |
| 遺跡概要 | 古代-住居10-中世・近世-屋敷跡1+掘立柱建物4+礎石建物1+竪穴遺構1+鍛冶跡1+石垣17+石列3+石組遺構11+石囲い遺構3+墓坑他37+溝3+ヤックラ4+天明泥流下畑-土師器・須恵器・陶磁器・在土土器+石器・石製品+金属器・銭貨 |
| 特記事項 | 縄文時代中期から後期までの拠点的な集落。中世屋敷跡。墓坑。 |
| 要約 | 吾妻川右岸段丘上に位置する、縄文時代から近世までの複合遺跡。検出された遺構のうち、18～20区、28区～30区で検出された古代の住居および中世屋敷跡、中世、近世の掘立柱建物、墓坑、石垣等について報告している。注目される遺物として、貿易陶磁器や中世瀬戸・美濃系陶器、「信濃型」と言われる内耳土器などがある。 |